

京都府遺跡調査概報

第 64 冊

1. 竹野遺跡
2. 奈具岡遺跡第 6 次
3. 塔遺跡
4. 若林遺跡第 3 次
5. 宇治市街遺跡
6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廢寺跡
7. 弓田遺跡
8. 甕原離宮推定地
9. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)

1 9 9 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナーを開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成5年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府農林水産部、建設省近畿地方建設局、住宅・都市整備公団の依頼を受けて行った、竹野遺跡、奈良岡遺跡第6次、塔遺跡、若林遺跡第3次、宇治市街遺跡、燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡、弓田遺跡、薨原離宮推定地、金ヶ辻遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、丹後町教育委員会、弥栄町教育委員会、京北町教育委員会、宇治市教育委員会、木津町教育委員会、加茂町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | | |
|------------|-------------|-----------------|
| 1. 竹野遺跡 | 2. 奈具岡遺跡第6次 | 3. 塔遺跡 |
| 4. 若林遺跡第3次 | 5. 宇治市街遺跡 | 6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡 |
| 7. 弓田遺跡 | 8. 甕原離宮推定地 | 9. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡) |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 竹野遺跡	竹野郡丹後町竹野	平6.7.25～ 9.22	京都府土木建 築部	柴 暁彦
2. 奈具岡遺跡第6次	竹野郡弥栄町溝谷奈具岡	平6.5.30～ 平7.2.16	京都府土木建 築部	柴 暁彦
3. 塔遺跡	北桑田郡京北町辻狭間ノ 元	平6.6.27～ 8.12	京都府農林水 産部	小池 寛
4. 若林遺跡第3次	宇治市伊勢田町若林	平6.7.18～ 9.9	建設省近畿地 方建設局	岸岡貴英
5. 宇治市街遺跡	宇治市乙方52-8、 宇治市東内29ほか	平6.9.26～ 12.22	京都府土木建 築部	森正哲次
6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡	相楽郡木津町木津宮ノ裏	平5.12.2～ 平6.7.1	住宅・都市整 備公団	伊賀高弘
7. 弓田遺跡	相楽郡木津町市坂弓田・ 上大条	平6.4.18～ 12.27	建設省近畿地 方建設局	橋本 稔
8. 甕原離宮推定地	相楽郡加茂町法花寺野	平6.11.1～ 12.15	京都府土木建 築部	有井広幸
9. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)	相楽郡加茂町例幣金ヶ辻 19-2他	平6.8.12～ 9.29	京都府木津土 木事務所	森島康雄

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

目 次

1. 竹野遺跡発掘調査概要-----	1
2. 奈具岡遺跡第6次発掘調査概要-----	15
3. 塔遺跡発掘調査概要-----	25
4. 若林遺跡第3次発掘調査概要-----	39
5. 宇治市街遺跡発掘調査概要-----	57
6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡発掘調査概要-----	65
7. 弓田遺跡発掘調査概要-----	93
8. 麩原離宮推定地発掘調査概要-----	113
9. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)発掘調査概要-----	123

挿 図 目 次

1. 竹野遺跡

第1図	調査地周辺の遺跡	1
第2図	基本土層柱状模式図	2
第3図	調査地点関係図	3
第4図	調査トレンチ配置図	4
第5図	8トレンチ検出遺構平面図	5
第6図	S X 501実測図	6
第7図	S X 516実測図	7
第8図	出土遺物実測図(1)	8
第9図	出土遺物実測図(2)	9
第10図	出土遺物実測図(3)	10
第11図	出土遺物実測図(4)	11
第12図	出土遺物実測図(5)	12

2. 奈具岡遺跡第6次

第13図	調査地及び周辺遺跡分布図	15
第14図	調査トレンチ配置図	16
第15図	土層柱状概念図	17
第16図	出土土器実測図	19
第17図	木製品実測図(1)	20
第18図	木製品実測図(2)	21

3. 塔遺跡

第19図	調査地位置図	25
第20図	検出遺構配置図	27
第21図	土層堆積状況柱状図	28
第22図	土坑7実測図	28
第23図	土坑6実測図	29
第24図	土坑10実測図	30
第25図	掘立柱建物跡4実測図	31

第26図	出土遺物実測図(1)	32
第27図	出土遺物実測図(2)	33
第28図	出土遺物実測図(3)	34
第29図	出土遺物実測図(4)	35
第30図	塔村1号墳石室実測図	37

4. 若林遺跡第3次

第31図	調査地及び周辺遺跡分布図	39
第32図	調査地位置図	40
第33図	若林遺跡周辺の地形区分図	42
第34図	柱状地質断面図	43
第35図	検出遺構図	45
第36図	掘立柱建物跡1実測図	46
第37図	溝2～11実測図	47
第38図	土坑1遺物出土状況図	48
第39図	土坑2遺物出土状況図	49
第40図	土坑3～7・10・11・13実測図	50
第41図	柵列1及びピット群実測図	51
第42図	出土遺物実測図	52
第43図	若林遺跡第2・3次調査検出遺構図	55

5. 宇治市街遺跡

第44図	調査地及び周辺主要遺跡地図	58
第45図	トレンチ配置図	59
第46図	Aトレンチ平面図	60
第47図	Aトレンチ遺構図	60
第48図	Cトレンチ平面図	61
第49図	出土遺物実測図	62

6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡

第50図	調査地位置図	66
第51図	燈籠寺廃寺跡寺域想定復原図	67
第52図	トレンチ西壁断面図	68
第53図	上層遺構平面図	69
第54図	下層遺構(S R 20)堆積状況図	70

第55図	出土遺物実測図(1)	縄文土器	-----	72
第56図	出土遺物実測図(2)	縄文土器	-----	74
第57図	出土遺物実測図(3)	縄文土器・石器	-----	76
第58図	出土遺物実測図(4)	弥生土器・古墳時代土器・奈良時代土師器	-----	78
第59図	出土遺物実測図(5)	奈良時代土師器	-----	80
第60図	出土遺物実測図(6)	奈良時代土師器	-----	81
第61図	出土遺物実測図(7)	奈良時代須恵器	-----	83
第62図	出土遺物実測図(8)	奈良時代須恵器	-----	85
第63図	出土遺物実測図(9)	奈良時代須恵器	-----	86
第64図	出土遺物実測図(10)	奈良時代瓦磚類・錢貨・中世土器	-----	88

7. 弓田遺跡

第65図	調査地周辺遺跡分布図	-----	93
第66図	試掘トレンチ配置図	-----	95
第67図	試掘トレンチ土層図	-----	96
第68図	A地区上層遺構平面図	-----	98
第69図	A地区上層出土遺物	-----	99
第70図	A地区下層遺構平面図	-----	100
第71図	A E区下層遺構平面図	-----	101
第72図	S D 9404・9405・9406土層断面図	-----	101
第73図	A W区下層遺構平面図	-----	102
第74図	A W区断ち割り土層断面図	-----	103
第75図	S B 9401・9402実測図	-----	104
第76図	S K 9410・9415・9403、S A 9412実測図	-----	106
第77図	S E 9416平面及び断面図	-----	107
第78図	S E 9416出土木器実測図(1)	-----	108
第79図	S E 9416出土木器実測図(2)	-----	109
第80図	出土土器実測図(1)	-----	110
第81図	出土土器実測図(2)	-----	111

8. 麩原離宮推定地

第82図	調査地位置図	-----	113
第83図	調査地周辺図	-----	114
第84図	トレンチ配置図及び土層柱状図	-----	115

第85図	AトレンチS D03実測図-----	117
第86図	Dトレンチ実測図-----	118
第87図	出土遺物実測図(1)-----	120
第88図	出土遺物実測図(2)-----	121
7. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)		
第89図	調査地位置図(1)-----	123
第90図	調査地位置図(2)-----	124
第91図	トレンチ配置図-----	125
第92図	1トレンチ東壁断面図-----	125
第93図	出土遺物実測図(1)-----	126
第94図	出土遺物実測図(2)-----	127
第95図	出土遺物実測図(3)-----	129
第96図	出土遺物実測図(4)-----	130
第97図	出土遺物実測図(5)-----	131
第98図	出土遺物実測図(6)-----	132

付 表 目 次

1. 竹野遺跡		
付表1	竹野遺跡の石材一覧表-----	13
2. 奈具岡遺跡第6次		
付表2	奈具岡遺跡出土遺物法量表-----	22
4. 若林遺跡第3次		
付表3	溝一覧表-----	46
付表4	土坑一覧表-----	48
付表5	出土遺物観察表(1)-----	53
付表6	出土遺物観察表(2)-----	54
7. 弓田遺跡		
付表7	試掘トレンチ成果一覧表-----	97

図 版 目 次

1. 竹野遺跡

- 図版第1 (1)調査地遠景(東から) (2)調査前風景(北東から)
- 図版第2 (1)1トレンチ全景(南西から) (2)2トレンチ全景(南西から)
- 図版第3 (1)3トレンチ全景(南西から) (2)4トレンチ全景(北東から)
- 図版第4 (1)5トレンチ全景(南西から) (2)8トレンチ全景(北東から)
- 図版第5 (1)8トレンチ西半部遺構検出状況(東から)
(2)集石土坑S X516遺物検出状況(南東から)
- 図版第6 (1)不明土坑S X517下部礫出土状況(南西から)
(2)不明土坑S X517完掘状況(南東から)
- 図版第7 出土遺物(1)
- 図版第8 出土遺物(2)

2. 奈良岡遺跡第6次

- 図版第9 (1)調査前の状況(東から) (2)調査地遠景(北東から)
- 図版第10 (1)4トレンチ深掘り状況(北西から)
(2)6トレンチ重機掘削作業(北西から)
- 図版第11 (1)6トレンチ作業風景(北東から)
(2)6トレンチ遺構検出状況(東から)
- 図版第12 (1)6トレンチ竪穴式住居跡検出状況(北東から)
(2)7トレンチ遺構検出状況(北西から)
- 図版第13 出土遺物(1)
- 図版第14 出土遺物(2)

3. 塔遺跡

- 図版第15 (1)調査地遠景(南方上空から) (2)遺物集中地点16全景(東から)
- 図版第16 (1)掘立柱建物跡1～3完掘状況(東南から)
(2)土坑7遺物検出状況(北西から)
- 図版第17 (1)土坑6遺物出土状況(北から)
(2)掘立柱建物跡4検出状況(南西から)
(3)土坑10完掘状況(東から) (4)土坑13検出状況(南西から)

図版第18 出土遺物

4. 若林遺跡第3次

- 図版第19 (1)調査地全景(西から) (2)調査地西半分(南から)
- 図版第20 (1)掘立柱建物跡1(南から) (2)土坑4・5(北西から)
- 図版第21 (1)土坑1遺物出土状況(東から) (2)土坑1(東から)
- 図版第22 (1)土坑2遺物出土状況(南東から) (2)土坑2(北西から)
- 図版第23 (1)土坑3(東から) (2)土坑10(南西から)
- 図版第24 (1)土坑13(北西から) (2)土坑12(北東から)
- 図版第25 (1)柵列1及びピット群(西から)
(2)柵列1・P4遺物出土状況(北東から)
- 図版第26 出土遺物

5. 宇治市街遺跡

- 図版第27 (1)Aトレンチ調査前(南から) (2)Aトレンチ北端攪乱
- 図版第28 (1)Aトレンチ南端(北から) (2)Bトレンチ全景(北から)
- 図版第29 (1)Cトレンチ全景(北から) (2)Cトレンチ北東、ピット1(南から)
- 図版第30 (1)Aトレンチ遺物出土状況(暗茶灰色粘質土)
(2)Cトレンチ北東SK01遺物出土状況
- 図版第31 (1)Aトレンチの出土遺物(1) (2)Aトレンチの出土遺物(2)
- 図版第32 (1)Cトレンチの出土遺物(1) (2)Cトレンチの出土遺物(2)

6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡

- 図版第33 (1)調査地遠景(調査前の状況)(北から)
(2)北拡張区遺構検出状況(南から)
- 図版第34 (1)北拡張区柱列検出状況(南から) (2)SD03・06検出状況(北から)
- 図版第35 (1)上層遺構検出状況(南から) (2)下層遺構(SR20)検出状況(南から)
- 図版第36 出土遺物(1)
- 図版第37 出土遺物(2)
- 図版第38 出土遺物(3)

7. 弓田遺跡

- 図版第39 (1)調査地周辺空中写真(西から) (2)調査地空中写真(上が東)
- 図版第40 (1)AE区上層検出素掘り溝群(北から)
(2)AW区上層検出素掘り溝群(北から)
- 図版第41 (1)AW区上層検出野井戸1(南から)

- (2) A E 区下層遺構検出状況(北から)
- 図版第42 (1) A E 区 S D 9404・9405(北から) (2) A E 区 S D 9406(北から)
- 図版第43 (1) A W 区下層遺構検出状況(北西から)
(2) A W 区中央下層遺構検出状況(北から)
- 図版第44 (1) A W 区南部下層遺構検出状況(北から)
(2) A W 区南部下層遺構検出状況(南から)
- 図版第45 (1) S B 9401検出状況(東から) (2) S B 9402検出状況(東から)
- 図版第46 (1) S A 9412検出状況(東から) (2) S K 9415検出状況(北から)
- 図版第47 (1) S K 9403検出状況(西から) (2) S K 9410検出状況(北から)
- 図版第48 (1) S E 9416検出状況(北から)
(2) S E 9416底部水溜め検出状況(南から)
- 図版第49 (1) S D 9405土層断面(南から) (2) S D 9404土層断面(南から)
(3) S D 9406土層断面(北から) (4) S D 9408土層断面(南から)
- 図版第50 (1) 縄文土器包含層掘り下げか所(北から)
(2) 縄文土器出土状況(北から)
- 図版第51 出土遺物(1)
- 図版第52 出土遺物(2)

8. 麩原離宮推定地

- 図版第53 (1) 調査前風景(北東から) (2) A トレンチ S D 03全景(北東から)
- 図版第54 (1) C トレンチ鋤溝群(西から)
(2) C トレンチ流路及び土層堆積状況(南西から)
- 図版第55 (1) D トレンチ全景(西から) (2) H トレンチ全景(南西から)
- 図版第56 出土遺物(1)
- 図版第57 出土遺物(2)
- 図版第58 出土遺物(3)

9. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)

- 図版第59 (1) 調査前風景(南から) (2) 1 トレンチ全景(南から)
- 図版第60 (1) 4 トレンチ全景(北から) (2) 1 トレンチ縄文土器出土状況
- 図版第61 (1) 出土遺物 (2) 出土遺物
- 図版第62 (1) 出土遺物 (2) 出土遺物
- 図版第63 (1) 出土遺物 (2) 出土遺物
- 図版第64 (1) 出土遺物 (2) 出土遺物

1. 竹野遺跡発掘調査概要

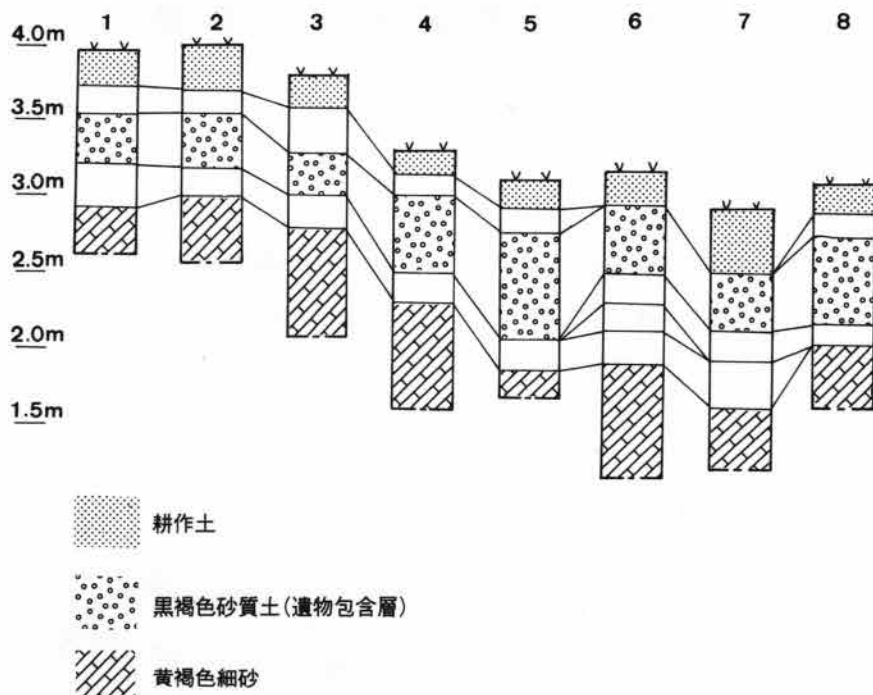
1. はじめに

竹野遺跡は、竹野郡丹後町竹野に所在し、地点としては竹野川の河口部の右岸に位置している。遺跡の立地する場所は、河川の運んだ土砂と地形の隆起による海退によって形成された砂丘となっており、周辺地形より約1～2m高くなっている。遺跡の範囲は、東西約600m・南北約250mの面積0.15km²の砂丘地全体に及ぶと思われる。現在、遺跡地は畑



第1図 調査地周辺の遺跡(1/25,000)

- | | | | | | |
|---------|-----------|----------|----------|-----------|----------|
| 1. 竹野遺跡 | 2. 福蓮寺跡 | 3. 大成古墳群 | 4. 産土山古墳 | 5. 片山古墳群 | 6. 神明山古墳 |
| 7. 丸山古墳 | 8. 願興寺古墳群 | 9. 願興寺跡 | 10. 岩木遺跡 | 11. 鼻下り古墳 | |

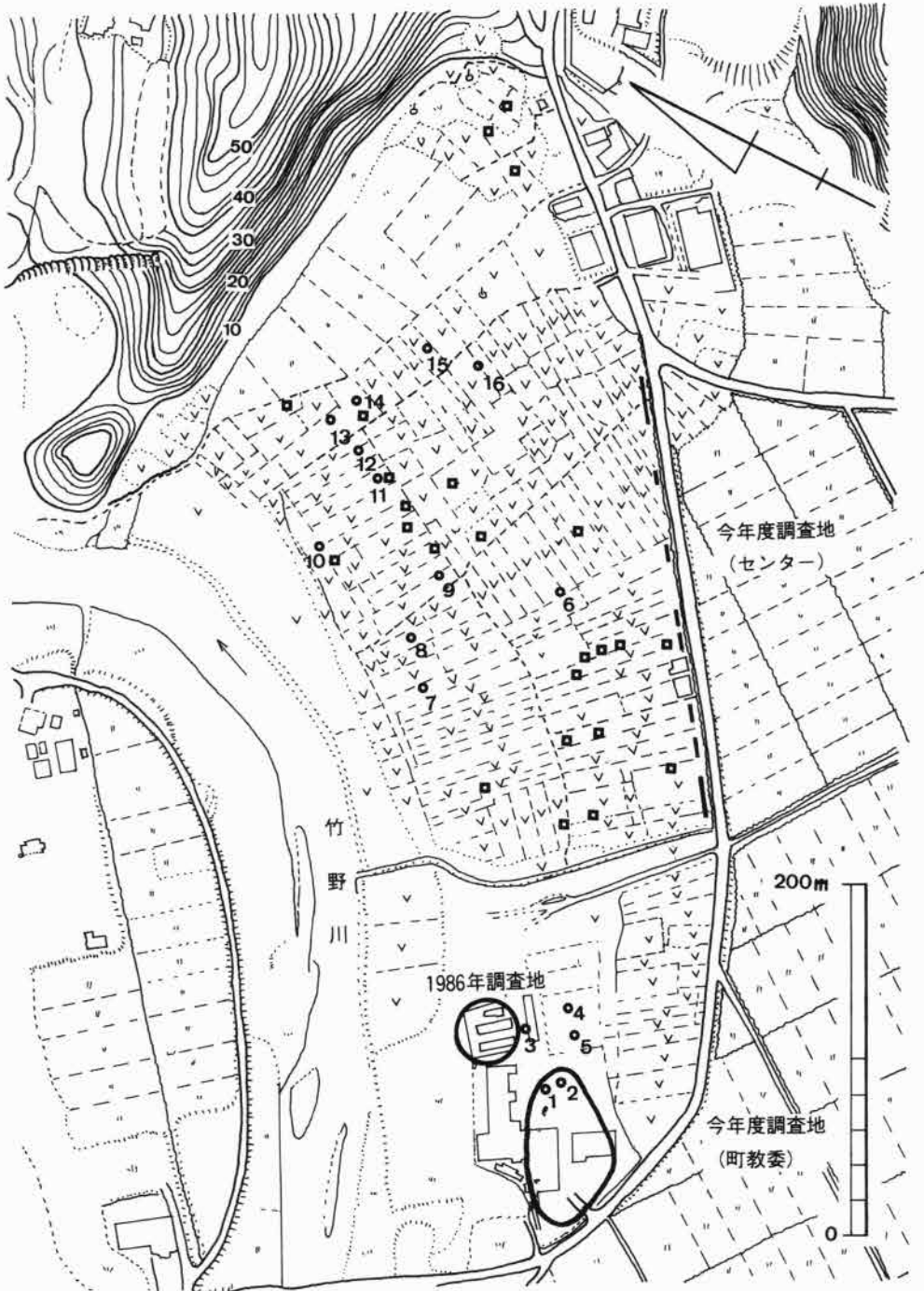


第2図 基本土層柱状模式図

として利用されている。

この遺跡が認識されるようになったのは、1965年、織物工場建設に伴い、多量の弥生土器が出土し、翌66年当時の高校生が建設地で遠賀川系土器を採集したことに始まる。それ以後数度にわたる発掘調査が実施され、現在では、弥生時代前期^(注1)の土器が出土することで周知の遺跡となっている。この広範な遺跡から出土する遺物は、古くは縄文時代後期から新しくは鎌倉時代にいたるまで多岐にわたる。

今回の調査は、国道178号丹後リゾート等関連道路改良事業に伴うものである。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富と同調査員柴 暁彦が担当した。調査面積は、約450m²である。発掘調査は、平成6年7月25日に開始し、同年9月21日には関係者説明会を実施した。そして、翌22日に調査を終了した。概要報告は、柴が行った。調査期間中は、京都府教育委員会・丹後町教育委員会をはじめとして、地元有志の方々や学生諸氏のお世話になった。記して感謝する。なお、調査に係る費用は、京都府土木建築部が負担した。^(注2)



● 1967～1969年調査地

■ 1982年調査地

第3図 調査地点関係図

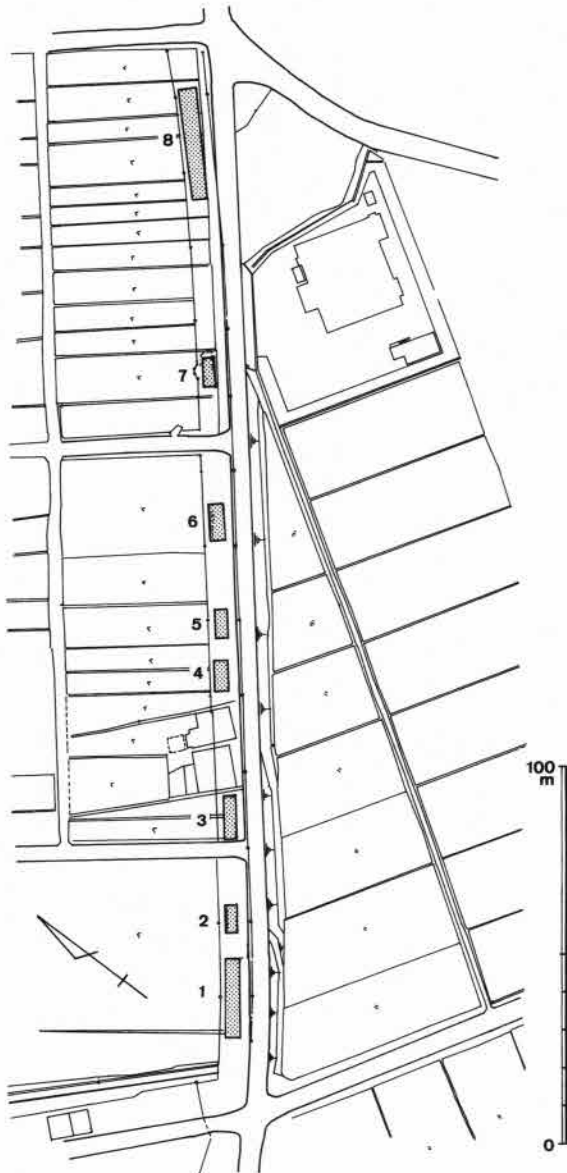
2. 周辺遺跡(第1図)

竹野遺跡の周辺にある現況で水田となっている沖積地は、古墳の築造された時代には潟湖となっていたと言われており、日本海から竹野川を經由して、直接内陸部に入り込むことが可能であったと思われる。これを反映するかのように、近辺には丹後地方最大の規模を誇る前方後円墳の一つである神明山古墳が所在し、また、当遺跡の北東側の丘陵には産土山古墳、片山古墳群や大成古墳群などがあることを考えても、竹野川河口部右岸地域で

は、当時は丹後地方の文化の中心地の一つとして機能していたと思われる。

3. 調査概要

調査は、国道178号の北側部分、延長約300mの区間を対象に計8か所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。掘削は、表土及び耕作土を重機によって除去し、その後、人力による掘削に入った。重機による試掘調査の結果、路線の西側(1～5トレンチ)では顕著な遺構及び遺物は確認されなかったが、路線の東側(6～8トレンチ)に行くほど包含層や遺構の検出された安定面が見られた。調査地の地形変化は、西から東にかけて傾斜し、大成丘陵の西裾部分が最も標高が低く、現状でも溝状の落ち込みが認められることから、この地で生活が営まれていた当時は、入り江状になっていたと思われる。各トレンチの基本的な層序は、表土及び耕作土下で、黒灰褐色砂質土である遺物包含層



第4図 調査トレンチ配置図

が見られる。この包含層は、堆積の良好な部分では2層に分けられるものと思われたが、上下の層で明確な時期差が存在するものではなかった。この包含層の下は、黄褐色細砂層の無遺物層となる。

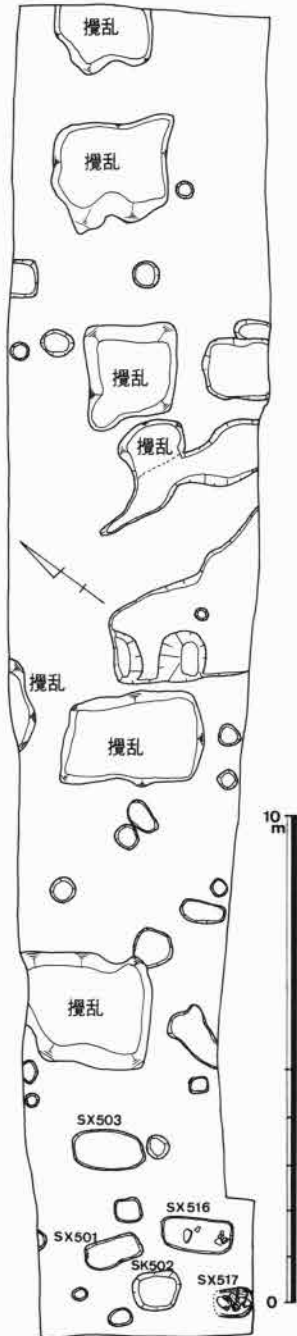
なお、3トレンチでは、黄褐色細砂層をさらに0.5 mほど掘削した結果、3 cm大の風化した浮石が疎らに含まれていた。しかし、いつの時期のものかは明らかではない。

1～5トレンチでは、黒灰褐色砂質土中には遺物を包含しておらず、その下層の黄褐色砂層面で検出した流路状の落ち込みやピットの埋土には遺物が含まれていなかったため、所属時期は不明である。一方、6～8トレンチでは黒褐色砂質土層に多量の遺物が包含されていた。その中で、7トレンチは、黒褐色砂質土の遺物包含層が約70cmの厚さで堆積していたが、生活面となる安定面は見られなかった。この包含層はかろうじて分層可能であったが、特に上下で時期差は見られないように思われた。また、8トレンチでは12世紀後半～13世紀の遺構を確認した。路線の東側を中心に本格調査を実施した。ここでは、もっともまとまった遺構が検出された8トレンチの概要を述べる。

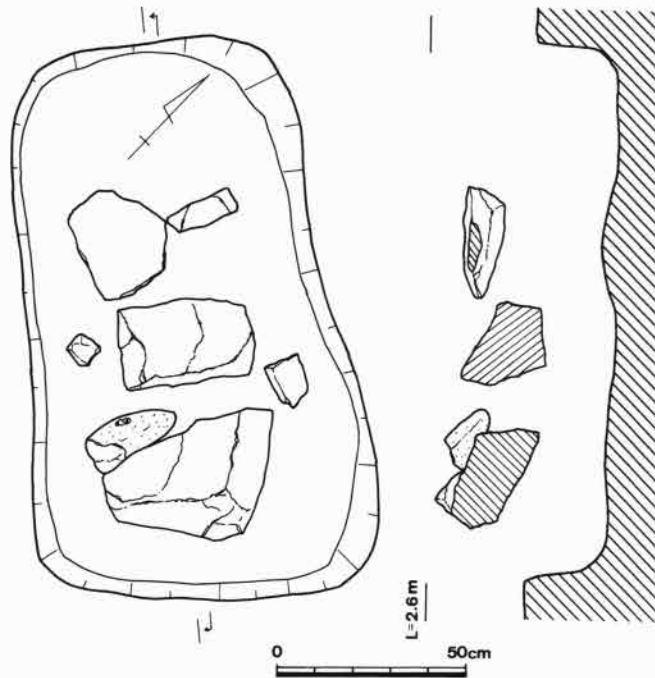
4. 検出遺構(第5図)

集石土坑 S X 501(第6図) 長辺約1.5m・短辺約0.8m、検出面からの深さ約0.3mを測る土坑である。埋土(黒灰褐色粘砂質土)上面には、人頭大の扁平な角礫が長辺に沿って数石並べられていた。この礫を除去し埋土を掘削すると、この土坑の埋土からは土師器皿(47)が出土した。この遺物から見て、12世紀後半～13世紀のものと思われる。

土坑 S K 502 径約1.0m、検出面からの深さ約0.8 mを測る不整円形の土坑である。埋土は、黒灰色粘砂質土である。埋土中から土師器皿や青磁碗片(9・13)



第5図 8トレンチ検出遺構平面図



第6図 S X 501実測図

鉄滓などが出土した。時期は12世紀後半～13世紀で、鉄滓も同時期のものとする。

集石土坑 S X 503 長辺約1.6m・短辺約0.8m・深さ約0.25mを測る。平面形は、隅丸長方形を呈している。埋土は、黒灰色粘砂質土である。埋土中から土師器皿(26)が出土した。遺構の所属時期は、12世紀後半～13世紀と思われる。

集石土坑 S X 516(第7図) 長軸約1.54m・短

軸0.8m・深さ約0.2mを測る。平面形は、隅丸長方形を呈している。埋土上面で拳大から人頭大の礫が出土した。礫は、土坑の埋め戻しが完了した時点で、ある程度まとめて置いている。使用された礫は、板状や塊状の凝灰岩などが見られる。中には、砥石も含まれている。石材は、任意に選択されたと思われる。礫の近辺から、完形品を含む土師器皿(25・32・36・49・59)が数点出土した。

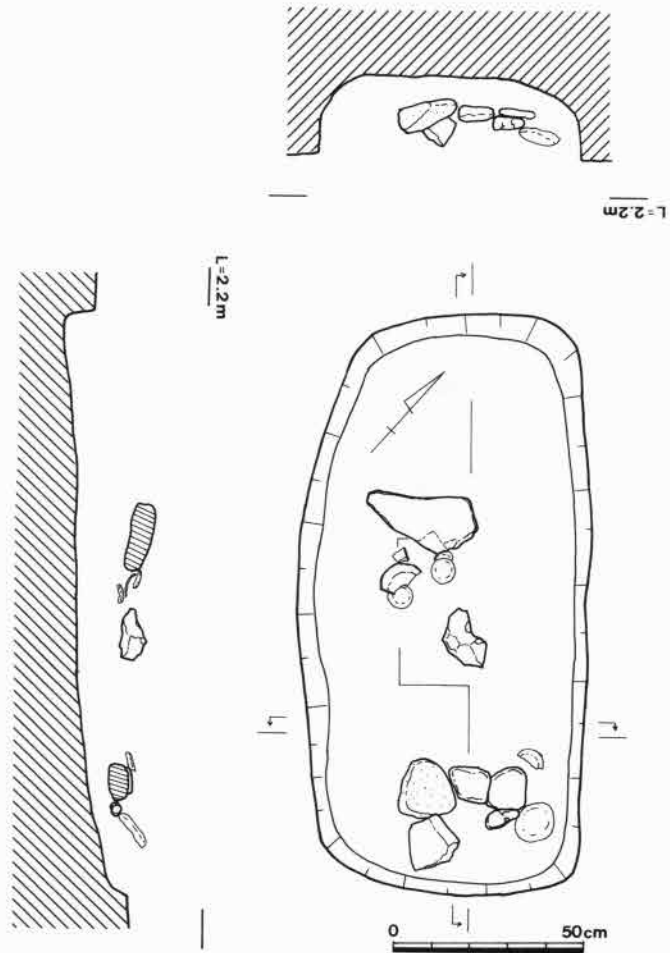
集石土坑 S X 517 長辺約0.8m・短辺約0.65m・深さ約0.4mを測る。平面形は、やや楕円形を呈している。検出面上面には、人頭大の円礫及び角礫が5石まとまっていた。また、土坑底面に接して角礫が同じく、5石折り重なっていた。これらの礫は、土坑底面に径約0.3m・深さ約0.2mの掘形を持っていた。出土遺物には、土師器皿片、黒色土器片がある。

5. 出土遺物(第8～13図)

出土遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、白磁椀、青磁椀、瓦や敲石、磨石、砥石などの石製品、鉄滓などがある。これらの遺物のなかで、比較的出土量がまとまっているものは、土師器皿である。

1は、須恵器の杯身である。体部上半が残存している。受け部の立ち上がりは短く内傾

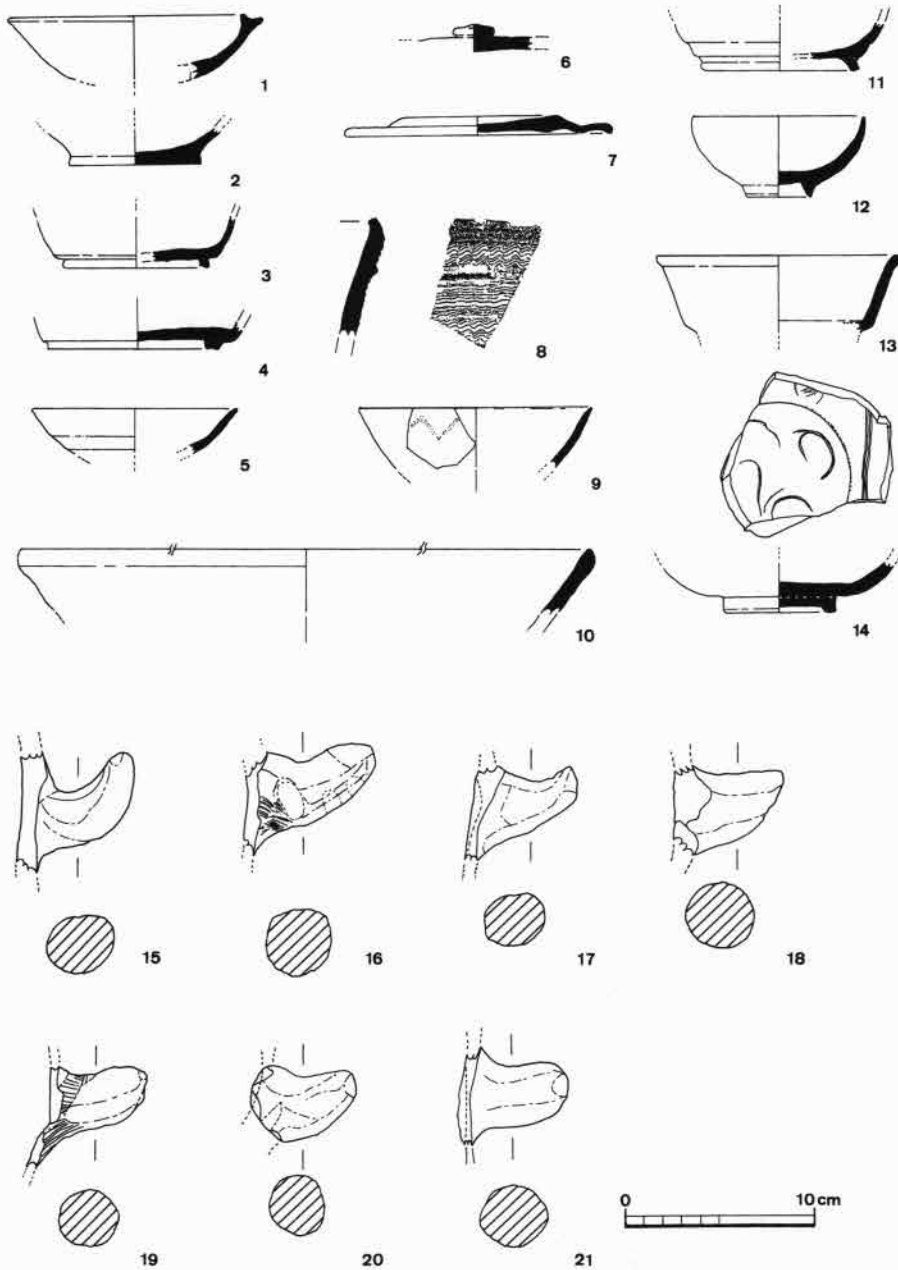
し、端部は丸くおさめている。12~14は、青磁である。12は、小型碗である。底部から内湾しながら立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。14は、見込み部分に陰刻が施されている。釉調は黄褐色を呈している。高台裏面は、露胎となっている。15~21は、土師器の把手である。22~46は土師器の皿である。大きさは大別すると、2タイプ見られる。一つは、22~35のように口径8cm前後のものである。もう一つは、36~46のような口径12cm前後のものである。特に、前者の口径の小さなタイプには製作技



第7図 S.X516実測図

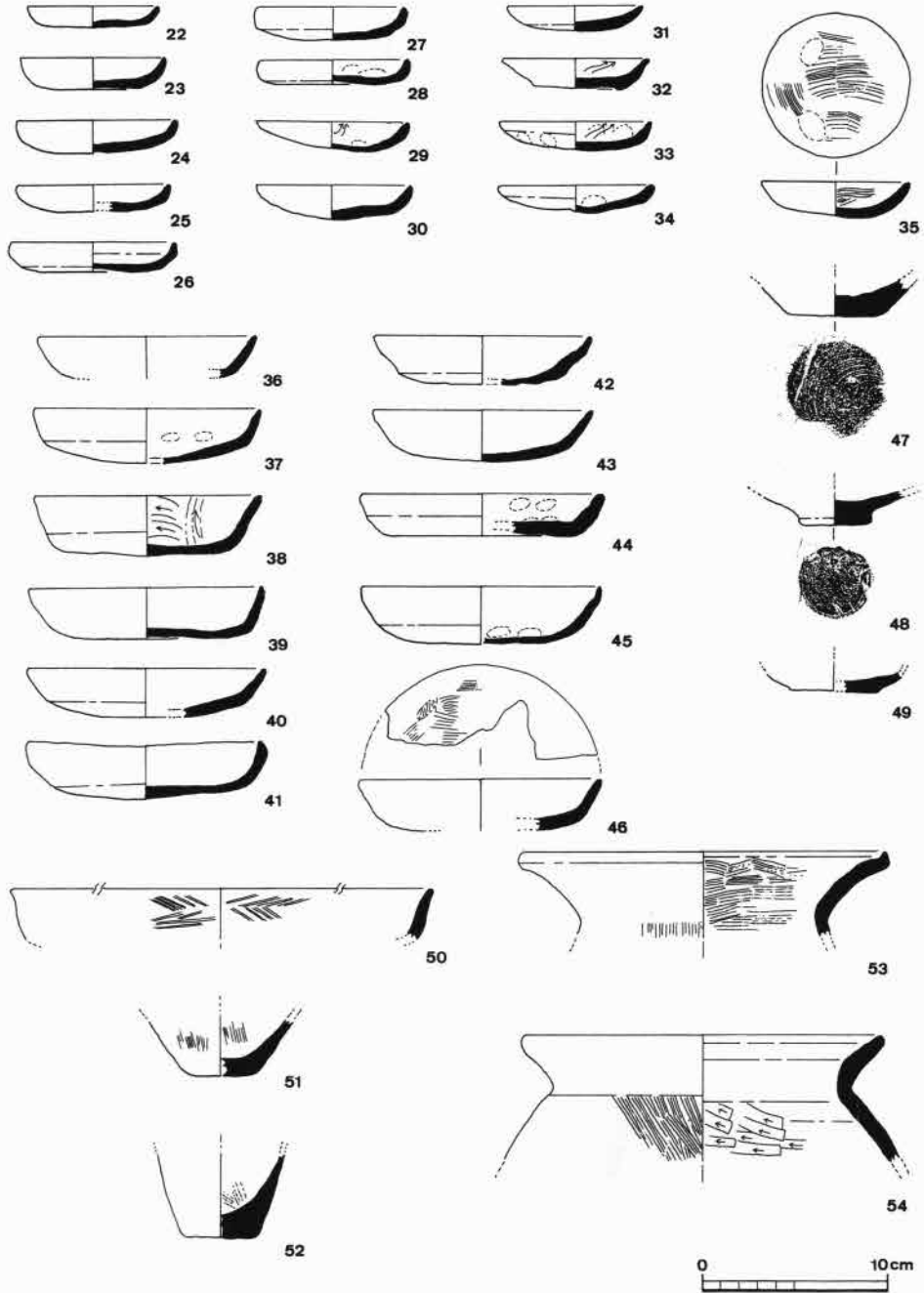
法上の相違が見られる。一つは型作りであり、もう一つは粘土を円板状にのぼし、1か所に切れ目を入れて貼り合わせたもの(33)に分かれる。底部の調整については、指頭圧痕を顕著に残すものと、ヘラ状工具によって切り取った、一見、平高台状のものが存在する。指頭圧痕を残すものは、平安京にも見られるような京都系であり、ヘラ切りのものは、在地の丹後のものと思われる。36・46は、板状工具の先端でナデた痕跡が見られる。55~62は、黒色土器である。器形が把握できる資料のなかで、55の皿を除き、碗が多い。碗は、黒色土器A類と呼ばれる、内黒のものである。底部は、すべて回転糸切り痕を残している、平高台である。内面のヘラミガキは比較的細い工具でミガキ調整されているもの(58・60・61)と、太めの工具によりミガかれているもの(59・62)とが見られる。61・62を見る限り、口縁部内面にミガキ残す部分がある。67は、紡錘車である。全体の約1/3の破片となっている。表面には、文様の見られない粗製品で、凝灰岩製である。68・69は土錘であ

る。かたちは球形を呈しているが、どちらも欠損品である。外面に指頭圧痕を残している。70は、勾玉である。全体にていねいに研磨されている。穿孔は、両面から行われている。石材は滑石である。72・73は、瓦片である。須恵質の小破片であるが、丸瓦と思われる。72は、二辺に端面を残している。凹面に布目圧痕があり、桶巻き作りと思われる。71は、



第8図 出土遺物実測図(1)

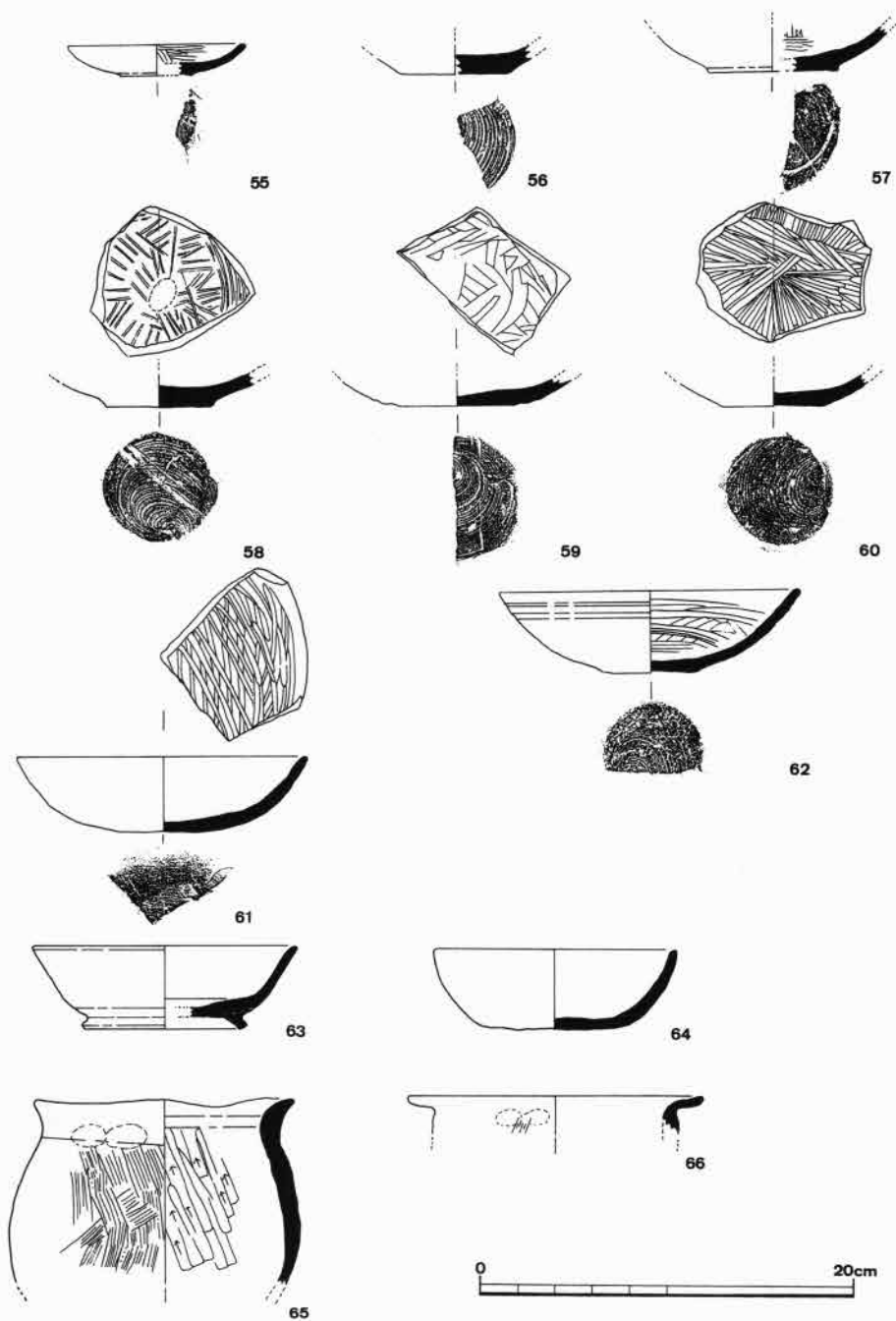
石錘である。形状は紡錘形を呈している。タテ、ヨコに紐掛け痕が存在する。安山岩製である。81は、砥石である。機能面は3面ある。長軸方向が欠損している。74~80・82~87は、敲石類である。機能面は叩く、磨るなど複数あり、単独の機能のものは数は少ない。大



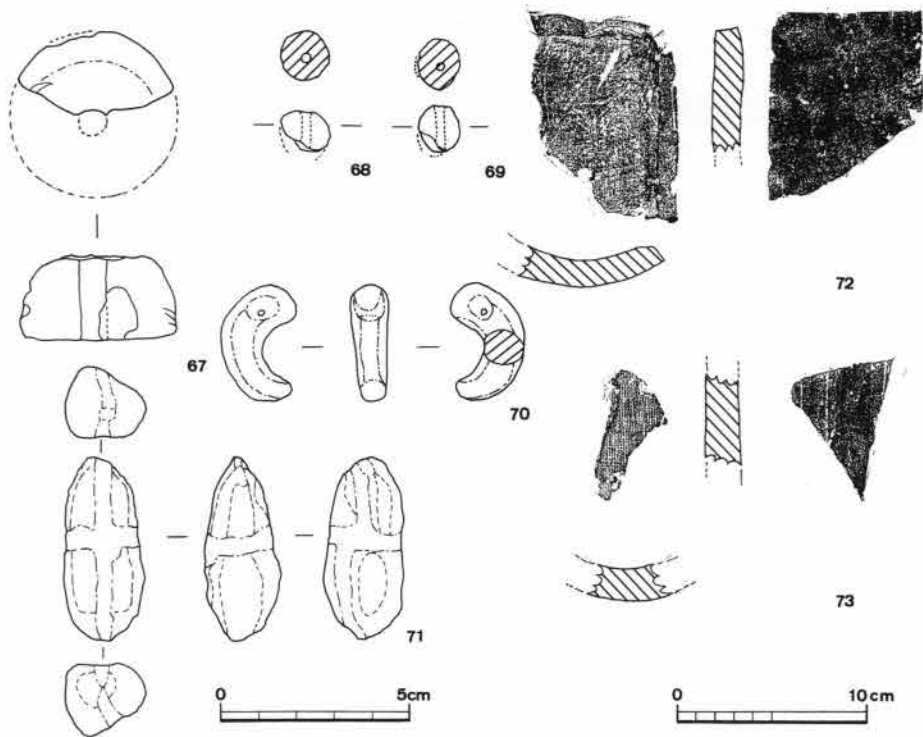
第9図 出土遺物実測図(2)

半は拳大の大きさの円礫を使用している。

鉄滓は、写真1に掲載した椀型滓を含め、8点が出土している。土坑S K 502の出土遺物に伴っているものがあることから、12世紀後半～13世紀の段階のものと思われる、この時



第10図 出土遺物実測図(3) 63～66は、丹後町竹野の天下新太郎氏寄贈品



第11図 出土遺物実測図(4)

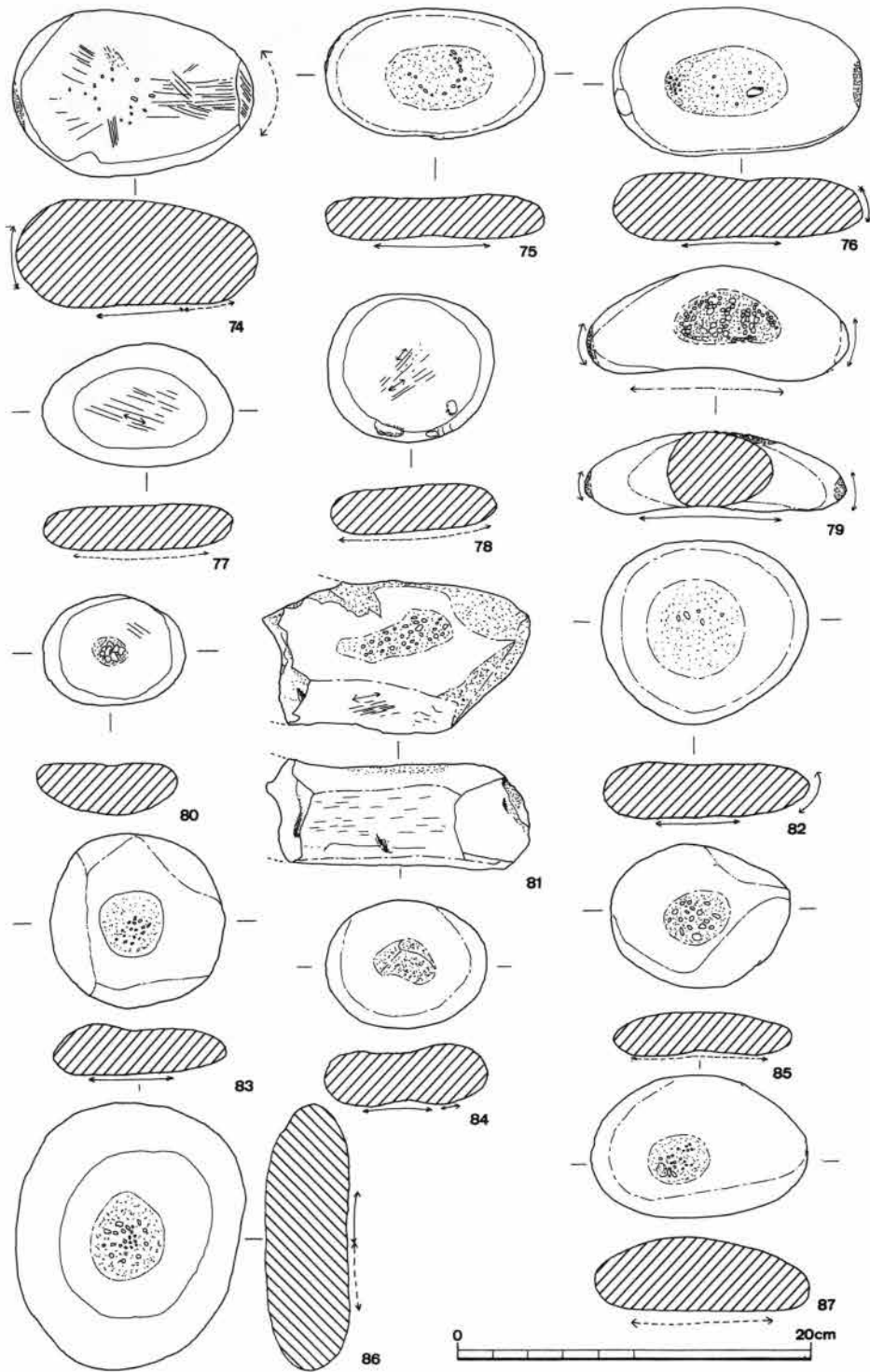
期の鍛冶工場の存在が考えられる。

63～66は、地元竹野地区の大家新太郎氏が採集されたものである。氏の所有する畑の耕作中に出土したという。63は、須恵器の杯身である。64は、土師器の杯である。底部から斜め上方に内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。内外面にわずかにハケ調整痕が残る。口縁部内外面が黒みを帯びる。65は、土師器の甕である。口径約13.1cmを測る。口縁部は歪んでいる。外面は、ハケ調整が施される。内面は、棒状工具により粗雑なケズリ調整がなされ、器面の凹凸が顕著である。胎土には砂粒を含んでいる。

5. まとめ

今回、遺構・遺物ともまとまっていたのは、東側に位置する8トレンチである。このトレンチでは、12世紀後半～13世紀に比定できる集石土坑などを確認した。調査地点が砂丘の縁辺にあたること、また、遺跡の範囲でも周縁部に当たると思われることから、顕著な遺構は見られなかった。この8トレンチ付近の小字名は福蓮寺といい、寺院が存在した場所とされるが、伝承のみで文献は見られない。

なお、過去の調査で、この地籍に設けたトレンチ内で「石壁」とされる石組を検出して



第12図 出土遺物実測図(5)

付表1 竹野遺跡の石材一覧表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	材質	備考
67	紡錘車	(2.2)	4.1	2.2	凝灰岩	新生代新第三系、水中堆積の火山灰
70	勾玉	3.2	2.0	1.0	滑石	超塩基性岩体（蛇文岩等）中の滑石脈中に産する
71	石錘	9.7	4.3	4.0	安山岩	新生代新第三系、水中堆積、現地産？
74	敲石	13.6	9.5	6.2	安山岩質玄武岩	新生代新第三系、溶岩、現地産？
75	敲石	12.3	7.3	2.5	砂岩	新生代新第三系、水中堆積、細粒砂で泥の薄層を挟む、現地産？
76	敲石	14.1	8.3	4.0	砂岩	新生代新第三系、水中堆積、細粒砂、現地産？
77	磨石	10.7	7.0	2.6	砂岩	新生代新第三系、水中堆積、極細粒砂、現地産？
78	磨石	9.4	8.5	2.7	泥質砂岩	新生代新第三系、水中堆積、極細粒砂、現地産？
79	敲石	14.8	6.5	4.3	砂岩	新生代新第三系、水中堆積、細粒砂、現地産？
80	敲石	8.1	6.2	3.0	安山岩	新生代新第三系、水中堆積、やや凝灰質？現地産？
81	砥石	15.0	8.7	5.8	泥質砂岩	新生代新第三系、水中堆積、極細粒砂、現地産？
82	敲石	11.7	10.5	3.4	砂岩？	新生代新第三系、水中堆積、現地産？
83	敲石	10.0	9.8	3.0	泥質砂岩	新生代新第三系、水中堆積、やや凝灰質？現地産？
84	敲石	9.2	7.3	3.5	砂岩	新生代新第三系、水中堆積、中～粗粒砂、現地産？
85	敲石	10.3	8.1	2.5	泥質砂岩	新生代新第三系、水中堆積、極細粒砂、現地産？
86	敲石	15.2	13.0	5.0	砂岩	新生代新第三系、水中堆積、極細粒砂、現地産？
87	敲石	12.3	8.3	4.2	砂岩	新生代新第三系、水中堆積、極細粒砂、現地産？

() は残存している数値を示す。

石材の鑑定は京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏による。

いる。報告者は寺院の建物基壇の可能性も考えておられる。^(注3) 通称として出口という名称も残っていることから、寺院跡か官衙といった施設が存在していた可能性が考えられる。^(注4) 遺跡でも、東側部分は遺構検出面が現地表から約0.4mと比較的浅い。また、当初の調査から二十数年が経過しており、畑作適地が限定される竹野地区においては、この砂丘地が畑として利用されている。地元の方の話でも、耕作中に建物跡の礎石や土器などが相当量確認されている現状では、かなりの遺構が削平された可能性を持つ。今後遺構の検出は、一層困難を極めるものと思われる。

(柴 暁彦)

- 注1 a 坪倉利正「竹野遺跡発掘調査報告書」 京都府立峰山高校史学部 1968
b 平良泰久「丹後竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告』第2集 丹後町教育委員会) 1983
c 奥村清一郎「竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告』第3集 丹後町教育委員会) 1987
d 坪倉利正ほか「竹野弥生遺跡」 丹後古文化研究会 1992
- 注2 調査参加者(敬称略)
上羽 樹・大江千晴・岡崎千代子・岡崎美津恵・小田栄子・片西 弘・可見直典・田畑吾一・高瀬裕美・民谷秋子・民谷千代野・中田繭子・平井輝美・増田 修・松岡まつ枝・山倉千代・山中道代
- 注3 注1 aに同じ。
- 注4 丹後町で中世の遺構が確認された例は、竹野川河口から南に約2kmの右岸の小台地上の岩木地区に所在する岩木遺跡がある。1988年には場整備事業に先立ち調査が行われた。検出遺構は、掘立柱建物跡2棟などである。出土遺物は、白磁碗・青磁碗といった輸入陶磁器がある。このほか、奈良時代の円面硯の脚部片、須恵器の転用硯の出土から官衙の性格付けをしている(吉田 誠「岩木遺跡」『京都府丹後町文化財調査報告』4 1988)。

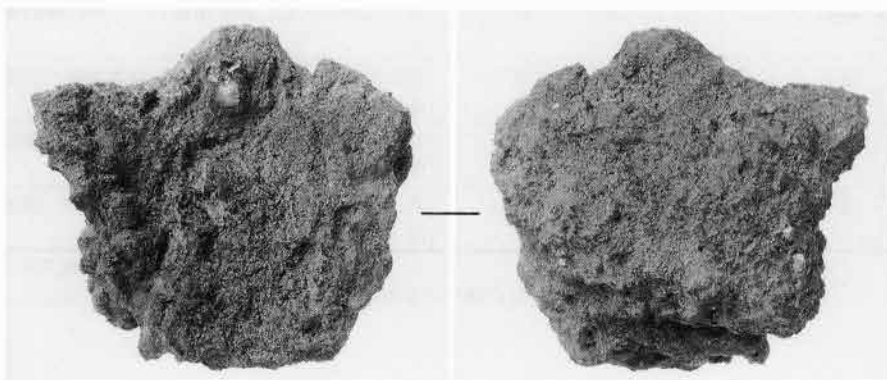


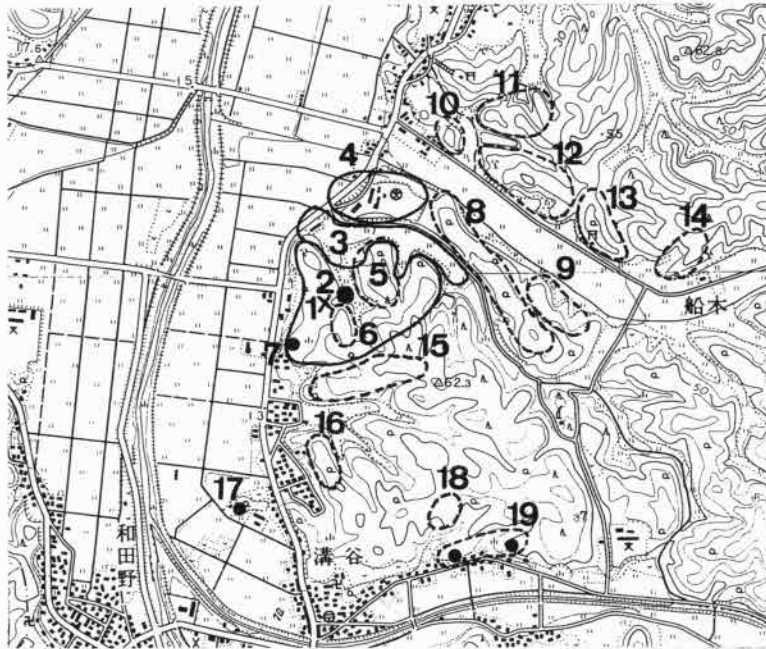
写真1 鉄滓

2. 奈具岡遺跡第6次発掘調査概要

1. はじめに

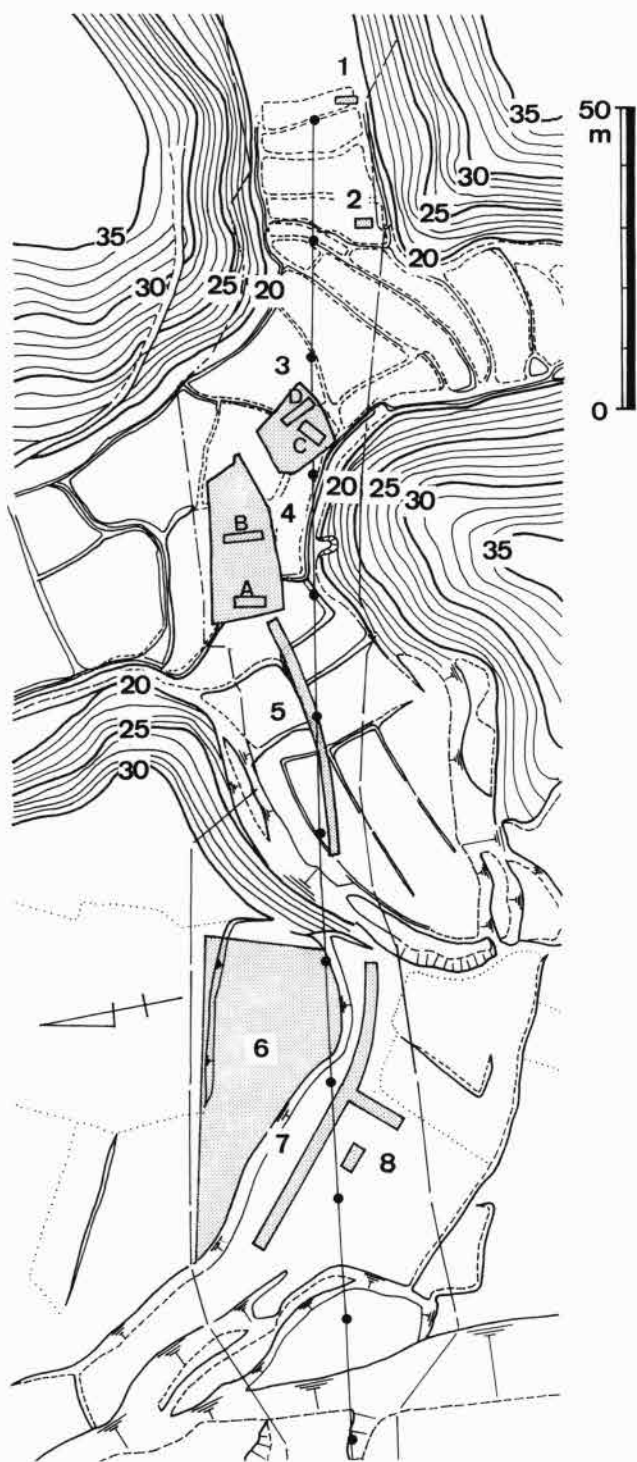
奈具岡遺跡は、弥生時代から歴史時代にわたり、断続的に生活が営まれた複合遺跡として周知されている。この遺跡の調査は、府道網野岩滝線の建設工事に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。今回の調査は、平成5年度の試掘調査の継続調査である^(注1)。調査面積は、約1,200m²である。発掘調査は、平成6年5月30日～6月16日、平成6年11月15日～平成7年2月16日の二期に分けて実施した。現地調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富、同調査員柴 暁彦が担当した。

本概要報告の執筆は、柴が行った。調査期間中は、京都府教育委員会・弥栄町教育委員会、地元有志の方がた及び学生諸氏の協力を得た^(注2)。ここに記して感謝したい。



第13図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-----------|------------|
| 1. 奈具岡遺跡 | 2. 調査地(●・×) | 3. 奈具谷遺跡 | 4. 奈具遺跡 | 5. 奈具岡北古墳群 |
| 6. 奈具岡古墳群 | 7. 奈具岡西古墳 | 8. 奈具古墳群 | 9. 小墓古墓群 | 10. 新宮古墳群 |
| 11. 谷古墳群 | 12. 福西古墳群 | 13. 奈具神社裏古墳群 | | 14. 中田古墳群 |
| 15. 奈具岡南古墳群 | 16. 久原古墳群 | 17. 丸山古墳 | 18. 溝谷北古墳 | 19. 八所古墳群 |



第14図 調査トレンチ配置図

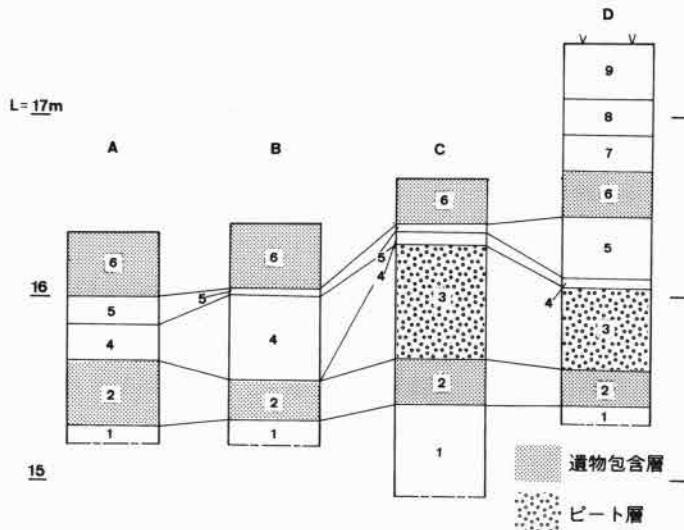
なお、調査に関する費用は、京都府土木建築部が負担した。

2. 調査概要

調査は、沖積地及び丘陵稜部の路線総延長約180mにわたって試掘調査を行い、遺構の確認された部分について、本調査を行った。調査地点は、便宜上、路線の東側部分から1～8のトレンチ番号を付した。沖積地には、大小4か所の試掘トレンチを設定し、丘陵部には3か所のトレンチを配した。

1・2トレンチ この二つのトレンチにおいては、遺構・遺物とも出土しなかった。

3トレンチ 遺物包含層を間層を挟んで上下2層を確認した。上層遺物包含層は、現地表下約1.5mにある。遺物は、板材などの大型木製品が目立つ。谷方向に平行して堆積しており、谷上部から流れ込んだものと思われる。時期は、古墳時代後期と推定される。植物遺体を多量に含むピート



第15図 土層柱状概念図(3・4トレンチ)
A～Dは、3・4トレンチのアルファベットに対応

層が約0.6mにわたり完全にバックされた状態で存在しており、さらにこの下層に遺物包含層が存在する。下層包含層は、木製品から、土器の量が若干上回る。この包含層の時期は、弥生時代後期と思われる。なお、上下層とも遺構は確認していない。

4トレンチ このトレンチでは、遺物包含層を確認した。包含層は、現地表下約0.4～2mまで約1.6mの厚さがあるが、含まれている遺物はまばらである。古墳時代後期の単一層である。

5トレンチ 西側の丘陵斜面と沖積地との緩斜面に設定したトレンチである。傾斜変換点付近では、現地表下約0.4mで中世段階の焼土を伴う遺物包含層を確認した。さらに重機で掘削すると、旧地形は、現地表面から約4m下がっており、深い埋没谷の状況を呈していた。下層包含層では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が見られた。しかし、上下どちらの層でも遺構は確認していない。

6トレンチ 丘陵の台地上の調査地である。表土層の直下で遺構を確認している。検出した遺構としては、竪穴式住居跡2棟、一辺約0.6m・深さ約0.4mを測る隅丸方形の掘形を持つ柵跡あるいは掘立柱建物跡1棟、倉庫と思われる掘立柱建物跡1棟、長さ約30m・幅約2.0m・深さ約0.3mを測る溝1条のほか、多数のピットを確認している。遺構の所属する時期は、大きく分けて、弥生時代後期から古墳時代後期、及び平安時代後期の3時期があると思われる。おそらく、検出された遺構は、居住域の一面にあたるものと推定される。

7・8トレンチ 遺構は、竪穴式住居跡、溝跡、ピットなどを確認している。また、地形的には丘陵稜部から斜面、及び谷部にかけての地形変換点を把握している。しかし、現在、試掘調査に留めている。

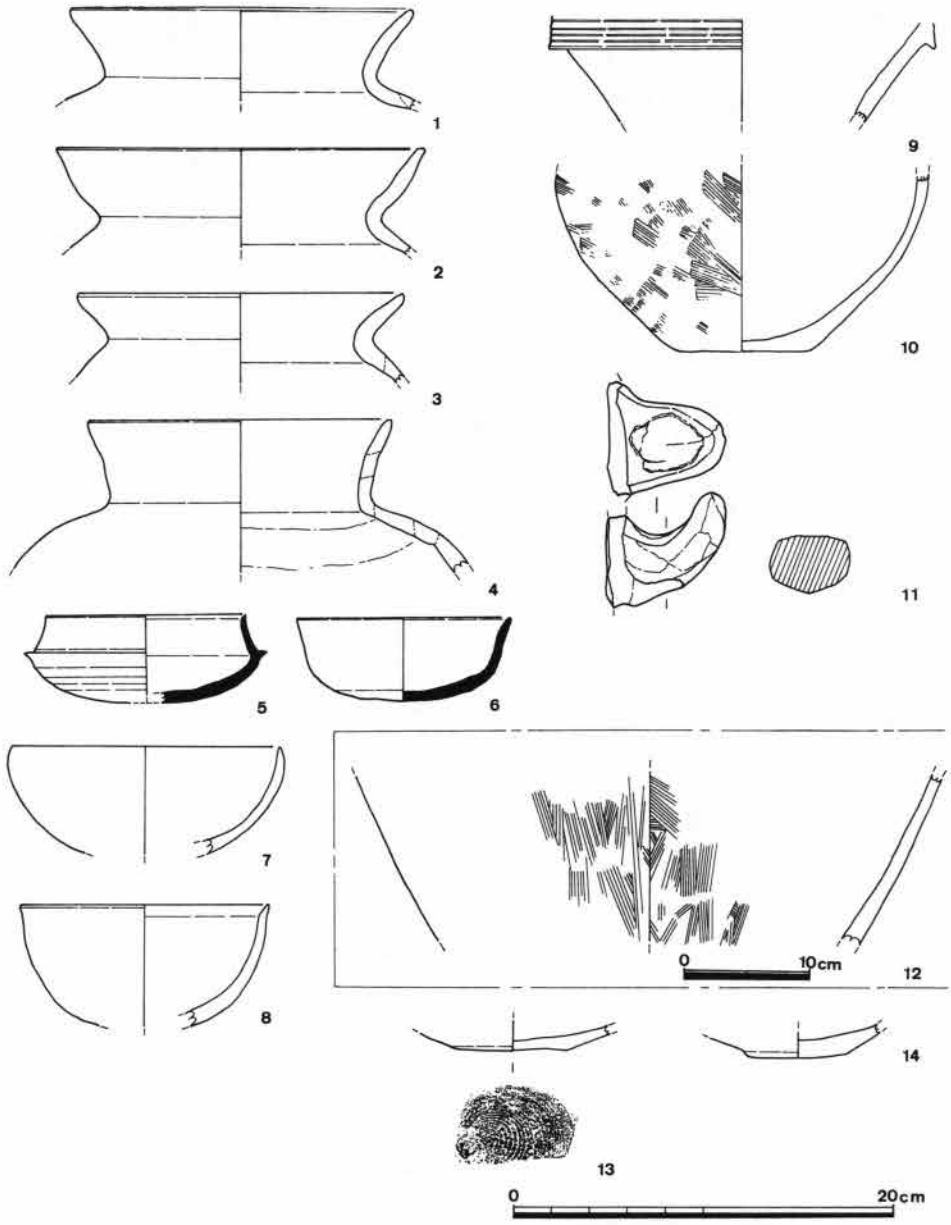
3. 出土遺物

沖積地で出土した土器・木器を図示した。

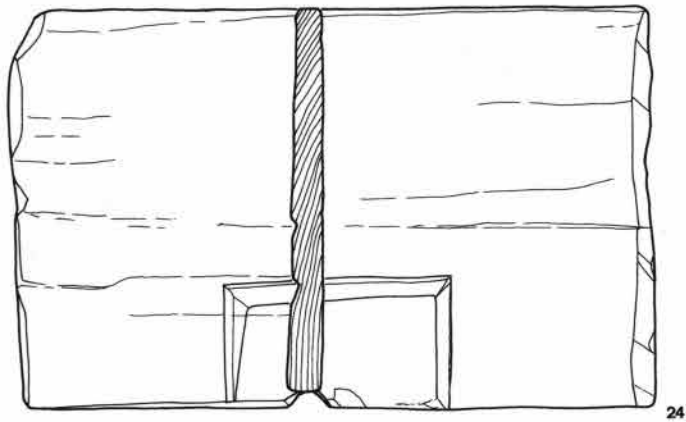
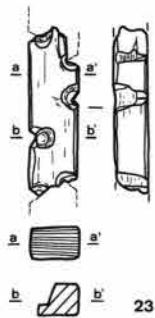
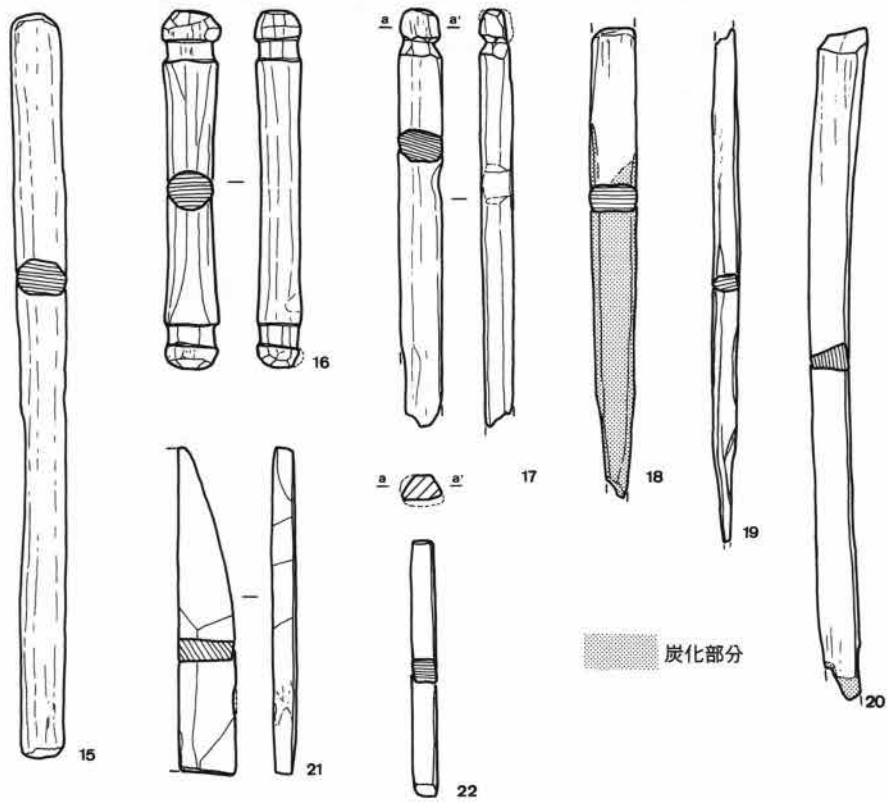
土器 1～4は、土師器の甕口縁である。「く」字形に外反するもの(1・3・4)と、やや内湾するもの(2)がある。4は、粘土紐輪積み痕を残す。5・6は、須恵器の杯身である。5は、復原口径約10.6cm・器高約4.7cmを測る。受け部は内湾し、口縁端部を外反させて尖り気味におさめる。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。6は、復原口径約11.3cm・器高約4.4cmを測る。丸みを帯びた底部から外反しながら立ち上がる。口縁端部は、やや尖り気味におさめる。焼成は良好、色調は暗青灰色を呈している。7・8は、土師器の杯である。7は、復原口径約14.3cm・器高約5.6cmを測る。丸みを帯びた底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。焼成は良好、色調は黄褐色を呈する。8は復原口径約13.2cm・器高約6.5cmを測る。やや深めの器形を呈する。口縁端部内面に鈍い稜を持つ。9・10・12は弥生土器である。9は、器台の口縁である。復原口径約19.8cmを測る。口縁部外面に5条の擬凹線が施される。胎土に砂粒を含んでいる。色調は、暗黄褐色を呈している。10は、甕の底部である。底径は、約7.0cmを測る。外面にはハケ目が施されている。胎土中に砂粒を含んでいる。色調は、暗褐色を呈する。12は、大型の甕の体部下半部と思われる破片である。器壁は約0.9cmと厚い。内外面に、ハケ調整痕が残る。畿内第IV様式のものと思われる。13・14は、土師器碗底部である。13は底径約6.0cm、14は約5.3cmの底径である。いずれも、底部に回転糸切り痕を残す。色調は、淡褐色を呈している。

木器 16・17は、雑具の部材と思われる有頭棒である。16は、長さ約19.0cm・幅約2.4cm・厚さ約2.2cmを測る。中央部分がやや細くなっている。全体にていねいな作りである。17は、長さ約22.1cm・幅約2.3cm・厚さ約1.7cmを測る。一端が欠損している。18～20は、杭状木製品である。18は、長さ約24.8cm・幅約2.5cm・厚さ約1.5cmを測る。断面形は、面取りのされた長方形である。先端部分から炭化している。杭として使用する際に防腐処理したものであろうか。20は、長さ約35.7cm・幅約2.0cm・厚さ約1.4cmを測る。先端部は炭化している。下端部には、鋭利な鉄器による切断痕が残る。まだ、木材本来の弾力性を有している。23は、火鑽臼である。残存長約8.8cm・幅約2.6cm・厚さ約1.75cmを測る。火鑽具を当てる部分に予め「V」字形の切り欠きを入れた痕跡を残す。6か所に火鑽痕が確

認できる。24は、用途不明木製品である。長さ約34.2cm・幅約21.2cm・厚さ約1.8cmを測る。片方の長辺中央やや左寄りに「V」字状の切り欠き、及び「コ」字形に溝が付けられている。25は、同一面に5か所、これに直交する方向に1か所柄穴が設けられている。穴の大きさは、縦約1.8cm・横約3.0cmである。これが約15cm間隔で開けられている。柄穴のなかには材が残存している。この材は、穴からやや小さめのものを入れ、楔で固定してい

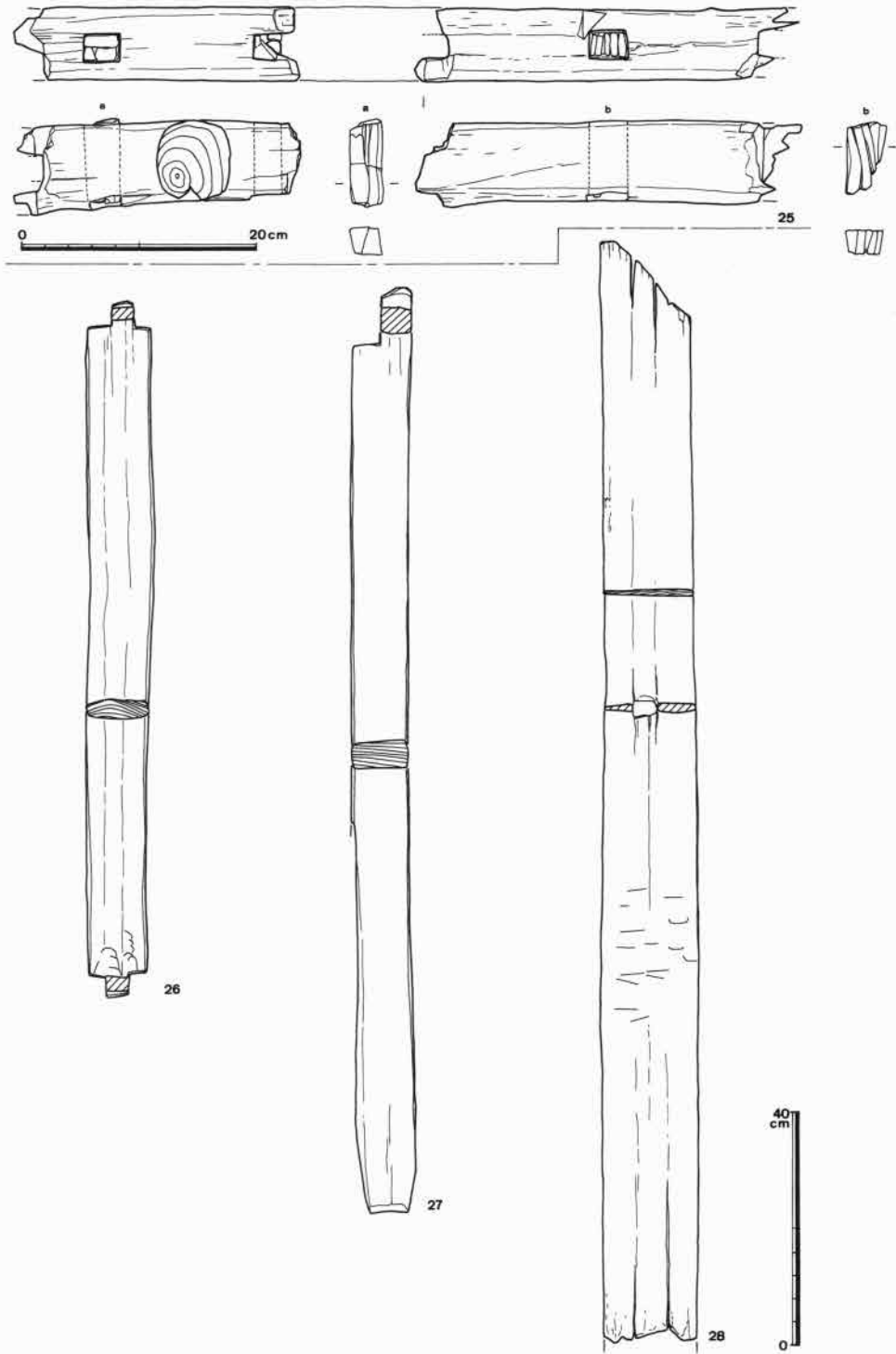


第16図 出土土器実測図(1~8・11, 4トレンチ深掘りA 9・10・12, 3トレンチ深掘りC下層)



0 20cm

第17図 木製品実測図(1) (トレンチ番号は、概報図面に対応)
 15・21.平成5年度トレンチ2 16~20・22・23.4トレンチ 24.平成5年度トレンチ8



第18図 木製品実測図(2)
25. 平成5年度トレンチ8 26~28. 3トレンチ

付表2 奈具岡遺跡出土遺物法量表

単位cm ()は現存長

土器

番号	種類	器種	口径	器高	底径	備考
1	土師器	甕	(18.0)			
2	土師器	甕	(19.4)			
3	土師器	甕	(17.2)			
4	土師器	甕	(16.0)			
5	須恵器	杯身	(10.6)	(4.7)		
6	須恵器	杯身	11.3	4.4		
7	土師器	杯	(14.3)	(5.6)		
8	土師器	杯	(13.2)	(6.5)		
9	弥生土器	器台	(17.8)			4トレンチ
10	弥生土器	甕			(7.0)	3トレンチ
11	土師器	把手				4トレンチ
12	弥生土器	甕				3トレンチ
13	土師器	椀			(6.0)	底部回転糸切り
14	土師器	椀			(5.3)	底部回転糸切り

木器

番号	種類	長さ	幅	厚さ	備考
15	棒状木製品	39.6	2.7	1.9	平成5年tr.2 ほぼ完形
16	雑具部材	19.0	2.4	2.2	4トレンチ 有頭棒 ほぼ完形
17	雑具部材	22.1	2.3	1.7	4トレンチ有頭棒
18	杭状木製品	(24.8)	2.5	1.5	4トレンチ 炭化部分あり
19	杭状木製品	(27.2)	1.4	0.9	4トレンチ
20	杭状木製品	(35.7)	2.0	1.4	4トレンチ 炭化部分あり
21	不明木製品	17.5	3.0	1.2	平成5年tr.2
22	棒状木製品	13.5	1.3	1.3	4トレンチほぼ完形
23	火鑽白	(8.8)	2.6	1.8	4トレンチほぼ完形
24	不明木製品	34.2	21.2	1.8	平成5年tr.8 ほぼ完形
25	馬鍬?	(133.0)	6.3	6.7	平成5年tr.8
26	部材	119.0	10.6	3.4	3トレンチ ほぼ完形
27	部材	158.0	7.4	5.0	3トレンチ ほぼ完形
28	板材	(188.0)	15.2	1.2	3トレンチ ほぼ完形 穿孔あり

る。異方向の柄穴との間隔は約6.0cmである。馬鍬の台木の可能性もある。26～28は、組み合わせ部材である。26は、長さ約119.0cm・幅約10.6cm・厚さ約3.4cmを測る。両端中央に柄が作り出される。27は、長さ約158.0cm・幅約7.4cm・厚さ約5.0cmを測る。片側に柄を作り出す。28は、残存長約188.0cm・幅約15.2cm・厚さ約1.2cmを測る。先端は斜めにカットされている。先端から約78.0cmのところに、柄穴がある。

5. ま と め

沖積地部分では遺物包含層は確認したが、顕著な遺構は認められなかった。一方、丘陵稜部の調査地は、過去に行われた第2次及び第3次調査と同一の丘陵背後の台地上の調査である。過去の調査では、弥生時代の墓や、古墳時代の住居跡などが確認されている^(注3)。今回は調査途中であるが、現在までの成果は、居住域という結果が得られそうである。今後、台地上を面的に調査し、当時の土地利用の状況を明確にする必要がある。

(柴 暁彦)

注1 田代 弘「奈良岡遺跡第5次調査地点試掘調査概要」(『京都市遺跡調査概報』第59冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1994



現地作業風景(東から)

注2 調査参加者(敬称略)

安達哲也・安達睦枝・今西茂満・岩佐正一・大下成子・沖とみ子・可見直典・熊谷千代子・嵯峨根清一・城下サヨ・谷口勝江・坪倉愛子・原 敬治・堀江登喜雄・村上五月・溝井麗子・森野美智子・由良里枝

注3 金村允人ほか「いもじや古墳・奈具岡遺跡発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第3集 弥栄町教育委員会) 1982

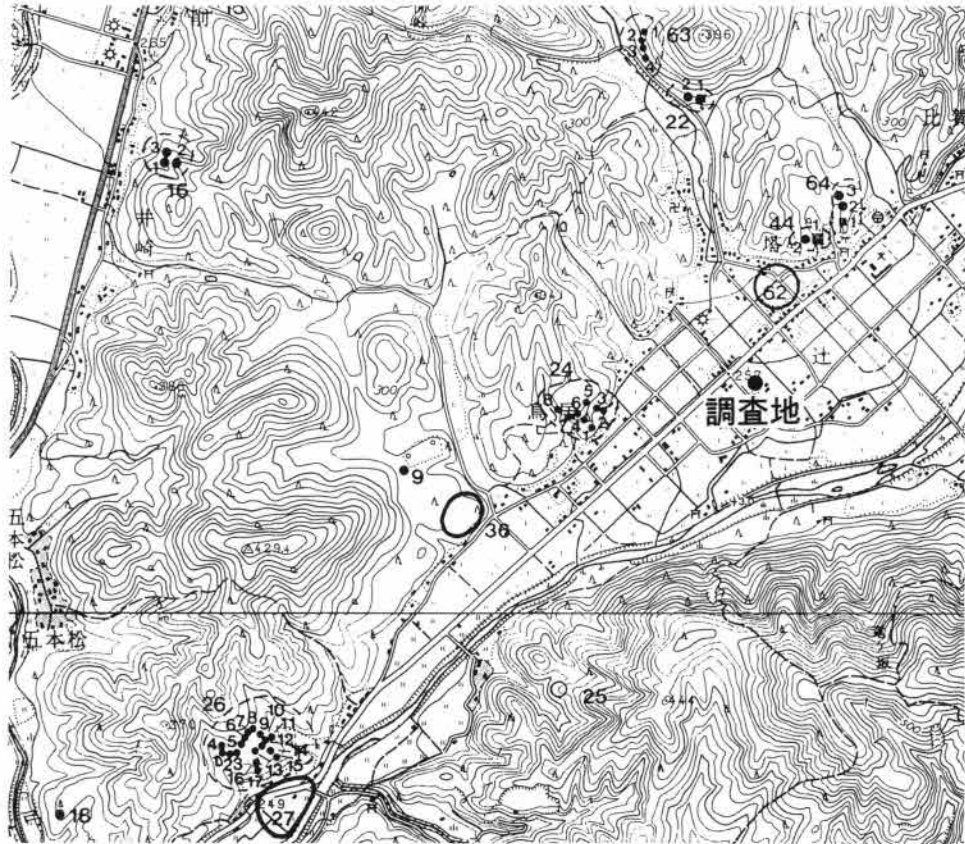
川西宏幸ほか『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』(財)古代学協会 1985

奥村清一郎「奈具岡遺跡発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告書』第4集 弥栄町教育委員会) 1986

3. 塔遺跡発掘調査概要

1. はじめに

塔遺跡は、京都府北桑田郡京北町大字辻小字狭間ノ元に所在する遺物散布地である(第19図)。本遺跡の発掘調査は、京都府農林水産部が施工する府営ほ場整備事業に伴う事前調査で、同部の依頼を受けて約900㎡の範囲にわたって実施した。調査は、平成6年6月27日から同年8月12日の期間に実施し、酷暑の中8月4日に現地説明会を行い50余名の参加者を得た。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛が担当し、本概要執筆及び編集は小池が行った。なお、調査に係わる経費は、



第19図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | | |
|------------|------------|-----------|-----------|
| 21. 馬塚遺跡 | 22. 塔村古墳群 | 24. 鳥居古墳群 | 9. のほりお古墳 |
| 63. 三宅谷古墳群 | 44. 愛宕山古墳群 | | |

全額、京都府農林水産部が負担した。

調査期間中、酷暑の最中ではあったが、地元の方々の多数の参加を得た。また、京北町教育委員会・地元自治会をはじめ、関係諸機関の方々から多くのご協力を得た。記して感謝の意を表したい。^(注1)

2. 調査概要

今回の発掘調査は、京都府教育委員会によって平成5年11月17日から同年12月9日に試掘調査が行われた調査成果^(注2)をもとに、試掘調査15・16地点を中心にトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた。耕作土と床土上面を重機により除去し、以下、人力掘削を行った。なお、トレンチ南半で近世耕作溝を多数検出したが、床土下に弥生土器や須恵器の遺物包含層を確認したため、人力により除去した。

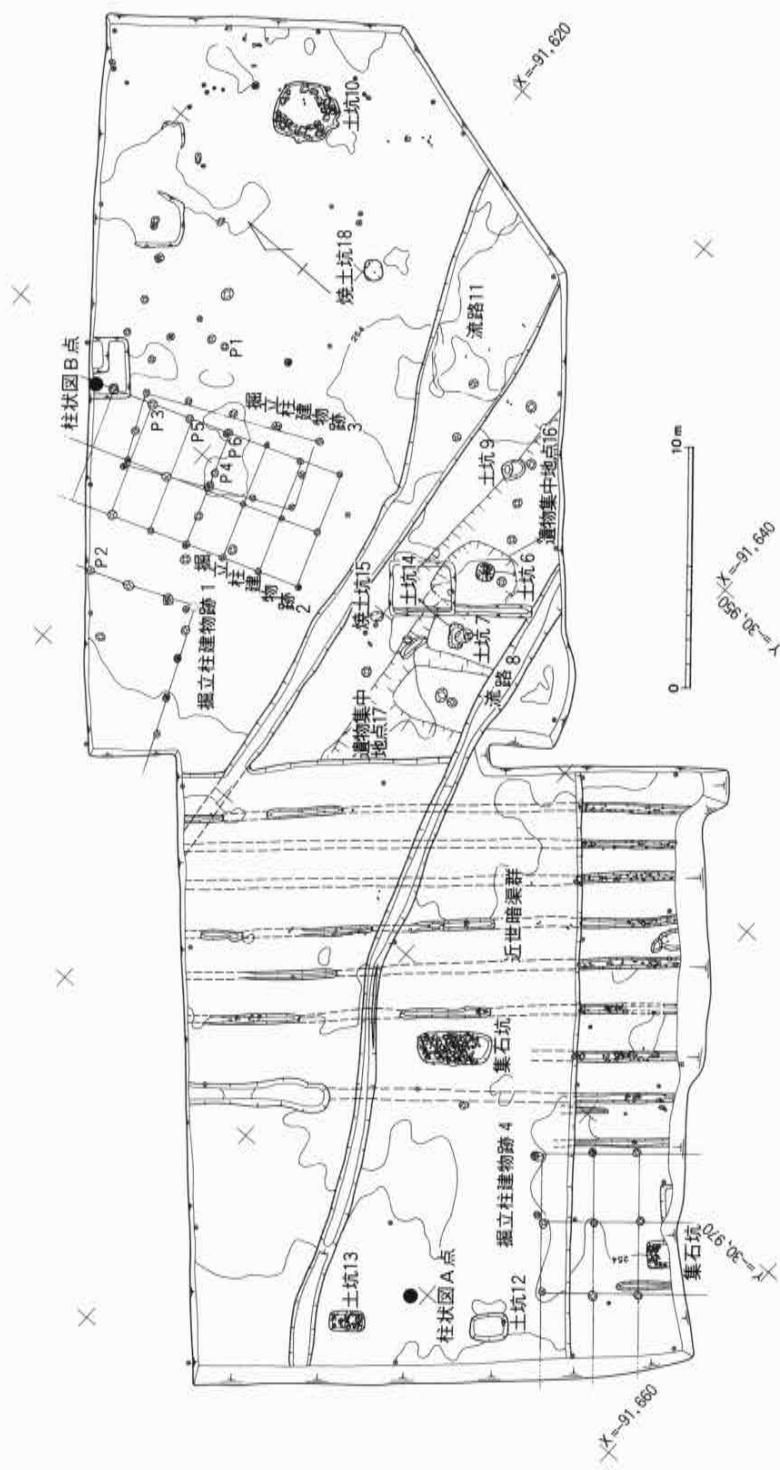
検出した遺構には、弥生時代中期の流路や古墳時代後期の掘立柱建物跡、中世の掘立柱建物跡・土坑、近世の土坑・暗渠などである。

(1)土層堆積状況 トレンチは、南北両端で0.2mの高差を測り、ほぼ平坦な地形を呈している(第20図)。一方、遺物包含層は、南に厚く堆積しており、A地点では、遺物包含層直下に青灰色粘土が堆積しているのに対して、B地点では、暗茶褐色礫層が堆積している(第20・21図)。トレンチ北半では、弥生時代の流路を2条検出しているが、流路間から弥生土器が散発的に出土していることから、弥生時代以後の幾多の氾濫を示唆している。

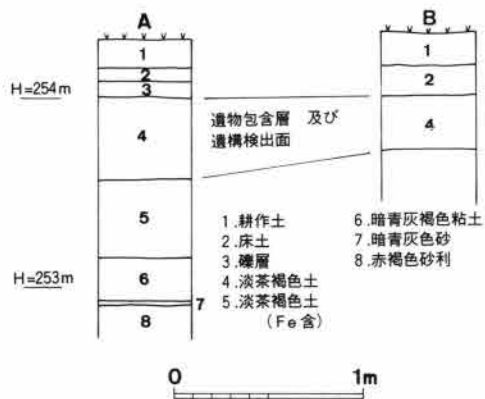
(2)検出遺構(第20図)

検出した遺構は、弥生・古墳・平安時代と中・近世の各時代にわたっている。以下、時代ごとに検出遺構を概観しておきたい。

弥生時代 流路8(第20図)は、平均幅0.8m・深さ0.2mを測り西流する。埋土は、砂礫が主体であり、弥生土器が出土している。この流路は、一時的な氾濫により形成された可能性が高い。流路11(第20図)は、流路8の北方に位置しており、最大幅4.5m・深さ0.2mを測る。流路の基盤層は礫層であり、埋土は、砂利が主体である。流路内から弥生土器が出土している。なお、両流路間には、明確な輪郭を確認し得なかったが、弥生土器が集中して出土する地点が2か所で見られた。特に、遺物集中地点16は、ほぼ2.8m四方の範囲に深さ0.1mにわたり弥生土器が包含されており、第27図の石器群の検出も見られた。また、遺物集中地点17は、氾濫によって形成された流路8・11間に位置し、地点16と接合関係を持つ弥生土器の出土も含まれていることから、氾濫によって再堆積した可能性が指摘できる。なお、流路8・11間には、流路の主軸と平行する地質的变化を示すラインが数条確認できたことから、複数回の氾濫を想定できる。焼土坑15は、0.3m×0.5mの楕円形を、



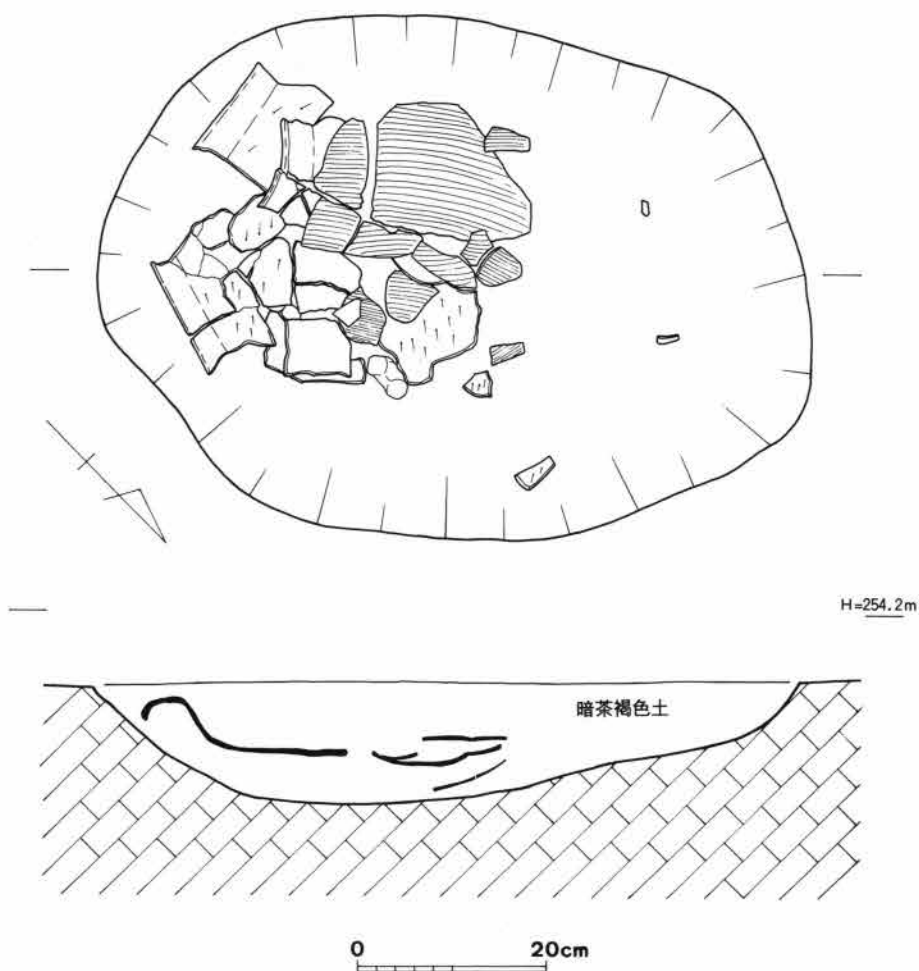
第20図 検出遺構配置図



第21図 土層堆積状況柱状図

焼土坑18は、0.6m×0.8mの不整円形を呈しており、各々から弥生土器細片が出土している。

古墳時代 土坑7(第22図) 長軸0.8m・短軸0.5mを測る不整な楕円形を呈しており、最深部で0.12mを測る。土坑底部は、検出面からゆるやかに掘られており、南半部では埋納した直後の状態を保った土師器・甕が出土し



第22図 土坑7実測図

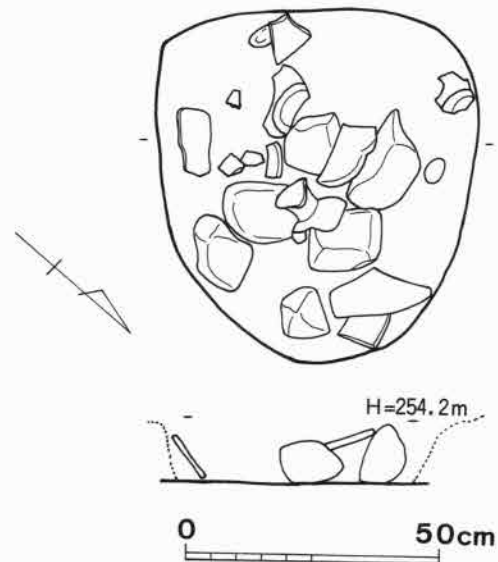
た。甕は、口縁部を南方に向けて横位に据え付けられており、土圧によって土坑底部に重なり合った状況で出土した。なお、平成6年8月4日に開催した現地説明会では、当該遺構を弥生時代甕棺墓と報じたが、ここで訂正しておきたい。

土坑14 先述した土坑7の直下で検出した土坑で、長軸0.8m・短軸0.45mの隅丸方形を呈している。土坑内から須恵器・杯身と弥生土器片が出土した。**掘立柱建物跡1** (第20図)の主軸は、西方へ23°振っており、南北列3間以上、東西列5間以上である。南北列の柱間距離は1.8mで、東西列は1.6~1.8mである。柱穴は、基本的に直径0.3~0.5mの円形または隅丸方形である。**掘立柱建物跡2**の主軸は、西方へ20°振っており、南北列6間以上、東西列5間以上である。南北列の柱間距離は1.6mで、東西列は2.4mである。また、柱穴は、直径0.3mの円形である。**掘立柱建物跡3**の主軸は、西方へ25°振っており、南北列4間、東西列2間である。南北列の柱間距離は1.6mで、東西列は1.4mである。柱穴は、直径0.3mの円形である。

平安時代 土坑6 (第23図) 土坑輪郭は、極めて不明瞭であるが、長軸0.7m・短軸0.6mの不整な円形に復原できる。土坑内からは、拳大の礫とともにほぼ完形の近江産緑釉陶器・椀、灰釉陶器・壺、土師器・皿、炭などが出土した。

中世 土坑10 (第24図)は、長軸2.8m・短軸2.4mの不整な円形を呈し、最深部で0.2mを測る。掘形内側には、ほぼ直径1.8mの礫を円形に配しており、礫間で瓦器及び東播系の摺鉢を検出した。**土坑12**は、長辺1.5m・短辺1.1mの隅丸方形で、土坑底部は平らで最深0.4mを測る。土坑内から瓦器・椀が出土しており、後述する掘立柱建物跡4に付随する施設の可能性がある。**掘立柱建物跡4** (第25図)の主軸は、西方へ40°振っており、桁行・梁間とも2間以上である。柱間距離は1.8mと2.8mを測る。

近世 土坑13は、長辺1.5m・短辺0.8mの隅丸長方形を呈しており、深さは0.35mである。土坑内を拳大の礫で充填し、土坑底部に板材を敷く。暗渠溝群は、1.8mごとに等間隔に穿たれており、溝内を礫で充填している。また、礫を充填した同時



第23図 土坑6実測図

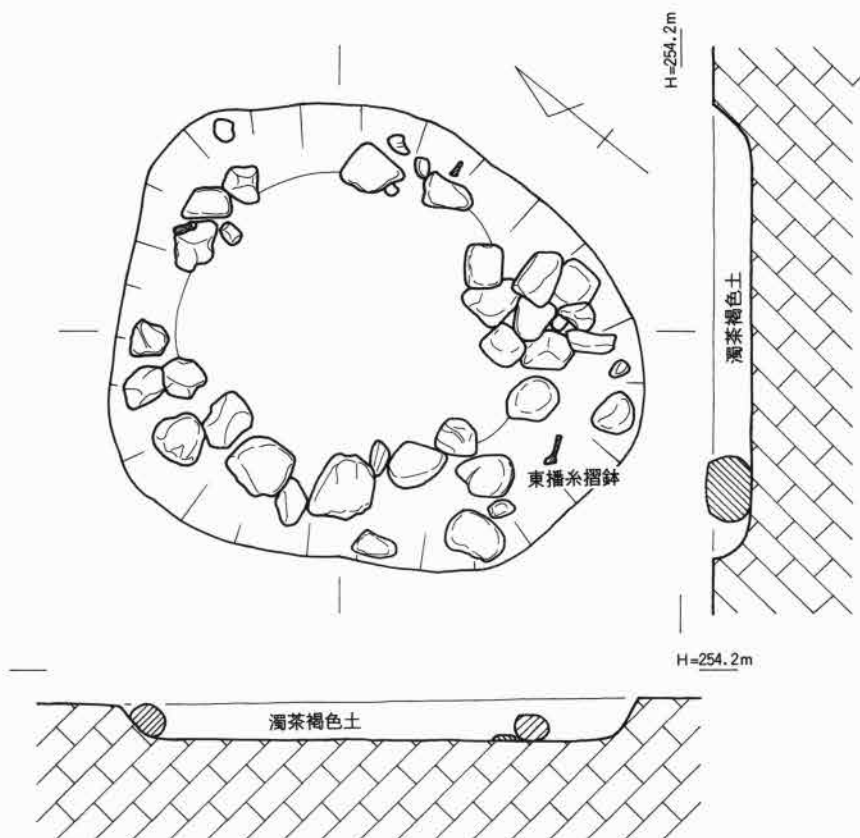
期の集石坑も検出しており、溝・土坑による排水を目的とした可能性が考えられる。

(2) 出土遺物

出土遺物は、弥生土器、石器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、中世須恵器、近世陶磁器類と多岐に及ぶが、ここでは遺構検出資料を中心に図示し、それらを補足する目的で、包含層出土資料についても図示し、主要な遺物について概観する。

弥生時代

遺物集中地点16出土遺物(第26図) 1は、胴部最大径22.9cmを測る壺で、頸部に横描直線文を施す。胴部内面は不整方向のハケ目で調整する。2は、口縁端部に左下がりの刻み目文を施す甕で口径27.7cmを測る。口縁部内面はハケで調整を行う。3は、口縁端部を2面に成形し、各々に刻み目文を施す甕で、内外面をハケにより調整を施す。8は、直上す



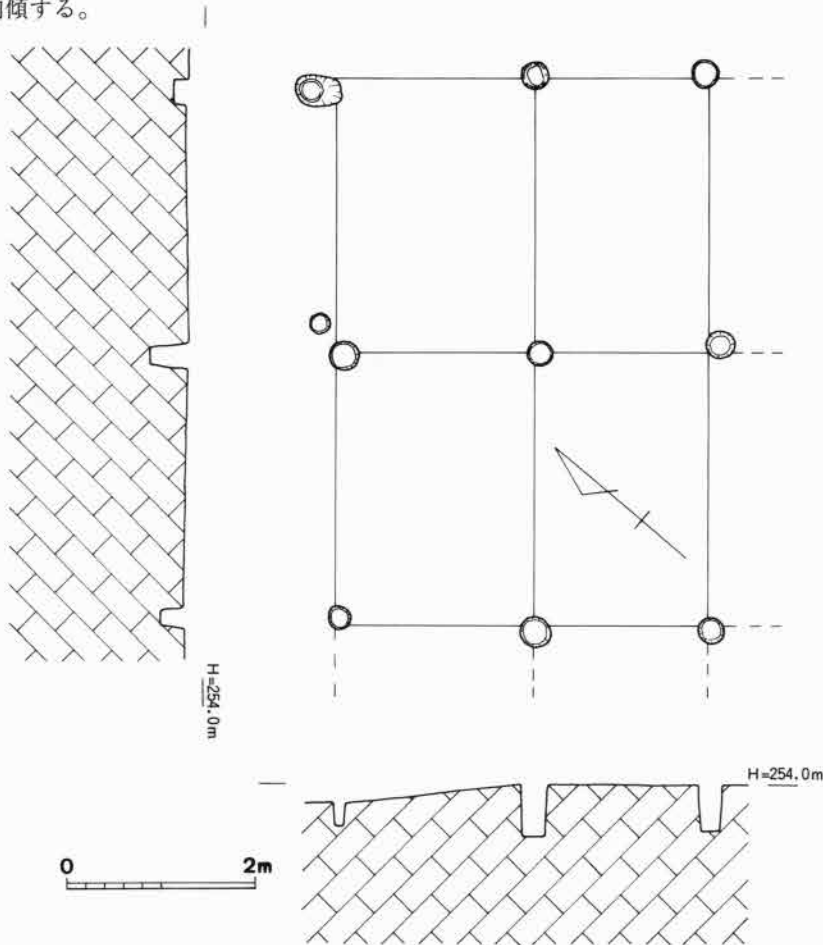
第24図 土坑10実測図

る胴部から湾曲し、やや下方に下がる口縁部をもつ甕で、口径は27.6cmである。9は、頸部で屈曲し外反する口縁部をもつ甕で、口縁端部に刻み目文を施す。胴部外面は縦方向のハケ目で調整する。11は、口径34.6cmを測る甕で、口縁端部に刻み目文を施す。胴部内面は、基本的に横方向のハケ目、外面は縦方向のハケ目で調整する。12~20は、櫛描き直線文と流水文を施した土器片である。21は、花崗岩製の敲石で中央部に使用痕が見られる。23は、砂岩製の凹石で中央部に使用痕が観察できる。24は、粘板岩製で加工痕を残している。

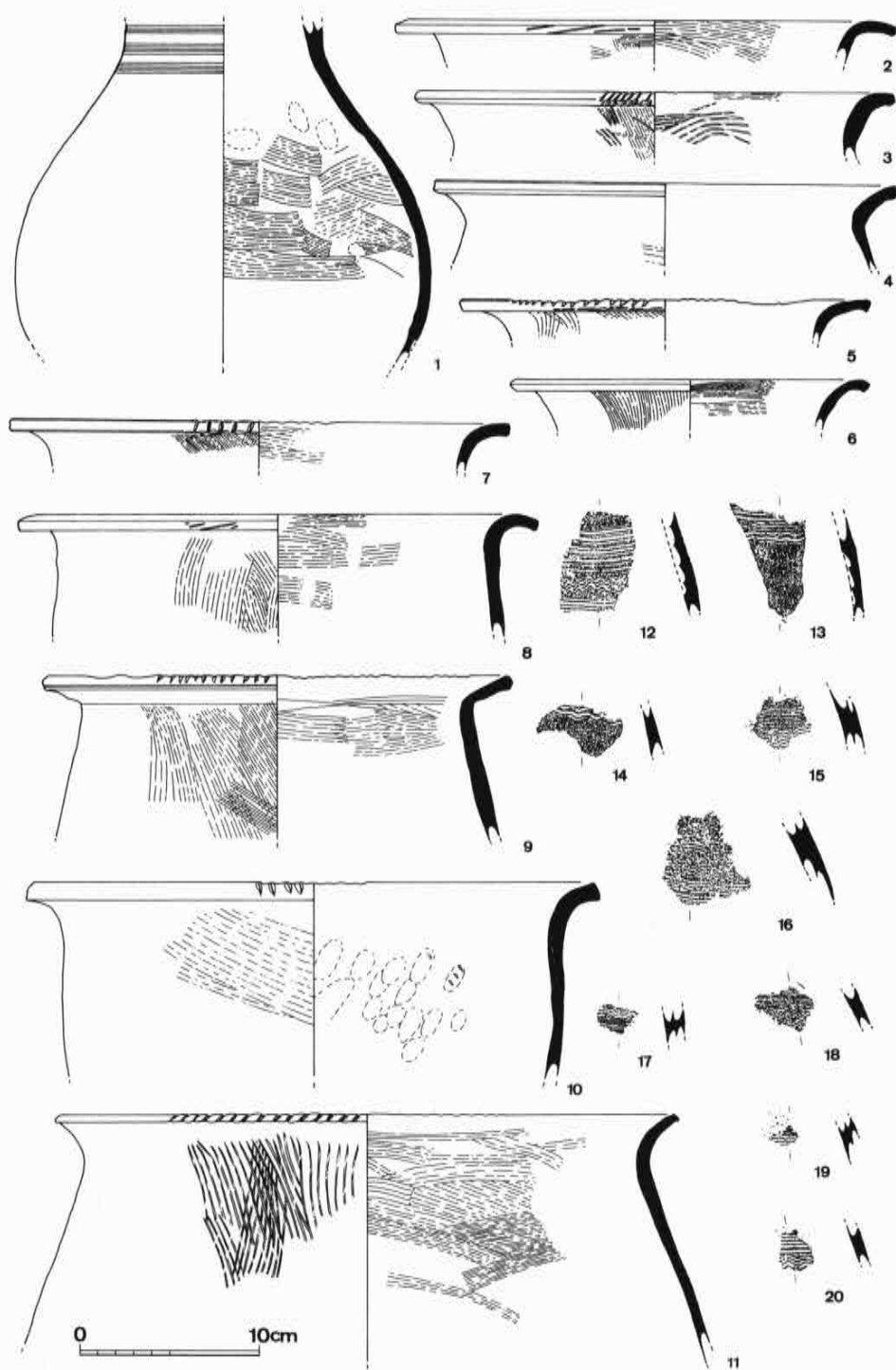
古墳時代

土坑7出土遺物 26は、口径17.9cm・頸径15.5cm・胴部最大24.4cm・器高30.6cmを測る土師器の甕である。底部は丸く、長胴の胴体部から内湾し、直線的に外反する頸部をもつ。外面はハケ目、内面はヘラ削りによって調整を行う。

ピット群出土遺物 27~29は、須恵器・杯身で、口径11.2~12cmを測る。立ち上がりは短く内傾する。



第25図 掘立柱建物跡4実測図

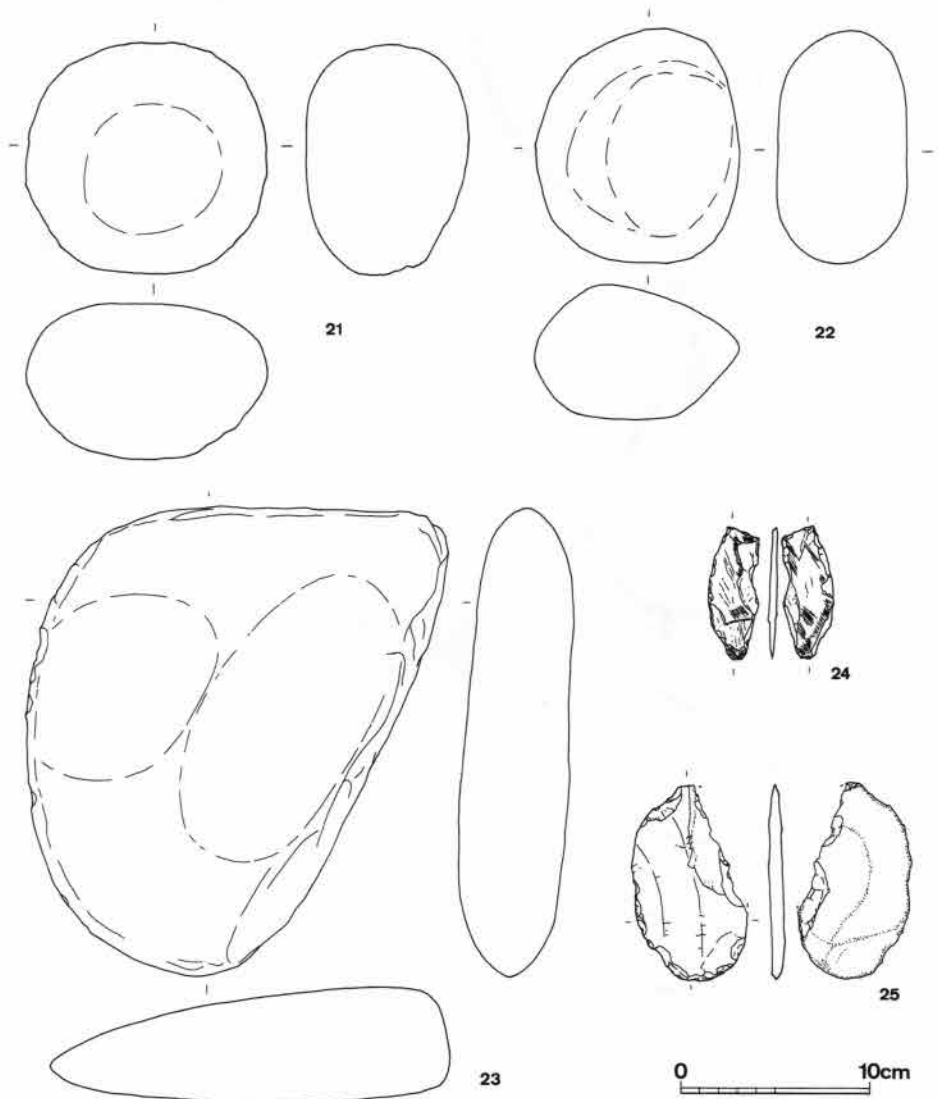


第26図 出土遺物実測図(1) (遺物集中地点16)

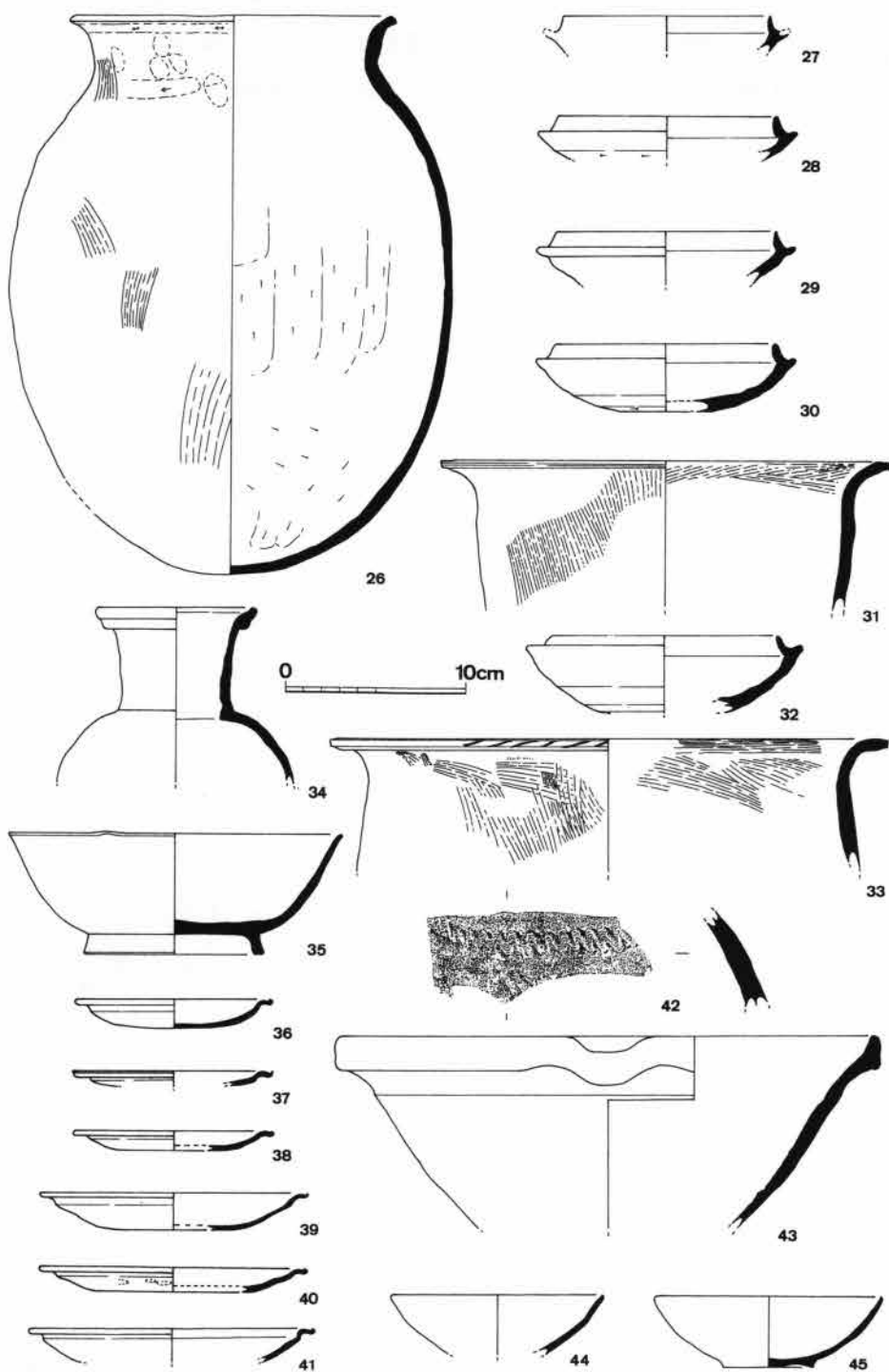
土坑14出土遺物 弥生時代の包含層に穿たれた土坑であるため、坑内に弥生土器を含んでいるが、30は、須恵器・杯身でピット群出土須恵器と同じ形態である。

土坑6出土遺物 34は、口径8.8cm・頸径6cmを測る灰釉陶器・壺である。35は、口縁端部にしのぎを施し、貼り付け高台をもつ緑釉陶器・碗である。形態の特徴と色調から近江産緑釉陶器と考えられる。36~41は、いわゆる「て」字状口縁をもつ土師器・皿で、口径は最小10.8cm~最大15.7cmを測る。

土坑10出土遺物 43は、口径30cmを測る摺鉢で、胎土からいわゆる東播系中世須恵器で

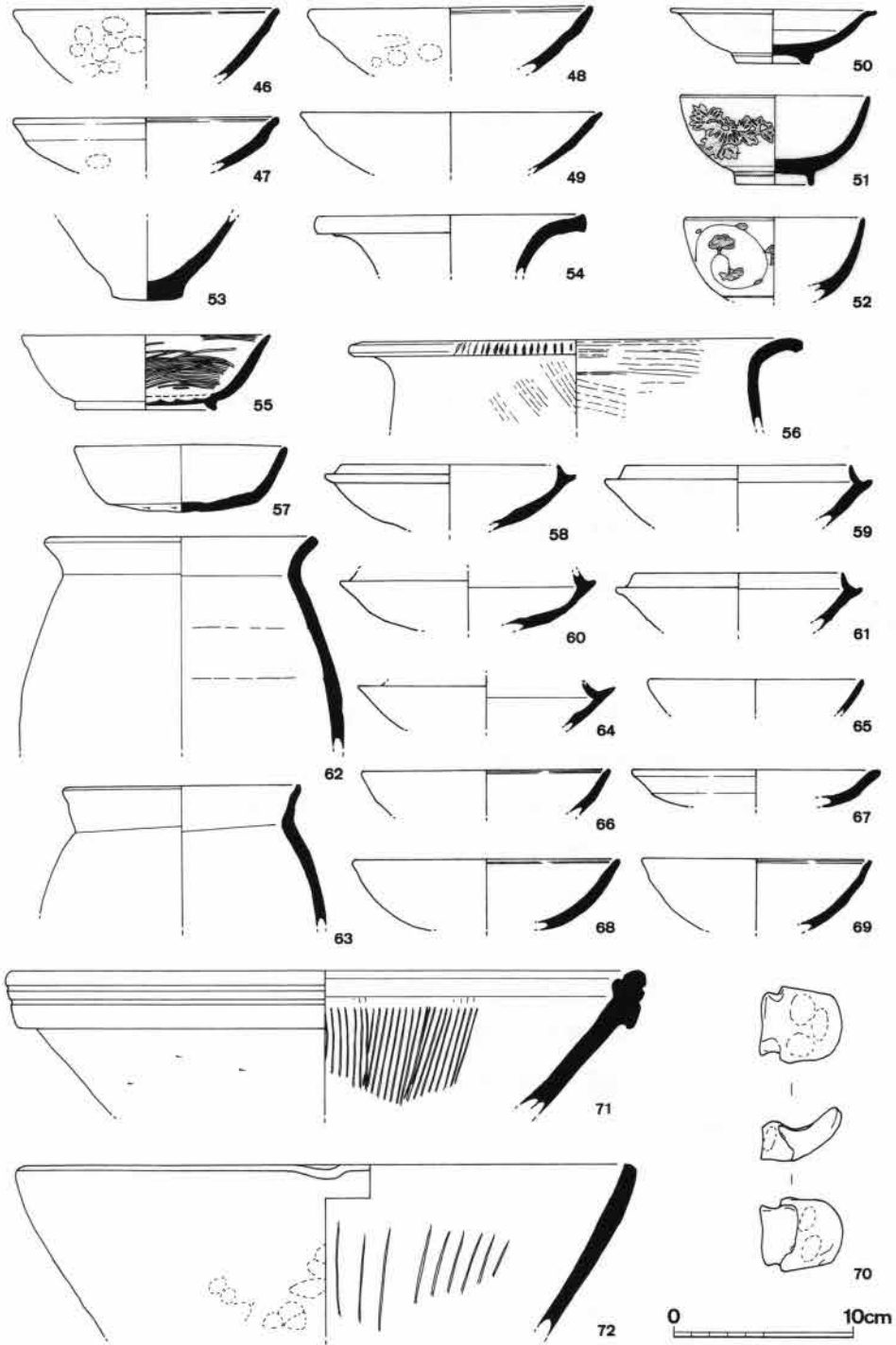


第27図 出土遺物実測図(2) (遺物集中地点16)



第28図 出土遺物実測図(3)

26. 土坑7 27. P3 28. P4 29. P6 31・32. 土坑14 32・33. 流路11 34~42. 土坑6 43~45. 土坑10



第29図 出土遺物実測図(4)

46・47. 土坑12

53~55. 流路8

50~52. 土坑13

48・49・56~72. 遺物包含層

ある。44・45は、瓦器・椀である。

土坑13出土遺物 50は、口径11.4cmを測る唐津・皿、51は口径10.4cmの蒟蒻印判をもつ磁器・椀である。

包含層出土遺物 58～61・64は、須恵器・杯身である。柱穴出土資料も含め、陶邑編年TK209前後に比定できる。62・63は、長胴の土師器・甕である。71・72は、近世陶磁器・摺鉢である。

3. ま と め

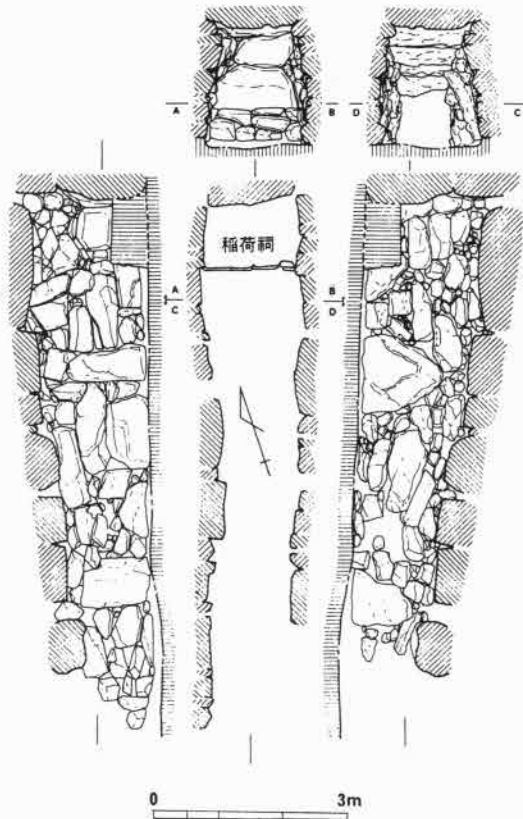
今回の発掘調査は、先述したように京都府教育委員会が実施した試掘調査の成果をもとに調査区を設定したため、字名は「辻」であるが、一連の遺跡として「塔遺跡」の呼称を踏襲した。

検出した遺構・遺物は、先述したように弥生時代から近世に及んでおり、塔遺跡が立地する平野部が、生活環境に優れた条件を有していたことがわかった。トレンチ北東では、弥生時代中期の土器を含む流路を2条検出し、流路の周辺及び流路間において、幾多の氾濫を示唆する地質的变化を確認できた。また、流路間で検出した遺物集中地点16は、比較的土器がまとまって出土していることから、氾濫によって遺構の輪郭が著しく不鮮明になった可能性がある。遺物の出土状況は、2.8m四方に集中しており、規模・構造は不明確であるが、竪穴式住居跡の可能性も指摘できる。第26図に図示した土器群は、一括性が高く、畿内第Ⅱ様式に比定できる土器群であり、弥生時代中期の集落が周辺に存在する可能性を示唆している。また、大和甕・近江系甕の新例として重要である。

一方、土坑7出土の横位に据えた土師器・甕は、長胴であることと頸部が2cmにわたり直線的に外反し、なおかつ、胴部外面をハケ目、内面をヘラ削りによって調整している特徴をもつ。土坑7直下で検出した土坑14から陶邑編年TK209に比定できる須恵器・杯身が出土していることから、この甕を古墳時代後期(6世紀末)以降に比定できる。トレンチ内では、飛鳥・奈良時代の遺構・遺物は検出しておらず、また、後述するように古墳時代後期の掘立柱建物跡群を検出している状況から、この甕を土坑14に限りなく近い時期に比定して大過ないところである。京都盆地以北における古墳時代後期の土師器・甕の形態的特徴及び調整など、不明な点が多い現時点では、本資料は、極めて重要な類例である。一方、この土坑群と同型式と認められる須恵器が掘立柱建物跡1～3を構成する柱穴から出土している。包含層出土須恵器も含め陶邑編年TK209に比定でき、古墳時代後期に集落が形成されていたことが判明した。古墳時代後期の集落は、竪穴式住居跡群で構成されることが通有であるが、当該遺跡で検出した建物跡は、総柱の掘立柱建物跡群であることか

ら、集落の中にあつて一般的な居住空間ではなく、倉庫を主体とした空間である可能性が高い。建物跡周辺から土器などの遺物が少ないことも、そのことを傍証している。周辺において古墳時代後期に比定できる遺跡としては、当該遺跡が所在する平野部の北西丘陵端部にのほりお古墳群・塔村古墳群などが点在している。のほりお古墳群は、京北町教育委員会によって発掘調査が行われ、追葬段階に玄門両側と床面に石を配置し、畿内中央部で盛んに採用された石槨を想起させる加工が施されていることが判明した。また、塔村古墳群は、『弓削』に通じる谷部にあつて、全長8.4mの無袖横穴式石室を主体とする円墳群である。これらの古墳が成立した歴史的背景については不明であったが、今回の発掘調査によってその歴史的背景の一端が明確になったばかりでなく、古墳群を造らしめた集落の構造の一部が明らかになった意義は大きい。今後、古墳築造時期と集落成立時期に関する正確な検証が待たれるところである。

奈良～平安時代の遺物は、包含層中にはほとんど確認しておらず、また、土坑7以外の遺構も検出していないことから、当該調査地では、同時期の土地利用は基本的に行われなかったと考えられる。唯一の遺構である土坑7は、拳大の礫、破碎した土器とともに炭を検出しており、直接、熱を受けてはいないが、調査地周辺で行われた祭祀に使用された土器群を一括して投棄した可能性が高い。土器群には近江産緑釉陶器を含んでおり、10世紀中葉を中心とする時期に比定できる。一方、土師器・皿群は10世紀後半に比定でき、両者に年代差を認定できる。おそらく、平安時代の当地にあつて、緑釉陶器は重宝されたため、伝世されたのであろう。京北町は、平安遷都にあつて建築用材を供給したことが広く知られているが、当該調査地より北東方には、山國庄が推



第30図 塔村1号墳石室実測図(注4文献から転載)

定されており、何らかの関連を推定できる。当該遺跡が所在する平野部に何らかの施設が存在する可能性を示唆する遺物として重要である。

中世に比定できる掘立柱建物跡4は、古墳時代の掘立柱建物跡群の主軸が西へ20～25°振っているのに対して、北方に対してほぼ直交するように配置されている。この主軸は、現行の水田畦畔と一致しており、当該遺跡が所在する平野部の土地区画が、少なくとも中世までさかのぼる可能性が指摘できる。また、掘立柱建物跡4の検出は、「辻」集落が形成された歴史的背景を正確に把握できる根拠として新資料を得たといえる。なお、石組みをもつ中世土坑10は、集落に伴う水溜めなどの施設を想定できる。

トレンチは元来、2筆にわたる水田であり、トレンチ中央部に畦畔が存在していた。その畦畔を境界に南西半には等間隔に暗渠が穿たれている。近世土坑13及び暗渠溝出土遺物から、18世紀中葉～19世紀に効率のよい水田経営が可能のように工夫がなされたことがわかった。

今回の調査は、当該遺跡が所在する平野部において本格的に行われた考古学的調査であり、提起した問題は多岐に及んでいる。今後、周辺における分布調査・発掘調査によって、現状より詳細に歴史的環境を復原できると考えられる。特に、弥生集落や周辺に所在する後期古墳群と今回検出した集落の関連は、新たに提起できた問題である。また、山國庄の推定地を考察する上で、緑釉陶器の出土は、微細ではあるが、参考資料として重要である。

(小池 寛)

注1 現地及び整理事業には、以下の方々の参加を得た。

大西政雄・細見正一・大栢婦み枝・林 一郎・人魯保子・渋谷敏子・細見 秋・水口敏枝・藤野 壽・久保好枝・久保義巳・塔本みち代・渋谷長子・田中国枝・岩本 宏・久保 薫・藤野タツエ・田中 脩・芦塚和子・小滝初代・中島恵美子・正田季美枝・林 秀子
協力者 森川 敦子(順不同・敬称略)

注2 「[2] 塔遺跡 府営農業基盤整備事業関係遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1994)』 京都府教育委員会) 1994

注3 「のほりお古墳発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集 京北町教育委員会) 1992

注4 「4. 周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』 京都府教育委員会) 1979

注5 厳密な概念規定の下には使用していない。

注6 『京北町誌』 京北町 1975

4. 若林遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

若林遺跡は、平成2年度に宇治市教育委員会により、発掘調査(第1次)が行われ、弥生時代後期の溝や古墳時代後期の住居跡・古墳などが見つ^(注1)かっている。また、平成5年度には、当調査研究センターが発掘調査(第2次)を行い、奈良時代の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡などを検出^(注2)した。

今回の調査は、建設省の「建設省伊勢田職員宿舎B棟新築工事」に先立ち、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて実施した。調査期間は、平成6年7月18日から9月9日まで、調査面積は約400㎡である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同調査員岸岡貴英が担当し、本概要は、遺跡の層序について、a～cを中塚良が、出土土器を長友朋子が、それ以外を岸岡貴英が執筆^(注3)した。

調査を進める上で、宇治市教育委員会・宇治市文化財愛護協会をはじめ、関係諸機関の方々から多くの御協力を得た。記して感謝の意を表したい^(注4)。

なお、基準点測量作業については、(株)スカイサーベイに依頼した。



第31図 調査地及び周辺遺跡分布図

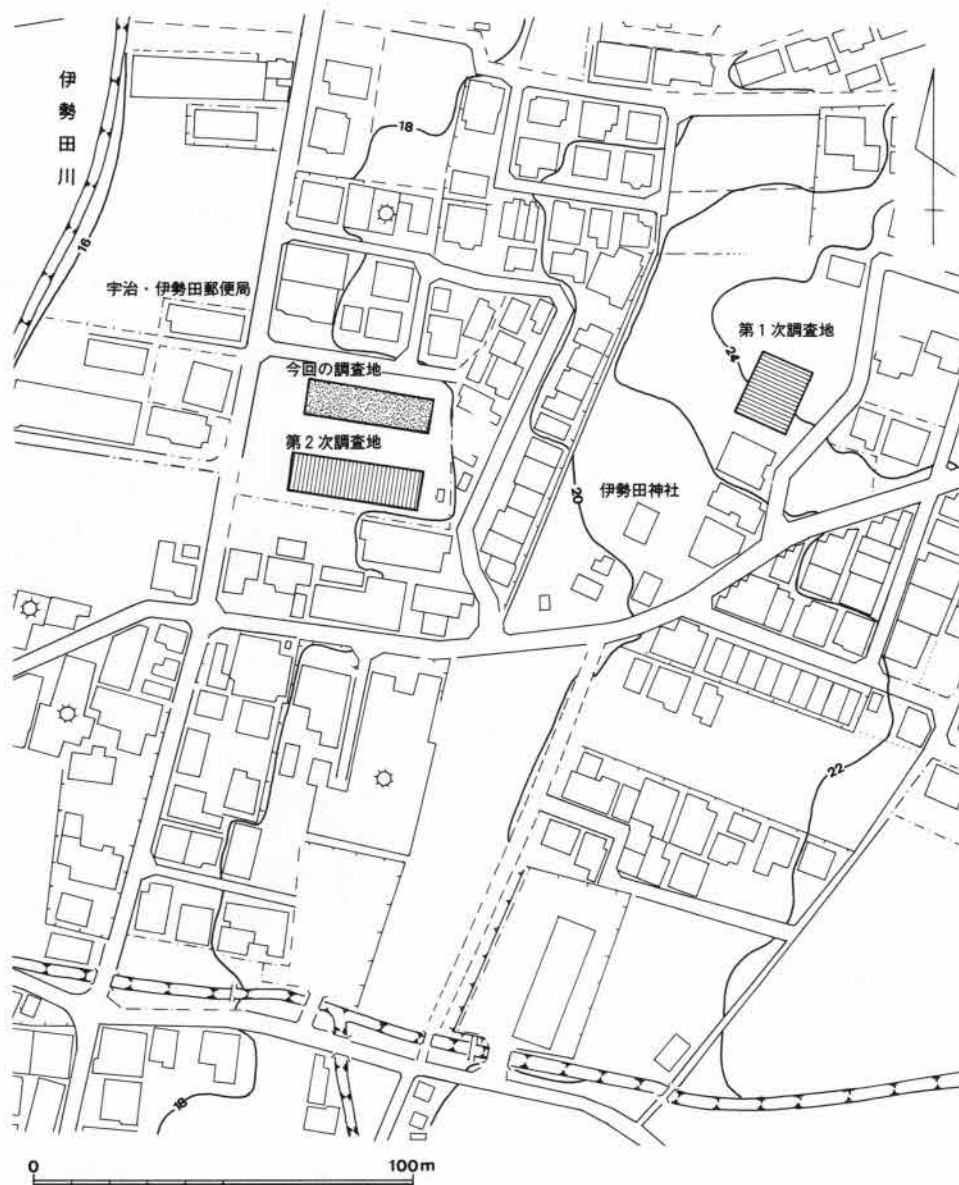
- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1. 小倉環濠集落 | 2. 巨椋神社東遺跡 | 3. 神楽田遺跡 |
| 4. 蔭山遺跡 | 5. 安田環濠集落 | 6. 井尻遺跡 |
| 7. 若林遺跡 | 8. 中山遺跡 | 9. 石塚遺跡 |
| 10. 一里山遺跡 | 11. 大久保環濠集落 | 12. 坊主山古墳 |
| 13. 大竹古墳 | | |

調査に要した費用は、全額建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所が負担した。

2. 位置と環境

若林遺跡は、東から西へなだらかに傾斜している宇治丘陵の西北端部に位置している。この遺跡の周辺地域には、弥生時代から中世までの遺跡が見られる。

弥生時代の遺跡には、神楽田遺跡や巨椋神社東遺跡などがある。前者は、旧巨椋池の東



第32図 調査地位置図

岸微高地上に位置し、弥生時代後期の土器が出土している。後者は、この遺跡の北700mのところであり、偏平片刃石斧・石鏃や弥生時代中期の土器が出土している。さらに、野神遺跡、石塚遺跡でも、石鏃が採集されており、弥生時代の集落跡の存在が予想される。

古墳時代の遺跡には、中山遺跡や井尻遺跡などの集落跡と単独墳である西山古墳・伊勢田塚古墳・一里山古墳・北山古墳などがある。中山遺跡では、須恵器の杯や有蓋高杯などが出土している。西山古墳は、直径12mほどの円墳で、かつては横穴式石室が開口していたと伝えられており、古墳時代後期のものと思われる。また、伊勢田塚古墳は四柱式家形陶棺を直葬する古墳である。この陶棺は、全国でも1例しか類例がみられず、大変珍しいものである。

飛鳥時代～奈良時代の遺跡として、広野廃寺が著名である。この遺跡では、瓦の堆積層や窯跡の存在が確認されている。また、小倉町春日森では、平安時代後期の唐草文鏡が見ついている。さらに、安田町・小倉町・大久保町では、中世の環濠集落が見ついている。

①調査の経過

調査は、7月18日に開始した。まず、重機によって約10～30cm掘削し、盛り土層(第34図1)及び包含層(第34図2)の一部を除去した。また、旧住宅のコンクリートの基礎や水道管が埋設されていたため、一部を重機により取り除いた。その後、7月21日から人力による精査を行い、遺構を検出した。また、トレンチに平行して4m四方のグリッドを設け、遺物の取り上げを行った。国土座標については、基準点測量を業者に委託した。8月25日には、柵列を検出しその性格をみるため、一部拡張した。その後、9月1日に関係者説明会を行い、多くの方々の参加を得た。

さらに、9月6日には重機による断ち割りを行い、遺構のベースとなる地盤の形成状況を確認した後、9月9日には調査を終了した。

(岸岡貴英)

②遺跡の層序について

a. 宇治市若林遺跡の地形・地質条件(第33・34図)

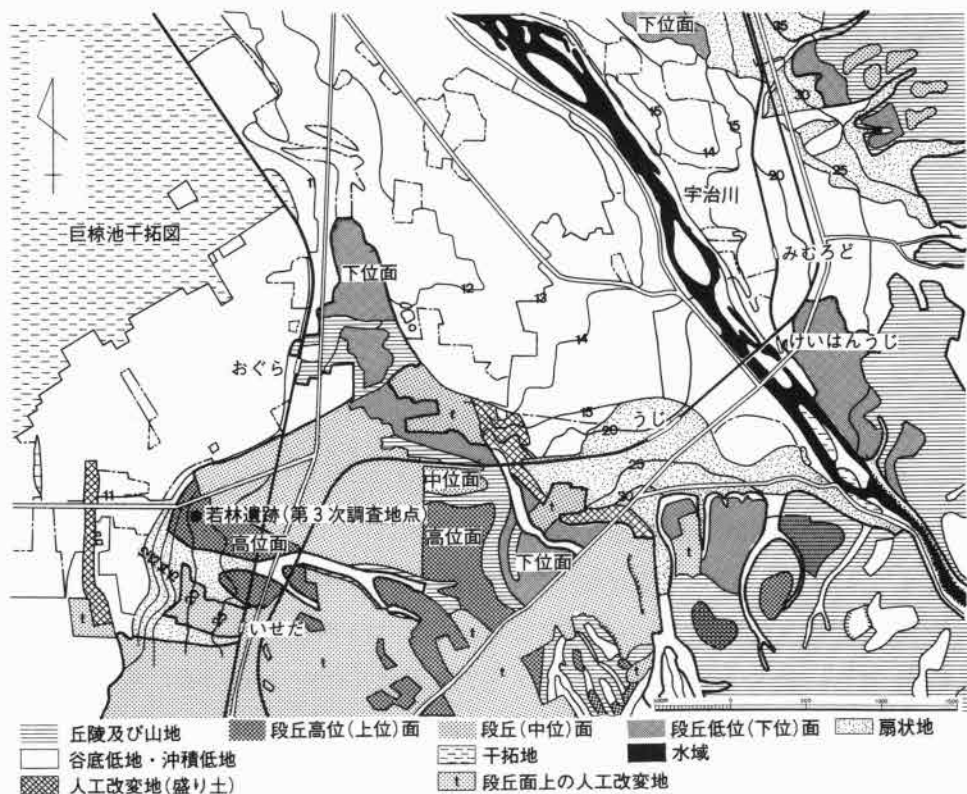
木津川流域には、丘陵の下位において、段丘地形の分布が知られている。かつてそれらの形態・高度分布特性等から、京都盆地南部地域における断層運動によるブロック的な地形変動の様式、すなわち第四紀ネオテクトニクス(植村・池田, 1980)が論じられたが、段丘構成層の層序・層相そのものに関する観察記載例については、今日までほとんど知られてこなかった。今回の調査成果は、宇治・城陽丘陵の前縁に広がる段丘面の地形・地質的特性、断層変位をうかがい知る上での基礎的資料となるものである。

若林遺跡は、詳細地形図(第33図)によれば標高18m程度の南西落ち(2° SW)の緩傾斜面に位置している。形態的基準にもとづいて作成された国土地理院(1977)の地形区分図(第33図)では、遺跡が立地する地形面は、段丘・高位面に相当する。高位面は、東方の丘陵背面上にも分布する。遺跡位置と西方の沖積低地との比高は約5mである。また、段丘面と現在の木津川河床の高低差は5~6m程度である。遺跡周辺地域は、近年の都市開発に伴い、地形の改変が著しい。

b. 調査区内トレンチ地点の層序・層相(第34図)

弥生時代~平安時代の遺構検出面(標高約17.7m)の下位において、およそ深さ5.2mまでの地層が観察された。層序は大きく上・下2層に区分される(以下第3・4層と呼ぶ。第1・2層:表土~遺構検出面までの構成層)。

第3層:最深部トレンチ掘削地点では、3a~3fの6つに分帯される(第34図a)。層厚は約4.1mである。これらは、礫~シルト層をなす。最上部の3a層を除いて3d層以浅では、-2mまでの上部のトレンチ(第34図b)において、砂礫・シルト層が指交的な関係で成層している。礫は軟質で著しく風化を受けている。全体に赤褐色の色相を呈してお



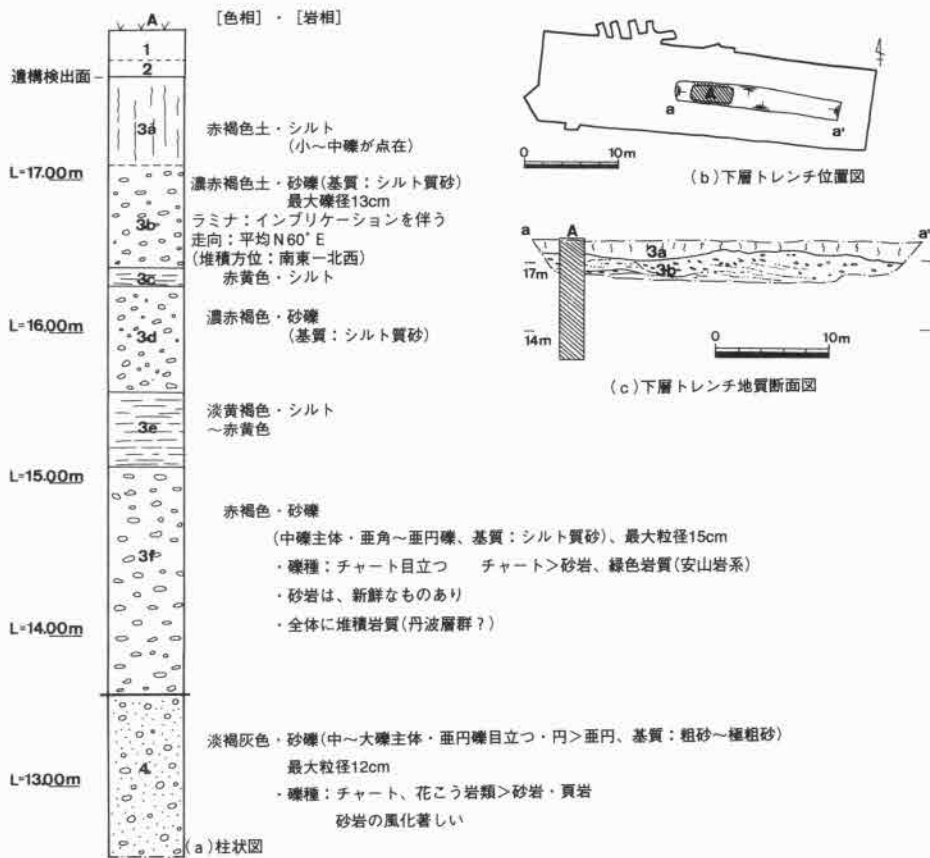
第33図 若林遺跡周辺の地形区分図(1/50,000) 国土地理院(1977)に加筆調整

り、後述する下位の第4層とは層相を大きく異にする。層厚約4.0mである。3a層は、厚さ0.6~1.0mの小~中礫を含むシルト壤土であり、下位の礫層の微起伏を被覆している。

3b層は主に、小~大礫(最大礫径13cm)、シルト質砂の基質で構成される。不明瞭ながらシルト質砂・砂礫の葉理構造をなしており、一部にインプリケーションが認められる。インプリケーションをなす礫群の走向は北東—南西軸(N44°~88°E程度,北西落ち)傾向をなすことから、3b層準における堆積方位(古流向)はおおむね南東から北西方位(N30°W程度)に推定される。

3f層以浅の岩質は微量の綠色岩類を伴うものの、全体に堆積岩類(中・古生層・丹波層群起源:チャート)を主体に微量の砂岩・綠色岩類を含む)で占められる。3f層は中礫・亜角~亜円礫主体の礫層で、チャート礫はハンマーで容易に打割できる程度にまで強く風化している。

第4層:トレンチ調査区の下最下部を構成する淡褐色砂礫である。層厚1.2m程度を確



第34図 柱状地質断面図

認した。小礫～大礫(最大礫径12cm、基質は粗砂～極粗砂)で構成される。円～亜円礫が目立つ。岩相は、堆積岩類(風化の顕著な砂岩、頁岩)を微量含みチャートがやや目立つものの、基質・岩石種ともに花こう岩類(アルコース質)が主体的である。締りは良好である。掘削深度的制約から、古流系についての情報は入手しえなかった。

c. 層序・層相に対する解釈

第3層は、岩相・色相(風化度)などからみて、いわゆる高位段丘相当層(20～30万年前?)と判断される。円磨度・層相変化のパターンは、扇状地性の堆積条件を示唆している。堆積方位の傾向・礫層構成は非木津川の要素(宇治川系か)を有する。一方、第4層は丹波帯堆積岩類をとまなうアルコース質砂礫層であり、上位の第3層とは全く岩相・固結度が異なる。礫層構成は現木津川河床に類似しており、第3層との明瞭な供給源のちがいを指摘しうる。第3層とは不整合的に接するものと考えられる。本編では、更新統中・下部(大阪層群)に相当するものとみておく。(中塚 良)

d. 基本層序について

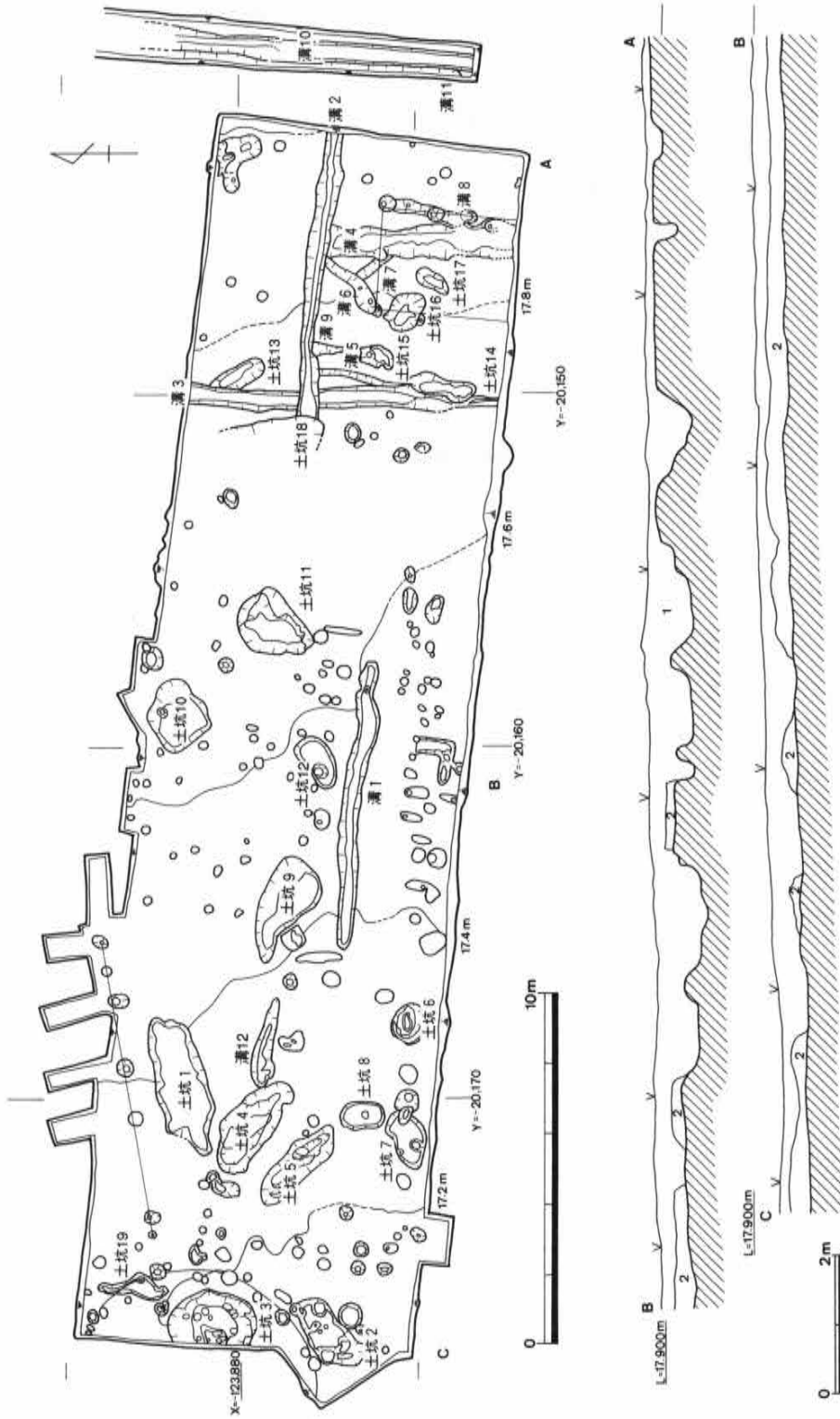
遺構検出面までは、大きく2層に分かれる。第1層は盛り土層であり、第2層は黄灰褐色土層の包含層である。この層からは、ほとんど遺物が出土しないため、時期は明確でない。ほとんどの遺構はこの第2層下、第3層上面にて検出された。

3. 検出遺構

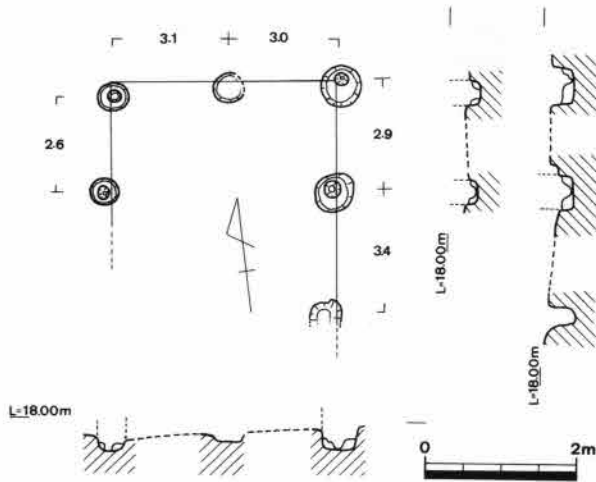
今回の調査では、トレンチのほぼ全面から、弥生時代から江戸時代までの遺構を検出した。これらは、掘立柱建物跡1棟、溝12条、土坑19基、柵列、ピットなどである。また、時期の判明した遺構には、弥生時代中期のもの(土坑・柵列)や奈良～平安時代のもの(掘立柱建物跡・溝)があるが、包含層自体も時期が不明確であり、遺物が出土する遺構も少ないことから、時期などを確定することはむずかしい。以下主な遺構について説明する。

掘立柱建物跡1 トレンチの東側で検出された2間(東西)×3間以上(南北)の南北棟の建物跡である。その規模は、東西6.1m×南北6.3m以上で、梁間は3.0～3.1m、桁行は2.6～3.4mと桁行はあまりそろっていない。建物跡の軸線方位は、N6°Eである。

柱掘形の平面形は、すべて円形で直径30～50cmを測り、その深さは検出面から10～40cmと削平を受けているものが多い。埋土は、褐色土を呈しており、ベースとなっている土とは色相の点で、それほど大差はない。柱痕は4か所で検出しており、いずれも直径約20cmである。埋土中からは土器片などは出土しておらず、時期は明確でない。ただ、第2次調査において検出した掘立柱建物跡と軸線方位がほぼ同じであり、その点から考えると奈良～平安時代のものであると思われる。



第35図 検出遺構図(1.盛り土層 2.黄灰褐色砂質土)



第36図 掘立柱建物跡1実測図

溝 今回の調査で検出された溝は計12条あり、調査区中央から東端にかけて検出された。これらは、その形態や埋土の状況が多様であり、かつ出土遺物も皆無であるため、一概に有機的なつながりを指摘することはむずかしい。しかし、溝自体を軸線方位で分けると、ほぼ南北に主軸をもつ溝(溝3・4)と南北からやや西に、東西からやや南に振

れる溝(溝1・2・5・8・9~11)などに分けて考えることができる。以下、主な溝について記述するが、すべての溝の規模・形状などについては、一覧表に記載した。

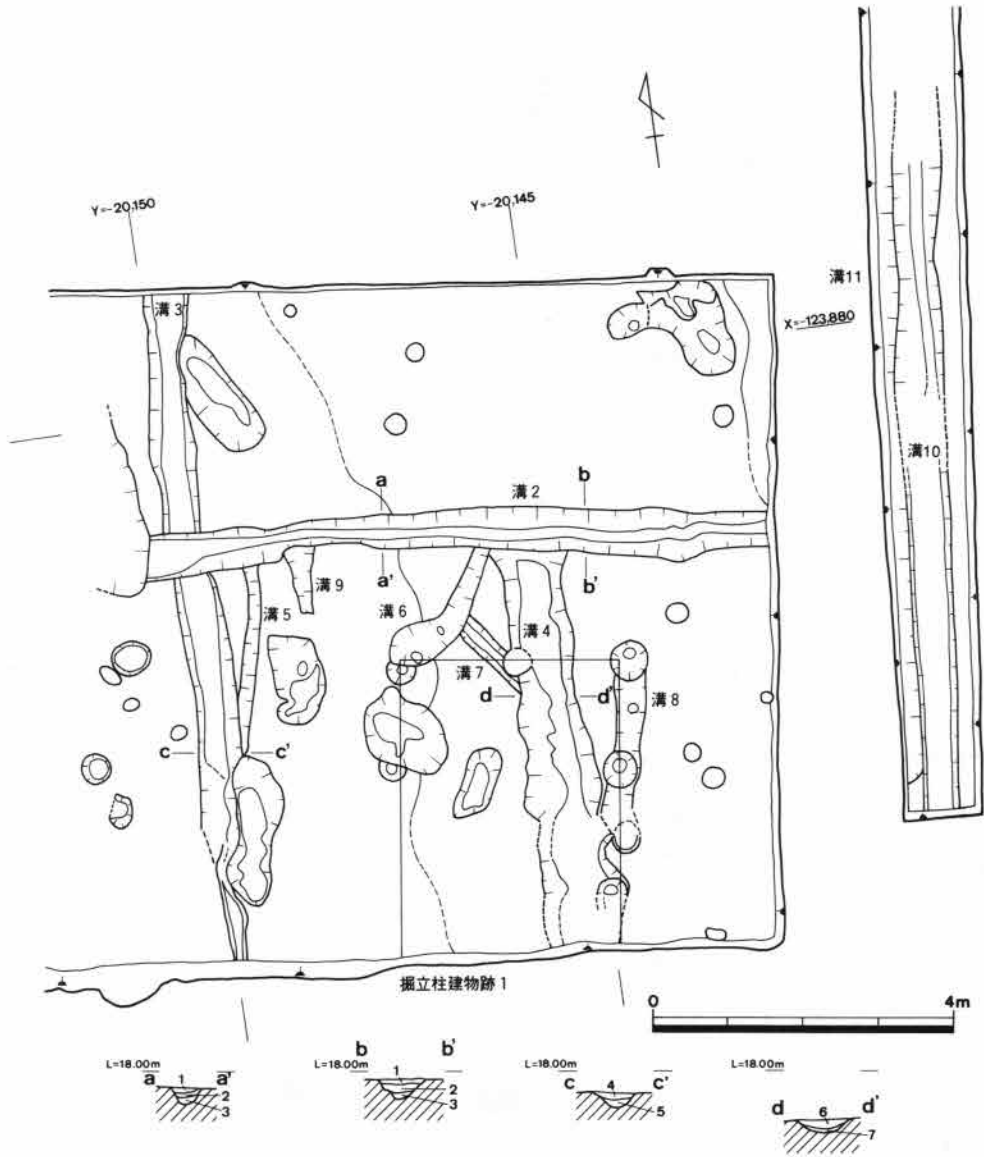
溝2 調査区の東側で検出された東西に直線的のびる溝である。断面形状は比較的急角度で、「V」字状に近い。埋土は、三層に分かれるが、最下層は中砂~細砂からなり、わずかに水が流れていたと考えられる。出土遺物はない。

溝3 調査区の東側で検出された南北に直線的のびる溝である。断面形状は比較的急角度で、「V」字状に近い。埋土は二層に分かれる。上層から須恵器片が出土している。土坑13・14とは埋土の上からは切り合い関係を見ることはできなかった。この溝は、第2次調査で検出した溝3と形態及び位置の上で連なる可能性がある。

付表3 溝一覧表

溝番号	検出長	幅	深さ	断面	出土遺物	方向
溝(SD)1	824cm	52cm	5~10cm	台形状		東西
2	930cm	49cm	30cm	V字状		東西
3	914cm	60cm	30cm	V字状	須恵器片	南北
4	530cm	92cm	20cm	台形状	弥生土器片	南北
5	262cm	20cm	5~6cm	皿状		北東
6	172cm	54cm	5~10cm	台形状		北東
7	100cm	30cm	10cm	皿状		北西
8	210cm	34cm	5~6cm	皿状		南北
9	104cm	26cm	10~15cm	台形状		南北
10	866cm	—	10~15cm	V字状		南北
11	380cm	—	10~15cm	V字状	染付(18~19世紀)	南北
12	258cm	50cm	5cm	皿状		東西

溝4 調査区の東側で検出された南北に直線的のびる溝である。断面形状はゆるやかで、台形状を呈する。埋土は二層に分かれる。掘立柱建物跡1の柱穴と切り合い関係もち、溝8→掘立柱



第37図 溝2～11実測図

- | | | | |
|-----------|-----------|------------------|------------|
| 1. 淡褐色砂質土 | 2. 褐色砂質土 | 3. 暗黄灰色砂質土(中～細砂) | 4. 暗灰褐色砂質土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 6. 黄灰色砂質土 | 7. 褐色砂質土 | |

建物跡1の前後関係を見ることができる。

溝10 南北方向にのびる溝である。断面は比較的急角度で「V」字状に近い様相を呈する。埋土は一層である。溝10とは切り合い関係を持ち、溝10→溝11の前後関係を有する。

溝11 埋土は一層である。この溝からは18～19世紀の染付の破片が出土している。

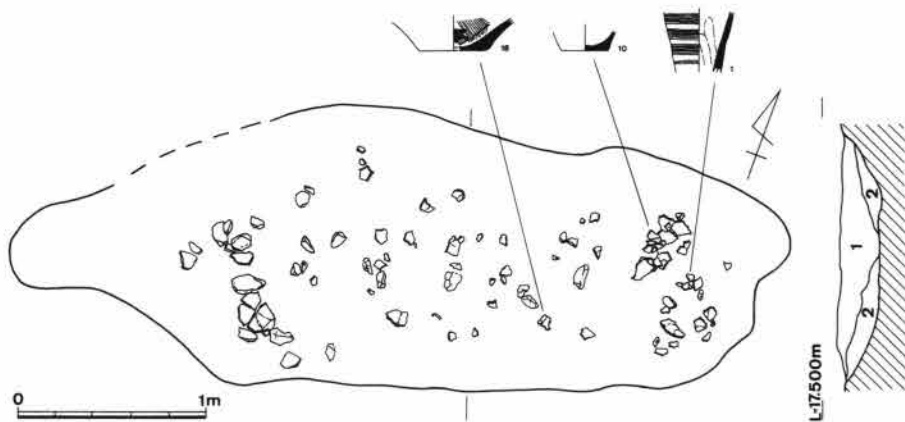
土坑 検出した土坑は、その形態などでみると多種多様である。さらに、その2/3からは、遺物が出土しておらず、その性格はおろか時期のわからないものが多い。弥生土器が

付表4 土坑一覽表

土坑番号	短	長	深さ	断面	出土遺物
土坑(SK)1	88cm	396cm	10cm	台形状	弥生土器
2	100cm	240cm	5~10cm	台形状	弥生土器
3	168cm	250cm	20~30cm	台形状	須恵器、土師器、瓦器
4	128cm	360cm	40cm	台形状	
5	84cm	284cm	50cm	U字状	弥生土器
6	114cm	139cm	30cm	台形状	弥生土器
7	90cm	178cm	5~10cm	皿状	
8	80cm	127cm	5cm	台形状	弥生土器
9	114cm	306cm	30~40cm	台形状	弥生土器
10	185cm	213cm	20cm	船底状	弥生土器
11	188cm	220cm	50cm	皿状	
12	72cm	164cm	60cm	V字状	
13	65cm	166cm	40cm	V字状	
14	64cm	192cm	10~20cm	V字状	
15	68cm	115cm	10~15cm	皿状	須恵器
16	88cm	118cm	10~20cm	台形状	
17	46cm	85cm	10~15cm	台形状	
18	-	-	10~15cm	皿状	
19	70cm	200cm	50cm	台形状	

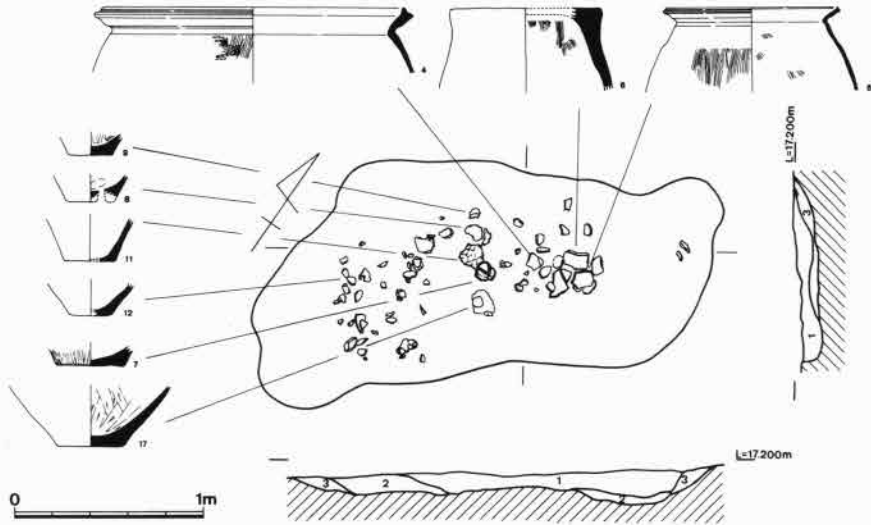
出土した土坑は、土坑1・2・8~10があるが、土坑8・9については、細片がみられるのみで、時期を確定できるほどのものではない。以下、主な土坑について記述するが、すべての土坑の規模・形状などについては、一覽表に記載した。

土坑1 トレンチの西側で検出したほぼ東西方向に長い不整形土坑である。断面は、台形状を呈し、底面は凹凸に富む。埋土は二層に分かれている。この埋土中、第38図1・2層からは、炭・焼土とともに比較的多くの弥生土器片が出土している。土器には、体部片が比較的目立つか、あるいは一部に壺の底部と思われるものや、細頸壺の頸部などがある。しかし、接合するものは少なく、器形のわかるものはほとんどない。以上、出土遺物の状



第38図 土坑1 遺物出土状況図

1. 暗茶褐色砂質土(炭混じり) 2. 褐色砂質土(炭・焼土が多量に混じる)



第39図 土坑2 遺物出土状況図

1. 暗茶褐色砂質土(炭を含む) 2. 茶褐色砂質土(炭を含む) 3. 淡茶褐色砂質土(炭を含む)

況及びその形態から、これは廃棄土坑的な性格のものと考えられる。

土坑2 トレンチの西側で検出したほぼ南西—北東方向に長い不整形土坑である。断面は台形状を呈し、底面は起伏に富む。埋土は三層に分かれるが、この埋土中、第39図1・2層からは、炭とともに比較的多くの弥生土器が出土している。土器には甕・台形土器・底部などがみられるが、いずれも破片資料であり、接合するものはほとんどない。以上、出土遺物の状況及びその形態から、これは廃棄土坑的な性格のものと考えられる。

土坑3 トレンチの西端で検出したほぼ円形を呈すると思われる土坑である。底面は起伏に富み、ピットを多数検出した。埋土は四層に分かれるが、拳大の礫などがブロック状に入るところから、人為的に埋められた可能性がある。埋土中からは瓦器碗の破片が出土している。

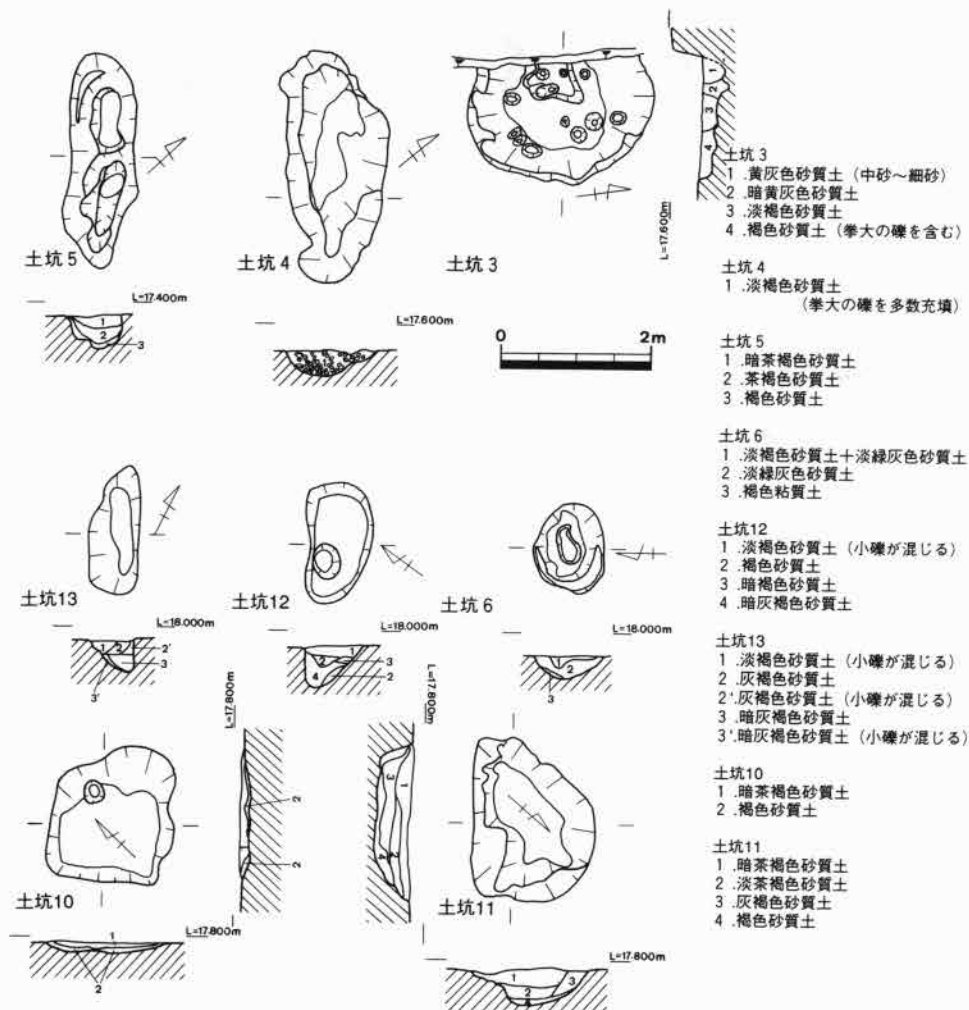
土坑4 トレンチの西側で検出した東西に長い不整形土坑である。断面は台形を呈する。埋土は一層で拳大の礫が多数みられた。人為的に埋められたものと考えられる。

土坑5 トレンチの西側で検出した東西に長い不整形土坑である。断面は「U」字形を呈する。埋土は三層に分かれ、底面は起伏に富む。

土坑6 トレンチの南側で検出された不整形円形の土坑である。断面は台形状を呈する。埋土は三層に分かれ、底面は中央部がややくぼむ。

土坑7 トレンチ中央部で検出された楕円形の土坑である。断面は西側に深い「V」字状を呈する。埋土は四層に分かれる。

土坑10 トレンチの中央部で検出された不整形形状の土坑である。断面は浅い皿状を呈



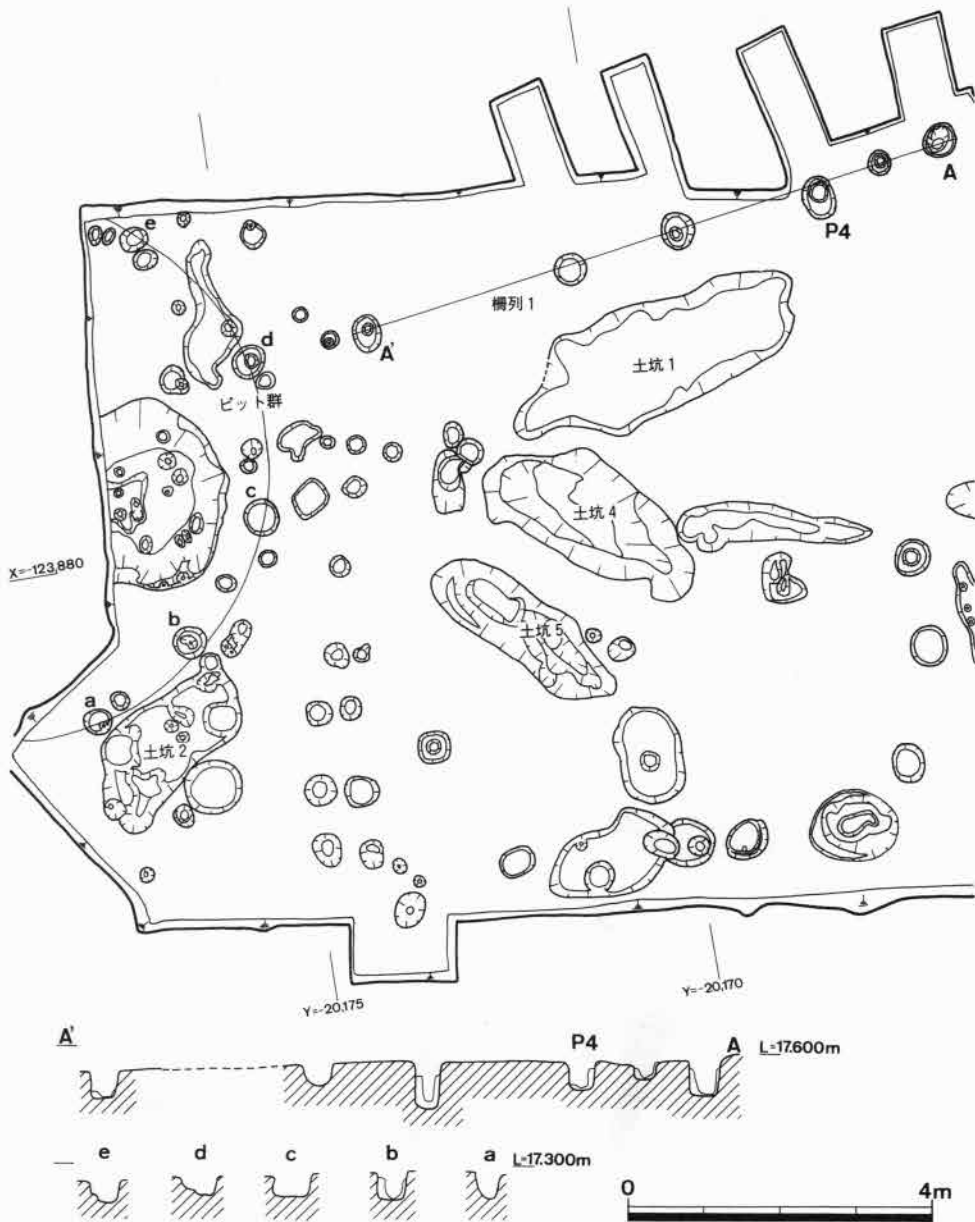
第40図 土坑3～7・10・11・13実測図

し、埋土は二層に分かれる。

土坑11 トレンチの中央部で検出された不整形土坑である。断面は台形状を呈し、東側にわずかにテラスを持つ。埋土は四層に分かれるが、その層相からこの土坑は何度か掘り返されている状況である。

土坑13 トレンチ東側で検出された長楕円形の土坑である。断面は東側に深い「V」字状を呈する。埋土は大きく三層に分かれる。その層相からこの土坑は何度か掘り返されている状況である。溝3とは明瞭な切り合い関係を見ることはできなかった。

柵列1 トレンチの西側で検出された東西方向にのびる柵列である。7つのピットからなり、直径30cm前後の円形の掘形を持つものが多い。深さは、深いもので約70cmに達するものもある。確認した柱痕跡は、直径10~20cmである。このピットの多くの掘形や抜き取



第41図 柵列1及びピット群実測図

り穴の埋土からは数点の弥生時代中期の土器が出土した。

ピット群 円形に配列するピット5個を検出した。ほぼ同様の埋土を呈し、多くのピットから弥生土器片が出土した。すべて直径30cm前後の円形掘形をもち、柱痕跡を残すものもある。円形の竪穴式住居跡の上面が削平され、柱穴のみの残存と考えることもできる。

4. 出土遺物

今回の調査では、コンテナ2箱分の遺物が出土した。これらには、弥生土器、土師器（羽釜）、須恵器（甕）、瓦器（破片）、染付（伊万里）などがある。これらのうち、大半は土坑及び柵列出土の弥生土器である。

1は、細頸壺の頸部である。上外方に直線的にのびる。外面には一帯8条からなる櫛描き直線文が4帯以上みられる。内面調整は斜め方向のハケを施した後、指ナデで仕上げている。2～5は、甕の口縁部である。2・3は、受け口状をなし、いわゆる近江系土器である。ともに胎土は脆く、1mm未満の小さな長石がたくさん見られる。表面は淡橙灰色を呈するが、割れ面を見ると暗黒灰色であり、以上の点で他の土器の胎土とは、明らかに異なる。口縁部内面には横方向のハケが見られる。これらは頸部から口縁部にかけて、ハケ原体の単位がわからないくらい密に施されている。2の外面には、口縁部と頸部に斜め方向のハケ目が施されている。4・5は、ともに口縁部を強く横ナデし、端部は上方にわず



第42図 出土遺物実測図

付表5 出土遺物観察表(1)

番号	器種	法量		色調			胎土			
		口径	底部	内	外	割れ面	素質	鉱物量	最大粒径	鉱物及び岩石
1	細頸壺	—	—	褐色	褐色	褐色	普通	やや少	2.0mm	石英、長石
2	甕	18.1cm	—	暗灰色	暗褐色	黒灰色	普通	やや多	1.5mm	長石、石英、赤色粒
3	甕	18.8cm	—	淡褐色	淡褐色	黒灰色	普通	やや多	1.2mm	長石、石英
4	甕	31.6cm	—	黄褐色	黄褐色	淡黄灰色	普通	普通	6.0mm	石英、チャート、長石
5	甕	18.1cm	—	黄褐色	黄褐色	淡黄灰色	普通	やや多	3.1mm	長石、石英
6	台形土器	16.3cm	—	褐色	淡褐色	暗灰色	粗い	やや多	8.0mm	石英、長石、黒色粒
7	底部	—	7.0cm	茶褐色	茶褐色		普通	普通	2.5mm	石英、長石、チャート
8	底部	—	5.0cm	淡褐色	淡褐色		普通	やや多	3.0mm	石英、チャート、赤色粒、長石、雲母
9	底部	—	4.9cm	黄褐色	褐色	黄灰色	普通	やや多	4.0mm	石英、長石、チャート、雲母
10	底部	—	5.1cm	黄褐色	黄褐色		普通	やや多	2.5mm	石英、長石、チャート、雲母
11	底部	—	5.4cm	黒灰色	黄褐色	黄灰色	普通	やや多	2.5mm	長石、石英、チャート、黒色粒
12	底部	—	4.4cm	黄褐色	黄褐色		普通	やや多	2.0mm	赤色粒、石英、長石、黒色粒
13	底部	—	6.8cm	黄褐色	褐色		普通	やや少	3.0mm	石英、長石
14	底部	—	6.0cm	明褐色	淡褐色		普通	やや少	2.2mm	長石、石英、チャート
15	底部	—	6.1cm	淡褐色	褐色		普通	やや少	2.0mm	石英、長石、雲母
16	底部	—	7.0cm	暗褐色	褐色		普通	やや多	3.0mm	長石、石英、黒色粒
17	底部	—	7.0cm	淡褐色	淡褐色		普通	やや多	3.5mm	長石、石英、チャート、赤色粒、黒色粒

付表6 出土遺物観察表(2)

番号	焼成	調整手法		残存度	備考	遺構名
		外面	内面			
1	良好	櫛描き直線文(8条)	指ナデ、ハケ	頸部1/3		土坑1
2	軟	ナナメハケ(4~5本/cm)	粗いヨコハケ(5本/cm)	口縁部1/4	近江系	柵列1-p4
3	軟		粗いヨコハケ(4本/cm)	口縁部1/5	近江系	柵列1-p4
4	良好	タタキ→ハケ		口縁部1/6		土坑2
5	良好	タテハケ(4本/cm)	ナナメハケ	口縁部1/8		土坑2
6	良好		タテハケ	口縁部1/2		土坑2
7	良好	タテミガキ	不明	底部1/2	底面に木葉の圧痕	土坑2
8	良好	不明	指頭圧痕	底部完形	底面に穿孔	土坑2
9	良好	不明	ハケ	底部完形		土坑2
10	軟	不明	不明	底部完形		土坑1
11	良好	不明	不明	底部1/2		土坑2
12	軟	不明	不明	底部1/2		土坑2
13	良好	タテミガキ	ケズリ	底部1/2		土坑2
14	良好	タテミガキ	粗いハケ(5本/cm)	底部1/2		土坑5
15	良好	タテミガキ	粗いハケ(5本/cm)	底部1/2		土坑6
16	良好	不明	ハケ(6本/cm)	底部1/2		土坑1
17	良好	不明	ケズリ	底部完形		土坑2

かに拡張し面を持つ。そのため、口縁部外端面は強い横ナデにより、凹線文状にくぼんでいる。4は、タタキの後、縦ハケを施している。5は、器壁が薄く、体部外面は縦ハケの後、上半部にまで強い横ナデが及んでいる、6は、台形土器である。台部はほぼ平坦である。台部の外縁はほとんど突出することなく、脚部もあまり広がらない。外面調整は磨減が激しいためわからないが、内面には縦ハケがみられる。

7~17は、壺及び甕の底部である。器壁の磨減が激しいため、調整のわからないものが多い。7の底面には、木の葉の圧痕がみられる。8は、穿孔が見られる。13~15は、外面に磨きをていねいに施している。14~16の内面には、比較的幅の広いハケ原体により、反時計まわりに調整が行われている。

(長友朋子)

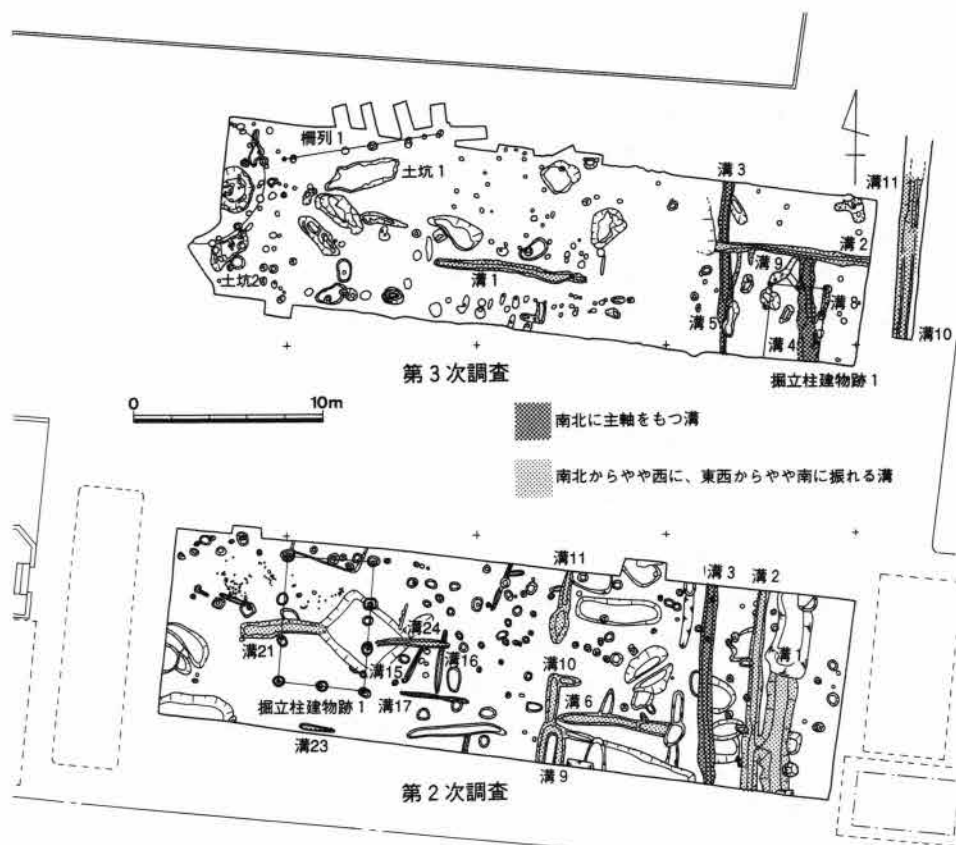
5. 小 結

今回の調査成果は、弥生時代中期(Ⅲ~Ⅳ様式)の土坑や柵列を検出したことにより、その時期の弥生集落の一端を検出したことにある。特に、土坑1・2は、その状況から廃棄土坑的な様相が強く、柵列とともに付近に住居跡の存在をうかがわせる資料である。この周辺には、巨椋神社東遺跡や神楽田遺跡が見つかるが、その集落の居住域の様相は

明瞭ではなく、その点では、今回の調査において明らかとなった。

また、土坑2から出土した台形土器については、共伴している甕からⅣ様式の中でも比較的古い段階に属するものと思われる。周辺の遺跡では、川西市加茂遺跡土坑2や茨木市東奈良遺跡F-4-N地区第Ⅰ大型土坑・H-5-I・M地区溝1、高槻市安満遺跡SD1などで出土しており、Ⅲ～Ⅳ様式にかけての形態的な変遷をみることができる。しかし、数量的な操作を行ったわけではないが、弥生中期の土器組成ではそれほど多く出土している型式ではなく、機能・用途など検討すべき点を残している^(註9)。

また、今回の調査で検出した掘立柱建物跡1の軸線方位は、第2次調査で検出した掘立柱建物跡1とほぼ同じで、同時期と考えることができる。この南北からやや西に、東西からやや南に振れる規格には、今回の調査の溝1・2・5・9～11や第2次調査の溝1・2・6・9～11・16・17・21・24がのってくる。ただ、時期のわかる遺構は、近世陶磁器が出土した今回の調査の溝11と第2次調査の溝1、さらに埋土の色相と建物跡の規模から円面硯が供伴する可能性が高い第2次調査の掘立柱建物跡1である。このような点から、



第43図 若林遺跡第2・3次調査検出遺構図

奈良時代以降、近世に至るまで、北から西に振るような地割りが残っていた可能性がある。

ただ、これら以外にも、第2次調査の溝3や今回の調査の溝3・4のように、ほぼ真北に主軸をとる溝も存在する。この第2・3次調査の溝3からは、須恵器甕の体部片が出土しており、加えて埋土の色相からみて、奈良時代から大きく下らないと思われる。このような点から、奈良～平安時代のある時期に正方位の地割りが存在した可能性も考えられる。

南山城における奈良時代の代表的な集落としては、畑ノ前遺跡^(注10)や正道官衙遺跡^(注11)などがある。これらの集落においては、正方位をとる建物跡群や北から西や東に振れをもつ建物跡群があり、奈良から平安時代にかけて時期的変遷を追うことができる。このことは、若林遺跡で奈良から平安時代に2つの地割りが存在することを考える上で参考となろう。

(岸岡貴英)

- 注1 杉本 宏ほか「若林遺跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第18集 宇治市教育委員会) 1992
- 注2 岸岡貴英ほか「若林遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注3 城陽市史編纂委員として周辺地域の地形調査をされていた中塚氏により、現地調査の指導・助言を得た。本文中に掲載した同氏の原稿は、氏の好意により投稿していただいたものである。この件については、城陽市教育委員会及び財団法人向日市埋蔵文化財センターの配慮に感謝申し上げます。
- 注4 調査の上でご教示いただいた方々は以下の通りである(敬称略)。
杉本 宏、荒川 史、浜中邦宏、北川純三、角田博一、吹田直子
なお、調査に参加していただいた方々は以下の通りである。
北川勝巳、手島美香、趙慧玲、清水美和、岩崎香織、永沢拓志、尾田洋子、吉田 幸、上田勉、白河豊基、山崎 誠、松本健一郎、中城祐二
- 注5 植村善博・池田 碩「南山城、木津川流域の段丘地形」『奈良大学紀要』9 1980
- 注6 岡野慶隆『川西市加茂遺跡』川西市教育委員会 1982
- 注7 田代克己・奥井哲秀ほか『東奈良 発掘調査概報』I 東奈良遺跡調査会 1979
- 注8 橋本久和「4.安満遺跡」(『昭和51・52年度 高槻市文化財年報』高槻市教育委員会) 1978
- 注9 台形土器の形態変遷については、摂津の資料にみることができる。具体的には時期が下るほど上端部が厚くなり、外側に突出する傾向にある。なお、その土器については、肥後弘幸氏、杉本厚典氏、國下多美樹氏、酒井龍一氏、森田克行氏、長友朋子氏に御教示を得た。
- 注10 「畑ノ前遺跡」(『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書—煤谷川窯址・畑ノ前遺跡—』精華町教育委員会・財団法人古代学協会) 1987
- 注11 「正道官衙遺跡」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第24集 城陽市教育委員会) 1993

5. 宇治市街遺跡発掘調査概要

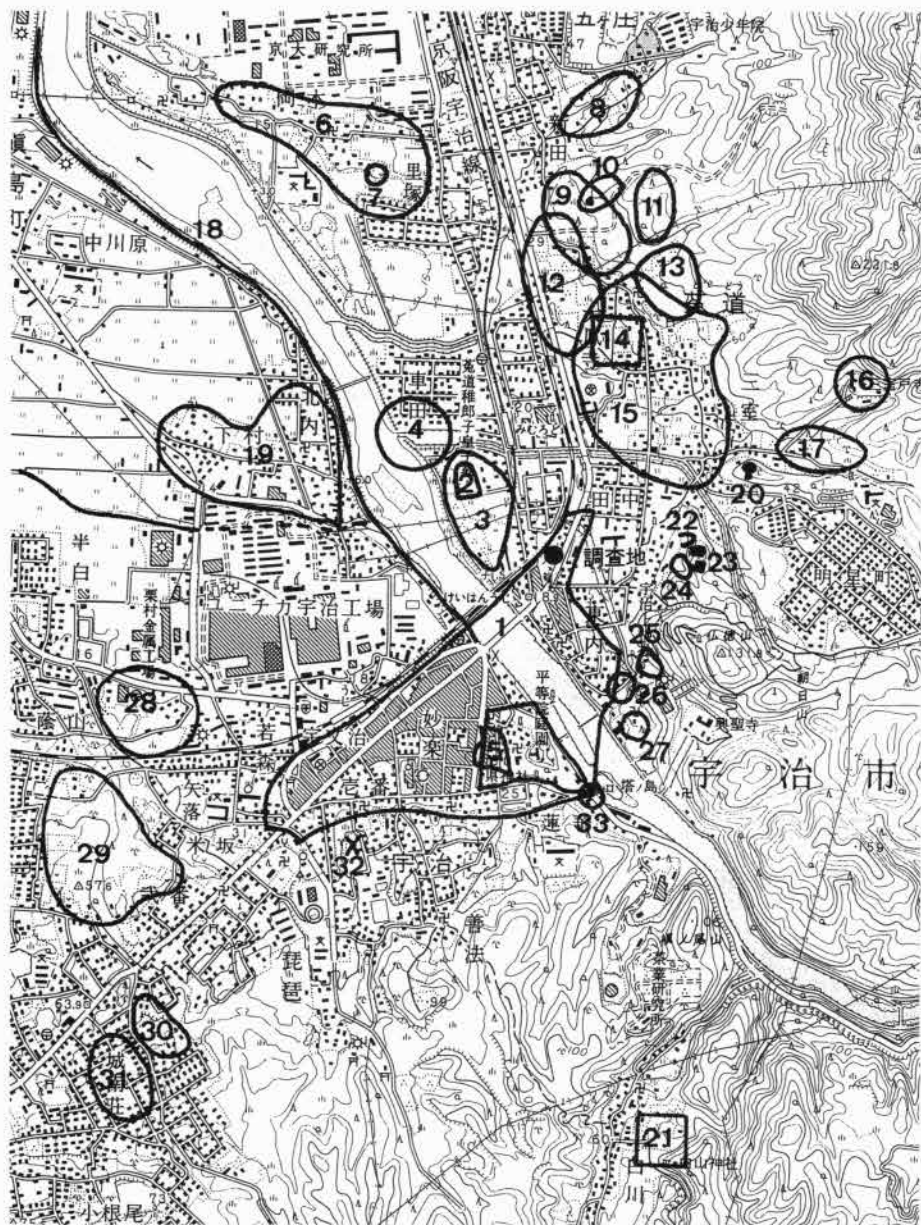
1. はじめに

宇治市街遺跡は、宇治川を挟んで現市街地一帯に広がる古墳時代から近世に至る集落遺跡で、これまでに数回にわたって発掘調査が実施されている。

今回、宇治市街遺跡の範囲内で府道京都宇治線の街路整備工事が予定されたため、当調査研究センターではこの工事に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受け、遺構・遺物の有無や広がりを確認することなどを目的に、試掘調査を実施した。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同調査員森正哲次が担当した。調査期間は、平成6年9月26日から同年12月22日まで、調査面積は、約400m²である。調査にかかる経費は、京都府土木建築部が負担した。また、今回の調査全般について宇治市教育委員会より多大な指導、助言をいただいた。

2. 遺跡の位置と環境

古代の宇治郡の地理的重要性を端的に示す遺跡として、隼上り瓦窯跡群をあげることができる。隼上り瓦窯跡群は、7世紀初頭に操業が開始され、この窯で生産された瓦が飛鳥の豊浦寺まで運搬されている。その運搬経路は、宇治津—巨椋池—木津川—泉津—下ツ道(中ツ道)であろう。すなわち、宇治川を通じて琵琶湖、近江、若狭と、巨椋池—木津川を通じて大和と、桂川を通じて北山城と、淀川を通じて摂津、河内と連絡することが可能な交通至便な地域であった。また、宇治橋断碑によると宇治橋は大化2(642)年に僧道登によって架橋されたとされる。宇治橋は『日本書紀』にも記されており、天武元(672)年5月、壬申の乱に際し近江朝廷側が「菟道の守橋者に命じて、皇大弟宮(大海人皇子)の舎人が私糧を運ぶ」のを禁止した橋としても知られている。宇治橋の北側には、宮内庁によって管理されている菟道稚郎子の陵墓がある。その真偽はともかくとして、宇治ゆかりの人物が交通の要衝である宇治橋の近くに推定されるのも当然といえよう。仁徳天皇の弟とされる稚郎子は、有力な皇位継承者であったが、このような皇位継承の可能性を持つ人物が宇治郡に存在した意味は非常に大きいといえよう。^(註1)その後、藤原氏建立による平等院を中心に市街地として整備された町が基礎となり、継承され発展してきた町が宇治である。宇治市街遺跡は、以上のような経緯をへて、宇治川右岸と左岸に広がる広大な面積を占める



第44図 調査地及び周辺主要遺跡地図(1/25,000)

- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|----------------|------------|
| 1. 宇治市街遺跡 | 2. 菟道稚郎子墓古墳 | 3. 乙方遺跡 | 4. 三室津推定地 | 5. 平等院庭園 |
| 6. 岡本遺跡 | 7. 岡本瓦窯跡 | 8. 一番割遺跡 | 9. 隼上り遺跡 | 10. 隼上り窯跡群 |
| 11. 羽戸山遺跡 | 12. 西隼上り遺跡 | 13. 東中遺跡 | 14. 大鳳寺跡 | 15. 菟道遺跡 |
| 16. 三室戸寺境内 | 17. 三室戸寺子院跡 | 18. 太閤堤 | 19. 榎島城跡 | 20. 池山古墳 |
| 21. 白河金色院跡 | 22. 山本瓦窯跡 | 23. 二子山1・2号墳 | 24. 山本窯跡(須恵器窯) | |
| 25. 宇治上神社遺跡 | 26. 宇治神社遺跡 | 27. 恵心院山門前遺跡 | 28. 矢落遺跡 | |
| 29. 池森天神遺跡 | 30. 野神遺跡 | 31. 神明宮東遺跡 | 32. 古瓦出土地 | |
| 33. 喜撰橋石樋遺跡 | | | | |

遺跡となったのである。今回の調査地は、宇治川右岸の河岸段丘と丘陵裾野に形成された微高地に位置する。近隣の遺跡としては、世界文化遺産に指定された平等院、丘陵頂上にある二子山1・2号墳、乙方遺跡、菟道遺跡、羽戸山遺跡、前述の隼上り瓦窯跡群などがある。また、今回の調査地の北東には、宇治市教育委員会が発掘調査し、封土を失った前方後円墳(門ノ前古墳)の周濠から形象埴輪などが出土した菟道遺跡がある。

3. 各トレンチ の調査概要

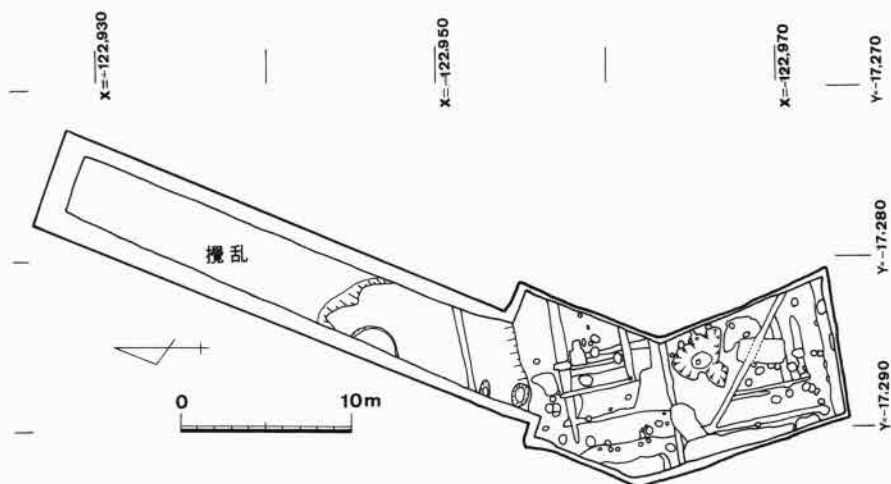
今回の調査は、府道京都宇治線に沿って3か所に分けて試掘トレンチを設定した。北から南へそれぞれA～Cトレンチと呼称する。

Aトレンチ

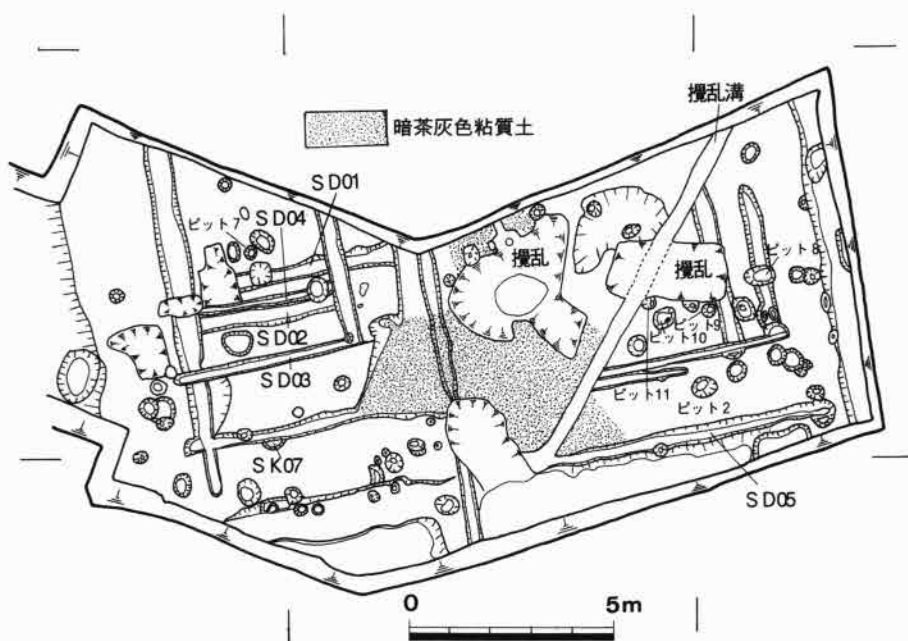
調査区域の北寄りに幅約6m・長さ約30mの南北方向のトレンチを設定して、重機掘削を始めた。トレンチの北側から約20m南までは、表土下約3mまで攪乱層であったが、これを境にして、南側では地山面(黄褐色混礫砂質土)が表土下約1m付近までしだいに上昇しはじめた。さらに、南へ約8mの地点から遺物包含層と思われる黄褐色粘質土を検出したため、南へ約2m、東へ約2mずつ拡張した。この拡張部分の地山面から、土坑と溝を検出した。また、トレンチ南端で



第45図 トレンチ配置図



第46図 Aトレンチ平面図



第47図 Aトレンチ遺構図

も、溝状の遺構やピットを多数検出したことから、これらの遺構の性格を知るため、さらに若干の拡張を行った。しかし、一般的にコンクリートなどの建物基礎による攪乱がひどく、明確な遺構を検出するには至らなかった。また、SD04・ピット6・ピット10・ピット11以外は、埋土に椀瓦や陶磁器破片などを含み、いずれも近・現代に属するものである。SD02の東には暗茶灰色粘質土がSD03付近まで広がっており、そこから須恵器の高杯脚部や土師器の甌と思われる遺物が出土したため、周辺の精査を行ったが、これらに関する遺構は検出できなかった。

Bトレンチ

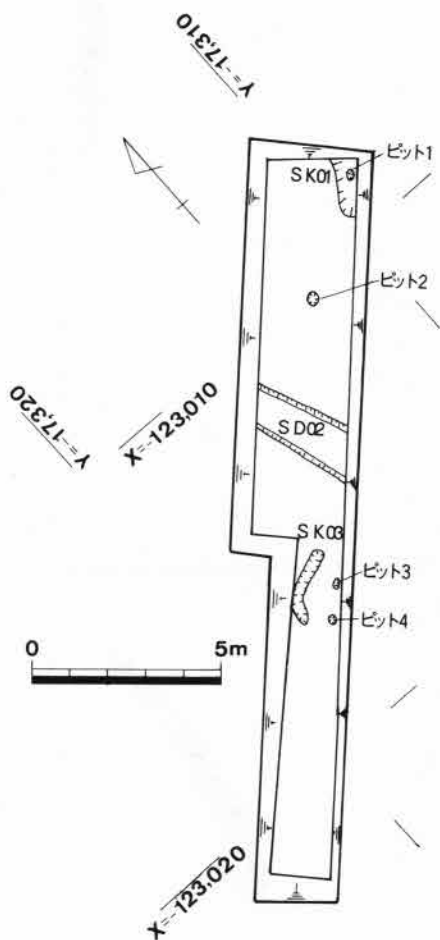
Aトレンチの南側に位置する。府道沿いの三角形の空間をもつ調査地で、Aトレンチとは比高差が約1mありBトレンチの方が低い。幅約2m・長さ約10mの南北方向のトレン

チを設定して掘削を行ったが、表土下約5~10cmでAトレンチ同様の地山面(黄褐色混礫砂質土)を検出した。地山面では、顕著な遺構・遺物は検出されず、すでに削平されていると考えられる。

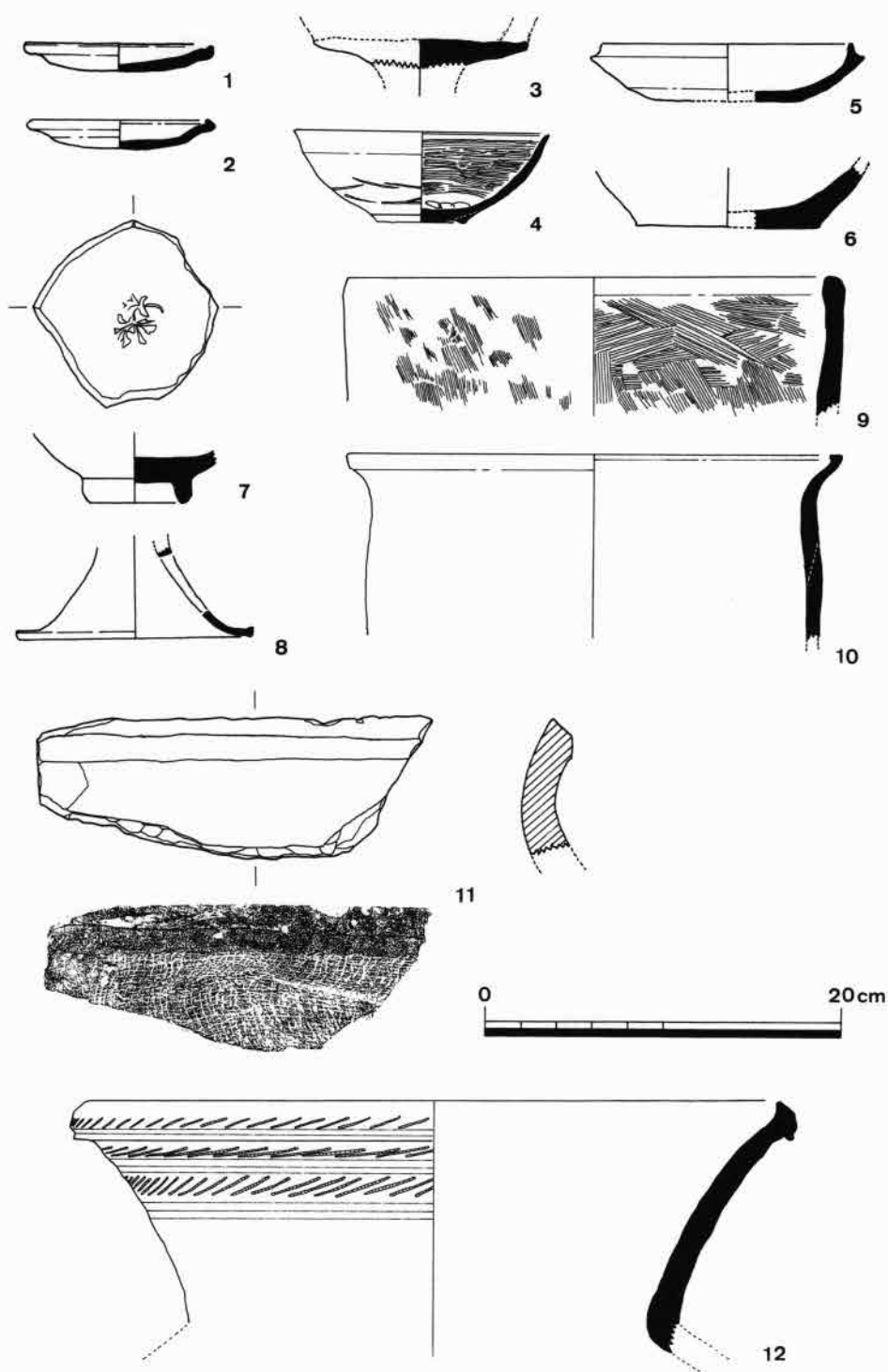
Cトレンチ

今回の調査地点では最も南に位置する。すぐ東側を府道京都宇治線が、北で約1.2m、南で約2.5mの段差をもって通じている。調査地南端に式内彼方神社のお旅所(旧社地)があるため、北側で東西幅3m、南側で2mのトレンチを設定して調査を行った。

トレンチ中央で検出した近・現代溝と思われる南北溝(SD02)を境として、東は暗茶灰色粘質土、西は黄褐色粘質土が広がる。同層中からは、土師器皿の破片や須恵器片、明代の龍泉窯陶磁などが出土した。この粘質土は、約20~30cmの厚さで堆積し、それ以下、洪積層の礫層になる。礫層は、宇治川に向かってやや上昇する傾向が認められる。主な遺構とし



第48図 Cトレンチ平面図



第49図 出土遺物実測図

ては、トレンチ北東部で検出した直径約30cm、検出面からの深さ約10cmのピット1や、北と東がトレンチ外になるため全体の規模は定かではないが、検出長南北1.5m・東西約1m・深さ約20cmの土坑S K01がある。

4. 出土遺物

以下、各トレンチから出土した遺物の概略をのべる。

A トレンチの出土遺物

3は、土師器の高杯で、杯部の立ち上がり部分と脚部が欠損したものである。時期は、古墳時代前期の布留式併行期と思われる。5は、須恵器の杯身である。器高が低く、扁平で、立ち上がり部はオリコミ手法によって作られている。底部の外面にはヘラ削り調整がみられる。内面には回転によるナデ調整が施されている。時期は、古墳時代後期(7世紀初頭段階)である。8は、須恵器の高杯脚部である。内外面ともにヨコナデ調整がなされており、スカシは三方向に施されていると思われる。9は、土師器で、内外面にハケ目調整が縦横に施されており、器壁の断面から竈か甑ではないかと思われる。12は、須恵器の甕頸部の破片である。色調は、淡灰褐色で口縁部に列点文と凹線文が施されており、頸部の凹線下部及び内面にはナデ調整が施されている。また、自然釉がみられる。9・12とも8世紀同様、古墳時代後期の6世紀後半に属する。

C トレンチの出土遺物

1は、土師器の皿である。底部から口縁部にかけて肥厚させる、いわゆる「て」の字口縁を持つ。2は、土師器の皿である。1と同様、口縁部は、「て」の字口縁である。1・2の時期は、12～13世紀と思われる。4は、瓦器碗であって、外面は高台から口縁近くまで指オサエ、口縁部の調整はヨコナデ調整である。内面にはヘラ磨きが施され、外面にもヘラ磨きの痕跡が見受けられる型式からみて、大和産と思われる。時期は、14世紀。6は、須恵質の鉢の底部である。底部は平底で、静止糸切りを用いたものと思われる。いわゆる東播系の鉢である。7は、明代の龍泉窯の青磁碗片である。見込みに印花文をもち、外面に花卉を施す雷文碗と思われる。14～15世紀の時期と思われる。10は、土師器の甕である。口縁部は外反し、内外面ともにヨコナデ調整されている。体部には粘土紐のつなぎ目痕が観察できる。11は、平安時代後期の丸瓦片である。長片と短辺の端部にヘラ削り痕と凹面に粗い布目が観察できる。

6. まとめ

今回の宇治市街遺跡の試掘調査では、各トレンチとも顕著な遺構は検出できなかった。

遺跡の立地上、近・現代の攪乱が著しかったが、出土遺物を観察する限り、古代～中世にかけての遺構が近辺に存在する可能性は極めて高いと言えよう。今後の宇治市街遺跡の調査に期待したい。

(森正哲次)

注1 森 浩一編・山中 章・山田邦和『日本の古代遺跡』28 京都Ⅱ 保育社

6. 燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、井関川放水路の整備事業に伴い、住宅・都市整備公団の依頼を受けて実施したものである。

調査地は、相楽郡木津町大字木津小字宮ノ裏にあり、燈籠寺遺跡の北端部に位置する。

燈籠寺遺跡は、木津町の平野部に東面する丘陵の縁辺にあたり、北方に派生する比較的狭長な尾根筋を中心に南北に展開する遺跡である。府立木津高等学校が所在する台地性丘陵部では過去7次にわたる発掘調査が実施されており、主として弥生～奈良時代の遺構・遺物が確認されている。

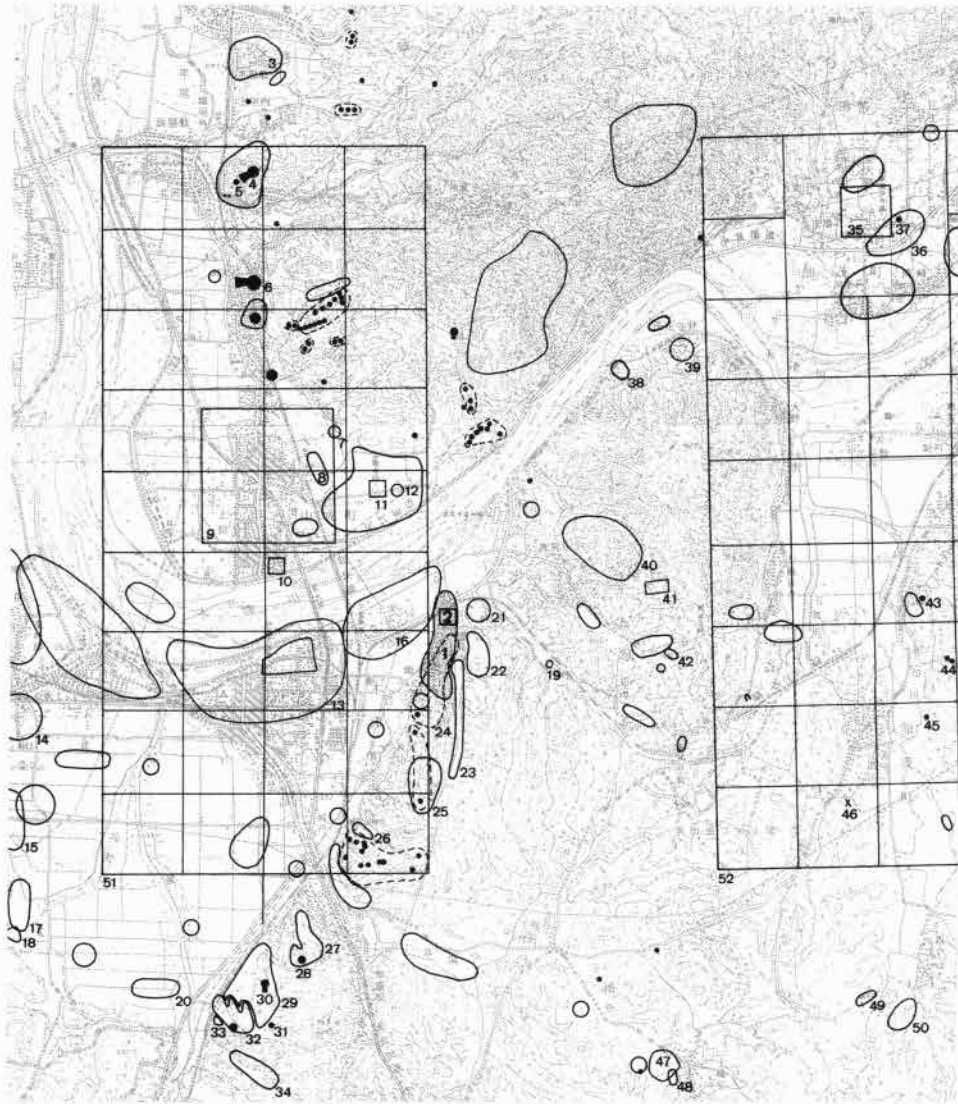
今回の調査地点は、木津川の沖積低地に移る中間地点の丘陵に連続する、舌状に張り出した低台地上に位置する。現在水田として土地利用されているが、古瓦の散布が古くから知られ、その一画には基壇跡と推測されている土壇が残されている。この土壇を金堂基壇と想定し、周辺の地形の起伏や畦畔に残る地割りなどから一辺約120mの正方形の寺域をもつ寺院跡が復原されている(第51図参照)。今回の調査対象地は、この燈籠寺廃寺跡の推定寺域の東縁に接している。このため、寺院の東限ラインを確認するため、対象地区の西寄りに南北に主軸をもつトレンチを設定して調査に当たった。

調査は、平成5年12月2日から平成6年3月2日までを試掘とした。その結果、遺構が調査区外に広がることが判明したため、平成6年4月18日から同年7月1日まで調査を継続した(本調査)。調査面積は約820m²である。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人(平成5年度)・同辻本和美(平成6年度)・同調査員伊賀高弘が担当した。調査に係る経費は、住宅・都市整備公団が負担した。なお、京都府教育委員会、木津町教育委員会、京都府立山城郷土資料館、木津の緑と文化財を守る会などの関係諸機関から御協力・御教示いただいた。また、現地作業には作業員・整理員・学生諸氏の協力があつた。^(注2)感謝の意を表したい。

2. 調査の概要

調査地の基本層序は、上位からⅠ. 耕作土・床土、Ⅱ. 褐灰色系粘質土、Ⅲ. 黄褐色系土(地山)となるが、Ⅲ層の地山が確認できるのは、およそ国土座標系のX=-139,850m

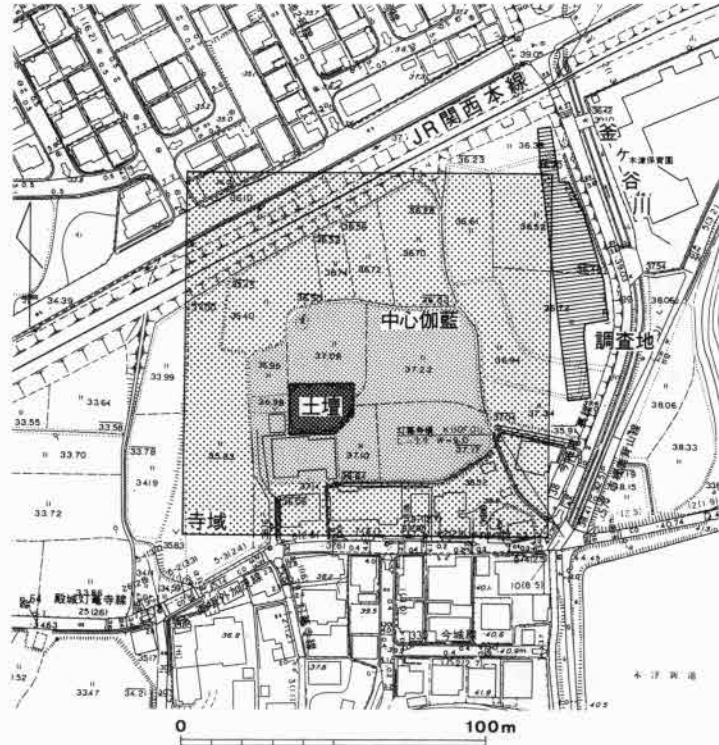


第50図 調査地位置図

- | | | | | |
|--------------|--------------------|-----------------------|-------------|------------|
| 1. 燈籠寺遺跡 | 2. 燈籠寺廃寺跡 | 3. 湧出宮遺跡 | 4. 平尾城山古墳 | 5. 稲荷山古墳 |
| 6. 椿井大塚山古墳 | 7. 高井手窯跡 | 8. 野田芝遺跡 | 9. 山城国府推定地 | 10. 泉橋寺 |
| 11. 高麗寺跡 | 12. 高麗寺瓦窯跡 | 13. 木津遺跡 | 14. 相楽遺跡 | 15. 曾根山遺跡 |
| 16. 上津遺跡 | 17. 大畠遺跡 | 18. 音如ヶ谷瓦窯跡群 | 19. 鹿背山瓦窯跡 | 20. 弓田遺跡 |
| 21. 白口遺跡 | 22. 赤ヶ平遺跡 | 23. 釜ヶ谷遺跡 | 24. 内田山古墳群 | 25. 木津城跡 |
| 26. 大谷窯跡 | 27. 西山遺跡 | 28. 西山塚古墳 | 29. 瓦谷遺跡 | 30. 瓦谷1号墳 |
| 31. 幣羅坂古墳 | 32. 上人ヶ平遺跡・上人ヶ平古墳群 | 33. 市坂瓦窯跡 | 34. 瀬後谷窯跡群 | 35. 山城国分寺跡 |
| 36. 例幣遺跡 | 37. 考古墳 | 38. 法華寺野遺跡(山城国分尼寺推定地) | 39. 麩原離宮推定地 | 40. 鹿背山城跡 |
| 41. 鹿山寺跡 | 42. 巾ヶ谷窯跡群 | 43. 野上古墳 | 44. 塚穴古墳群 | 45. 砂原山古墳 |
| 46. 大木屋遺跡 | 47. 中ノ島遺跡 | 48. 梅谷瓦窯跡群 | 49. 新池窯跡群 | 50. 西小窯跡群 |
| 51. 恭仁京右京推定地 | 52. 恭仁京左京推定地 | | | |

以北のトレンチ北端部に限定される。すなわち、南側の調査区の大部分は、Ⅲ層をベースとしてこれを大きく切り込む河川状堆積が広がる（SR20）。

この河川堆積層の上面にはほぼ全面にわたって硬質の暗灰色粘砂土が覆い、Ⅱ層の下位に間層として入る。また、トレンチの中央で、河川



第51図 燈籠寺廃寺跡寺域想定復原図

堆積層の上面がゆるく窪む部分では、この暗灰色粘砂土の下位に灰色系粘質砂土がレンズ状に堆積する。これらの河川堆積層を被覆する土層は、相対的に堅固であり、人為的に敷設された整地土の可能性が指摘できる。

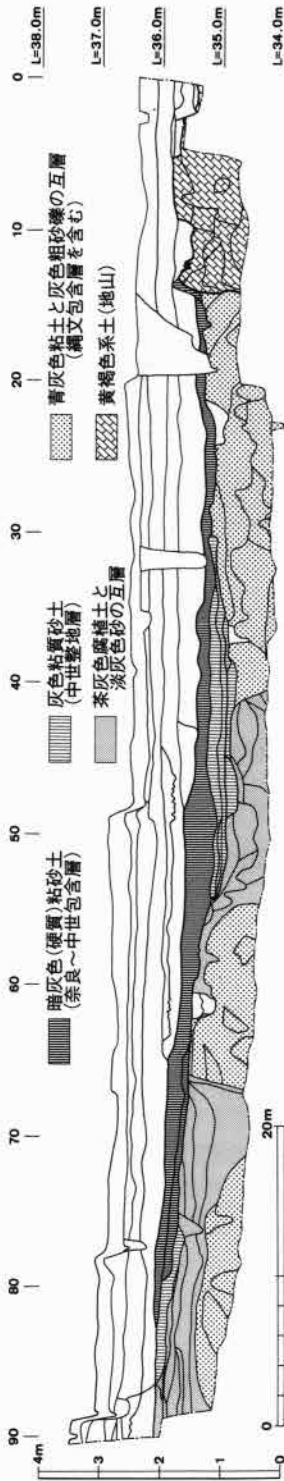
この整地土の上層は、遺物包含層であり、奈良時代を上限に中世に至る遺物がややまとまって出土した。一方、河川堆積層は、青灰色～灰色を呈するグライ土系の粘土あるいは砂礫層と、茶灰色系腐植土と淡灰色砂（・礫）の互層に二分でき、全体としては、前者の上位に後者が堆積するという層順を示す（第52図）。河川内堆積土からは、保存状態のよい遺物がまとまって出土したが、主に上層からは奈良時代の遺物と、一部弥生時代の遺物、下層の灰色粗砂礫層からは縄文土器が出土した。

3. 検出遺構

〔河川上整地土面で検出された遺構〕（第53図）

大小の土坑や溝状遺構が検出されたが、遺存状態は悪く、検出面からの深さも0.2mを越えるものはない。

SK01 長軸を東西にとる隅丸長方形プランの土坑で、西側は調査区外にはずれる。底



第52図トレンチ西壁断面図

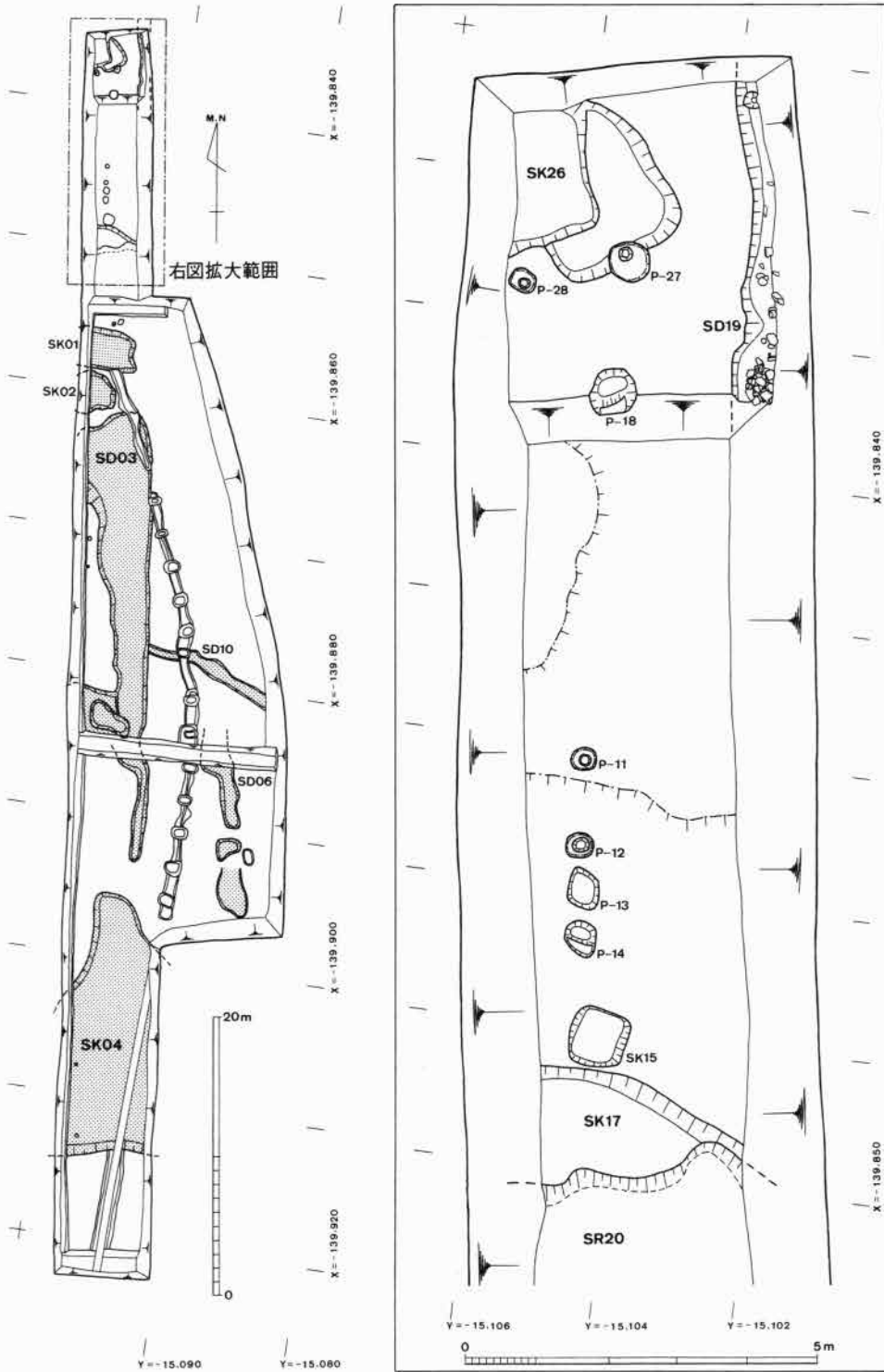
面は、河川堆積土(青灰色シルト)に達して若干の凹凸を呈し、側面はゆるやかに内湾ぎみに立ち上がる。埋土は、黒色土・青灰色シルト混じりの暗灰色シルト質土で、少量の奈良時代の遺物に混じって6世紀後半の須恵器杯身片が出土した。

S K02 S K01に南接する浅い皿状断面の土坑。平面形は、不整円形を呈する。埋土は、青灰色土の混入する暗褐色粘質土で、奈良時代の土器や瓦を上限として、中世の瓦器碗などが少量出土した。

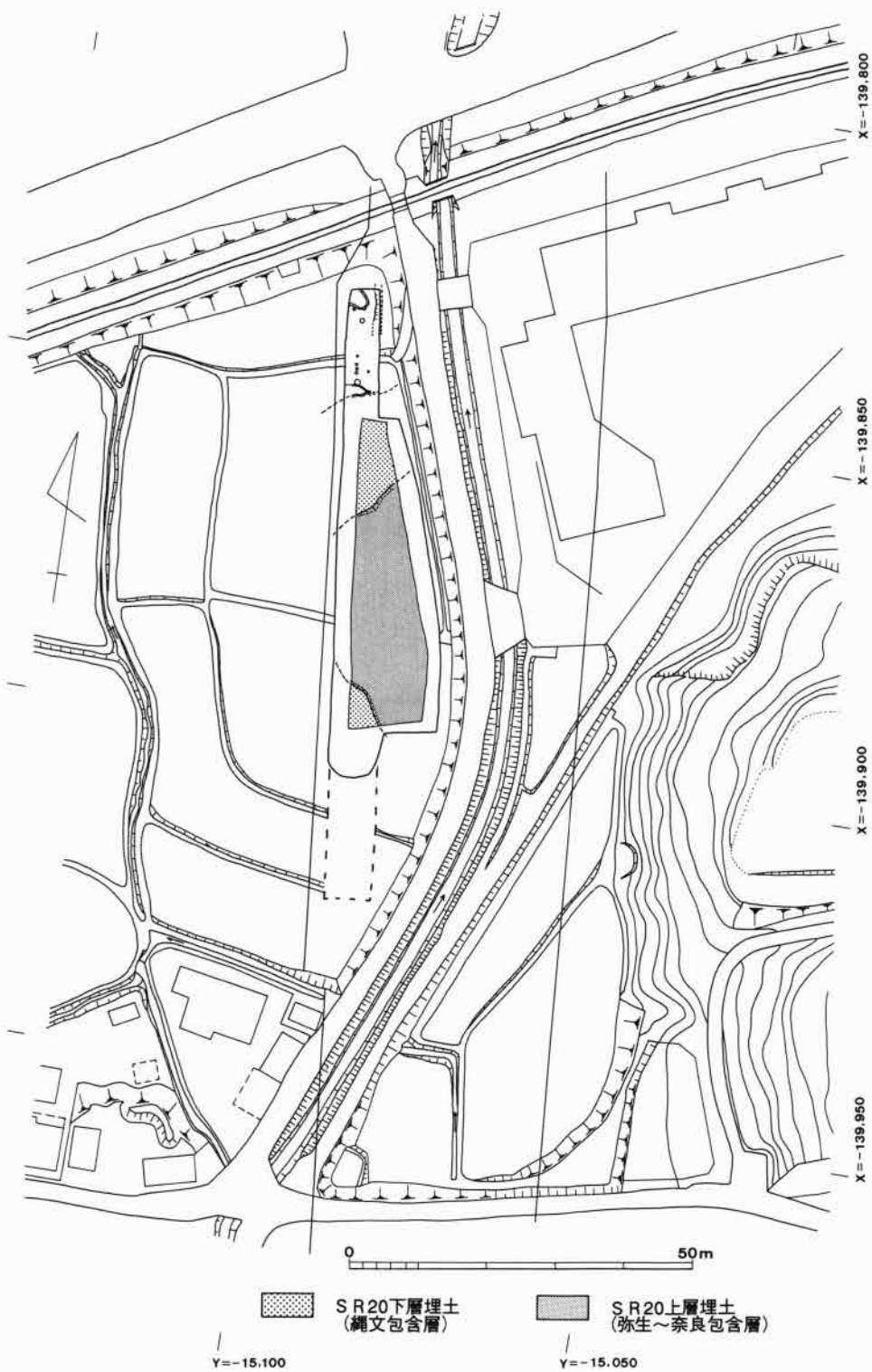
S D03 調査区内において総延長32.0mにわたって検出した南北方向に主軸をもつ溝状遺構である。北側ほど幅広く(最大幅4.5m)、北端でその西縁が調査区外にはずれる(西折する可能性もある)。南側は、検出面がだんだんと高くなるにもかかわらず、東寄りに幅を狭め途切れる。横断面形は、底面が平坦な逆台形を呈し、検出面からの深さは最大0.2mを測る。埋土は、上位より暗褐色粘質土、灰褐色粘砂質土の層順で堆積し、両層から奈良時代の瓦類を中心に、布留期の高杯や中世の瓦器碗・銭貨などが出土した。

S K04 調査区の南半で検出した面的に広がる浅い土坑。調査区外にのびるため全体の平面形は不明である。底面はほぼ平坦で、調査区の西縁で南北に並ぶ直径0.2mを測る小ピットを2基検出した。埋土は、暗褐色粘砂質土で、内部から奈良時代の瓦・土器類、中世の土器(瓦器など)が少量出土した。

S D06 南北に主軸をもつ溝状遺構である。遺存状態は悪く、北側は削平を受けて消失し、南側も分断されて断片的に残るにすぎない。ただ、残存部を見ると西側のS D03と関連があるようで、両者は6mの間隔ではほぼ平行しており、南北方向のほぼ同位置で、東側にクランク状に折れ曲がる。埋土は、暗褐色粘質土で、若干の遺物(奈良~中世)が出土した。



第53図 上層遺構平面図



第54図 下層遺構(SR20)堆積状況図

S D 10 S D 03の中ほどで、斜めに交差する素掘り溝である。重複関係はS D 10がより新しいが、浅くなって西側には続かない。溝の両岸に沿って杭列が並び護岸施設とみられる。内部に暗褐色土が堆積するが、伴出遺物はない。

[トレンチ北端の地山面で検出された遺構] (第53図右半部)

S K 17 南に傾斜する落ち込みで、暗褐色土が堆積する。内部から奈良時代の瓦・土器類をはじめ、中世の瓦器などが出土した。中世の河川上を覆う整地層。

ピット列 S K 17の北方で、柱筋をほぼ南北(N2°30'W)にそろえる1本柱列である(検出長9.6m)。中間(P-11~18間)が攪乱で途切れる。掘形は円形に近い隅丸方形プランを呈し、一辺0.35~0.7mの規模を測る。径15cm前後の柱痕跡を残すものもある。柱間寸法は、南2間(P-11・12・14)が1.2m等間であるのに対し、北端間(P-18・27)は1.8mと不同である。各掘形内から土器細片が出土したが、時期は不明。

S D 19 調査区の北東端で検出した南北に主軸をもつ素掘り溝である(検出長4.5m)。西側斜面のみで、東側斜面は調査区外であるため幅は不明である。暗褐色粘質土が堆積し、埋土の上半に偏って奈良時代の瓦類が比較的多く出土した。

S K 26 トレンチの北西端で検出した土坑である。底面が段状に落ちる断面形を呈する。内部には暗褐色粘砂土が堆積し、弥生土器が少量出土した。

4. 出土遺物

調査によって出土した遺物はコンテナバットにして約50箱ある。その内容は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器などの土器類と、石器・瓦・銭貨である。このうち、土器類の大半と石器は自然河道S R 20から出土した。

縄文土器(第55~57図) 出土量はコンテナバットで10箱程度で、すべてS R 20下層埋土から出土した。粗製の無文土器が多くを占めるが、有文の精製土器も約30%の割合で含まれる。ほぼその時期差を根拠にV群に分類して、図示した資料に若干の解説を加える。

1) 第I群土器 中期後葉に属するもの。

1は、キャリパー状の屈曲口縁をもつもので、器表は強く磨耗して胎土に砂粒が目立つ。頸部外面に横位に連続施文された瓜形文が残る。船元II期。2は、直立する口縁の上半に斜交して横位に連続する巻貝圧痕を施し、残存部下端には半截竹管(D)を押し引きで連ねている。北白川C式期に属する。

2) 第II群土器 後期初頭の中津式に属するもの。

3~5は、口縁部がゆるく円弧を描くように内湾、あるいは内傾するもので、端部は丸くおさめる。口縁下の外面に水平方向の二条沈線(3の下端沈線は下方に入り組む)を引き、



第55図 出土遺物実測図(1) 縄文土器

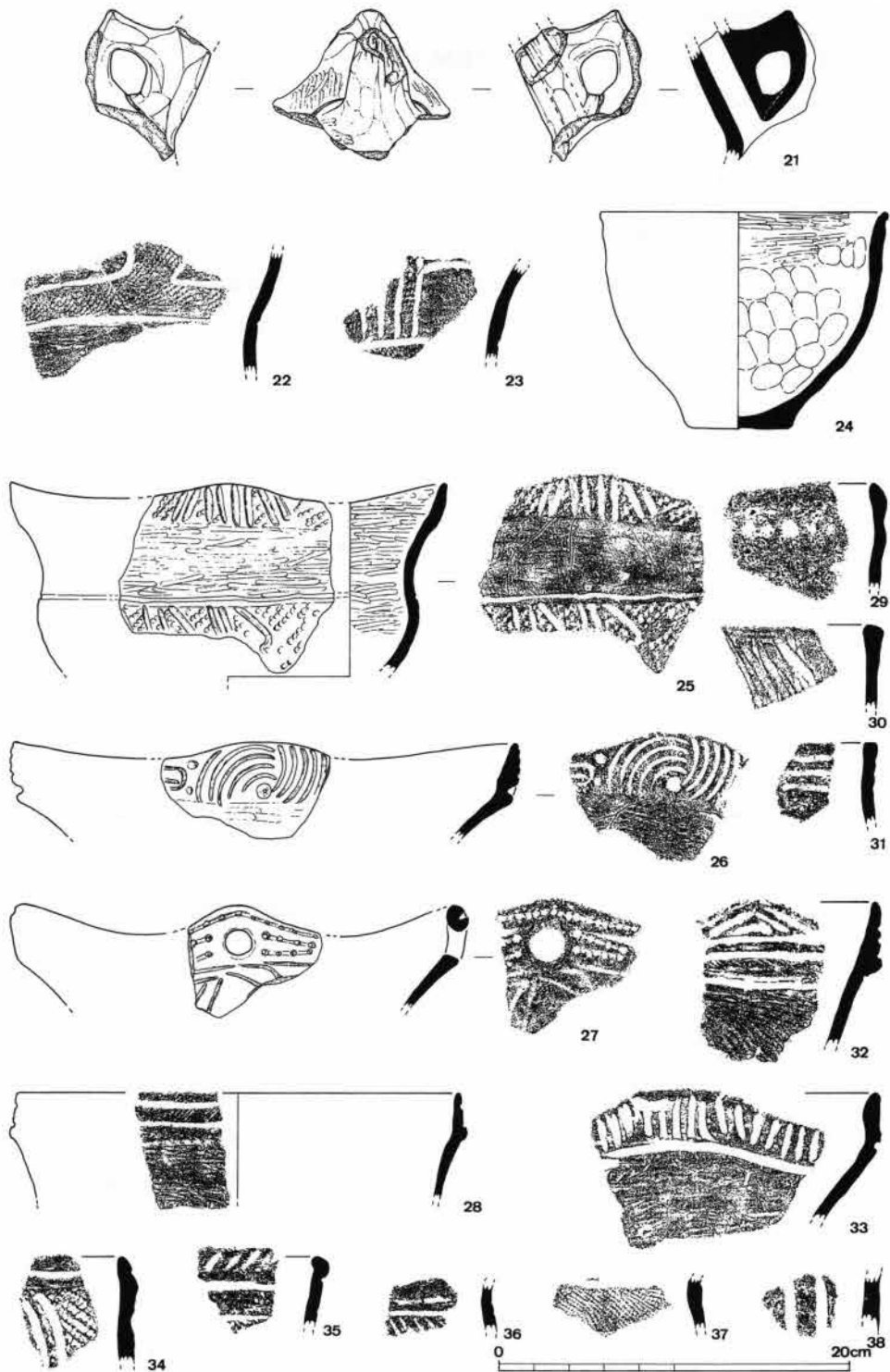
3・4は沈線間にRLの縄文を充填する。

3) 第Ⅲ群土器 福田KⅡ～四ツ池式の範疇で捉えられる土器群(6～15)。口縁部は外反するものが多いが、口唇部はさまざまな形を示す。

6は、口縁端部が逆「く」字形に内折し、屈曲部外面に2条の横走沈線をめぐらせ、内部をRLの縄文で充填する。頸部にも2本沈線の縄文帯を斜向させる。7・8は、口唇部の内側に粘土を貼り付けて肥厚させ、上面に1条、側面に1(8)～2(7)条の沈線をめぐらせる。7は、上面沈線の切れ目に円形刺突を施し、頸部外面には横走する2本の平行沈線と垂下する曲線的な3本沈線で窓枠状区画を構成し、内部に対角を結ぶ2条沈線を配する。8は、口唇部上面の沈線の外側に連続的に刻みを加える。9は、口唇端部を丸くおさめ、口縁下に3本沈線を横走させる。10は、大きく外傾する直口口縁下に横走する2本沈線を配し、内部をRLの縄文で埋める。12・13は、外面に曲線的な2条沈線を施したもので、13は帯縄文による渦巻文となる。14は、頸部外面に水平と斜向する2条沈線の縄文帯を配する。15は、外面に太めの2重沈線を引き、内部にRLの縄文を充填して帯縄文としている。

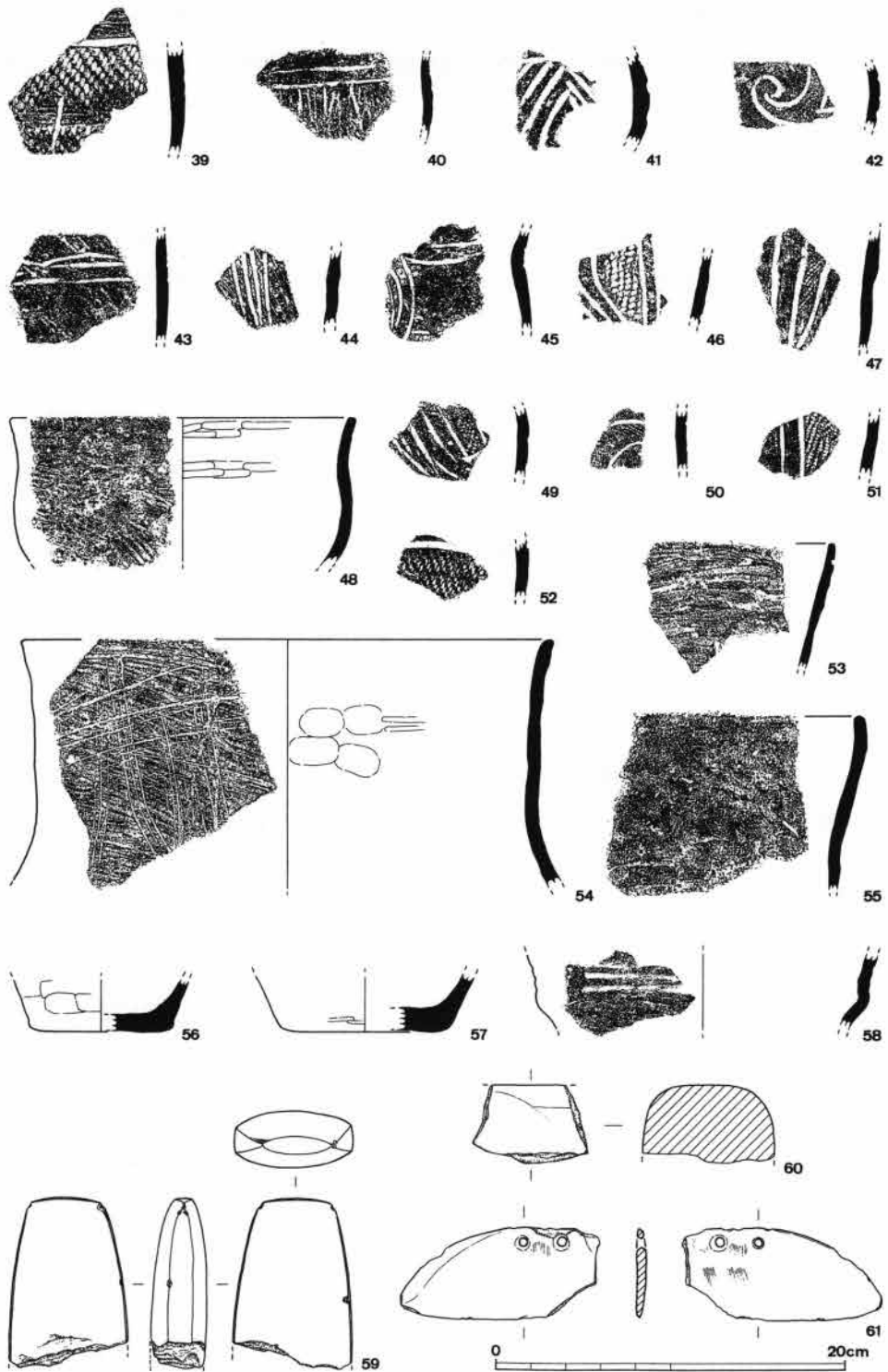
4) 第Ⅳ群土器 いわゆる縁帯文土器とそれに併行する粗製土器を一括した。全般に、縁帯文の初期にあたる北白川上層式Ⅰ期(古段階)に含まれるものが多い。

16は、胴部がやや肩の張る丸味をもち頸部がわずかにくびれて外反し、口縁部は内折して端部は直口状に終るプロポーシオンを呈する。器面の調整は、内外ともにていねいな巻貝による条痕で平滑に仕上げる。外面の沈線文様は巻貝の殻頂により施す。口縁部には、その屈曲部を挟むかたちで2条の平行沈線が引かれ、沈線間に巻貝による擬似縄文を充填する。頸部には、間隔をおいて2対の逆「U」字形文を垂下させる。頸胴部界には1条の沈線をめぐらせて分帯とする。胴部には2本沈線による一端が直線的に垂下する縦長の渦巻文を配する。17は、直立する口縁端部に面をもたせ、上面に斜位に連続する刻みを施す。口縁部下の外面には2条沈線を配する。18は、外面に引かれた幅のある2条の沈線間に単節の羽状縄文を充填する。19は、内湾する胴部外面に、曲線的な縄文帯(RLの縄文)の一端が鋭角的に曲折し、他方が入り組んで「目玉」状の文様意匠としている。20は、水平・斜向の直線的な2条沈線を配したものである。21は、注口土器の注口部分である。外面全体にていねいなミガキ調整がなされ、器表を平滑に仕上げる。注口の基部(接合部)には1条の沈線をめぐらせてアクセントとする。横断面が楕円形を呈する橋状把手が注口部の中位にとりつく点は、同種の土器の中では古相を示す要素である。22の外面文様は、水平にのびる2条の沈線の縄文帯(LRの縄文)が上方に曲線的に分枝するもの。23の外面には、横走沈線で止まる4本の垂下沈線が描かれ、さらに上方の一端から曲線的な横線が派生する。24は、平坦な平底から胴部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に至って短く外反する側面形



第56図 出土遺物実測図(2) 縄文土器

を呈する無文の鉢形土器である。器面は、胴部以下を外面左傾ナデ、内面は、ていねいな指オサエで調整した後、口縁内外に横位に巻貝条痕を加えて平滑に仕上げる。25は、胴部が丸味をもち頸部でくびれて口縁はやや内折する有文深鉢である。口縁部と胴部に地文としてLRLの複節縄文を施す。文様は太い沈線で表し、口縁部で波頂部を中心に「ハ」字形の多重垂下文を配し、頸胴部界には1条の沈線をめぐらす。胴部は波頂部下に限り、直線と曲線からなる3本1単位の垂下文で装飾する。26は、逆「く」字状に内折する口縁部外面(縁帯)の、波頂部中央に円形刺突(貫通していない)を配し、これを中心に渦巻状の同心円弧文を加える。波頂部間には隅丸の長方形区画文を充填するようで、波頂部文様との境界には縦列する円弧を入れる。27は、内折する縁帯の波頂部中央に貫通する円孔を配し、円形刺突を連珠状につらねた横走沈線を3条加える(沈線の内上位の1条は口唇上をめぐるため、円弧部分で途切れない)。縁帯下端にも1条の沈線を入れ、頸部には曲線的に垂下する不規則な沈線帯を配する。28は、ほぼ垂直に立ち上がる縁帯の下端に突帯を巡らせ、その上位に横走する2条の平行沈線を配し、沈線間はLRの縄文を充填する。外反する頸部外面は無文で、横位の巻貝条痕で調整する。29は、口縁下外面に横に連続する指頭圧を加えたもの。30は、口縁外面に丸棒状工具による斜めミガキを施す。31は、直口状の口縁下外面に浅くて断面が丸い3本平行沈線を横走させる。32は、口縁部外面を断面三角形形状に肥厚させて、その外面を文様帯とする。縁帯下縁には、上下両縁に横走沈線をめぐらす1条の隆帯を配し、波頂部は多重沈線による三角形文を刻む。頸部外面には巻貝による条痕が顕著に残る。33は、「く」字状に曲がる口縁下縁に1条の沈線を横走させて縁帯を区画し、波頂部付近は、多重垂下沈線を充填させる。頸部外面は横位ナデで仕上げる。34は、口縁から頸部にかけての外面に水平沈線と垂下弧状沈線を描き、地文としてRLRの複節縄文を施す。35は、内外に肥厚する口唇部上面に斜向する刻みを加える。口縁下外面には2条の平行沈線を横走させ、内部に縄文を埋める。36は、頸胴部界に2条平行沈線をめぐらせ、胴部は斜めの多重沈線を垂下させる。内外ともナデ仕上げである。37は、外面にRLの縄文を施す。38は、2条の沈線束を縦走させる。39は、1条の横走沈線下にRLRの複節縄文を施し、中位にクシ状工具による細線横線を加える。40は、頸胴部界に2条の沈線束を入れ、胴部外面には、多条沈線文を垂下させる。41は、横走沈線下に多条による山形文を施文して胴部を飾る。42は、2条沈線による先端の入り組んだ「J」字文を描き、沈線間は縄文で充填する。43は、内外ともナデで平滑に仕上げた外面に3本沈線束を横走させる。44は、条線地の外面に4本単位の沈線を垂下させる。45は、頸胴部境界に2条の平行沈線をめぐらせ、この横帯から3本の弧状沈線が垂下する。内面は横位ミガキ、外面はていねいなナデで調整する。46は、垂下する多条の弧状沈線間に縄文(複節?)を充填する。内面



第57図 出土遺物実測図(3) 縄文土器・石器

は横位ナデ仕上げである。47は、下方に集束する多重垂下沈線の1束間に縄文を充填する。48は、口縁部が短く外反する無文の鉢で、体部外面は斜向する巻貝条痕が残り、口縁部外面と内面は横位ナデで仕上げる。49は、斜向する多条沈線の一つが窓枠状に閉じられ内部に充填縄文を施す。内外ともナデ調整。50は、2条の沈線束によって曲線的な文様を描き、沈線間はRLの縄文で埋める。51は、垂下する2条の沈線の外側に縄文を施したもの。52は、1条の横走沈線下にRLの縄文を加えたもの。53は、直線的に外傾する口縁外面に巻貝による条痕を施す。内面は横位ケズリで器厚を減じている。54は、頸部が直立して口縁が短く外反する。外面には全面にわたって左傾する巻貝条痕を施し、3本一単位の条線を縦横に加える。55は、外面全面に左傾する二枚貝圧痕を施し、内面はナデで調整する。56・57は、底部である。いずれも底面がナデによって仕上げられる平底を呈し、56は、外面に強い横位のナデ調整が加えられる。

5) 第V群土器 後期末葉の宮滝式に属するもの。

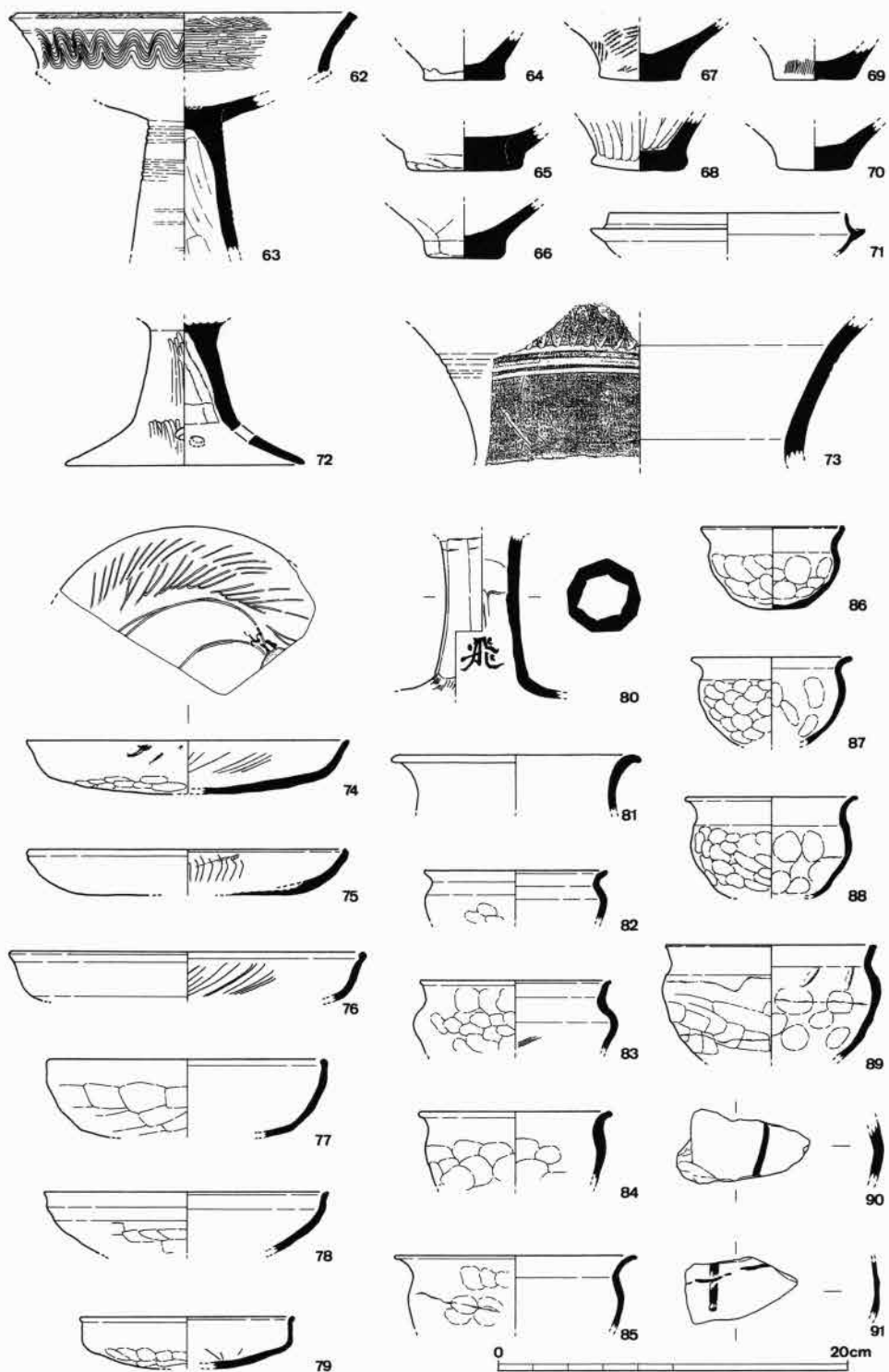
58は、「く」字状に隆起する頸胴部界に、一端が途切れる3条の平行沈線を横走させたもので、内外ともにナデで仕上げる。

縄文時代の石器(第57図)

59は、昭和59年度に燈籠寺廢寺土壇の西辺南寄りで表採された定角式磨製石斧である。刃部を欠くが両側縁及び頭部が研磨され、石斧主面との間に稜をつくり、断面は樽形に近い隅丸長方形を呈する。石材は安山岩である。60は、表面をていねいに研磨して丸味をもたせた、白色を呈する花崗岩製の加工石材で、石皿の側縁部に相当するものと思われる。

弥生時代の遺物(第57・58図)

61は、全体の1/3を折損するが、背部が外反し刃部は直線状(直線刃半月型)を呈する磨製石庖丁である。断面は薄手で、刃先は鈍い両刃造りとなる。縦位の研磨痕が表裏に認められる。千枚岩製。62は、皿形高杯の口縁部である。外面は横位の布を介したナデの後、1条の波状文で加飾し、内面と口唇上面は横位のヘラミガキで平滑に仕上げる。63は、高杯脚柱部である。脚柱上端は中実で、上端側面に杯部を付加する。脚部から杯部への移行は鋭角的で、杯体部外面には板オサエが施される。脚柱部外面には、3～4本の凹線束が3単位めぐる。脚柱部内面は、しほり目を回転ケズリで消している。64～70は、底径4.4～6.4cmを測る小形の底部である。器面調整は、磨耗したものが多く不鮮明だが、外面には、斜放射状のタタキ(67)・粗いタテ方向のミガキ(68)・タテハケ(69)などの技法が用いられる。66は、体部外面を板ナデするが、同一工具で底部側面を押圧しており、下方からみて八角形状に整形している。65は、底部輪台の内部に粘土円盤を充填する製作技法が観察できた。



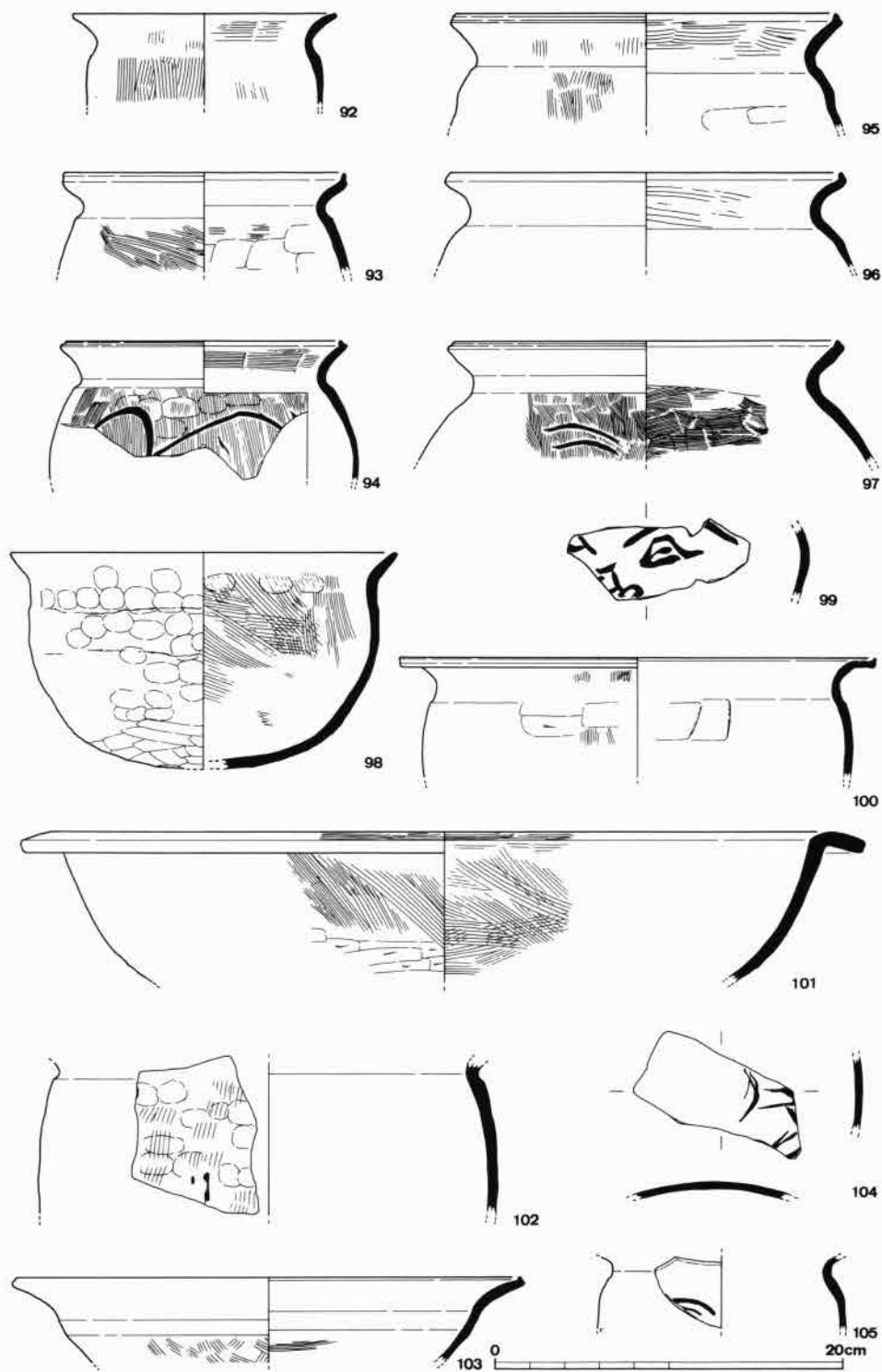
第58図 出土遺物実測図(4) 弥生土器・古墳時代土器・奈良時代土師器

古墳時代の土器(第58図)

71は、須恵器杯身の小片である。立ち上がり部は中位で「く」字形に屈曲し、口唇部は丸くおさめる。復原口径13.5cmを測る。72は、土師器高杯の脚部である。脚柱及び裾部外面は、縦位のヘラミガキで仕上げる。脚柱部内面にはしほり目を残す。裾部には円孔が4か所穿孔される。73は、須恵器大形甕の口縁部で、内外とも回転ナデで仕上げた後、外面に3条の平行沈線と波状文を施文する。

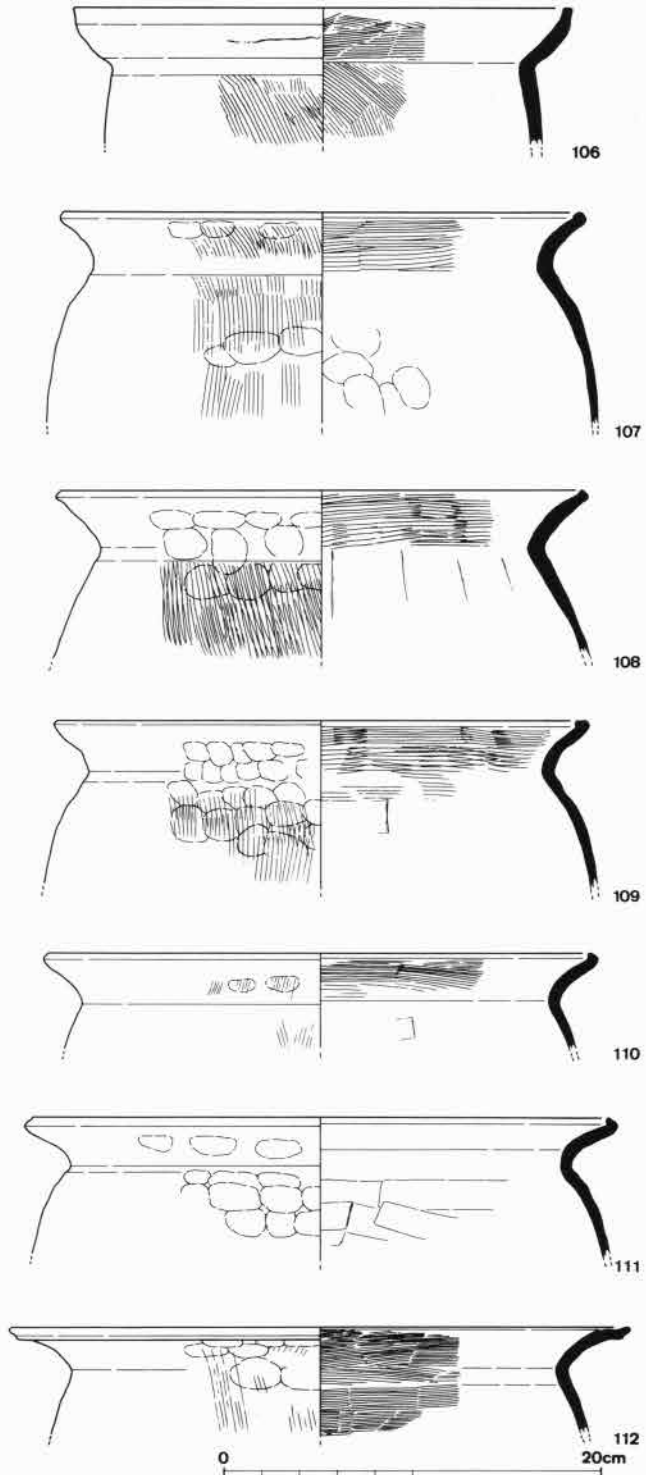
奈良時代の土師器(第58～60図)

74・75(杯A)は、復原口径18.6cmを測る。74の口縁はやや外反し、口唇部は丸くおさめる。a o手法で調整し、底部外面に指頭圧痕を残す。内面は、螺旋暗文と2段の斜放射暗文を加える。75は、やや内湾する口縁の端部が内方に丸く巻き込む。a 1手法で調整し、内面は上端が屈曲する放射暗文を施す。76は、口縁部の小片で高台の有無は不明である。口唇部は内方に丸く巻き込む。a o手法で調整し、内面には1段の斜放射暗文を加える。77(杯C)は、内湾して立ち上がる口縁部を有し、端部は丸く肥厚する。器表磨耗のため調整不詳だが、外面はb o手法を用いる。78(椀C)は、b o手法で整形する。内面全体に漆膜が付着するため調整は不明である。79は、皿状の底部から口縁が直立し、端部が小さく外折する形態を示す。a o手法で調整し、内面には放射状暗文を施す。80は、高杯脚部で、脚柱部はていねいな面取りで多面体に仕上げる。裾部外面は放射状のハケ、内面はヨコナデで仕上げる。脚柱部内面の下方に「飛」墨書がある。82～89(壺B)は、扁球形の胴部と強く外反する短い口縁部からなる広口の土器。胴部の内外をユビオサエで整形した後、内面全面と口縁部外面にヨコナデを加えて仕上げる。87・89は、内面に漆が付着する。90・91は、外面を指頭圧痕、内面を指頭ナデで調整した器外表に文字として判読できない墨書を有する破片である。91は、内面に漆が厚く付着する。甕は法量の違いから口径16cm前後の小型品(92～94)と、23cm前後の中型品(95～98)、そして27～33cmを測る大型品(100・106～112)に分類できる。口縁部の形態は、頸部の屈曲が鋭く、口縁部が外反するものが多く、中には頸部からゆるやかに短く外反するもの(98)や、内湾ぎみに立ち上がるもの(106)などもある。口唇部は内方に肥厚するものが主流であるが、肥厚せずに丸くおわるもの(92・98)や方頭状の面取りをするもの(106・108)も存在する。器面の調整は、複数個体に共通した技法が認められる(92・94・95・97・100・106～112)。すなわち、体部から口縁部にかけての外面を縦基調のハケメで調整し、同時に口縁部内面にヨコハケを施す。その後、口縁部とその周辺の内外にヨコナデを加えて仕上げる。ただし、体部内面調整は変化に富んでおり、ハケメを多用するものやナデ・ケズリ・オサエを用いるものもある。特殊な調整手法を採るものとして、93は体部外面にヨコハケ、内面にヨコハケとていねい



第59図 出土遺物実測図(5) 奈良時代土師器

なユビオサエを施した後、口縁部に指頭によるヨコナデを加える。また98は、体部外面上半をオサエ及びナデ調整し、同下半をヘラ削りする。内面は体部中位から口縁にかけてヨコハケとナナメハケを重ね、体部下半はナナメナデ調整を加える。最後に口縁部内外を指頭によるヨコナデで仕上げる。なお、96・97は通常の甕形土器であるが、外面に絵画風の墨書があり、墨書人面の眉を表現したものとみられる。99は、胴部外面に墨書で人面を描いたもので、目・眉・鼻が確認できる。ただ、ここで使用された土器は通有の墨書人面土器と異なり、外面にタテハケ、内面に静止痕をもつ連続的なヨコハケ調整を残すものである。101・103は、半球形の体部に大きく外反あるいは水平に口縁が開く鍋Aである。101の調整は外面の体部中位から口縁端部までを左傾ナナメハ

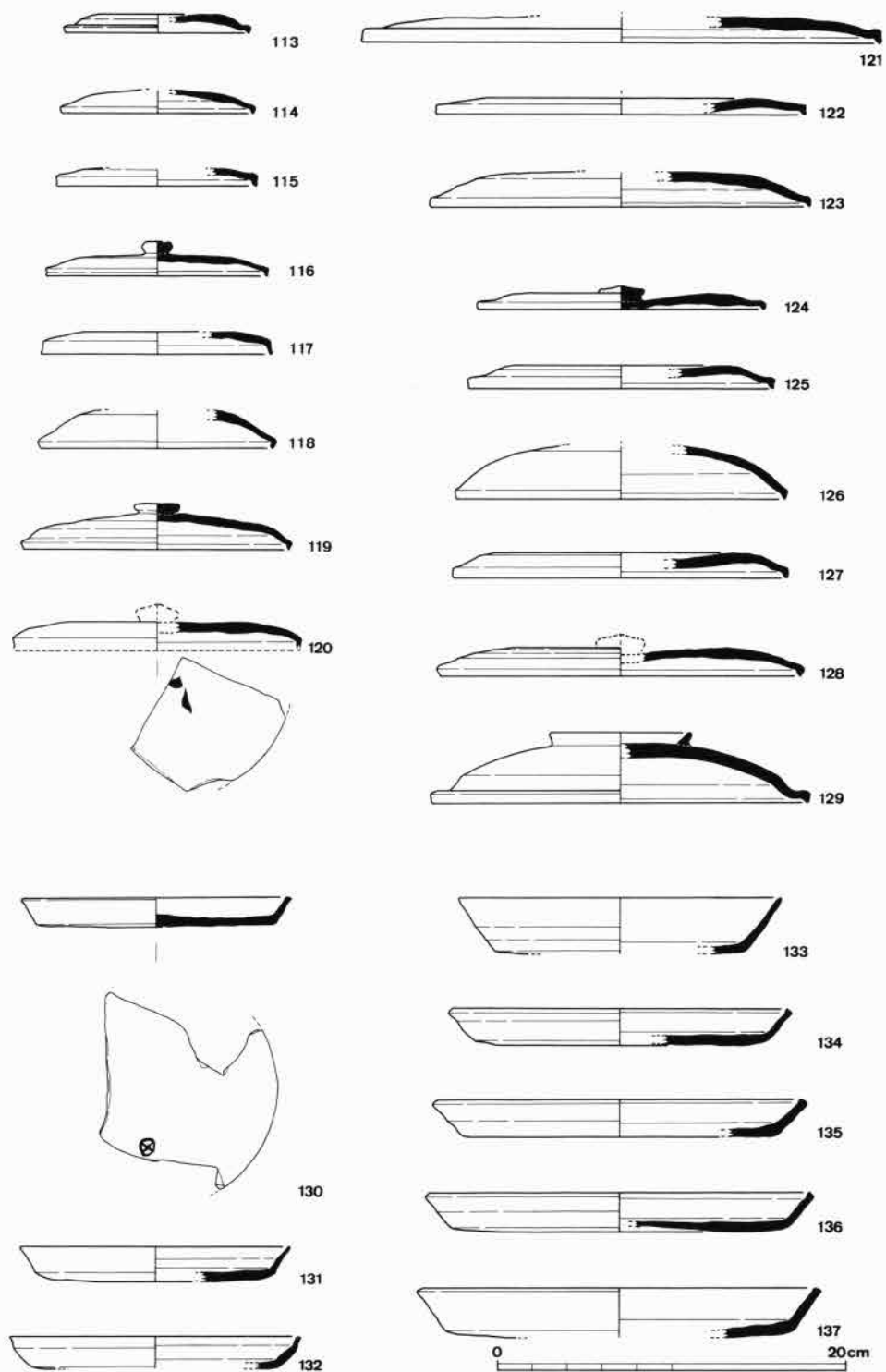


第60図 出土遺物実測図(6) 奈良時代土師器

ケ、体部下半をヨコヘラケズリし、内面は体部を斜交するナナメハケ、口縁部をヨコハケした後最後に口縁部内外に指頭ヨコナデを加えて仕上げる。112は、体部外面に斜交するナナメハケ、同内面に横位ヘラケズリと断続的なヨコハケを施した後、口縁内外をヨコナデで調整する。102は、甕の胴部の小片で、外面に縦棒を連ねたような墨痕が認められる。器面調整は、外面をタテハケの後ユビオサエ、内面を全面指頭ナデで平滑に仕上げる。104・105も煮沸・貯蔵形態の土器の外面に墨痕を認めるものである。104は、外面を不整方向のハケメで仕上げたもので、絵画様の墨書がみられる。105は、頸部くびれ付近の胴部片で、タテハケの後軽いナデ調整を施した外面に墨書で2条の円弧(人面の眉か?)を描いたものである。

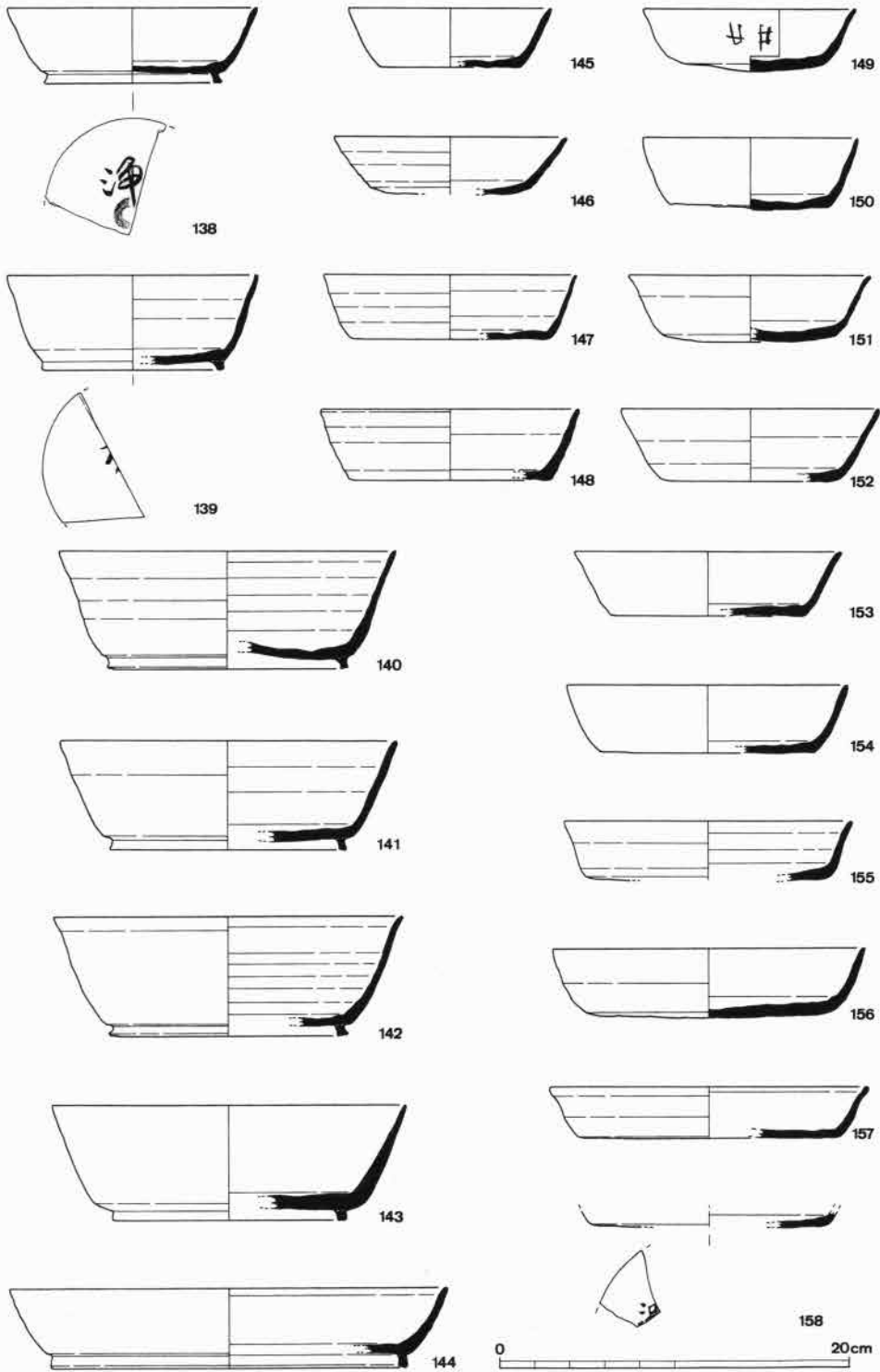
奈良時代の須恵器(第61～63図)

蓋は、口径の違いから10.6～13.4cmを測るもの(113～119)、15.3～19.4cmのもの(119・120・124～127)、20.7～22.0cmのもの(122・123・128・129)、27.8cmを測る大型のもの(121)に分けられる。形態的には頂部が平坦で扁平なもの(113～117・120～122・124・125・127・128)と、頂部が丸みをもって笠形をなすもの(118・119・123・126・129)に二分でき、さらに縁部の断面形から、屈曲する縁部をもつもの(A形態、113・121・124・125・127・129)と、縁部の屈曲が明確でないもの(B形態、114～120・122・123・126・128)に分類できる。端部は下方に丸みを帯びて肥厚する程度のもの、断面が逆三角形で鋭く下方に突出するものなどの形態差が認められる。つまみを残す個体をみると、扁平でその上面中央がわずかに高まるもの(119・124)、逆にくぼむもの(116)がある。129は、円環状のつまみを付している。調整手法はほぼ共通しており、頂部外面を回転ヘラケズリした後、縁部周辺の外面から頂部内面にかけて回転ナデを施し、最後に頂部内面に不整方向のナデを加える技法が一般的である。ただし、小型品は頂部外面のヘラケズリを省略し、ヘラ切り未調整部分を残したり(113)、全面を回転ナデのみで調整する(114・115)。120は、頂部内面に「八」とも読める墨書を残し、114・117も同部位に墨痕が認められる。121は、内面全面に墨痕があり、転用碗の可能性がある。皿は、口径の規模の差から15.6～16.8cm(130～132)の小型品と、18.6～19.8cm(133・134)、21.6～23.3cm(135～137)の中型品に分類できる。いずれも、広く平坦な底部に外上方に直線的に開く短い口縁部がとりつく形態をとる(皿C)。口唇部は、外傾する面をもつもの(130・137)、内側に巻き込み肥厚するもの(134～136)、尖りぎみに丸くおさめるもの(131～133)などの差がある。底部と口縁部の境は、稜角をなすもの(130・133・137)と、丸く削り落とすものがある。調整は、大半の個体が底部外面に不整方向のナデを施すが、ヘラ切り痕を明瞭に残し、口縁部内外を回転ナデ、底部内面をていねいな不整方向のナデで仕上げる手法を採る。ただし、小型

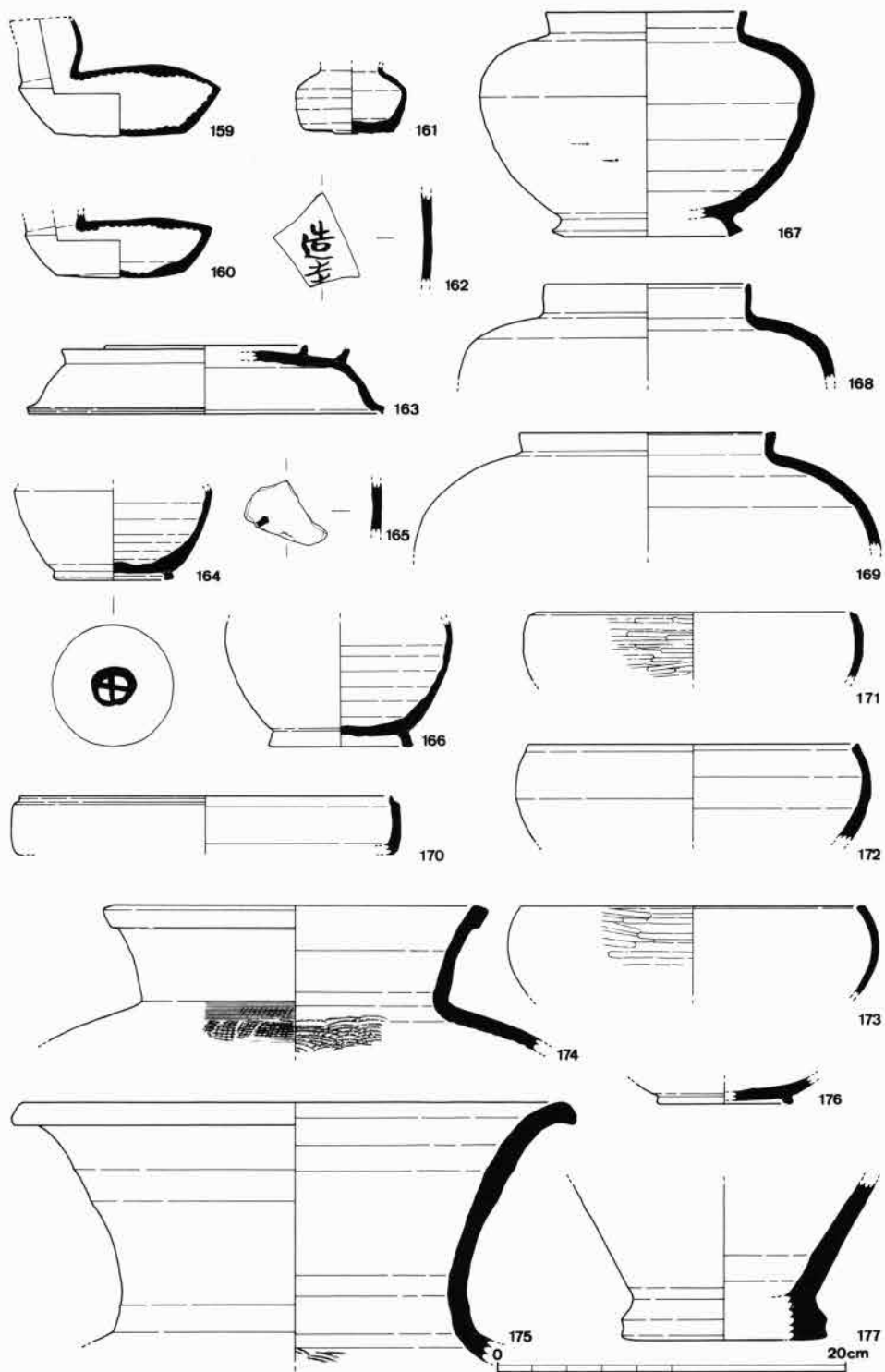


第61図 出土遺物実測図(7) 奈良時代須恵器

の器種(130・131)は、底部内面も口縁から連続する回転ナデで調整し、136は底部外面に回転ヘラケズリを施す。130は底部外面に「☒」墨書が記される。杯は、高台を有する杯B(138~144)と、もたない杯A(145~157)がある。杯Aは、平坦な底部と上外方にまっすぐのびる口縁部からなるもので、口唇部は大半が丸くおさめるが、157のように内方に巻き込んで肥厚するものもある。口縁部と底部の境は、屈折して稜をなすものと、丸みを帯びるものがあるが、後者のうち149・151は丸みを帯びた底部からゆるやかに口縁部に移行する形態をとり安定性に欠ける。法量(口径)の差には断絶はなく、11.6cm(145)から18.4cm(157)と連続的に推移する。調整手法は、ほぼ共通しており、底部内面から口縁部の内外にかけて回転ナデ(ロクロナデ)を施した後、底部内面中央寄りの部位に不整方向のナデを加える。底部外面はヘラ切り未調整のままか、一定方向あるいは不整方向の軽いナデを加える。中には、底部外面にまで回転ナデが及ぶ個体(155)もある。149は、口縁部外面に「井」字を横に2つ重ねたような墨書がある。杯Bは、杯Aに高台が付いたものであるが、法量(口径)の差によって14.4cm(138・139)と20.0cm前後(140~143)、そして25.2cm(144)に分かれる。口唇部は、すべて尖りぎみに丸くおさめ、肥厚するものはない。高台は、底部外面周縁に接するか、やや内側にとりつくものが多いが、143は少し内方に偏っている。高台の形態は、低短な台形あるいは外方に踏んばる平行四辺形を呈し、脚端面の接地の状況は、底面が水平をなすもの(138・139・141・143)、内傾するもの(140・142)、外傾するもの(144)の3種類がある。器面調整は、底部内面から口縁部外面までを回転ナデした後、底部内面に不整方向のナデを付加する点は全個体共通するが、底部外面調整に関しては器体の大小で若干異なる。すなわち、比較的小型の138~140ではヘラ切りの後不整方向のていねいなナデを加えるのに対し、大型の141~144では同部位を回転ナデによって調整する。なお138は、底部外面に「浄」の墨書があり、139にも同部位に文字らしき墨痕が認められるが判読できない。平瓶(159・160)は、扁平で肩部に稜をもつ体部の上面に、あまり広がらない小振りの口頸部をつけたもので、体部最大径10.8cm(160)、11.6cm(159)を測る小型品である。調整は、底部外面をヘラ切り不調整で残すほかは、回転ナデでていねいに仕上げる。壺C(161)は、扁平な球形の体部を有する平底の小型品。口頸部を欠く。底部外面にヘラ切り痕を残すほかは、ていねいなロクロナデで器面の内外を仕上げる。162は内外ともナデ仕上げの土器(供膳形態)の一面に「造寺」の墨書が認められるものである。特殊蓋(163)は、頂部に二重の円環状の突帯を貼り付けたもの。縁部は「S」字状に屈曲し、端部は小さく尖り気味に下方に突出する。全面を回転ナデ調整した後、頂部内面に不整方向のナデを加える。壺底部(壺L、164・166)は、球形の体部に低短な高台が付くもの。底部外面にヘラ切り未調整を残す以外、回転ナデでていねいに仕上



第62図 出土遺物実測図(8) 奈良時代須恵器

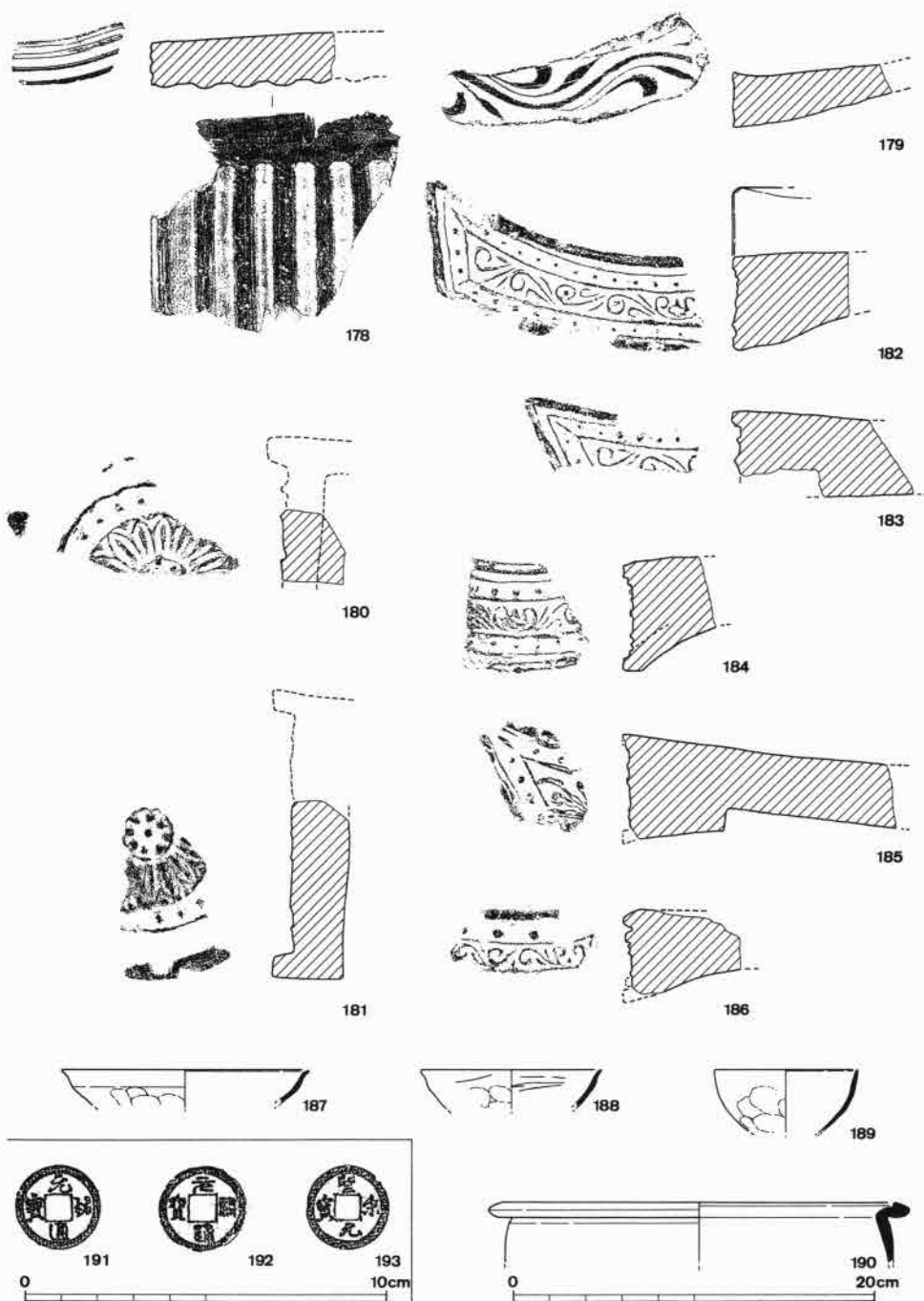


第63図 出土遺物実測図(9) 奈良時代須恵器

げる。164は、底部外面に「㊦」の記号様の墨書がある。壺A(167~169)は、肩のやや張った扁球形の体部に直立する短い口縁部と「ハ」字形に踏んばる高台を付すものである。完存に近い167でみると、体部外面は、全面回転ケズリの後、外面の肩部以上から内面全面にわたってロクロナデを施す。さらに、底部付近の内面には不整方向のナデが加えられる。壺D(170)は、直立する扁平な体部と、内折して上方につまみ上げたようなごく短い口縁部を備える。底部を残さないが、おそらく高台を付すものであろう。遺存部分は、内外とも回転ナデ調整で仕上げる。鉢A(171~173)は、いわゆる鉄鉢形を呈するが、いずれも体部下半を欠き、底部の形態は不明である。調整は、内外を回転ナデ調整した後、外面の口縁部寄りに横位のヘラミガキを加える。甕A(174・175)は、口縁が外反する大型の甕で、口縁部の形状は、174では短く外反し、端部は外側に肥厚して方頭状を呈する。175は、長く大きく外反し、端部は外側に丸味をもって若干肥厚し、垂下する。調整は、体部を残す174では、体部内外をタタキで調整した後、口縁部外面から体部内面にかけて指頭によるヨコナデを加え、さらに体部外面には、カキ目調の布を介したヨコナデを加えて平滑に仕上げる。灰釉陶器(176)は、杯Bまたは皿Bの底部である。内面全面に施釉し、三又トチンの痕跡をとどめる。高台は「つけ高台」で、断面が台形で低いものである。鉢F(177)は、円盤状の底部から外上方に立ち上がる口縁部がのびる形状を示す。調整は、底部を除く内外をロクロナデした後、外面に弱い縦位のナデを加える。底部外面は、不整方向のナデを重ねて平滑に仕上げる。

瓦類(第64図)

178は、顎面施文重弧文軒平瓦である。瓦当面に彫りの浅い型引き四重弧を施文する。顎面の形態は、その厚みからして直線顎とみられる。顎面には、断面が整美な円弧をなす突帯が少なくとも6条均等に型引きされている。凹面の布目圧痕は、瓦当側1cm未満を横ナデで磨り消している。胎土は精良で、焼成は須恵質、灰色を呈する。179は、偏向唐草文軒平瓦である。瓦当面には大振りな忍冬唐草文を施文するが、瓦当と筈が少しずれており、中心寄りで凸面側の文様が欠損する。内区と外区の区別は特になく、筈からはみ出した部分は未調整で凹凸を残す。曲線顎で、凸面は格子目叩きの後、瓦当側7cmをていねいなヨコナデで磨り消している。凹面は、すべて布目圧痕を残す。胎土は精良で、焼成は良好。灰白色を呈する。180・181は、単弁17葉蓮華文軒丸瓦。いずれも小片で表面の磨耗が進行している。圏線で囲まれた中房に1+8の蓮子を置き、外区内縁には珠文を、外区外縁にはおそらく線鋸齒文を陽刻する。胎土には小石粒を若干含み、焼成はやや甘く、表面は暗灰色を呈する。この瓦は、恭仁宮跡KM05と同筈である。182~184は、均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは「C」字上向内に、下端を欠いた花頭形を垂飾する。蕨手3葉を



第64図 出土遺物実測図(10) 奈良時代瓦埴類・錢貨・中世土器

左へ3転半させる。顎部の形態は曲線顎で、凸面は縦位の縄目叩き目を施した後、瓦当側は13cmの範囲に横位の板ナデとランダムな縦基調のユビナデを重ねる。凹面の布目圧痕は、瓦当側5～9cm内外を横ケズリまたは乱雑なヨコナデで消している。胎土には小石粒を若干含み、焼成はやや軟質である。器表は、暗灰～暗褐色を呈する。恭仁宮出土瓦のKH03と同範である。185は、均整唐草文軒平瓦の周縁部の破片資料である。脇区に珠文を3点配する。段顎を呈し、凸面は横位の縄目叩き目の後、瓦当側7cmをヨコナデ調整し、凹面の布目圧痕は瓦当側6cmをヨコケズリで消している。胎土には小石粒を若干含み、焼成は堅緻、器表は暗灰色を呈する。平城宮6664系と同範。186は、均整唐草文軒平瓦である。内区の幅は狭く、中心飾りは「C」字上向内に水滴様飾りを垂飾し、小振りの蕨手3葉を遺存部分で3点以上反転させる。外区の珠文は大きく、間隔をあけて各蕨手の中心に対応するように配する。顎部は曲線顎である。各部の調整は不明である。胎土に小石粒を比較的多く含み、焼成はやや軟質、暗灰色を呈する。

中世の遺物(第64図)

瓦器椀(187～189)は、いずれも口縁付近の細片資料である。器高の低いもの(187・188)と、口径が小さく深く椀状を呈するもの(189)がある。口縁部付近の内外のミガキは188の内面にわずかにみられるにすぎず、他は外面に指頭圧痕を顕著に残す。口唇部の形状はわずかに内傾する小さな段を有する。鍋(190)は、外折した口縁部の内面が幅広く肥厚する形状を呈し、内外面とも回転ナデで仕上げる。外面が黒色を呈する。銭貨は3点出土した。191は真書体の元祐通宝、192は篆書体の元祐通宝で、ともに1086年初鑄、193は、真書体の聖宋元宝で1101年初鑄。いずれも北宋銭である。

4. 小 結

今回の調査で判明した諸点について、以下要約する。

(1)調査区内の広い範囲で検出された河道SR20は、釜ヶ谷筋に沿って南北に流路をもつ現在の釜ヶ谷川の旧流路とみてよく、特に縄文時代後期から奈良時代にかけて開析と埋没を繰り返した河川の姿をおよそ確認したと理解してよいと思われる。

縄文時代の資料については、まずその遺跡の希少性という点が挙げられる。視点を南山城地域にしぼってみても、『京都府遺跡地図』登録遺跡中縄文時代の遺跡を拾い上げると、今回の調査例を含めても13例とわずかに1%を数えるにすぎない。本遺跡出土の縄文土器は、河川内堆積土中に包含されるという条件にありながら、その保存状態は良好であって、これは遠隔地から流下したものでないことを意味する。すなわち、調査地の周辺の微高地に居住域(集落)が存在することを暗示するものである。特に、出土した土器が後期前葉の

縁帯文土器の初期に中心をおくものの、後期初頭の中津式及び同末葉の宮滝式を混じえ、断続的ではあるが、およそ後期全般にわたる約1000年間の土器型式がみられるという特徴が看取できる。このことから、この遺物群から推定される集落は、一定期間の継続的な居住が認められる拠点的な集落の可能性が高い。

(2)はじめにも記したように、今回の調査対象地は、燈籠寺廃寺の推定寺域内に重複し、その復原案によると東限施設が対象区内に入る。調査の結果、調査区域の大半が南北に流路をもつ自然河道であり、その埋没の下限が少なくとも9世紀以降に比定でき、その上面が整地され二次的に土地利用されるのが、出土銭貨などから11世紀以降中世にかけての時期であることが判明した。この中で、わずかに調査区の北端部では上記の河川開析を被らない安定した地盤がみられ、この上面から南北に主軸をもつ溝(SD19)と柱列を検出した。調査範囲が狭小であるため全貌を知り得ないが、築地か柵列とその雨落ち溝の可能性があり、瓦類などから8世紀に機能した遺構とみられる。仮に、これらが寺域の東限施設の一部だとすれば、SD19の中心軸は寺域復原案の東限ラインとほぼ一致するが、復原案の寺域北限を越えて北方に施設が展開することになる。調査区内では西折しないことから、寺域東限は120m(400尺)を超え、少なくとも135m(450尺)以上を測ることになる。一方、今回の調査では、奈良時代の遺物がコンテナにして40箱出土しているが、その中に多くはないが、寺院遺構に不可欠な瓦資料も含まれる。軒瓦を瞥見してみると、出土遺物の項でも記したとおり、大別して7世紀のものと8世紀に下るものがある。これにより、この寺院の創建時期の一点が7世紀後半ないし末葉であることがわかる。過去に百濟末期様式の素弁8弁蓮華文軒丸瓦が採取されており、いわゆる白鳳時代創建の寺院であることが改めて判明した。顎面施文重弧文軒平瓦(第64図-178)については、南山城地域の白鳳寺院のいくらかに類例をみる。その分布をさらに詳細にみれば、木津川右岸地域は主として山田寺式または川原寺式系の軒丸瓦とセット関係をもつものに対して、左岸では、先の素弁8弁蓮華文軒丸瓦とセット関係にある寺院が燈籠寺廃寺を含めて数か寺(三山木寺廃寺・普賢寺跡)存在する。この地域に木津川右岸域とは異なった瓦の供給体制が存在するものと思われる。^(注3)次に、8世紀の軒瓦は、大半が恭仁宮出土瓦と同型式で占められる点が注目される。すなわち、今回出土した軒瓦の内、第64図-180~184は、恭仁宮瓦型式のKH03及びKM05と同範で、これらの瓦は恭仁宮域では、ともに恭仁宮大極殿域が山背国分寺に施入されたおり(天平18年=746年)に新調された瓦の一群として捉えられている。^(注4)これらの瓦の恭仁宮以外の出土地を一覧すると、両者がセットで出土した例は滋賀県の甲賀寺と近江国衙に限定され、この他KM05は上津遺跡・久世廃寺・高麗寺で確認されている。^(注5)このように、この型式の瓦は、決して広範囲にわたって多量に分布するものではないことが現時点では指

摘できる。それでは、なぜ燈籠寺廃寺からこのような山背国分寺系の瓦がセットで複数出土したのかということになるが、一案としてこの寺院が山背国分尼寺であった可能性を指摘したい。それは山背国分(僧)寺と同範の瓦が使用されているという根拠のほか、この寺を国分尼寺とする伝承や記録が古く江戸時代から存在するからである。すなわち、中世の興福寺の末寺を記した『興福寺官務牒疏』(1441年)に「誓願寺、在相楽郡出水郷、僧房三字、光明皇后御願、本尊弥陀佛」とみえるが、相楽郡出水郷内において奈良時代の寺院跡をさがすと、現在のところ燈籠寺廃寺しか見い出せず、この寺が中世には誓願寺と呼ばれていた可能性があること。そして、この考えを前提にした場合、近世の地史である『山州名跡志』(1771年)では、この誓願寺について「当寺は聖武帝の御願にして持戒の尼を棲しめたまへりと云々。但し是れ即ち光明子の御願。日本一州一寺の国分尼寺なるか」とする解釈が存在し、注意を要する。また、幕末に描かれたとみられる『木津郷図』と称する絵図をみると、この廃寺内に残る土壇の付近に「ニジ後」と記す千童寺村の田があることがわかり、さらに近年までこの廃寺の北に接する地区に「ニジヤマ」なる通称が残されていることを岩井照芳氏は考察されている^(注6)。

これより先に、田中重久氏がこの遺跡付近(「御霊神社の東」と記し、上津遺跡の可能性もある)から、山城国分寺跡と等しい瓦が出土することを報告し、「山城国分尼寺の参考地の一つとして考えてもよいかもしれない」と、遺物の上からその可能性を追究された^(注7)。このように、燈籠寺廃寺を国分尼寺とみる考えは、古くからあるわけで、今回の調査によると、国分寺系瓦の検出は、田中氏の考証を裏付ける形で、従前の国分尼寺説をより補強するものとみることできる。ただし、この山背国分尼寺については、立地環境や地名の由来などから加茂町法花寺野宇里にあてる説も有力であって、現時点ではどちらを国分尼寺に比定するかは決しがたい。したがって、ここでは改めて燈籠寺廃寺にもその可能性が指摘できる程度に評価しておきたい。

(3)最後に、S R20で埋没後上面が整地されて以降、営まれた遺構について若干触れてみたい。縄文時代以降、しばらく河川(S R20)の氾濫原であった調査地付近は、中世に至って整地されるようで、その主目的が耕地開発に伴うことは田畑の水路的性格をもつSD10や、牛馬の足跡の検出からある程度予想できる。ところで、この面(上層検出面)で検出された南北方向に平行する2条の溝(S D03・06)は、中心軸間で約6.0mの間隔をとって併走し、一見直線的にのびる道路跡の両側溝を思わせるものがある。仮に、道路跡だとすると、調査地の南方ではほぼ南北方向に走る釜ヶ谷筋の北延長線上に一致することになる。この釜ヶ谷筋に関しては、近年岩井照芳氏の研究によって、大和の「上ツ道」の北延長であって、恭仁京設定の際には左右京を分かち「賀世山西道」として機能したとする説が提

唱^(注9)された。今回検出された道路状遺構が岩井氏の唱える該当道にあたるかどうかについては、時期的な問題として検出遺構(道)が新しく考えられるための確には符合しないであろう。ただ、同氏の説によると、この「釜ヶ谷道」の中世における重要性もさまざまな角度から論証されており、この点では検出道を中世の街道に結びつけることは可能である。

(伊賀高弘)

注1 本報告作成に際し、以下の方々にご教示を賜った。

泉 拓良氏、岩井照芳氏、田中淳一郎氏、玉田芳英氏、千葉 豊氏、橋本清一氏、森下 衛氏、竹原伸仁氏

注2 調査に参加していただいた方々は、以下のとおりである(敬称略)。

石橋明子・木下町子・日下隆春・高橋立彦・中野行真・永尾幸江・林 恵子・福永美知子・山本弥生

注3 木津町史編纂のおり、軒平瓦が採取されている(『木津町史 史料篇Ⅰ』1984)。

注4 この点は竹原伸仁氏が指摘されておられる。(竹原伸仁「南山城の古代屋瓦に関する一考察—軒平瓦に見る雨仕舞と装飾について—『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』1992)

注5 上原真人「恭仁宮跡 発掘調査報告 瓦編】 京都府教育委員会 1984

注6 岩井照芳「山城国分尼寺は木津にあった?」『広報木津』第185号 1980

注7 田中重久「平安奠都前の寺址と其出土瓦」(『綜合古瓦研究』夢殿第十八冊特輯号 鵜故郷舎) 1938

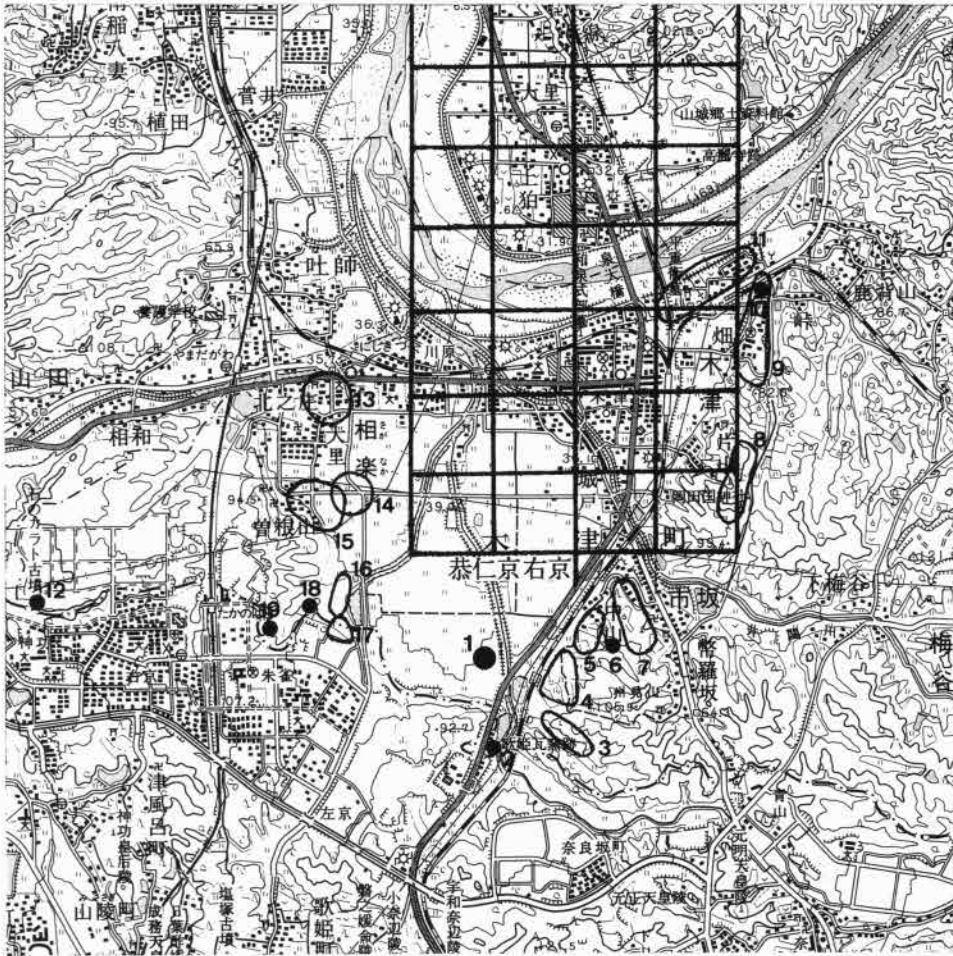
注8 中谷雅治「甕原離宮の位置について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立五周年記念誌— (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注9 岩井照芳「恭仁京賀世山西道と上ツ道延長道」(『京都考古』第76号 京都考古刊行会) 1994

7. 弓田遺跡発掘調査概要

1. はじめに

弓田遺跡は、京都府相楽郡木津町大字市坂小字弓田・上大条に所在し、以前から遺物散布地として知られていた。今回、国道24号京奈自動車道の建設に伴い、発掘調査を実施し



第65図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- | | | | | |
|-----------|-------------------|-------------|-----------|------------|
| 1. 弓田遺跡 | 2. 歌姫瓦窯跡 | 3. 瀬後谷遺跡 | 4. 瓦谷遺跡 | 5. 上人ヶ平遺跡 |
| 6. 西山塚古墳 | 7. 西山遺跡 | 8. 木津坂跡 | 9. 燈籠寺遺跡 | 10. 燈籠寺廃寺跡 |
| 11. 上津遺跡 | 12. カザハビ(石のカラト)古墳 | 13. 相楽遺跡 | 14. ハヶ坪遺跡 | |
| 15. 曾根山遺跡 | 16. 大鼻遺跡 | 17. 音如ヶ谷瓦窯跡 | 18. 音乘瓦窯跡 | 19. 相楽山遺跡 |

た。調査は、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。調査にあたっては、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美、同主任調査員石井清司、同補佐員橋本 稔が担当した。現地調査は、平成6年4月18日から着手し、同年12月27日に終了した。調査面積は、約4,400m²である。

なお、調査に係る経費は、建設省近畿地方建設局が負担した。

調査にあたっては、木津町教育委員会をはじめ、関係諸機関の方々の協力やご教示を得た。また、現地調査にあたって学生諸氏の協力を得た。^(注1)ともに記して感謝したい。

2. 位置と環境

弓田遺跡は、南山城盆地最南端部に位置し、木津川によって形成された沖積地上に立地する。周囲を低い丘陵で囲まれた水田地帯にある。また、奈良県との府県境に位置し、平城京跡や佐紀盾列古墳群とは奈良山丘陵をはさむ位置にあって、古代から大和盆地とは近い位置関係にある。

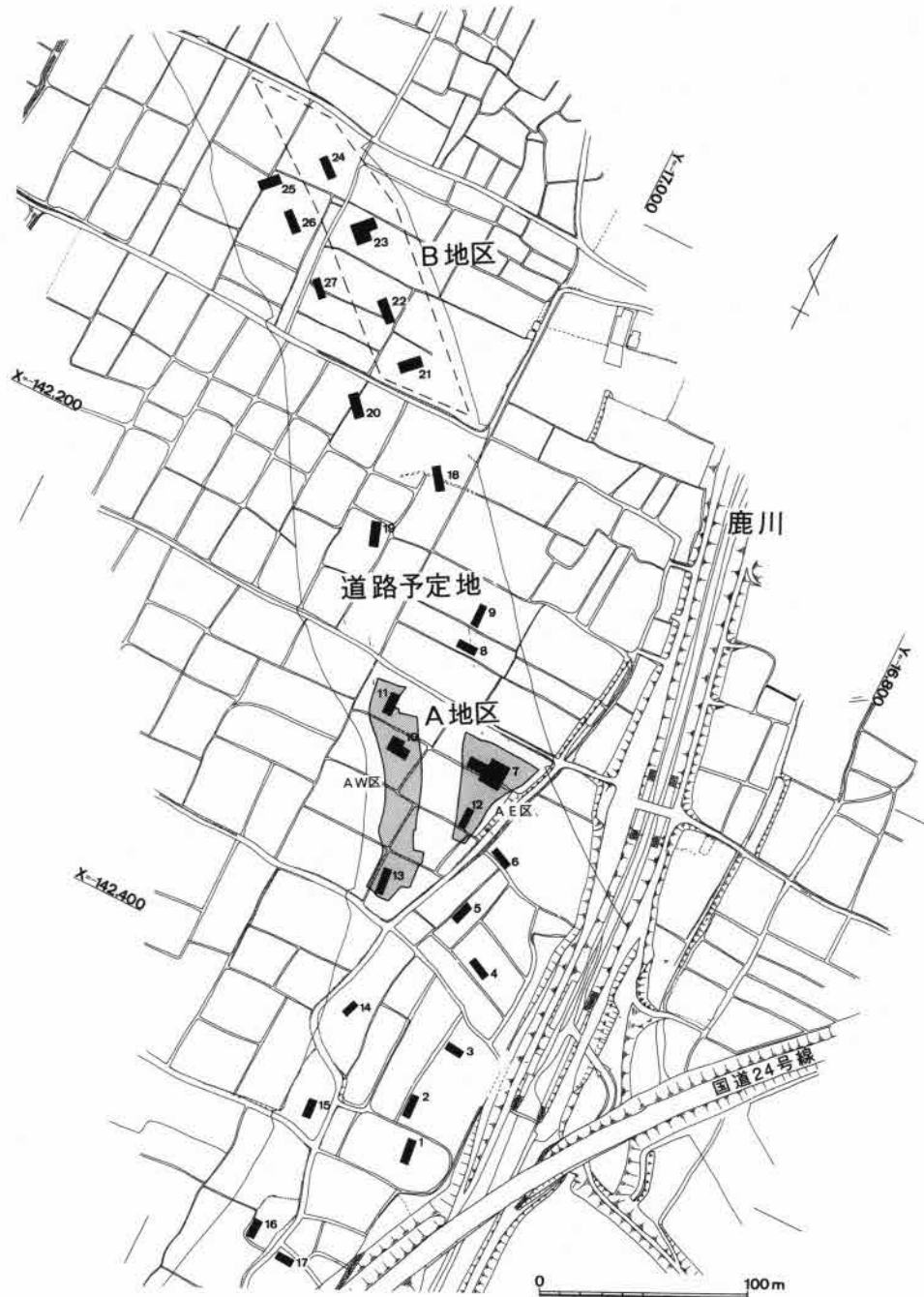
調査地周辺の遺跡として、周囲の丘陵上には東に上人ヶ平遺跡群、歌姫瓦窯、西に相楽山銅鐸遺跡、音乗谷古墳、音乗谷瓦窯跡がある。丘陵裾部に立地する弓田遺跡と同様な遺跡として、弥生時代中期の大島遺跡、弥生時代後期の曾根山遺跡、奈良時代の掘立柱建物跡が検出された八ヶ坪遺跡があげられる。また、調査地の北側は、恭仁京右京の推定地として考えられており、南山城一帯にかけて残る条里地形が弓田遺跡付近にもみとめられる。

3. 調査の経過

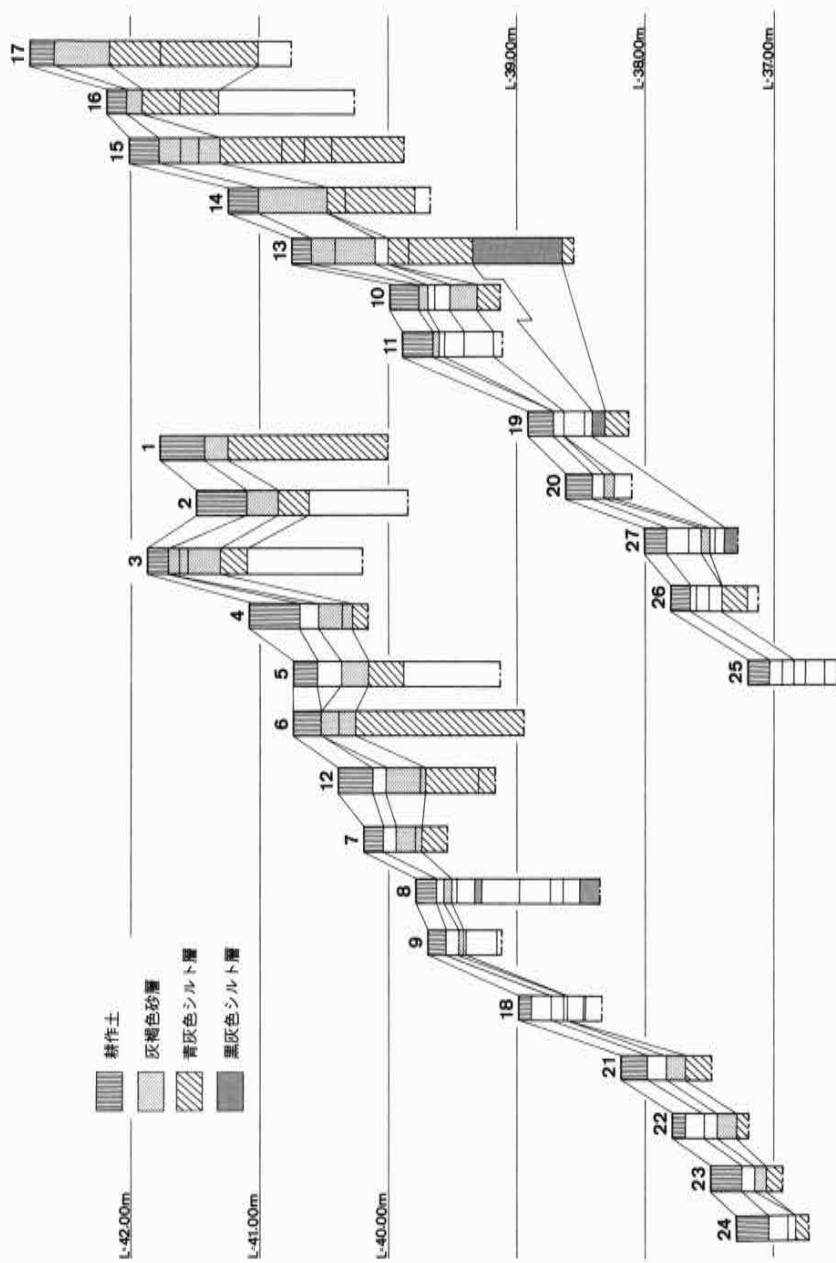
調査にあたっては、まず道路予定地内において27か所の試掘調査を実施した(第66図)。試掘では、27か所全部で現耕作土直下に氾濫層である砂層の堆積が認められ、調査地一体にかけ、遺跡に近接して流れる鹿川の洪水の跡がみられた(第67図)。No. 1～6・14～17のトレンチでは、洪水砂層下の旧耕作土下で青灰色シルト層と青灰色砂層の互層が地表下約2mにわたって確認でき、遺構・遺物などはなかった。No. 7・10・12・13では、中・近世の遺物とともに素掘り溝、掘立柱建物跡、弥生土器を包含する溝を検出した。No. 8・9・11・18～20・25～27では、素掘り溝などを検出したが、それ以外に顕著な遺構はなかった。No. 21～24にかけては、素掘り溝の検出とともに、その下層に平安時代のピットなど、古墳時代の包含層を確認した。その成果をもとに、道路用地内でNo. 7・10・12・13を含む範囲を今年度の調査地としA地区とした。

なお、A地区は、調査地中央を通る既設の工事用道路より東側をAE区、西側をAW区

とした。B地区は、No.21～24を含む遺物・遺構確認地区とした。



第66図 試掘トレンチ配置図



第67図 試掘トレンチ土層図

4. 遺構の概要

A地区では、AW区の西側を灰白色の氾濫砂によって大きく削平を受けており、旧河川の流路とも考えられたが、用地境に近く、また著しい湧水のため調査はできなかった。旧耕作土下において、AE・AW両区とも上・下2層で遺構を検出した。ただし、下層のベース土に縄文時代の遺物の包含が認められ、AE区に特に集中していたため、一部でさらに下層の調査を実施した。

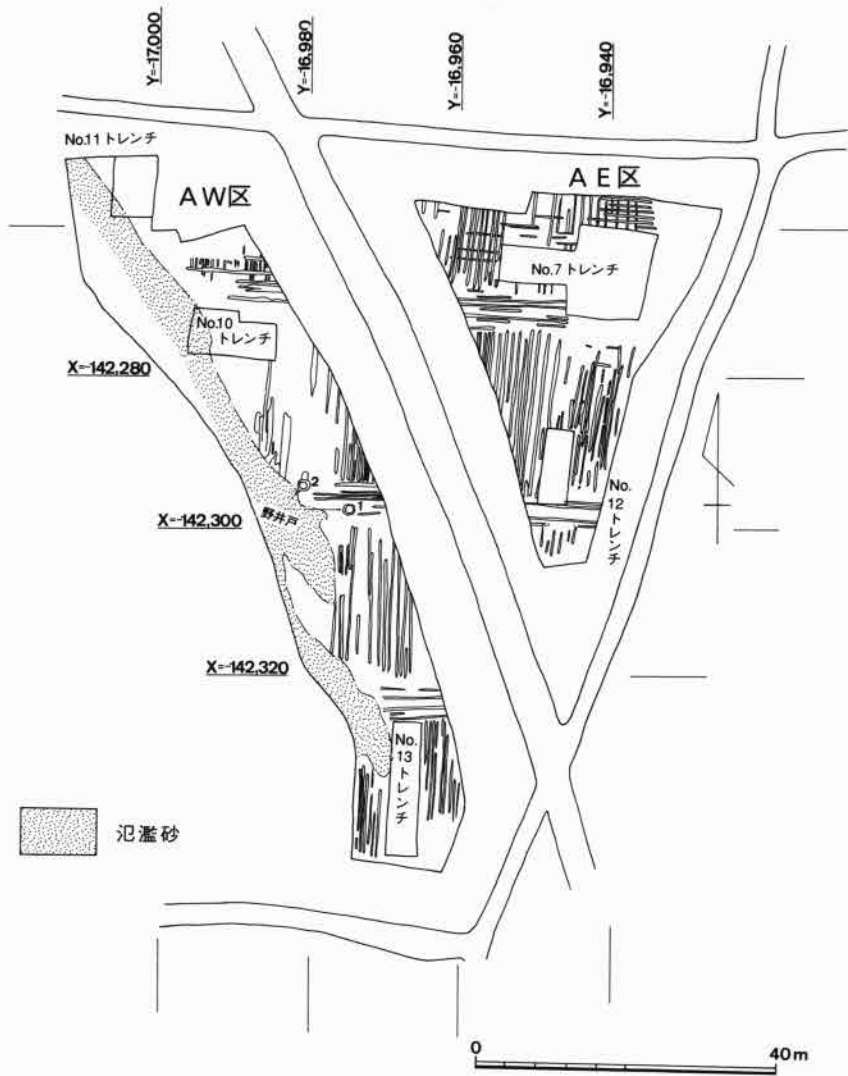
上層遺構 現耕作土の下層に洪水層である砂層が10～15cmの厚さで堆積し、その下層で素掘り溝群を検出した。溝群の幅は、15～30cm・長さ最大18mを測り、南北方向、東西方向と直交する2方向に整然とした規則性をもつ。東西方向の溝は、現水田畦畔と位置がほぼ一致し、南北方向の溝群を3分する。これらの溝群は、中世から近世にかけての耕作の溝であり、南北方向では現行の水田の単位とはほぼ一致するが、東西方向では判別できなかった。AW区中央には、東西方向の溝をはさんで2か所の円形土坑を検出した。土坑には直径1～1.1m・残存高37cmを測る木の桶が残っていた。これらは野井戸の跡で、桶から江戸時代後半の遺物を検出した。

第69図の遺物は、上層遺構で出土した遺物である。平安時代後半から江戸時代末までの広範囲な時期の遺物が混在するが、大半の遺物は中世から近世の遺物である。1～3は、淡茶褐色を呈する土師皿である。4は、黒色化した土師椀である。13世紀頃の大和産のも

付表7 試掘トレンチ成果一覧表

トレンチ番号	調査概要	調査面積 (m ²)	トレンチ番号	調査概要	調査面積 (m ²)
1	顕著な遺構なし	60	15	顕著な遺構なし	60
2	〃	75	16	〃	60
3	〃	56	17	〃	60
4	〃	70	18	〃	60
5	〃	75	19	〃	60
6	〃	43	20	〃	140
7	○弥生後期溝2条・ 中世遺物包含層	170	21	○奈良時代ピット	60
8	顕著な遺構なし	51	22	○中世遺物包含層	60
9	〃	56	23	○古墳時代前期遺 物包含層	90
10	○時期不明掘立柱建 物跡	76	24	○〃	60
11	顕著な遺構なし	50	25	顕著な遺構なし	60
12	〃	48	26	〃	60
13	○中世ピット、土坑	82	27	〃	60
14	顕著な遺構なし	50		試掘調査面積合計	1,852

○遺構・遺物を確認したトレンチ



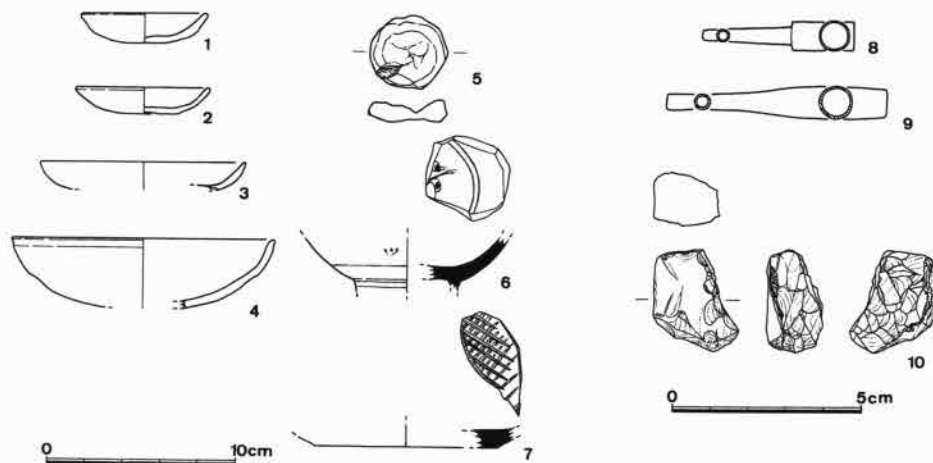
第68図 A地区上層遺構平面図

のである。5は、茶褐色を呈する円形土製品である。時期は不明である。6は、古伊万里の染め付け茶碗である。17世紀頃である。7は、淡黄灰色を呈する灰釉がかかった古瀬戸のおろし目皿で、15世紀頃のものである。

8・9は、キセルの吸い口である。江戸時代のものである。10は、淡緑色を呈するチャート製の火打ち石である。江戸時代の大和産のものである。

1・3・6は、AW区中央の野井戸跡2から出土した。8～10は、AE区南部の素掘り溝中から出土した。

下層遺構(第70図) 上層遺構のベース土層である灰褐色土層の下層、青灰褐色シルト層



第69図 A地区上層出土遺物

1~4.土師器 5.不明土製品 6.古伊万里 7.古瀬戸 8・9.キセル吸口 10.火打ち石

上面から検出した。同一面において異なる時代の遺構を検出したが、それは耕作によって遺構面がかなり削平を受けていた結果と思われる。また、出土遺物が少ないため、すべての遺構の時期は比定できなかった。

溝

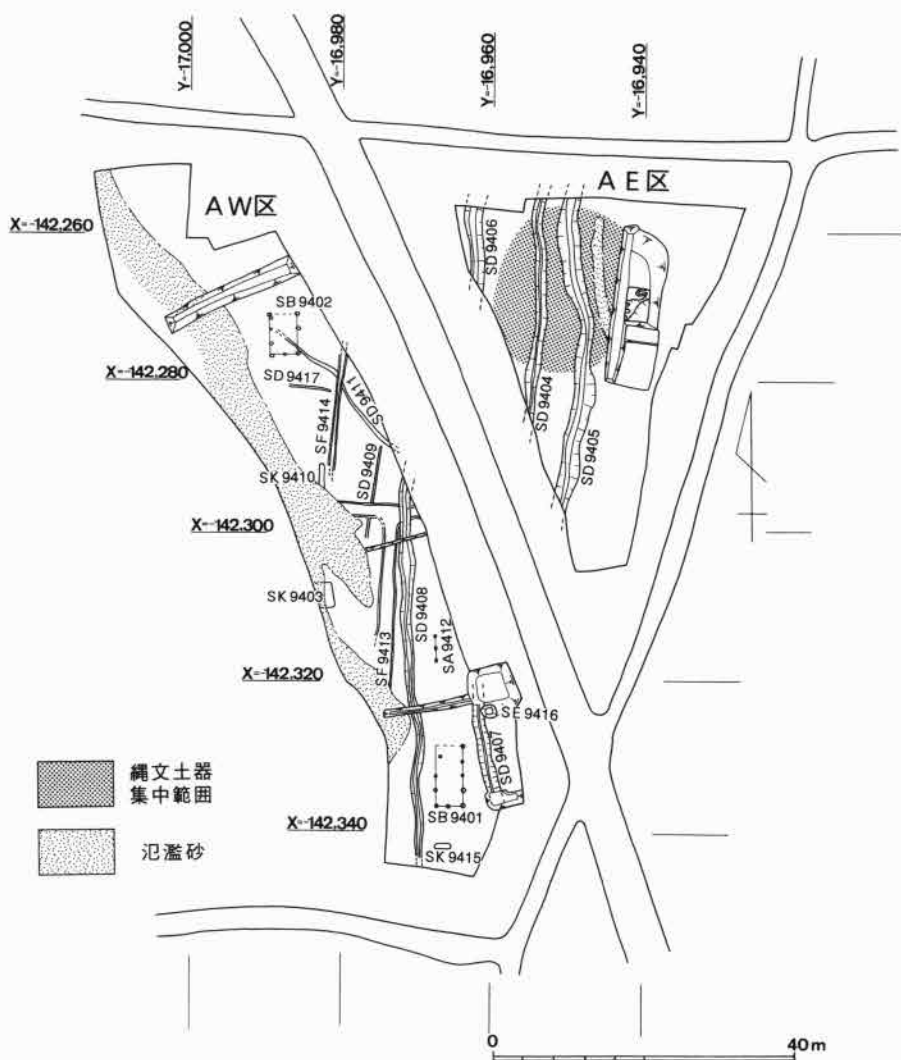
S D 9404 A E地区で検出した。幅1.3~1.5m・深さ約60cm・検出長30.1mを測り、断面は「V」字形をなす。南北方向に流れる溝である。少量の弥生土器片のほかは、まとまった遺物がないが、弥生時代後期の自然流路と判断した。

S D 9405 A E地区で検出した。幅3.7~1.7m・深さ50~80cm・検出長40.2mを測り、断面は「U」字形をなす。南北方向に蛇行して流れる溝である。当初、黒灰褐色土を埋土とする幅0.6m・深さ30cm・検出長18.5mの溝として認識していたが、下層の断ち割りによって、規模が拡大することが判明した。はじめに溝埋土、黒灰褐色シルト中から弥生土器片を検出したことから、弥生時代後期の自然流路と考えられる。

S D 9406 A E地区西北端部で検出した。幅0.5~0.9m・深さ15~60cm・検出長9.4mを測る南北方向に流れる自然流路である。出土遺物はなく、時期は不明である。

S D 9407 A W地区南部で検出した。幅0.9~3.2m・深さ約50cm・検出長11.7mを測り、断面は「V」字形をなす。灰白色砂を溝埋土とし、南北方向に直線的に流れる溝である。井戸跡S E 9411に切られており、埋土中から遺物はなく、S E 9416(平安時代前期)より以前の遺構であろう。上記の溝群と同様、自然流路と判断した。

S D 9408 A W地区南部で検出した。幅約30~32cm・深さ約10~60cm・検出長49.4mを測る南から北に流れる溝である。断面は「V」字形をなし、灰白色砂を埋土として検出し



第70図 A地区下層遺構平面図

た。溝中には、流木とともに土師質甕体部片を検出したが、遺構の時期の決め手とはならなかった。この溝は、後述する畦状遺構 S F 9413に先行する自然流路である。

S D 9409 A W地区北部で検出した。幅40～60cm・深さ約15cm・検出長12.7mを測る。断面が皿形をなす南北方向の溝である。遺物はなく、時期は不明であるが、畦状遺構 S F 9413に先行する遺構である。

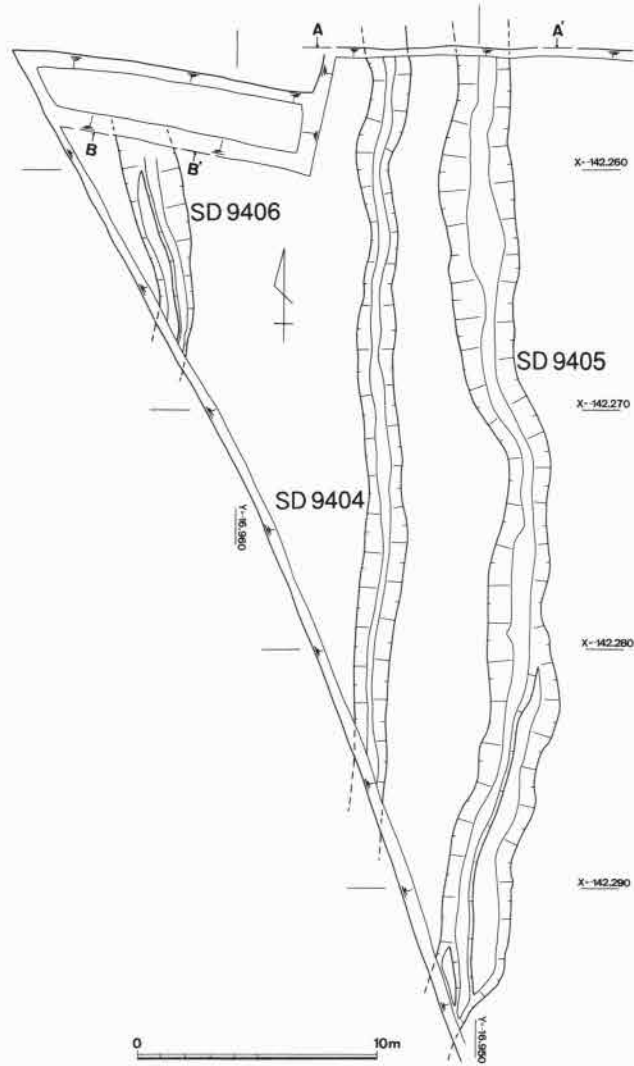
S D 9417 A W地区北部で検出した。幅35cm・深さ10cm・検出長6.2mを測る。断面が皿形をなす東西方向の溝である。遺物はなく、時期は不明である。

S D 9411 A W地区北部で検出した。幅30cm・深さ15cm・検出長21.5mを測る。断面が

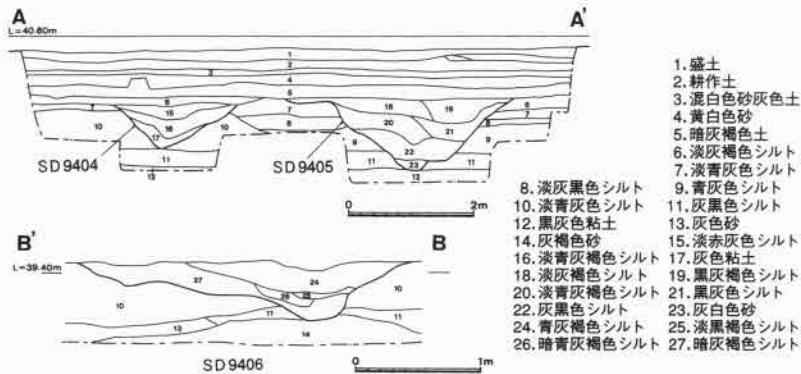
皿形をなす北西方向の溝である。弥生土器の底部片が出土しており、弥生時代後期の溝である。

掘立柱建物跡(第75図)

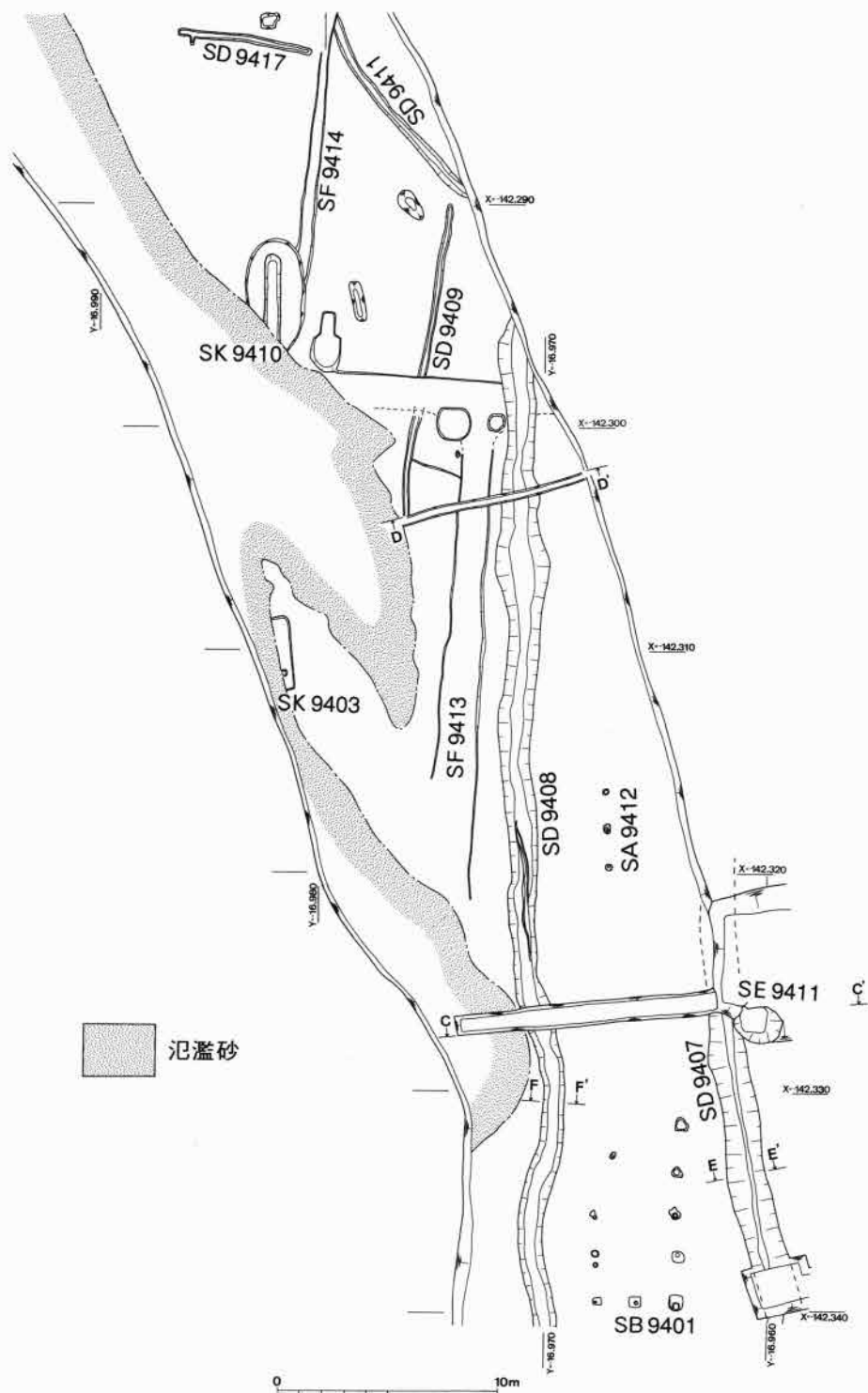
S B 9401 AW地区南部で検出した。桁行2間(3.8m)×梁間4間(8.3m)を測る。主軸は、座標北から東へ1°40'振る。柱穴掘形の平面形は方形をなすが、柱穴底部付近で検出したため、大半の柱穴ピットは不定形の形状をなす。ピット1・5では根石を確認した。ピット1では3~5cmの河床礫を集めて根石とし、



第71図 AE区下層遺構平面図



第72図 S D 9404・9405・9406土層断面図



第73図 AW区下層遺構平面図

ピット5では拳大の方形の石を根石として検出した。また、ピット5では根石の下層から直径15cmの柱根跡を検出した。ピット6の掘形から須恵器杯蓋片を1点検出した。また、井戸SE9416や柵列SA9412は、この建物跡に伴う遺構として考えている。

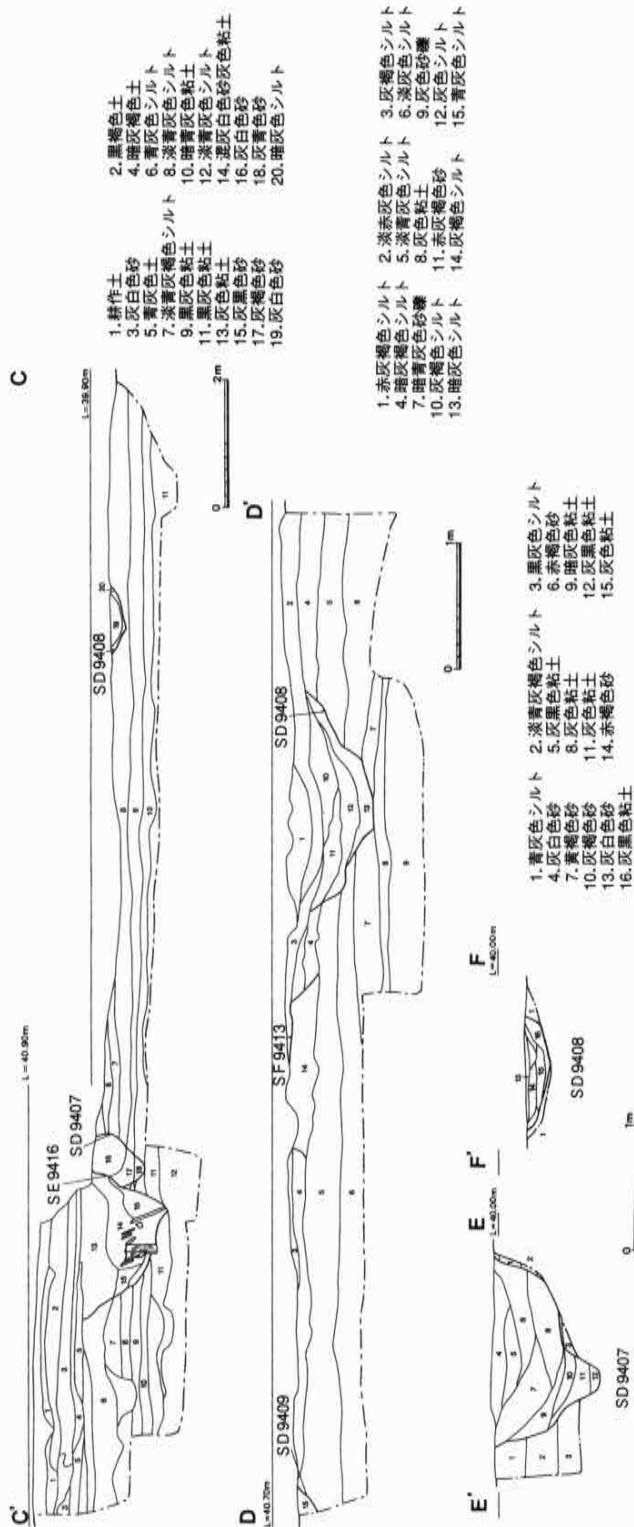
SB9402 AW地区北部で検出した。桁行2間(2.7m)×梁間3間(5.6m)の南北棟の建物跡である。主軸は座標北から東へ2°15'振る。出土遺物はなく、時期は不明である。

柵列

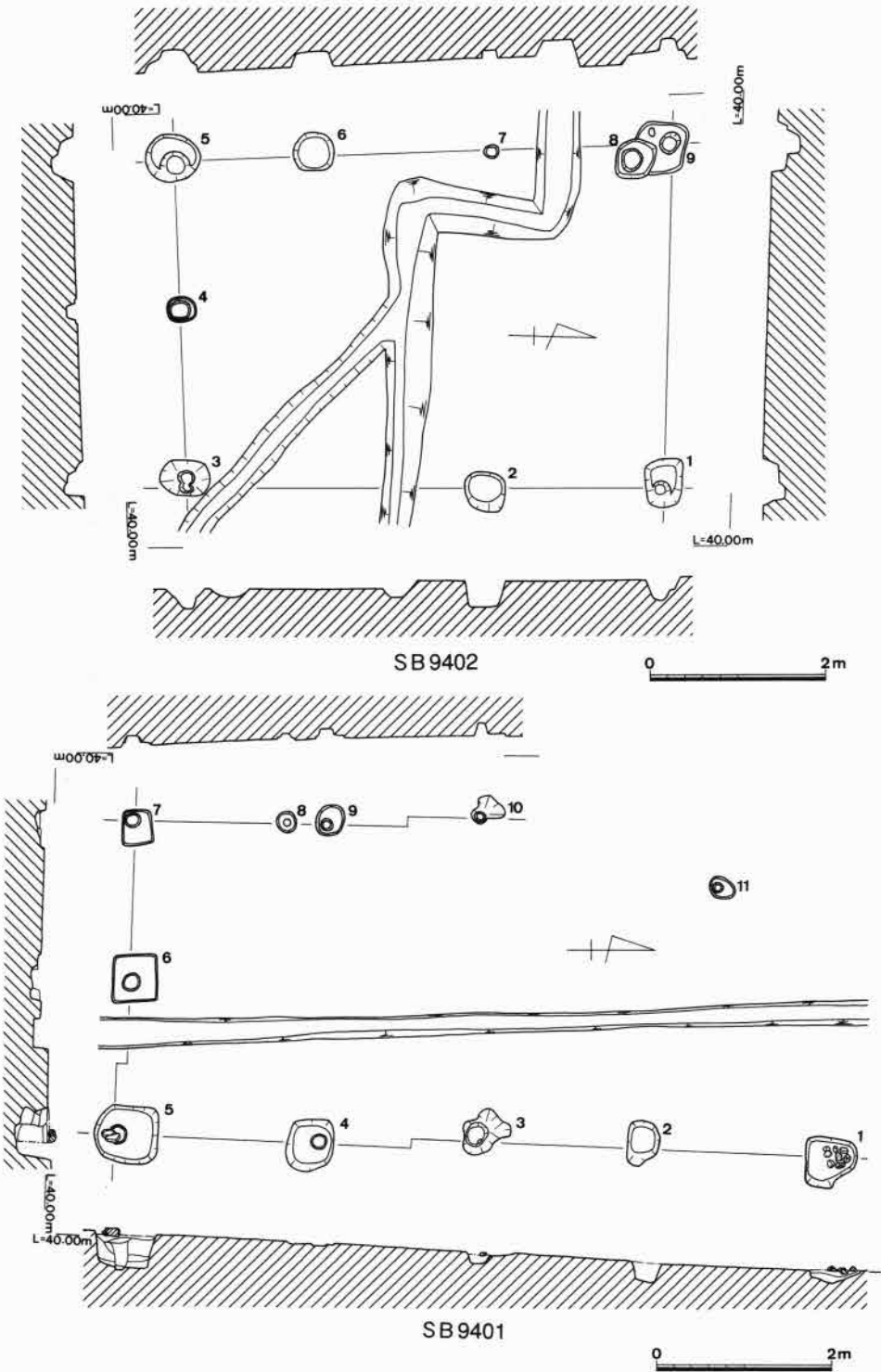
SA9412 南北方向に2間(3.4m)の柱列である。

土坑(第76図)

SK9403 南北3.2m×東西の残存長70cm・深さ8cmを測る。西側が洪水の氾濫によって削平を受けている。北壁部分で須恵器壺体部、中央付近で



第74図 AW区断ち割り土層断面図



第75図 S B 9401・9402実測図

須恵器甕口縁部と杯蓋口縁が出土した。形状は、竪穴式住居跡の一部分を思わせるが、氾濫砂によって削平が著しく、全体の形状は不明である。出土遺物から、奈良時代と判断される。

S K 9410 幅70cm・残存長3.30m・深さ11cmを測る溝状の土坑である。断面は、舟形をなし、埋土は黒褐色土である。内部から須恵器の甕体部片、皿を検出した。南側は、洪水の氾濫によって削平を受けている。出土遺物から、奈良時代と判断される。

S K 9415 幅60cm・長さ1.9m・深さ10cmを測る長方形の土坑である。断面は舟形をなし、青灰色シルト土を埋土として検出した。床面中央東端に直径4cm・深さ10cmの小穴があり、床面で土師皿片が出土した。

土手状遺構

S F 9413 AW区の中央部で東西・南北方向に「T」字状に検出し、幅1.3～1.6m・高さ約10cmを測る。水田の畦畔または道の可能性がある。しかし、周囲の一段下がる面からは、積極的に水田の可能性を示唆する遺構は検出できなかった。遺物はなく、時期は不明である。

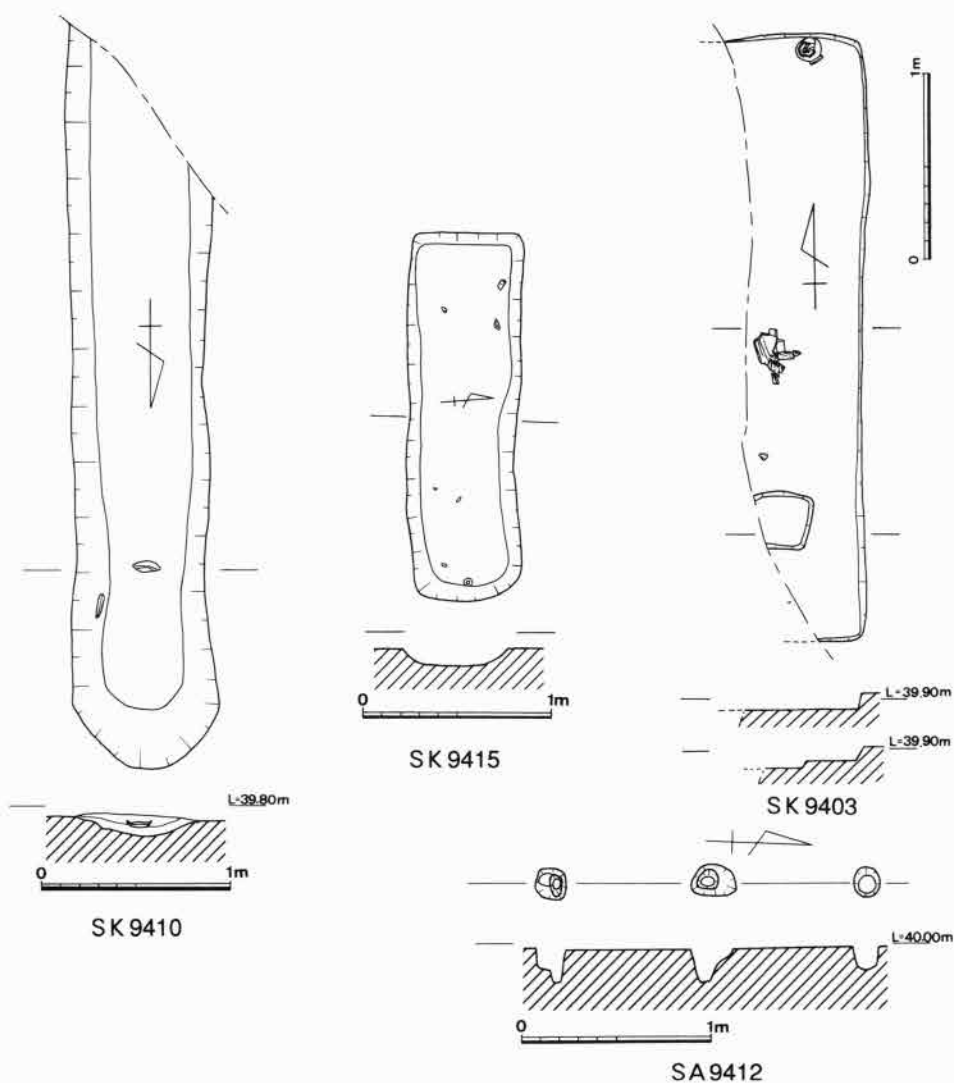
S F 9414 S B 9412の南側で南北方向に検出した。幅約30cm・高さ約5cm・検出長16.2mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。S F 9413・9414ともに遺物がないため、時期は特定できないが、層的には上層の素掘り溝群の下層遺構であり、中世以前の可能性も考えられる。さらに、現在残る条里とほぼ位置が一致する。これらの遺構については、今後周辺での調査が進むことを期待したい。

井戸(第77図)

S E 9416 トレンチの断ち割りによって検出したため、全形は不明であるが、かろうじて残る部分から、掘形は長軸の長さ2.2mを測る。平面は、楕円形をなし、全体は播り鉢状の形状をなす。

井戸本体は、一辺約1mの平面方形で、深さ約1.55mを測る。板材の組み構造は、幅10～30cmの板を縦に並べたものを2重に重ね、一面の側板として四方を囲う。内側には側板を支える横棧が入り、隅柱はなく横棧のみで側板を支える構造である。底面の水溜めは、横棧で囲われた井戸枠の中に3～5cmの河床礫が敷かれていた。井戸内部に遺物はなく、井戸の祭祀を示す痕跡はなかった。

なお、井戸上部中央にある小頭大の石付近から、須恵器甕、長頸壺の破片が出土した。井戸廃絶時に投棄されたものであろう。S E 9416の時期は、平安時代前期で、S A 9412同様、S B 9401に伴うものと考えている。第78・79図は、S E 9416の井戸材である。第78図は横棧である。4を除き、91cm前後の長さを測る。1～4は、井戸上部の横棧である。両



第76図 SK 9410・9415・9403、SA 9412実測図

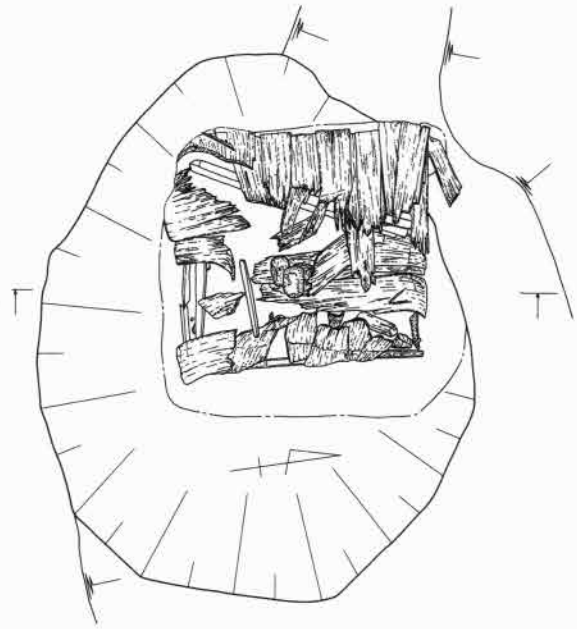
端が雄柄のもの(1)と、雄柄・雌柄を相持つもの(2・3)とがある。4～6は、底部の水溜めの井戸枠である。両端が雄柄のもの(7・8)、両端が雌柄のもの(5・6)とがある。5・6は板状で、7・8は棒状である。

第79図は縦板である。幅14～16cmの4～7・9・10と、幅の8～12cmの1～3・8がある。いずれも底部の角を丸く削る。1には0.8～1.2cmの小穴が穿たれており、転用材としての特徴を残す。厚さは0.8～1.0cmであり、比較的薄い板材を使用している。取り上げの段階で板材が破損したため、残存度の良好な板材のみを資料提示した。

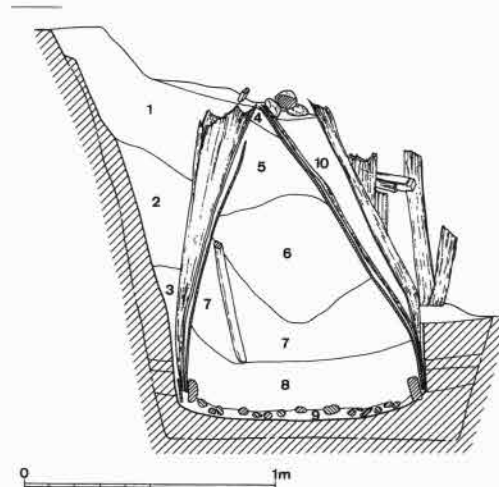
縄文時代包含層

下層遺構を検出した淡青灰色シルト層をベース層とする面に、縄文時代晩期の遺物が包含していた。このうち、A E区北部では縄文時代晩期の突帯文土器片、石器片を確認した。そのため、縄文時代の遺構の検出を目的として、A E区S D9405の東側で下層を調べた。その結果、包含層は、淡青灰色シルト層に黒色の有機物が混じった灰褐色シルト層で、厚さは平均約20cmを測る。この包含層中では、少量の遺物を除き、遺構などは検出できなかった。出土した遺物も、かなり磨滅しているものがあり、周辺からの流入と思われる、縄文時代の遺構が削平を受けていると考えられる。S D9405の東で南北にベルト状に氾濫砂によって切り込まれ、この中から弥生時代前期の壺の頸部片が出土した。

さらに、この東側にサブトレンチを設定し、さらに下層の遺構の有無を確認した。サブトレンチは、下層遺構検出面か約2m、砂礫層まで掘り下げた。ここではシルト層が続き、下層では約30cmの厚さで有機物が分解した黒灰色シルト層が互層になって堆積していた。黒灰色シルト層には流木が混じっていたが、土器などの遺物は調査か所では認められなかった。また、サブ



L=40.00m

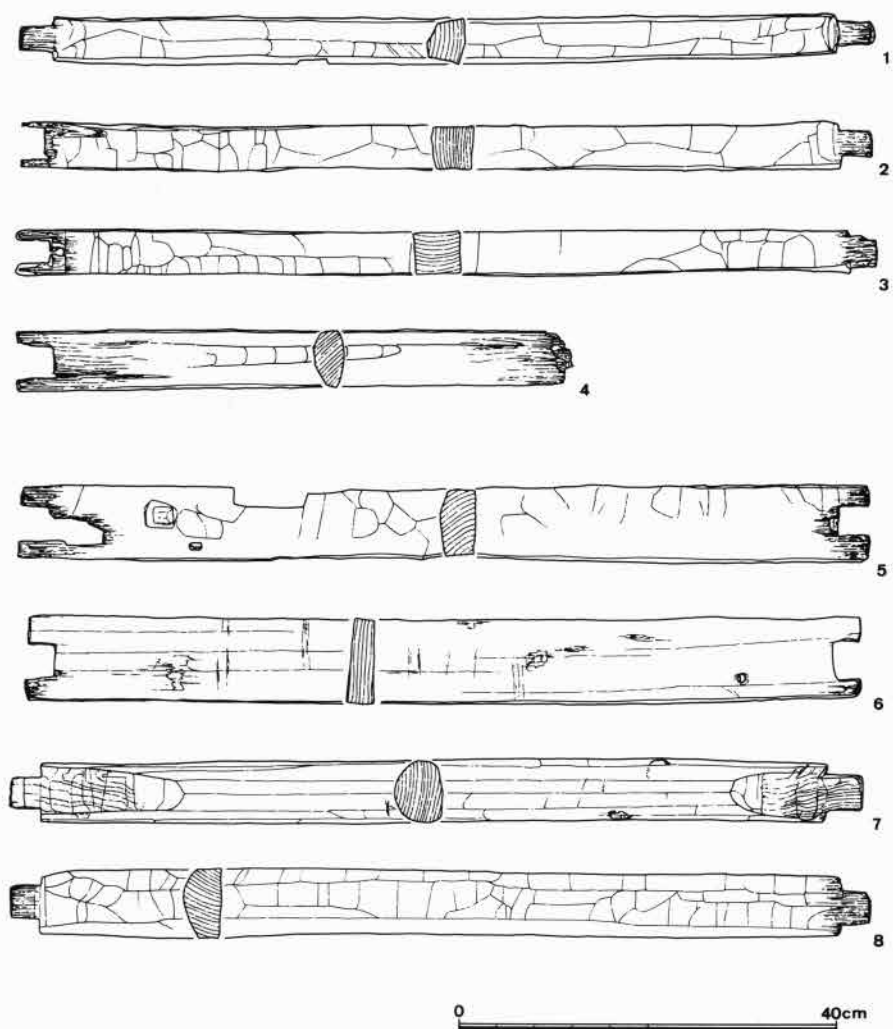


第77図 SE 9416平面及び断面図

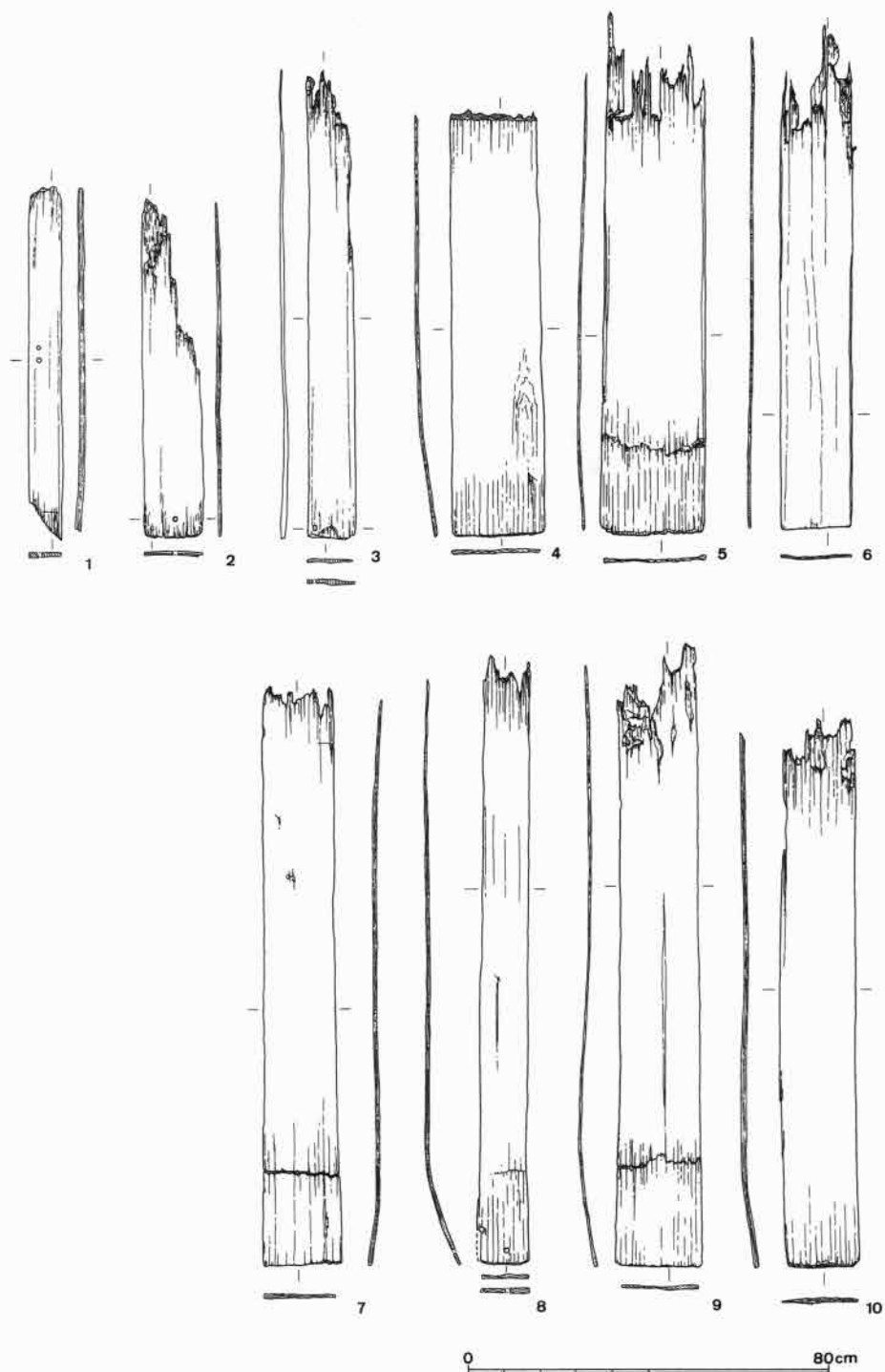
1. 混灰色土青灰色シルト 2. 混黒色土青灰色シルト
3. 黒色粘土 4~10. 灰色シルト

トレンチの東と西で土層の不連続が確認できた。地震の痕跡を示す断層かもしれない。

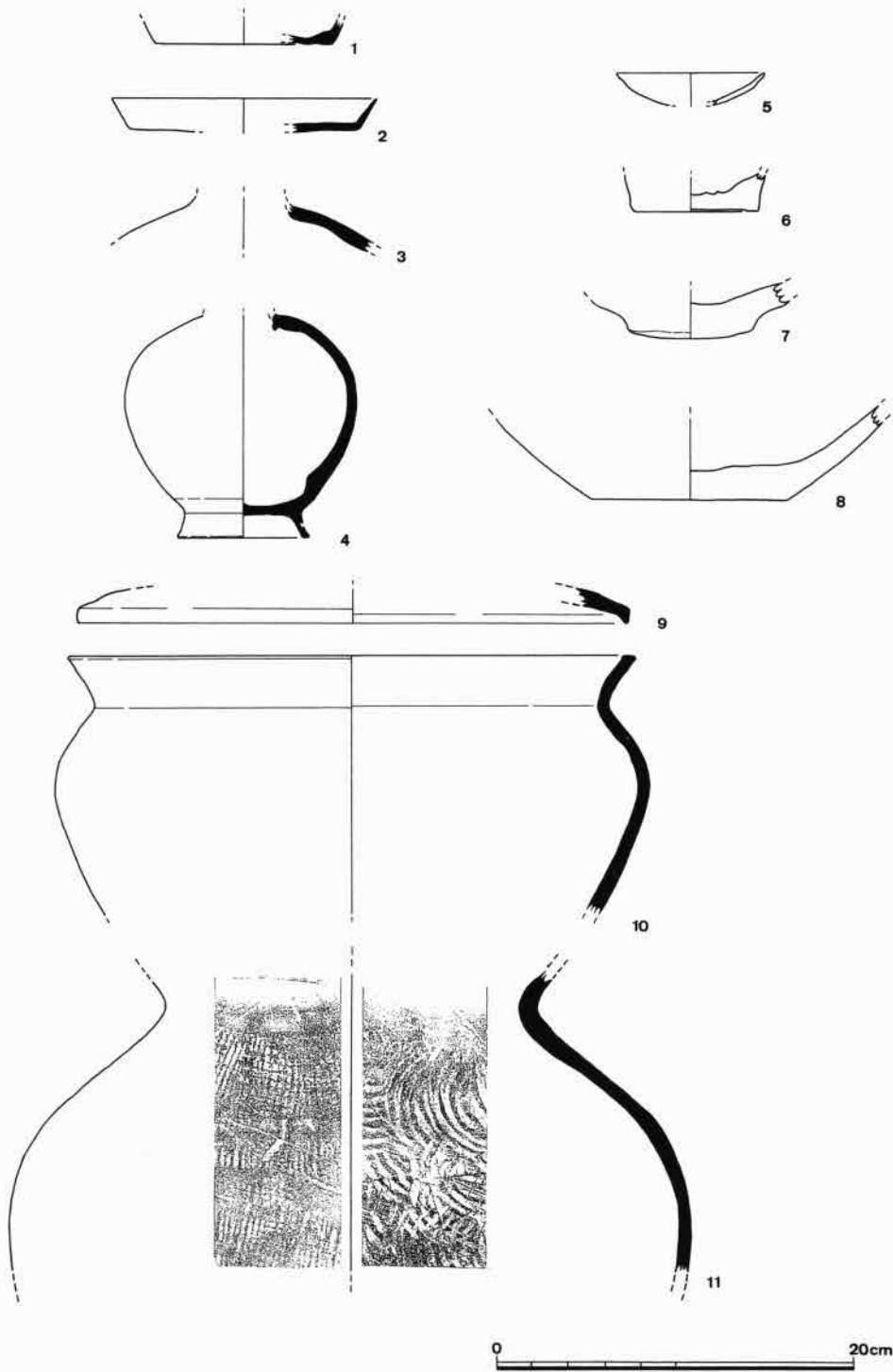
第80図は、AW区の下層遺構で出土した遺物である。1は、SB9401のピット6の須恵器である。2は、SK9410出土の須恵器の皿である。3・11は、SE9416上部の集石付近で出土した須恵器であり、3は長頸壺の体部である。4・9・10は、SK9410で出土した須恵器である。5は、SK9415で出土した土師器皿である。淡赤褐色を呈し、口縁部内面に油煙が付着している。6～8は、弥生土器である。6は、SD9411で出土した。7は、SD9404で出土した。8は、SD9405の上層の埋土である黒褐色土層から出土した。6～8のいずれもが壺または甕の底部で、チョコレート色を呈し胎土に角閃石を含む。大阪府



第78図 SE9416出土木器実測図(1)
1～4. 上部井戸枠 5～8. 底部井戸枠

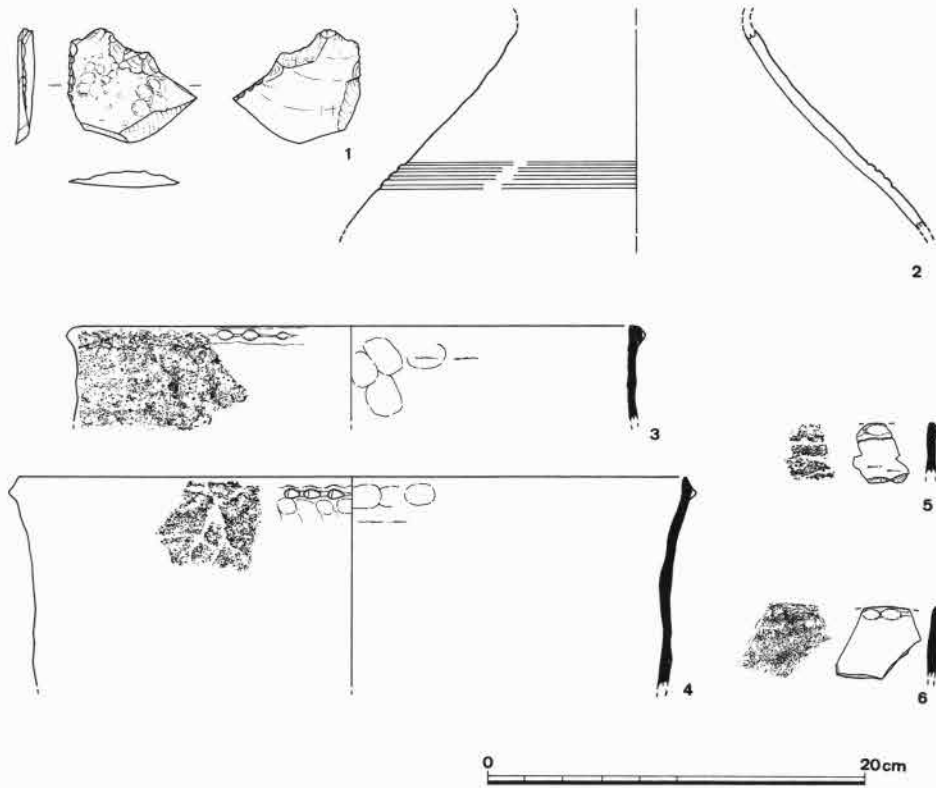


第79図 S E9416出土木器実測図(2)



第80図 出土土器実測図(1)

1~4・9~11. 須恵器 5. 土師皿 6~8. 弥生土器



第81図 出土土器実測図(2)

1. 石器 2. 弥生土器 3~6. 縄文土器

の生駒山西麓周辺の土器である。

第81図は、A E区の縄文包含層で出土した遺物である。1は、楔形石器である。暗灰色を呈する、いわゆるサヌカイトである。2は、包含層を切り込むベルト状の砂層から出土した。砂層中の遺物はこれ一点のみである。淡黄褐色を呈する弥生前期I様式新段階の壺頸部である。3~7は、縄文土器である。色調はいずれもが暗茶褐色を呈する。直口する甕で体部に施文はなく、口縁端部外面に貼り付けた突帯を持つ。晩期船橋式の土器である。

5. ま と め

以下、今回の調査で判明した結果を簡単に記しておく。

中世~近世 素掘り溝群として水田の跡を検出した。

平安時代 前期の井戸を伴う掘立柱建物跡1棟、柵列を検出した。

奈良時代 土坑を2か所検出した。

弥生時代 後期の溝を2条検出した。自然流路であるが、遺物が混入することから、周囲に集落があったものと推定される。

縄文時代 遺構は検出できなかったが、縄文晩期の遺構の存在を暗示するものであった。今後、調査地周辺で検出されることを期待したい。

ほかに、下層で掘立柱建物跡1棟、土手状遺構、溝などを検出したが、時期決定の決め手となる遺物がなく、時代はわからなかった。しかし、土手状遺構については、条里と位置関係が一致しており、条里制の制定時期をめぐる問題に関わってくる。その点については、今後の調査で特に留意する必要があるだろう。

(橋本 稔)

注1 主な調査参加者(敬称略)

五百磐 明・五百磐和代・石井伸卓・石橋明子・井ノ口雄三・木本昌英・日下隆春・工藤伸治・小西佐和子・田島 肇・中城祐二・中野行真・西根正弘・藤沢地恵・堀 優子・辻 道子・中村久登・林 恵子・芳谷興子

(付記)

石器の材質については、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏にご教示を得た。また、石器自体については、当調査研究センターの黒坪一樹調査員に、中・近世の遺物については、伊野近富調査第1係長・森島康雄調査員に教示を得た。なお、縄文土器については、奈良大学教授泉 拓良氏に実見していただいた。ここに記して感謝したい。

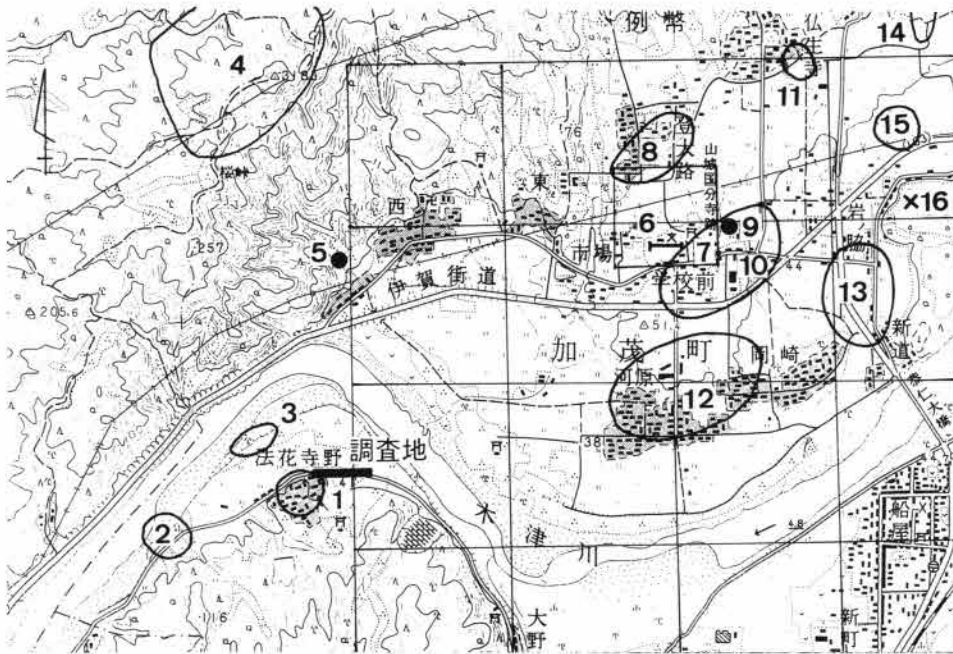
8. 甕原離宮推定地発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、府道加茂木津線改良工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。調査対象地域である相楽郡加茂町法花寺野地区周辺は、奈良時代に造営された甕原離宮の推定地であるとともに、国分尼寺が営まれた場所として比定されている。甕原離宮推定地は、法花寺野の集落が営まれている丘陵部から、水田の広がる木津川南岸の氾濫原に広がる。しかし、この地区ではこれまで発掘調査例が少なく、必ずしも遺跡の様相は明らかでない(第82・83図・図版第53(1))。

この地区でこれまでに行われた2回の調査の概略は、以下のようである。

第1次調査は、1927年に集落の西方約150m付近で行われ、奈良時代の瓦とともに土壁



第82図 調査地位置図(1/25,000)

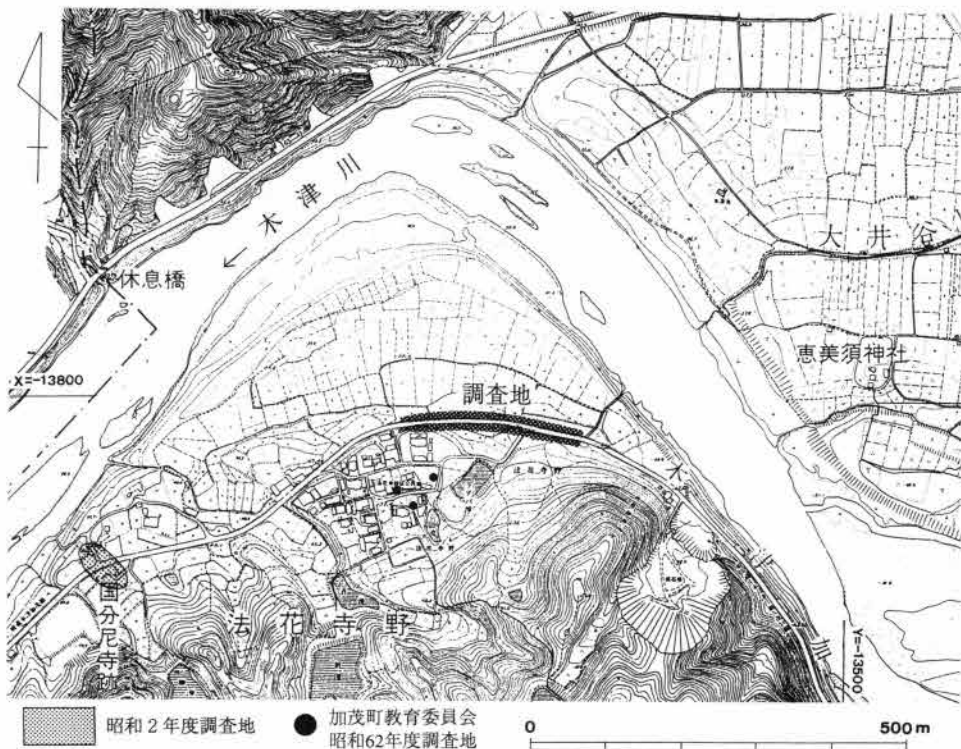
- | | | | | |
|------------|-----------|----------|----------|----------|
| 1. 甕原離宮推定地 | 2. 法華寺野遺跡 | 3. 久保遺跡 | 4. 鷹城跡 | 5. 椎ノ森古墳 |
| 6. 恭仁京跡 | 7. 山城国分寺 | 8. 小ノ林遺跡 | 9. 考古墳 | 10. 例幣遺跡 |
| 11. 石ヶ辻遺跡 | 12. 樋用遺跡 | 13. 岡崎遺跡 | 14. 狭間遺跡 | 15. 平田遺跡 |
| 16. 流岡山遺跡 | | | | |

様遺構の検出報告がなされ、^(注1) 宮殿あるいは寺院の周壁として推定されている。この成果をもとに、この付近を国分尼寺跡に推定し、石碑が立てられた。たまたま今回の調査直前に、1927年の調査地付近でロストル式瓦窯と判断できる遺構が露出しており、土壁様遺構は、同様の瓦窯跡と推定できよう。また、その折に付近で採集した瓦も今回一部併載しておく。

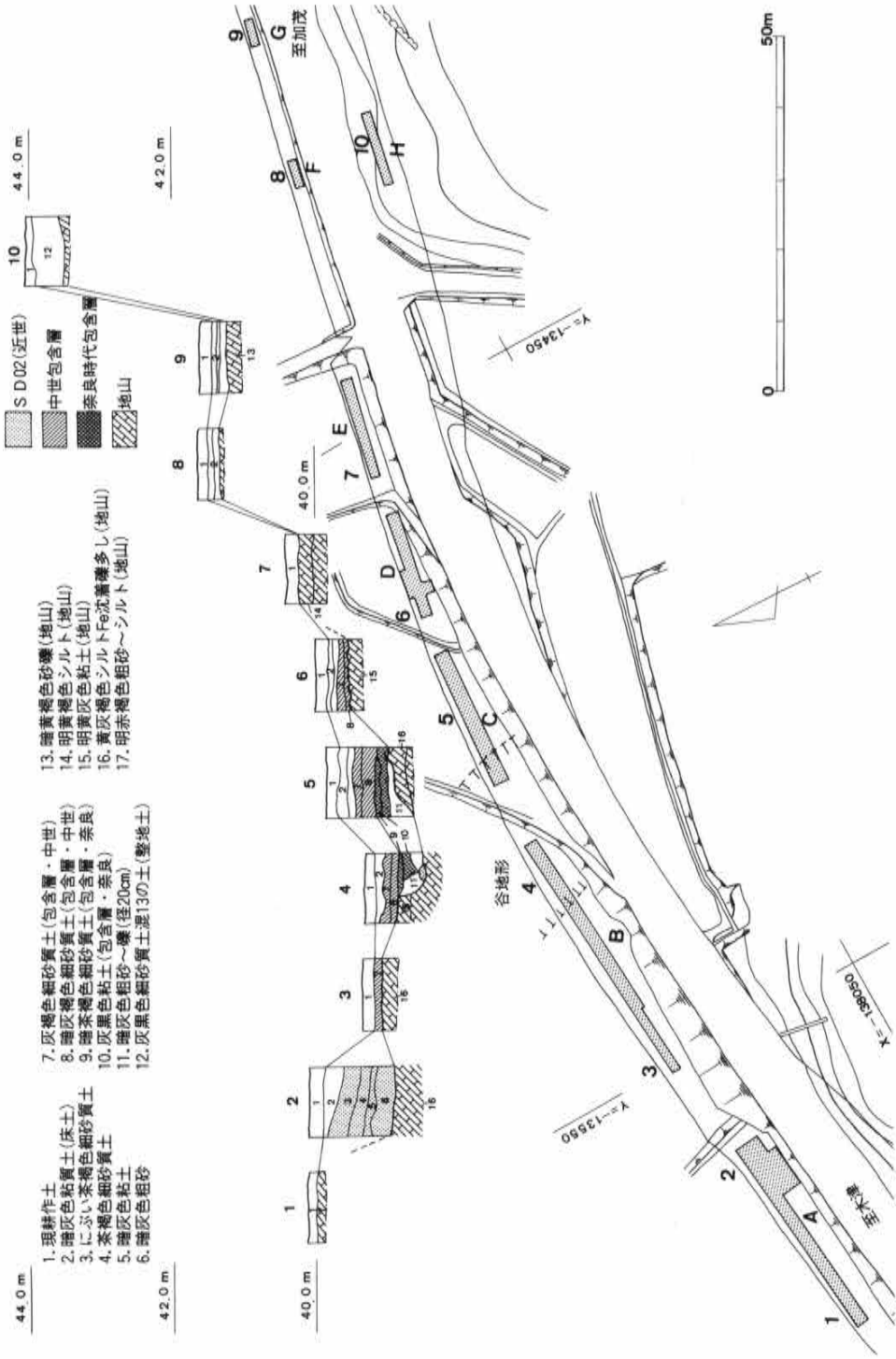
第2次調査は、加茂町教育委員会によって、この地区の遺跡の内容を明らかにすることを目的に、昭和62年2月に集落内で実施している。成果としては、江戸時代以降の土壌などの遺構、サヌカイト石核、奈良時代の須恵器、瓦、中・近世土器類が^(注2) 出土している。

今回の調査対象地は、相楽郡加茂町法花寺野の集落の東側にあたり、現府道の南北両側に細長く、全長約200m・最大幅(現道含む)約16mの範囲内に計8か所の大小のトレンチを配置した。調査面積は約250㎡、調査期間は平成6年11月1日～同年12月15日である。調査は、調査第2課調査第3係長辻本和美、同調査員有井広幸が担当し、本概要は有井広幸が作成した。調査の実施、及び概報の作成にあたっては、京都府木津土木事務所、京都府教育委員会文化財保護課、加茂町教育委員会ほか、諸機関の各関係者をはじめ、地域の方々、整理員・調査補助員の皆さんに御協力をいただいた。記して感謝する。^(注3)

なお、本調査に係る経費は、全額京都府が負担した。



第83図 調査地周辺図(1/10,000)



第84図 トレンチ配置図及び土層柱状図

2. 調査概要(第84図)

調査地付近は、伊賀方向から西流してきた木津川が、加茂の盆地を抜けて、木津の盆地に流れ出る直前の峡谷部分である。この辺りの木津川の北岸は、切り立った崖で交通の障害となっており、以前は北岸と南岸を結ぶ渡しが行われていたという。国道163号線が崖裾に貼り付くように設けられている。南岸側は法花寺野の集落が丘陵上に乗る(標高50m前後)、その北側に木津川によって形成された若干の平地(標高40m前後)が広がっている。ただし、この地区の東西端ともすぐに崖地形になっており、特に東側の崖は、木津川の攻撃面となって幾多の水害の原因の一つになっている。この崖面を含めた集落の背後の山は花崗岩の岩山で、古くは、大坂城の築城の際の採石場として知られており、今もまた砂利採石場が営まれている。調査地付近の土地利用は、丘陵斜面部及び自然堤防上は茶畑が多く、開析谷内や平地部分は水田耕作が行われている。

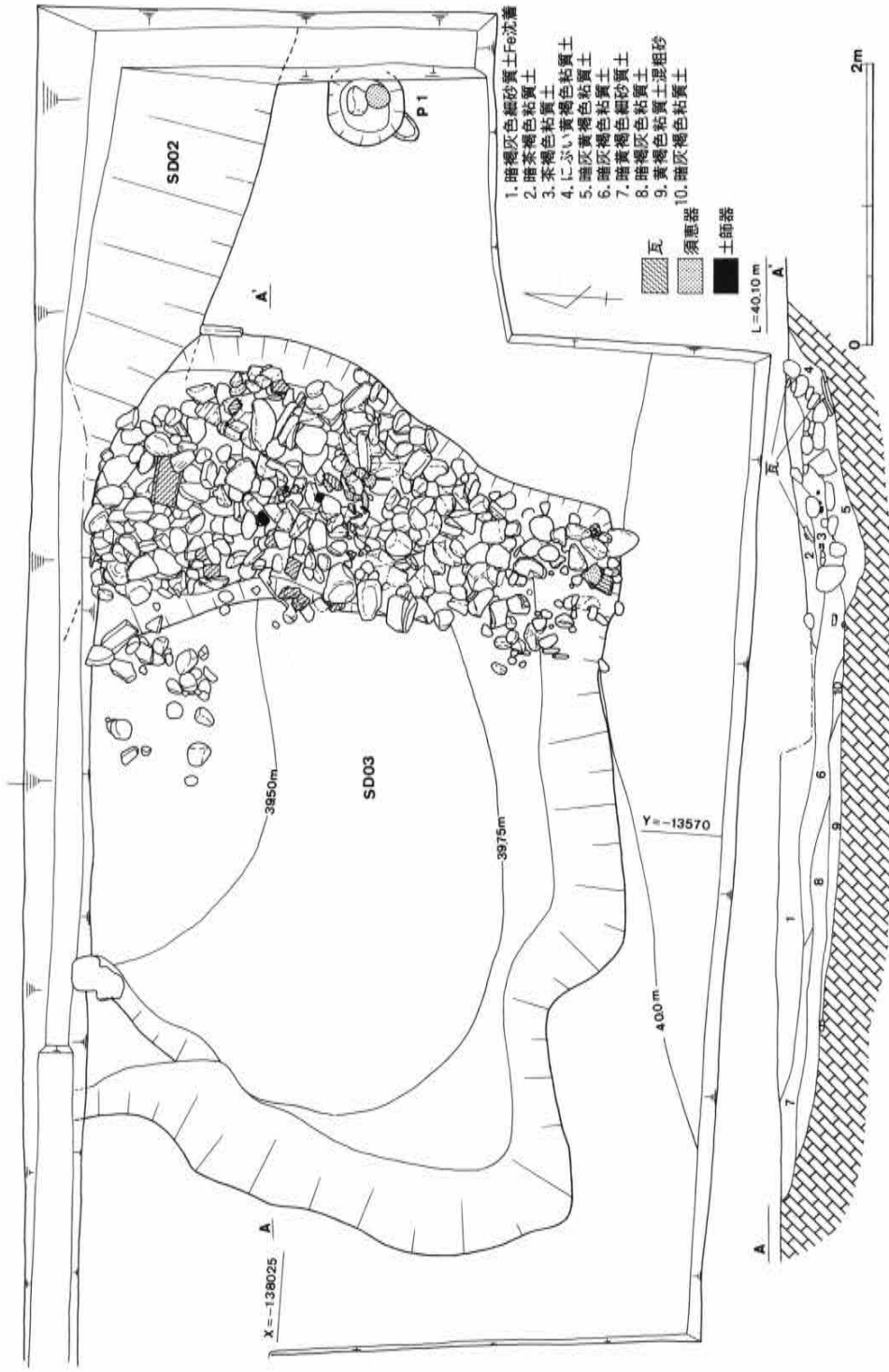
調査対象地は、集落東側の溜池から続く開析谷を東西にまたぐ形になった。谷を挟んだ東西兩岸の丘陵端部付近は、旧地形の削平が著しく、若干の瓦片などを採取したほか、遺構は検出できなかった。開析谷付近に設定したトレンチでは、奈良～中世の遺物包含層のほか、ピット・溝などの遺構を検出した。また、出土遺物は、奈良時代の瓦片が最も多く、須恵器(杯蓋・杯身・甕)、土師器(甕・杯)、瓦器碗、青磁碗、サヌカイト剥片などが出土した。以下、配置した8か所のトレンチを、西から順にA～Hとして状況を報告する。

Aトレンチ(調査面積80㎡) 今回の調査では西端に位置し、集落の乗る丘陵の北東裾付近にあたり、標高約40mの水田に配置した。トレンチ西半分は、水田造成によると思われる削平を受け、耕作土直下で明赤褐色粗砂～シルトの地山になり、東半分で茶褐色系の包含層と遺構(SD01～03、P04)を確認した。遺物の出土量もこのトレンチが最も多く、その大部分がSD03から出土している(第85図・図版第53(2))。

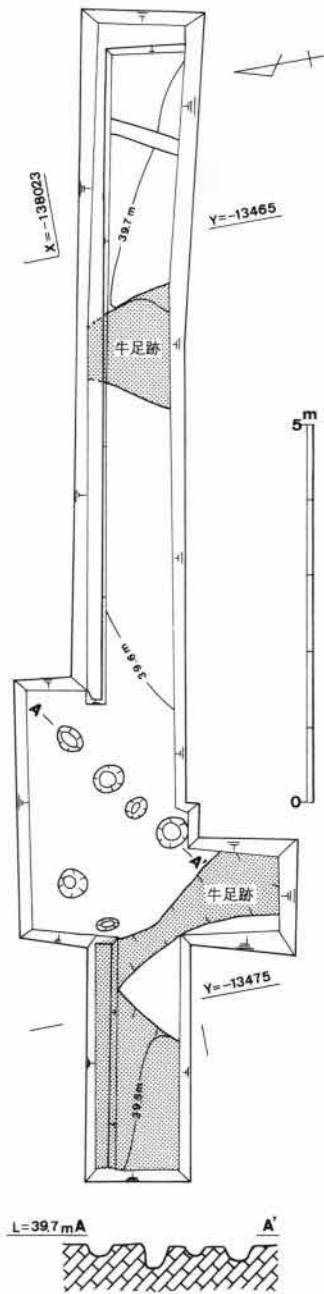
SD01は、トレンチ西端より東へ約9m付近で検出した南北方向の浅い溝で、北端は調査地外に続く。規模は、検出長約1m・幅約1.6m・深さ約0.2mで、埋土は褐灰色粘質土である。遺物は出土せず、時期は不明である。

SD02は、トレンチ北東端で検出した東西方向にのびる遺構である。遺構の南端がトレンチ内にかかった程度のため、規模は深さが約1m以外不明である。埋土は、上層が茶褐色系細砂質土、下層が暗灰色粘土及び粗砂である。埋土の状況から水が流れていた溝が埋まり、水田を拡張した折に埋まったと判断している。出土遺物は、SD03を切っているためその関連物が多いが、粗砂層より磁器片が出土しているので、時期は近世以降であろう。

SD03は、トレンチ東端で検出した溝状遺構である。南から北方向に底部が下がる。北端はSD02に切られ、南端は水田耕作などにより削平を受けているので、本来の規模は不



第85図 AトレンチSD03実測図(1/50)



第86図 Dトレンチ
実測図(1/100)

明である。検出規模は、長さ約4m・幅約6.2m・深さ約0.5m。断面形は、西から東に向かってゆるやかに深くなる弓弧状を呈し、東側面に丸(文字瓦を含む)・平瓦、須恵器・杯蓋・甕、土師器・甕などの遺物が、拳大より大ぶりの河原石の集石と出土している。埋土は茶褐色系粘質土で、滞水していた可能性がある。集石は、最下層に石を敷き詰めた上に遺物と石が転落した状況が観察できる。集石は、さらに南北に続いていたと考える。

P4は、SD03の東約1.6mで検出した一辺約0.5m・深さ約0.3mで、平面隅丸方形のピットである。上面で直径0.2mの柱痕跡と、根固め用と考えている自然石を検出した。遺物は、少量の炭片が出土した。埋土の状況から、SD03と同時期の可能性はある。

Bトレンチ(調査面積70㎡) Aトレンチより東側の一段下がった標高39.4mの水田に設定した。床土の下層に、西から東にゆるやかに厚くなる灰褐色細砂質土の、奈良時代から中世にかけての遺物包含層が全体に広がる。出土遺物は、布目瓦片、須恵器杯類・甕片、土師器杯類・甕片、瓦器碗底部片、青磁碗片などで小片のものがほとんどである。この層の下の地山面から鋤溝と考えているまばらな小溝群を検出した。また、トレンチ東端より西へ9mの付近まで礫を含んだ暗灰色粗砂の堆積があり、同様の堆積がCトレンチの中央付近まで検出幅で約25m・深さ約1mの規模で続いている。開析谷の流水の影響によって堆積したと考えているこの層から、サヌカイト片が出土している。

Cトレンチ(調査面積40㎡) 今回の調査域の中央に位置し、開析谷から東側の丘陵に向かって再び上がりはじめる、標高39.8mの水田に配置した。今回の調査で最も厚い包含層を検出した。灰褐色系細砂質土は、中世の遺物を含み、B・C・Dトレンチ一帯に広く分

布しており、この層の下からは、耕作関連の小溝群を多数確認している。さらに、トレンチ西半分では、この層と前述の粗砂層の間に暗茶褐色土及び灰黒色土があり、奈良時代の遺物が含まれている。このことから、この開析谷は奈良時代から埋まりはじめ、中世段階では、水田耕作が行われていたと考えている(図版第54)。

D トレンチ(調査面積25m²) 開析谷と丘陵間の、標高40.1mの比較的安定した位置にある水田に配置した。包含層は、東に行くほど薄くなり、東端では耕作土直下で地山となる。地山面は、粗砂の部分と明黄灰色粘土の部分交互にあり、粘土部分では牛と思われる偶蹄目の足跡が多数見つかった。耕作に関連するもので、地山の違いの影響であろう。また、トレンチ中央付近で大小6個のピットを検出した。埋土は包含層と同じで、建物になるかどうかは、トレンチの面積の関係上確定できなかった。遺物は包含層から、布目瓦片、須恵器杯類、土師器片、瓦器碗の底部片などが出土した(第86図・図版第55(1))。

E トレンチ(調査面積15m²) 開析谷の東側丘陵の斜面中腹にあたる位置にある、標高約40.5mの水田に配置したトレンチである。このトレンチ全域で、耕作土直下で明黄褐色シルトの地山となり、旧地形の削平が著しい。遺物は、耕作土から土師器片が出土している。

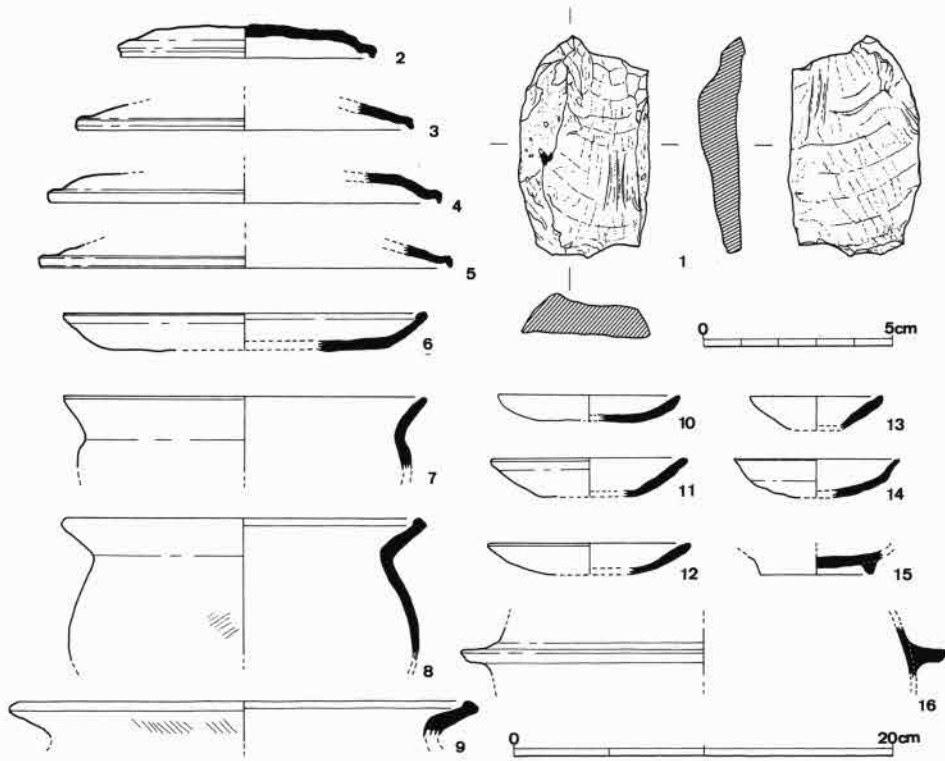
F・G トレンチ(各調査面積4m²) この2つのトレンチは、今回の調査では東端に位置し、開析谷東側丘陵の尾根筋先端の標高約41.5mの水田に配置した。耕作土・床土直下で暗黄褐色砂礫の地山となり、遺構及び遺物包含層は検出できなかった。遺物は、耕作土から布目瓦片などが若干出土している。

H トレンチ(調査面積12m²) このトレンチは、道路を挟んでF・Gトレンチの南側の、標高約44mの茶畑に配置した。この茶畑は、標高70m付近まで北向き斜面一面に広がっている。堆積状況は、表土下約0.5mまで茶畑に関連すると思われる造成土があり、抜根に伴う窪みを地山面で多数検出したが、遺物包含層及び遺構は確認できなかった。遺物は、布目瓦、陶器片などが若干出土した(図版第55(2))。

3. 出土遺物(第87・88図・図版第56～58)

1は、Bトレンチ粗砂層で出土したサヌカイト剥片である。自然面が2か所に残り、母岩の表面に近い部分の剥片であろう。打点部は砕けたためか残りは悪い。剥片は途中で折れ、細部加工の痕跡は見当たらない。自然面以外の部分は黒灰色を呈し、質は比較的緻密で風化は進んでいない。2は、須恵器杯蓋である。つまみの部分を欠くほかは、完形に接合できた。色調は暗青灰色、焼成は良好、胎土は緻密である。AトレンチSD03出土。

3～5は、須恵器蓋の口縁部の破片である。いずれも色調は淡青灰色、焼成は良好、胎土は密、小片の実測である。3・5はD、4はBトレンチ包含層出土。6は、土師器皿で

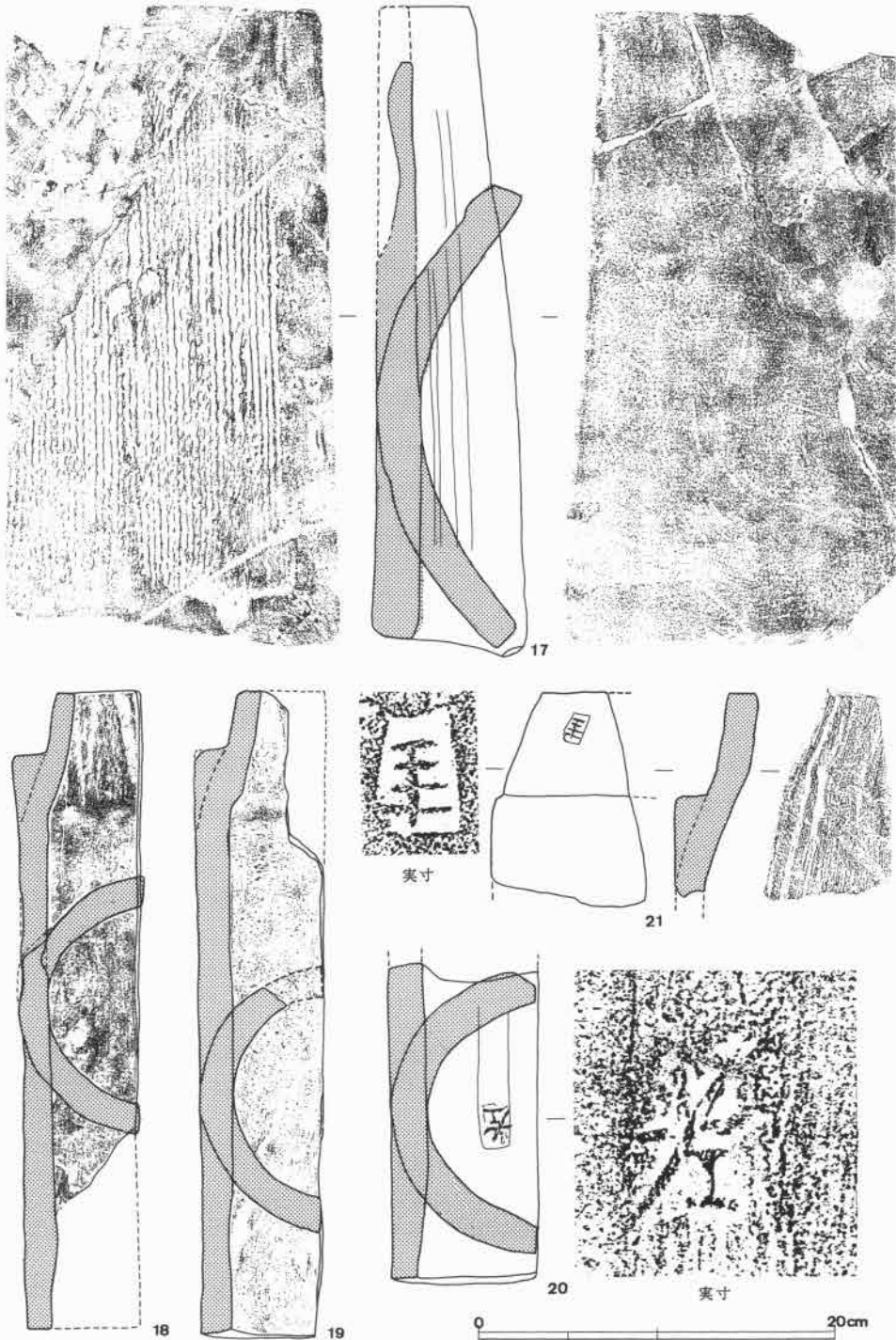


第87図 出土遺物実測図(1)

1. サマカイト剝片 2~5. 須恵器 6~16. 土師器
 A : 2・7~12 B : 1・4 C : 6・14・16 D : 3・5・13・15

ある。色調は淡赤橙色、胎土は密、焼成は良好。Cトレンチ黒灰色粘土層出土。7~9は、Aトレンチ出土の土師器甕である。8は、SD03出土。いずれも残りは悪い。10~14は、土師器小皿である。10~12はA、13はD、14はCトレンチ出土。10・11はSD02出土。15は、土師器・杯B底部と考えている。高台を貼り付ける。色調は淡黄褐色、焼成はやや軟質、胎土に少量の砂粒を含む。Dトレンチ包含層出土。16は、羽釜鏝付近の破片である。色調は淡茶褐色で、一部に煤の付着がある。胎土は密。Cトレンチ灰褐色土から出土。

17~20は、AトレンチSD03出土。17は、平瓦で全体の大きさが推定できる唯一の例である。全長36.9cm・幅26cm・狭端部推定幅約25cm・広端部推定幅27cm・厚さ2.5cm前後、胎土中に1~7mm程度の砂粒が散見し、焼成はやや軟質で、黄色身を帯びた灰黒色を呈する。凹面はやや磨耗しているが、布目痕がほぼ一面に残り、広端部より内側へ6cm前後に布の縫い合わせが観察できる。この縫い合わせ部分は、側面に残る布の縁のかがり痕に繋がっている。また、模骨状の成形台の痕跡が浅く残る。凸面は、全体に縄目痕が長く整然と平行に残る。しかし、広狭両端付近と片方の側面付近は叩いていない。叩き板の幅は



第88図 出土遺物実測図(2)

17~20. S D03出土 21. 法華寺野遺跡付近表採

6.5cm、製作方法は粘土板1枚造りであろう。18・19は、丸瓦の完形に復原できた例である。18は、全長36.1cm・同幅14.5cm、玉縁長3.3cm・同幅11.5cm。19は、全長36.8cm・同幅14.5cm、玉縁長3.2cmである。ともに灰黄色、軟質で表面の細かい調整は不明である。胎土も17と同様である。S D03から出土したこのほかの瓦は、丸・平ともに軟質と須恵質の物が出土している。20は、丸瓦の布目痕のある凹面左下付近に押印した状況が観察できる文字瓦である。全長は不明、筒部幅は16.1cmである。須恵質に堅く焼けて青灰色を呈する。凹面は、縦方向のナデ調整がまばらに見え、筒部端面付近に横方向のヘラケズリ、また両側面の端部を縦方向に面取りする。凸面は、タタキの痕跡を残さない。文字は、「老」と読み、印長9.5cm以上・同幅約2cm、すでに恭仁宮跡で出土して分類報告されている、K J 18に該当する^(注4)。21は、先述した法華寺野遺跡で表採した丸瓦の例である。玉縁の凸面左寄りに字としては読めない記号が押印してある。玉縁長6cm。焼成は、良好で硬質に焼けており、色調は暗灰色、胎土は若干の砂粒を含む。凹面には布目痕が残り、玉縁部分には絞目が見える。この他に、平瓦片・丸瓦片合わせて整理用コンテナ1個分を採集した。

4. ま と め

今回の調査においても、甕原離宮、国分尼寺に直接つながる遺構・遺物は検出できなかった。しかし、法花寺野地区の東側の平地部分にも奈良時代後期や、中世の遺構が包含層を含めて、遺跡が広がっていることが確認できたことは大きな成果であろう。特に、文字瓦の出土は、恭仁宮との関係を含め、甕原離宮につながる可能性を示す注目すべき例と考える。また、西側の国分尼寺推定地付近の窯跡と考えられる遺構の保存とともに、再度の調査が実施されることを望むとともに、今後の調査によってこの地区の遺跡の内容がさらに明らかにされることを期待したい。

(有井広幸)

注1 佐藤虎雄「法華寺野の遺蹟」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第11冊 京都府) 1930

注2 波多野徹「甕原離宮推定地発掘調査概要」(『加茂町文化財調査報告』4 加茂町教育委員会) 1986

注3 調査参加者(五十音順・敬称略)

大島紀子・木下町子・木本昌英・田島 肇・筒井由香・中村久登

注4 中谷雅治・安藤信策・上原真人他『恭仁宮跡発掘調査報告 瓦編』京都府教育委員会 1984
有井広幸「甕原離宮推定地」(『京都府埋蔵文化財情報』第55号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

今回の例と、恭仁宮跡出土例の拓本を京都府教育委員会の御協力により、直接比べる機会をいただいた。

付記 今回の調査は、当初法華寺野遺跡として行っていたが、諸機関と調整の上、遺跡名を甕原離宮推定地として報告させていただいた。

9. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、蛇吉川小規模河川改修事業に伴うもので、京都府木津土木事務所の依頼を受けて行った。平成5年度に今回の調査地の南に隣接する場所で河川改修事業が行われたが、その際の立会調査で恭仁京関連と見られる奈良時代の遺物が出土したために、今年度は河川改修事業に先立って発掘調査を行うことになったものである。当初は、恭仁京跡として調査に着手したが、恭仁京関連の遺構は検出されず、下層から縄文時代などの遺物が出土した。このため、加茂町教育委員会、京都府教育委員会と協議の上、遺跡名を金ヶ辻遺跡とした。調査期間は平成6年8月22日から9月29日まで、調査面積は約80m²である。

なお、調査に要した費用は全額京都府が負担した。

2. 調査概要

調査地は、恭仁京北東部に隣接する緩傾斜地で、調査地の北西に位置する仏生寺の集落付近から南東方向に向かって広がる扇状地上に立地している。調査地は、棚田状の3つの平坦面にまたがっており、下段の水田に1・2トレンチ、中段の荒地に3トレンチ、上段の荒地に4トレンチを設定して調査を行った。各段の標高は、それぞれ59.3m、60.4m、61.9mを測る。各トレンチの概要は以下のとおりである。

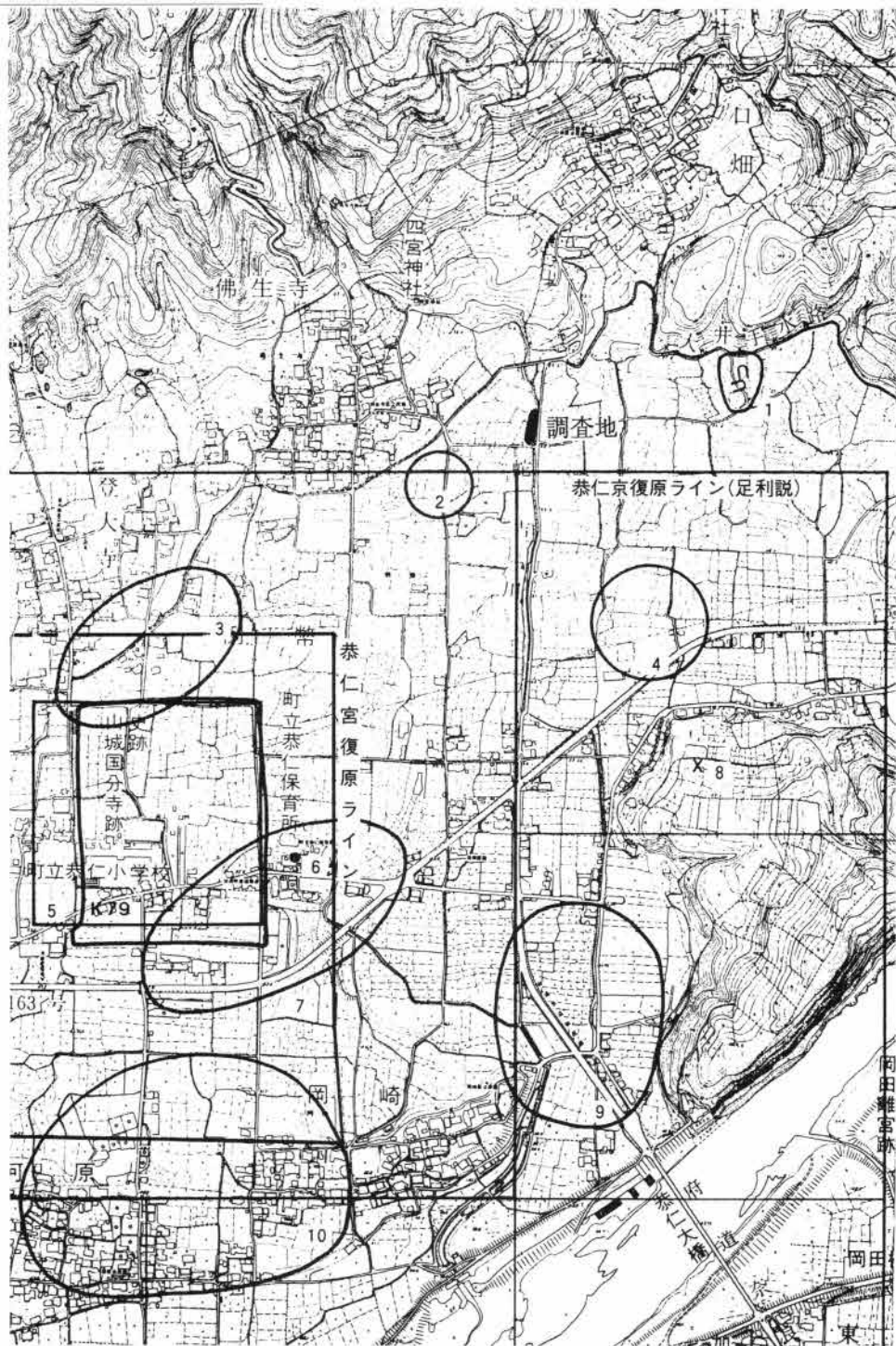
1 トレンチ 現地表下約0.9mまでは水平堆積層で、層中からは奈良時代の遺物がごく少量出土した。以下は、北西から南東に下がる斜めの堆積が見られ、その中に無遺物の砂礫層をはさんで弥生時代前期と縄文時代晩期の遺物包含層を確認した。遺構は、検出されなかった。

2 トレンチ 堆積状況は1トレンチと同様であるが、現地表下1m付近以下は湧水が多い砂礫層が堆積していた。遺物包含層ならびに遺構は認められなかった。

3 トレンチ 現地表下0.6m付近までコン



第89図 調査地位置図(1) 1/25,000



第90図 調査地位置図(2) 1/10,000

- | | | | | |
|---------|----------|----------|---------|-----------|
| 1. 狭間窯跡 | 2. 石ヶ辻遺跡 | 3. 小ノ林遺跡 | 4. 平田遺跡 | 5. 山城国分寺跡 |
| 6. 考古墳 | 7. 例幣遺跡 | 8. 流岡山遺跡 | 9. 岡崎遺跡 | 10. 桶用遺跡 |

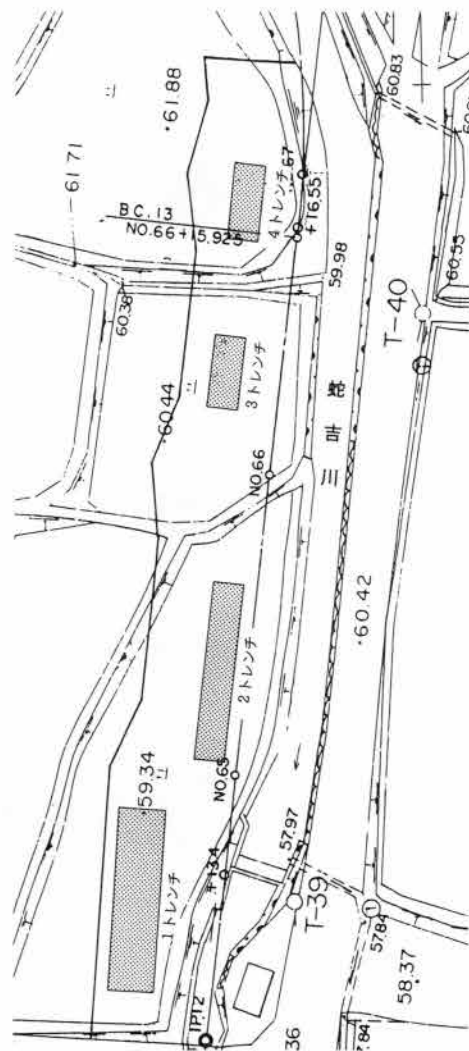
(『京都府遺跡地図(1985)』に加筆)

クリート片などの廃棄物が多量に捨てられていた。その下に旧耕土、床土がみられ、床土の直下で湧水の多い河川堆積の砂礫層となった。遺物包含層ならびに遺構は認められなかった。

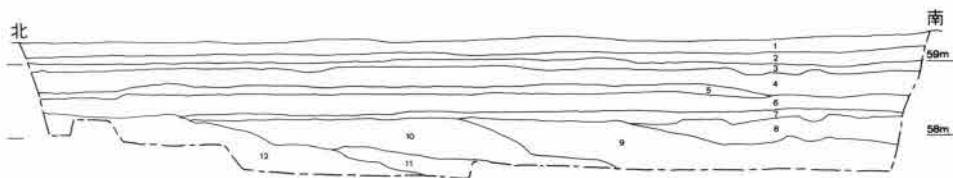
4トレンチ 現地表下1.6m付近までは水平堆積が続き、以下は湧水の多い河川堆積の砂層となった。遺物包含層ならびに遺構は認められなかった。

3. 出土遺物

縄文土器 縄文土器は、1トレンチ暗茶褐色粘質土から出土した。1～33は、深鉢の口縁部である。1～5・12～17は、短い口縁部を持ち、17は波状口縁をなす。1・2・12・13の頸部外面には滋賀里Ⅲaの特徴である強いナデによる凹みが明瞭に認められる。1・5・13の外面は、板状工具によるナデが施されているが、凹凸が目立ち、粘土紐の継目が残っているものもある。3・14の外面は、横方向のケズリで、14はケズリの後、ナデ調整が施されている。2・12・15・16の外面には二枚貝条痕がみ

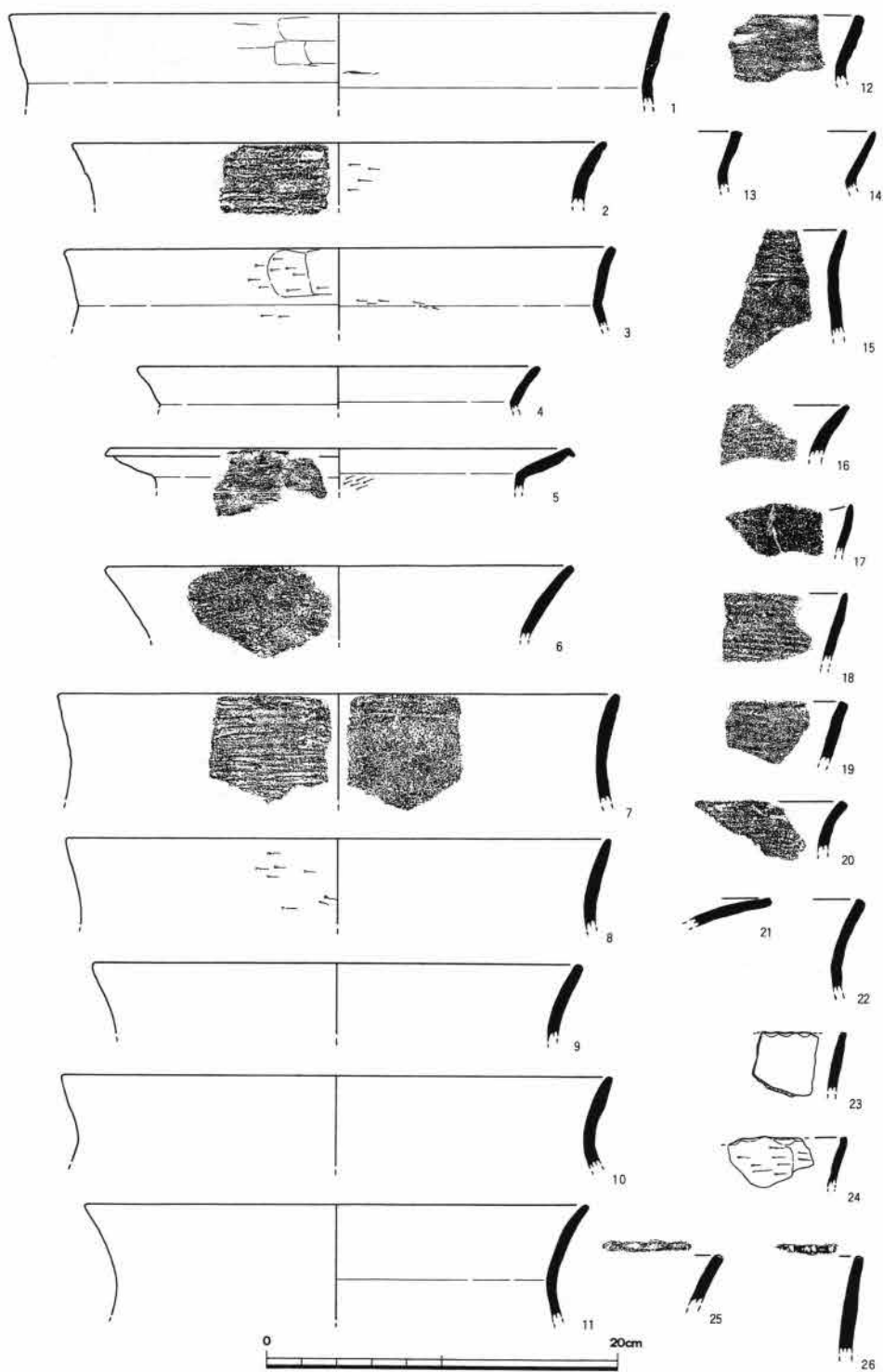


第91図 トレンチ配置図



- | | | |
|------------|-----------------------|--------------------------|
| 1. 暗灰色粘質土 | 5. 淡灰色礫混じり粘質土 | 9. 淡黄灰色砂礫 |
| 2. 暗黄灰色粘質土 | 6. 暗青灰色粘質土 | 10. 暗茶褐色粘質土(縄文時代晩期遺物包含層) |
| 3. 灰黄色粘質土 | 7. 茶褐色礫混じり粘質土 | 11. 茶灰色粘質土 |
| 4. 淡灰色粘質土 | 8. 淡黄灰色砂(弥生時代前期遺物包含層) | 12. 暗青灰色礫混じり粘質土 |

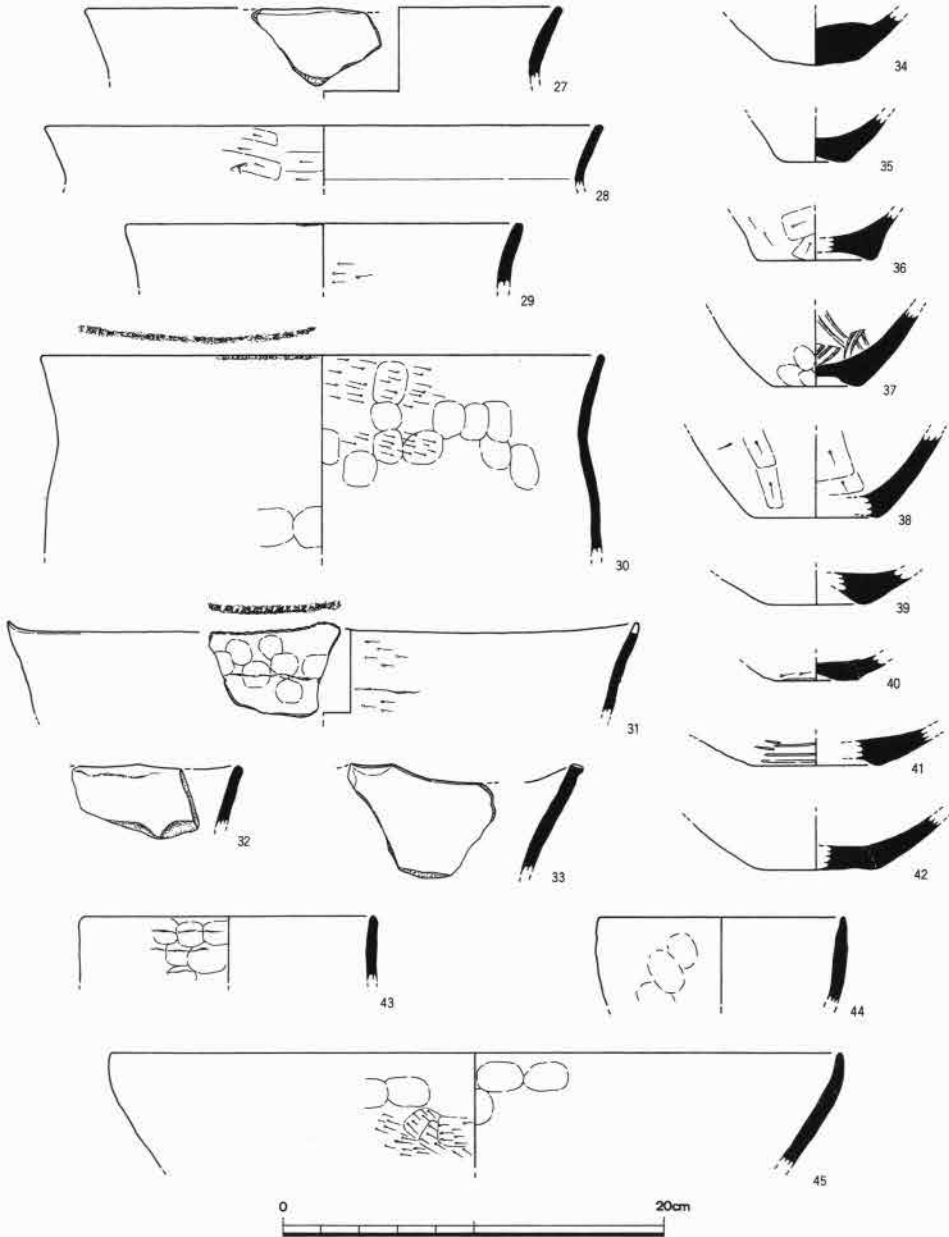
第92図 1トレンチ東壁断面図(1/100)



第93図 出土遺物実測図(1) 1/4

られる。4は、磨滅のため器面調整を観察することができない。17の外面はナデ調整である。内面はいずれもナデ調整によって平滑に仕上げられている。口縁端部は、1・3・5・12・13が面取りを行っているのに対して、他は丸く納めている。

6~11・18~33は、長い口縁部を持つ深鉢である。23~26・29~31は、口縁端部に刻み目を持ち、刻み目には指で摘んだようなもの(23・24)、端部を上から押さえたような長楕



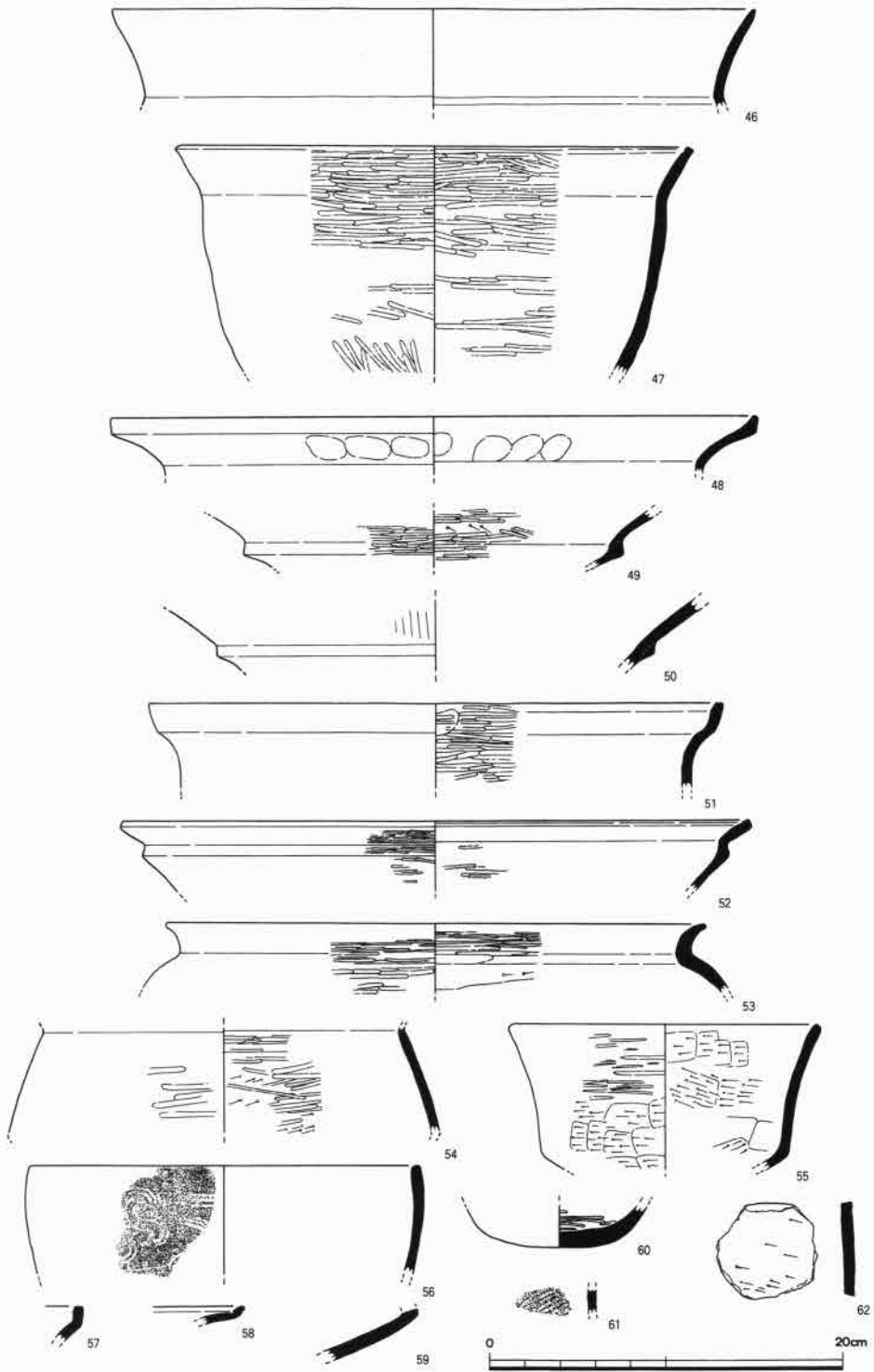
第94図 出土遺物実測図(2) 1/4

円形のもの(25)、ヘラ条工具を押して文字どおり刻んだもの(26・29～31)がある。31～33の口縁は波状をなし、33は波頂部を押さえて平らにしている。32は、波頂部に刻み目が施されている可能性がある。外面の調整は、6・7・18～20に二枚貝条痕が認められるが、このうち19・20は、条痕を軽いナデ調整で消している。7は、内面上端部付近にも2枚貝条痕が見られる。8・21・24・28・30の外面は、ケズリが施されている。31は、外面の調整がほとんど行われておらず、粘土紐の継目が明瞭である。他はナデ調整が施されている。内面の調整は、29～31の口縁部と22の胴部内面にケズリが施されているほかはナデ調整である。

34～42は、深鉢の底部である。丸底になるもの(34)、凹み底になるもの(35～41)、平底になるもの(42)がある。36・38・40の胴部外面と42の底部外面及び、38の内面にはケズリが施されている。40の底部外面の中心付近には、器壁が剥落した痕跡が認められる。37の内面と、41の胴部外面には条痕様のものが観察できる。他はナデ調整である。

43～45は、寸胴形の深鉢である。43は、内外面ともにナデ調整であるが、外面のナデは雑で、粘土紐の継目が明瞭に残っている。44の内面はケズリの後、雑なナデ調整が施されている。外面の調整は不明瞭である。45の外面はケズリの後、口縁部のみにナデ調整が施されている。内面はナデ調整で平滑に仕上げられている。

46～60は、浅鉢である。外反する長い口縁部を持つもの(46～50・57・58)、短い口縁部をもつもの(51・52)、胴部が大きく張り出して胴部最大径が口径を上回るもの(53・54・59)、直立する口縁部を持つもの(56)、及び浅い底部に長い口縁部が付くもの(55)がある。46の外面は粗いナデ調整、内面はていねいなナデ調整が施される。47は、直立した器形となっているが、内外面ともにていねいなヘラミガキが施されていることから、浅鉢と考えられる。ゆるやかに外反する口縁部の内端付近に1条の凹線をめぐらせている。48は、口縁端部を外側に肥厚させて端面を作っている。内外面の調整は46と同様であるが、わずかに指押さえの痕跡が観察できる。49・50は、段をなす頸部である。49が内外面にミガキ調整を加えているのに対して、50の器面調整は粗いナデである。51は、短い受け口状の口縁部を持つもので、外面はナデ調整、内面はミガキ調整が施されている。52は頸部の段から短く外折する口縁部を持つもので、口縁内端部付近に1条の凹線をめぐらせている。内外面ともミガキ調整が施されている。53は、短く外反する口縁部を持つ。器面の調整は口縁端部にナデ、外面と口縁内面にミガキ、胴部内面には工具によるナデ調整が施されている。54の外面はミガキ調整、内面はケズリの後、ミガキ調整が施されている。55は、外反して長くのびる口縁部を持つ浅鉢である。内面と外面の下半にケズリ、外面上半に二枚貝条痕が見られる。56は、口縁部の直立する浅鉢と思われる。外面には3本歯の櫛状の工具で描

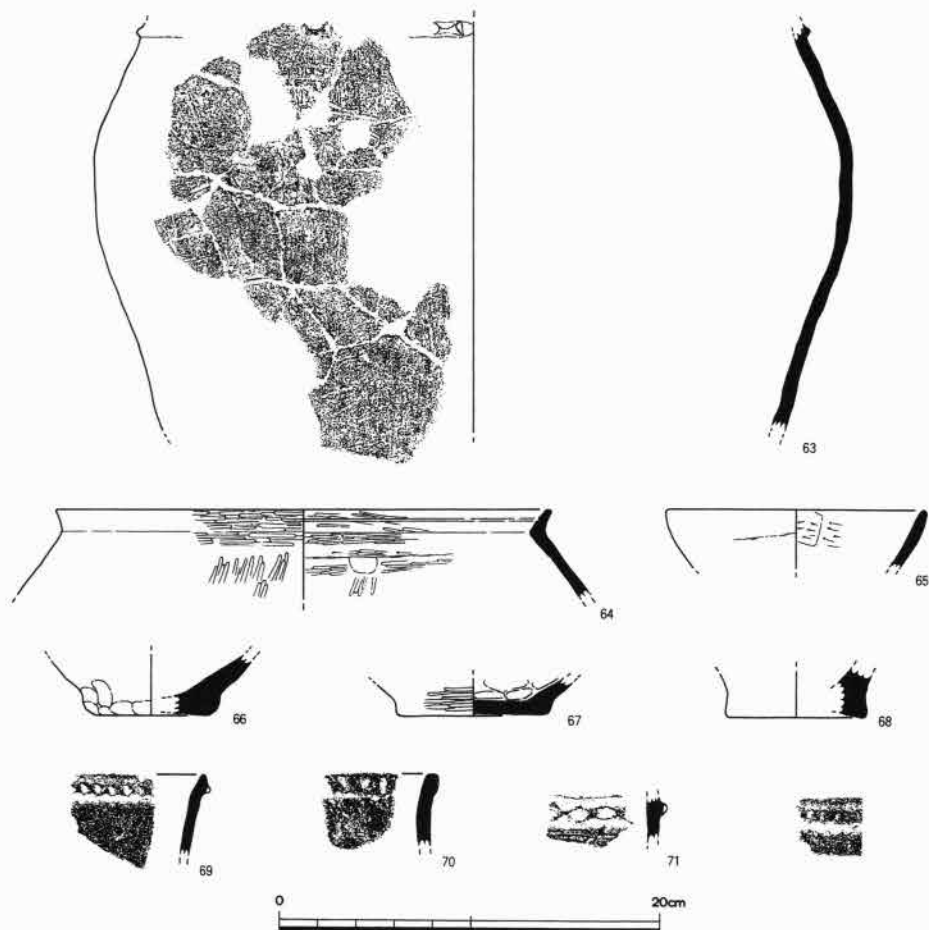


第95図 出土遺物実測図(3) 1/4

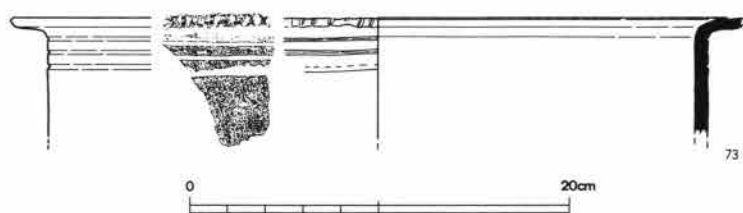
かれた流水文状の文様が描かれている。内面は、ナデ調整によって平滑に仕上げられている。57は、外反する口縁の端部を直立させたもので、外面は屈曲部以下にはケズリ、屈曲部から口縁端面まではナデ調整が見られる。内面にはミガキ調整が施されている。58は、口縁内端付近に沈線状の袢りをめぐらせたもので、外面はナデ、内面はミガキによって調整されている。59は、胴部が張る浅鉢の胴部下半である。内面はケズリの後、ミガキ調整が施されている。60は、浅鉢の底部である。外面はケズリ、内面には二枚貝条痕が見られる。

61は、小破片であるが、今回の調査で出土した縄文を持つ唯一の資料であるためここに掲げた。縄文はLRである。62は、土製円盤である。口縁端部が残っており、もとの器形は皿状の浅鉢と思われる。外面はナデ調整、内面はケズリの後、ナデ調整が施されている。

63~72は、凸帯文の時期に位置付けられるものである。63は、深鉢の胴部である。胴部凸帯がわずかに認められ、2条凸帯の深鉢であることが知られる。外面には板状工具によ



第96図 出土遺物実測図(4) 1/4



第97図 出土遺物実測図(5) 1/4

るナデの痕跡が見られる。64は浅鉢である。短く外折する口縁部の内面中央付近に1条の沈線をめぐらせている。内外面ともにミガキ調整が施されている。65は、椀状の浅鉢と思われる。内面にはケズリが施される。66~68は、底部である。67は、外面にミガキが見られることなどから浅鉢の底部になるかもしれない。69は、口縁端部に断面三角形の刻み目凸帯を持つ深鉢である。刻み目は「D」字状を呈する。内外面ともナデ調整が施されている。70は、口縁端部に断面方形の刻み目凸帯を持つ深鉢である。磨滅が著しいが、刻み目は「O」字状を呈する。71・72は、胴部凸帯である。刻み目は、71が「O」字状、72が「D」字状である。

弥生土器 弥生土器は、1トレンチ淡黄灰色砂層から出土した。73は、甕である。「L」字に外折する口縁部の端面に「V」字状の刻み目を持ち、胴部上端には3条のヘラ描き沈線文を持つ。内外面ともに板状工具によるナデ調整が施されている。同一個体と見られる接合しない胴部片が出土している。

4. ま と め

1トレンチで検出された縄文土器は、同一層から出土したものであるが、滋賀里Ⅲa~Ⅲbと、凸帯文2期の二つの時期に大別され、その間に位置づけられる凸帯文1期のものは出土していない。前者では、滋賀里Ⅲbが主体を占めるが、この中でも型的に新しいものは含まれていない。従来の滋賀里Ⅲbを篠原式とし、古段階・中段階・新段階の3つに分ける考え方^(注3)に従えば、篠原式の古段階及び中段階に位置付けられる資料であると思われる。また、深鉢と浅鉢の口縁部の破片数はそれぞれ63片と14片であり、比率は深鉢が81.8%、浅鉢が18.2%となる。後者は資料数が少ないが、凸帯文2期の中でも後出するものと思われる。包含層資料ではあるが、資料の少ない南山城地域の当該期の土器研究に有益な資料である。(森島康雄)

注1 湖西線関係遺跡発掘調査団田辺昭三(編)『湖西線関係遺跡調査報告書』真陽社 1973

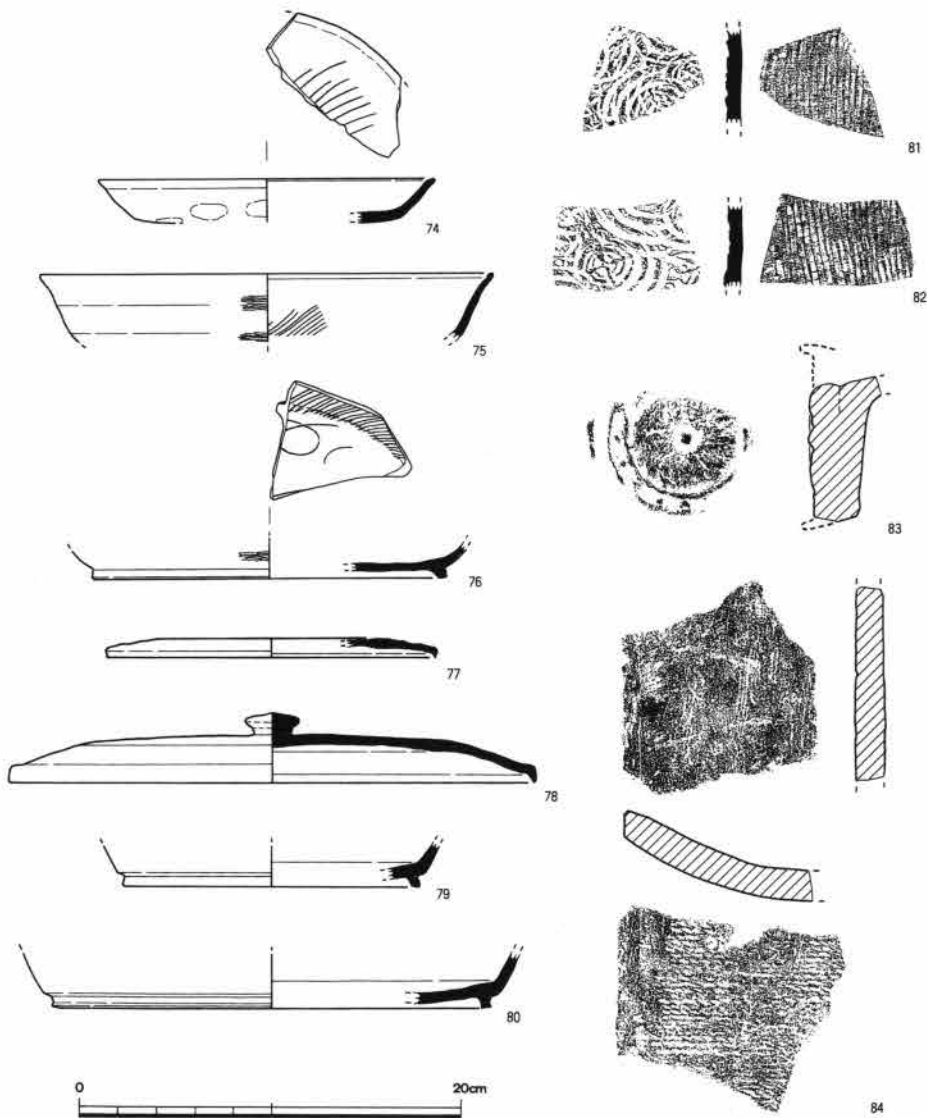
注2 泉 拓良「西日本凸帯文土器の編年」(『文化財学報』第8集 奈良大学文学部文化財学科)

1990

注3 家根祥多「篠原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」（『縄紋晩期前葉—中葉の
 広域編年』北海道大学文学部）1994、
 今回の報告にあたっては、泉 拓良氏・家根祥多氏から種々のご教示をいただいた。記して、
 感謝する。

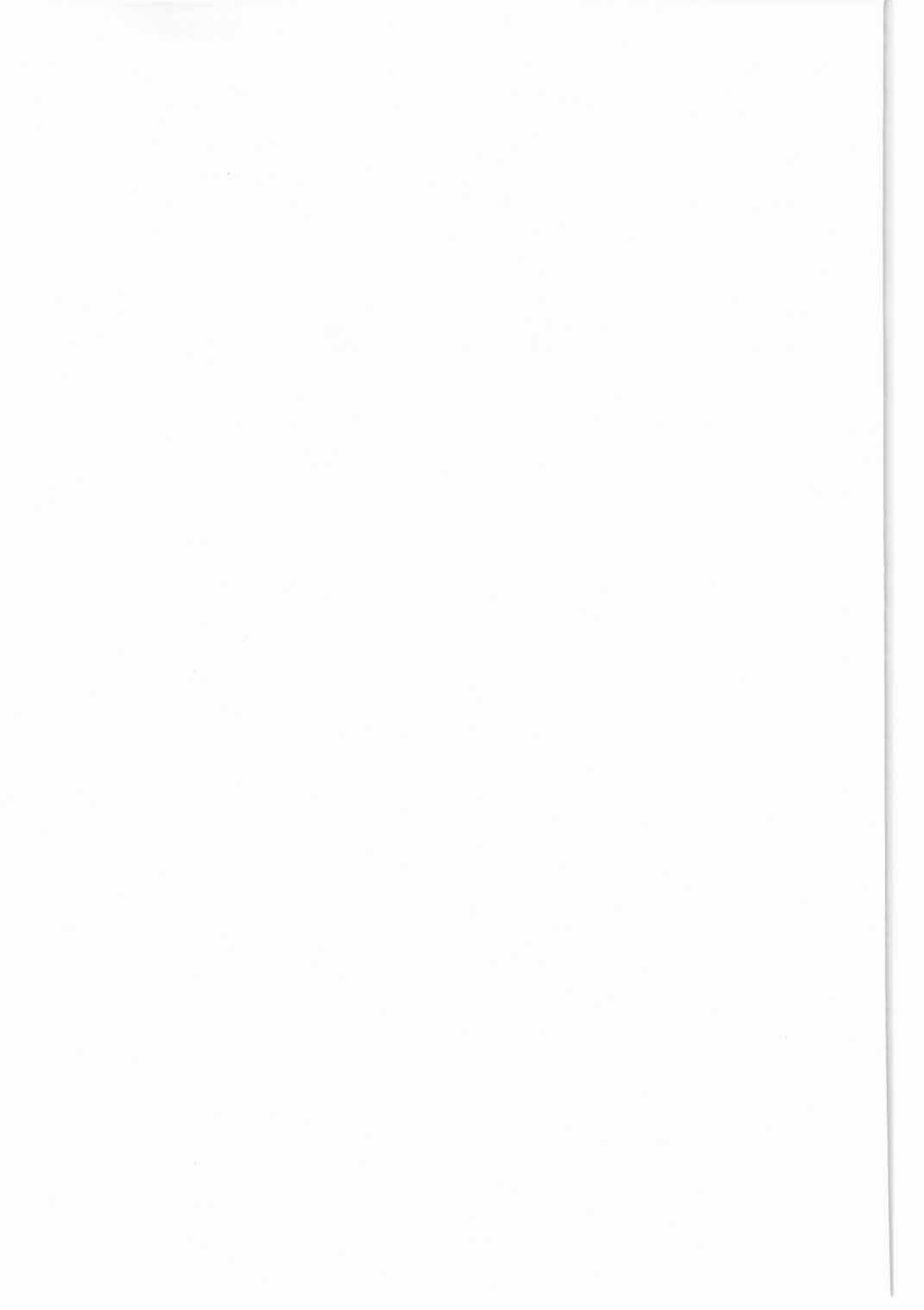
付載 平成5年度立会調査出土遺物

第98図に掲げたものは、平成5年度の京都府教育委員会による立会調査で出土した遺物である。74
 ~76は土師器、77~82は須恵器、83・84は瓦である。75・76は同一個体の可能性がある。82の内面には
 車輪文の当て具痕が見られる。いずれも奈良時代中期、恭仁京期の遺物と考えられ、京北限推定ラ
 インよりも北側で恭仁京期の遺物がまとまって出土したことは注目される。



第98図 出土遺物実測図(6) 1/4

圖 版



図版第1 竹野遺跡



(1) 調査地遠景 (東から)



(2) 調査前風景 (北東から)

図版第2 竹野遺跡



(1) 1トレンチ全景 (南西から)



(2) 2トレンチ全景 (南西から)

図版第3 竹野遺跡



(1) 3トレンチ全景 (南西から)



(2) 4トレンチ全景 (北東から)

図版第4 竹野遺跡



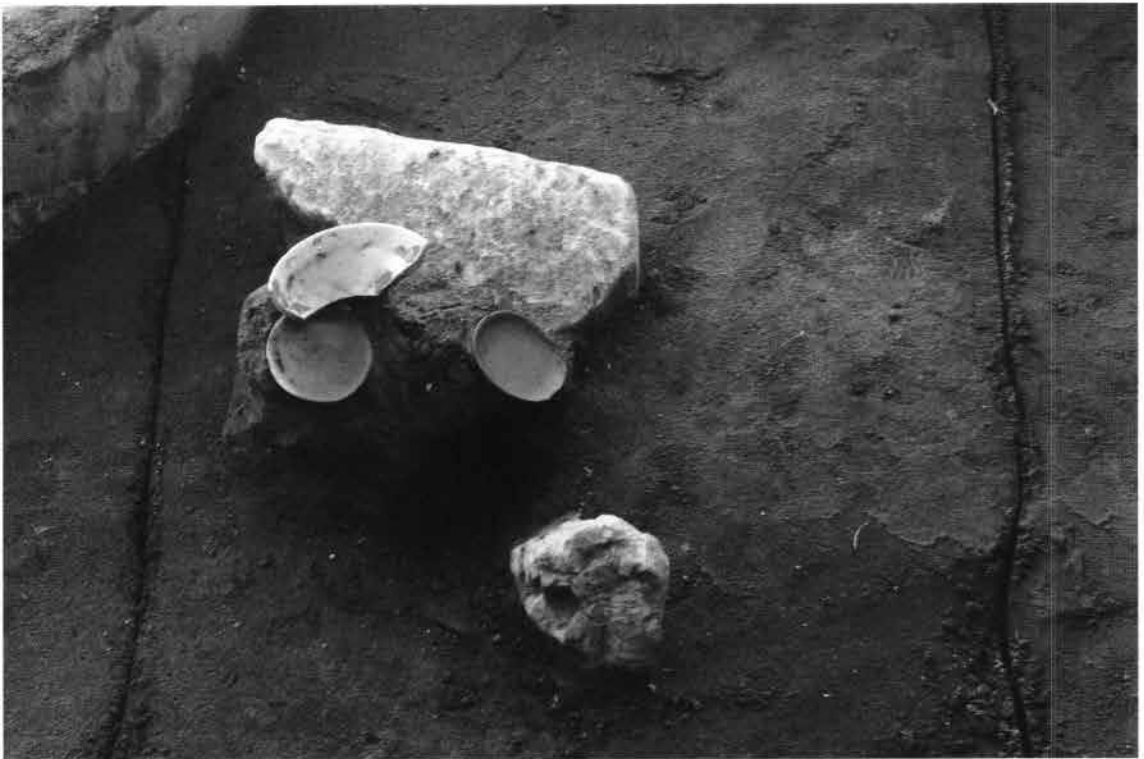
(1) 5トレンチ全景 (南西から)



(2) 8トレンチ全景 (北東から)



(1) 8トレンチ西半部遺構検出状況（東から）



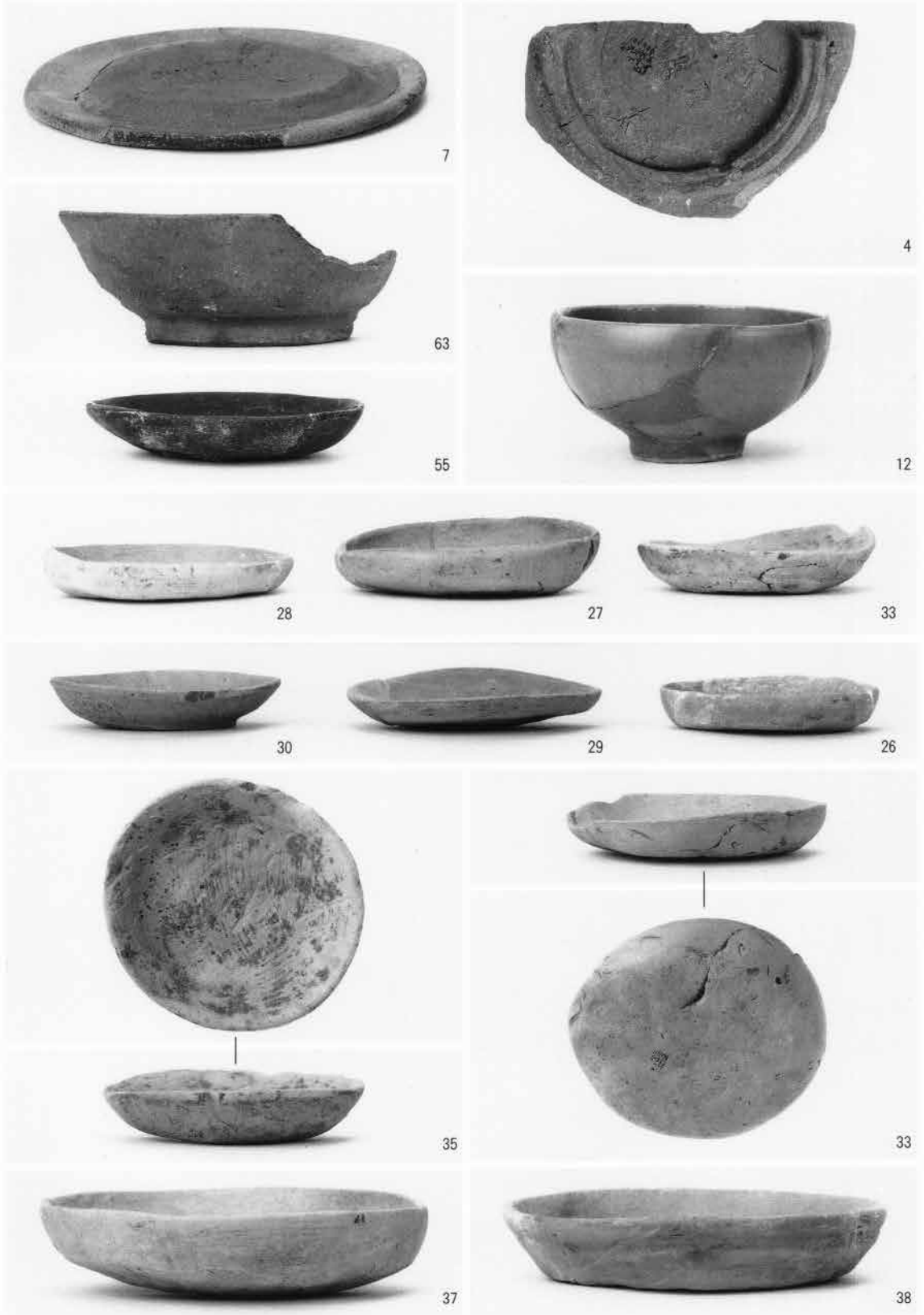
(2) 集石土坑 SX 516遺物検出状況（南東から）



(1) 不明土坑 SX 517下部礫出土状況 (南西から)



(2) 不明土坑 SX 517完掘状況 (南東から)



出土遺物(1) 番号は挿図実測図に対応

図版第8 竹野遺跡



39



43



45



40



41



46



44



42



47



48



62



61



60



70



(1) 調査前の状況（東から）



(2) 調査地遠景（北東から）



(1) 4トレンチ深掘り状況（北西から）



(2) 6トレンチ重機掘削作業（北西から）



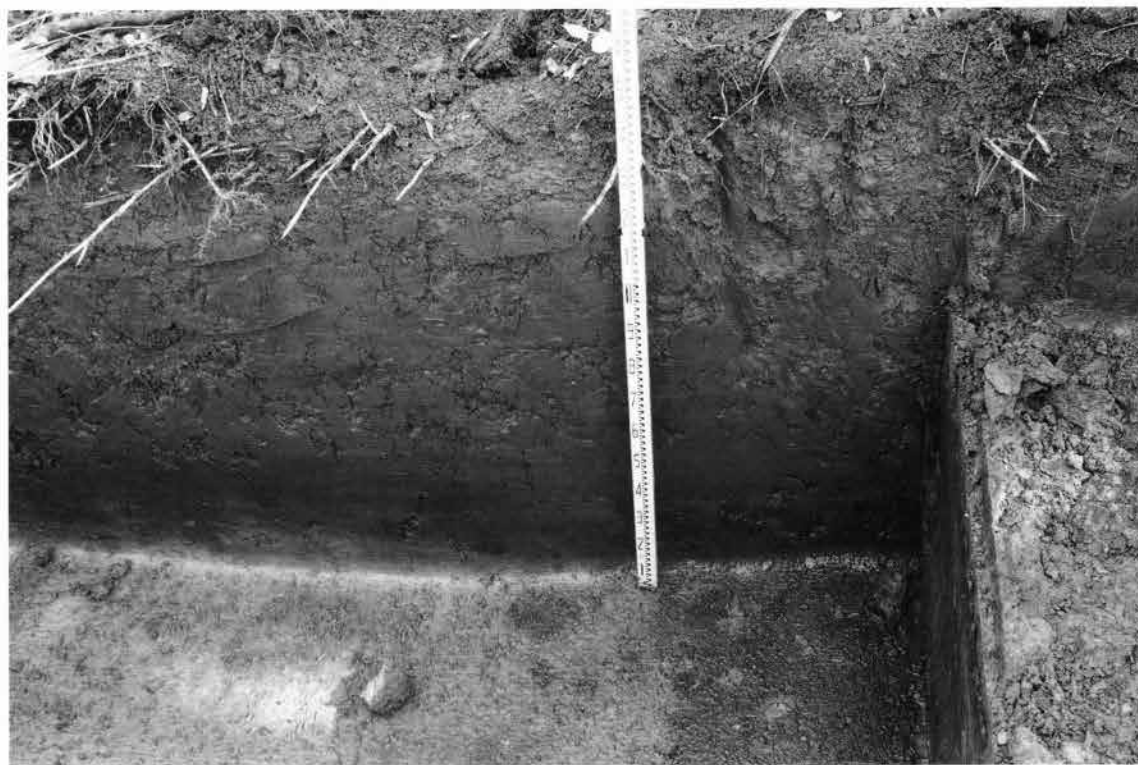
(1) 6トレンチ作業風景（北東から）



(2) 6トレンチ遺構検出状況（東から）

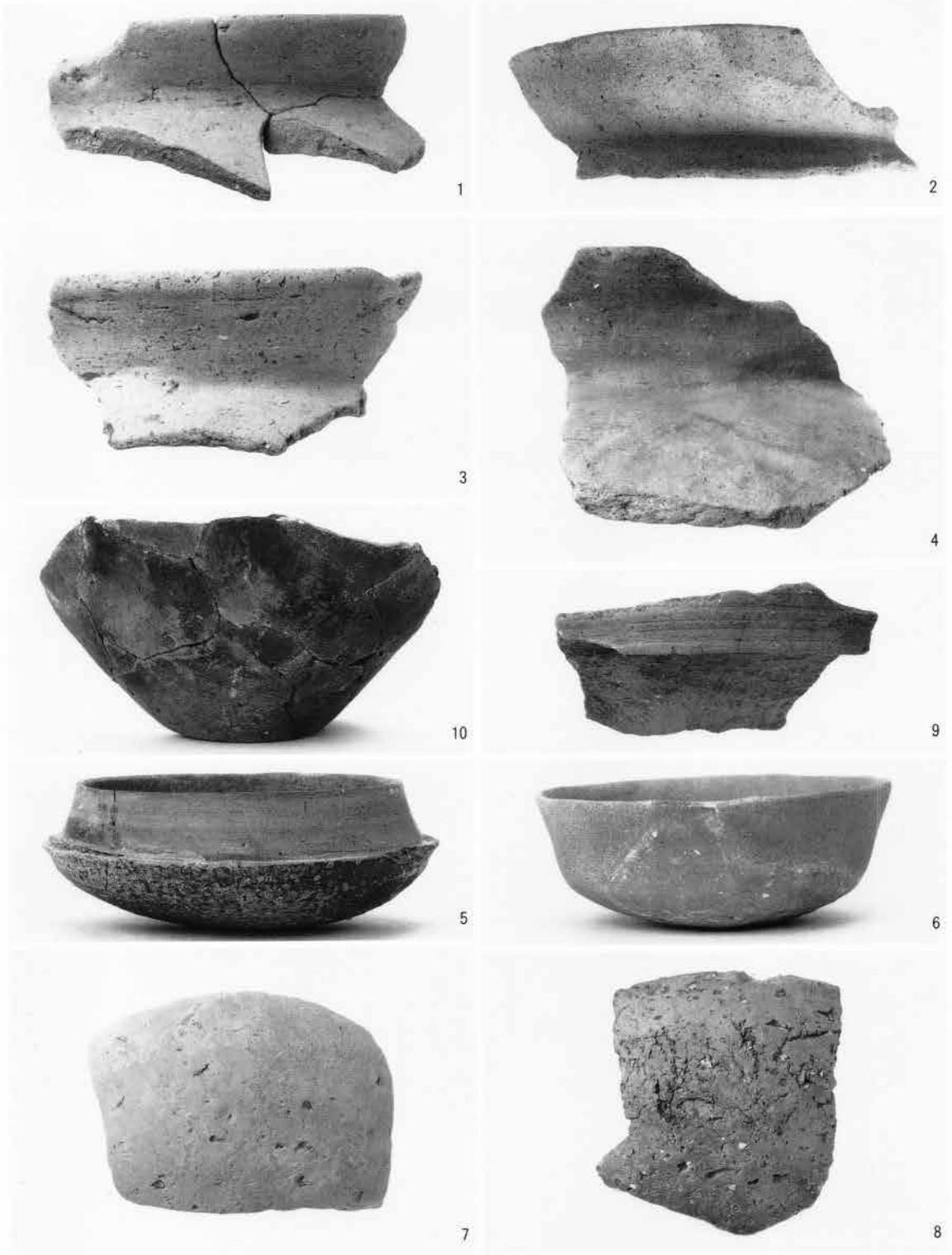


(1) 6トレンチ堅穴式住居跡検出状況（北東から）

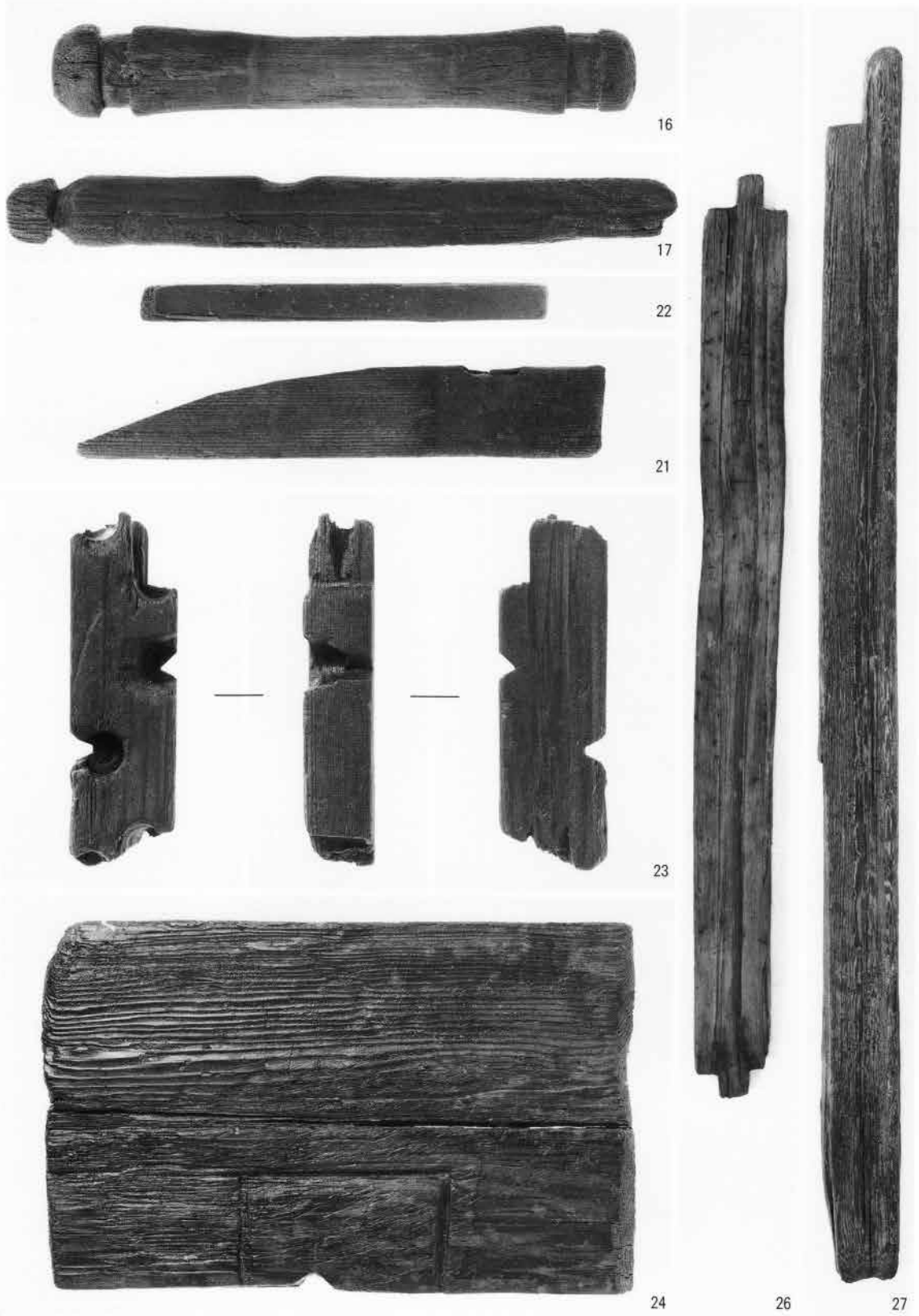


(2) 7トレンチ遺構検出状況（北西から）

図版第13 奈具岡遺跡第6次

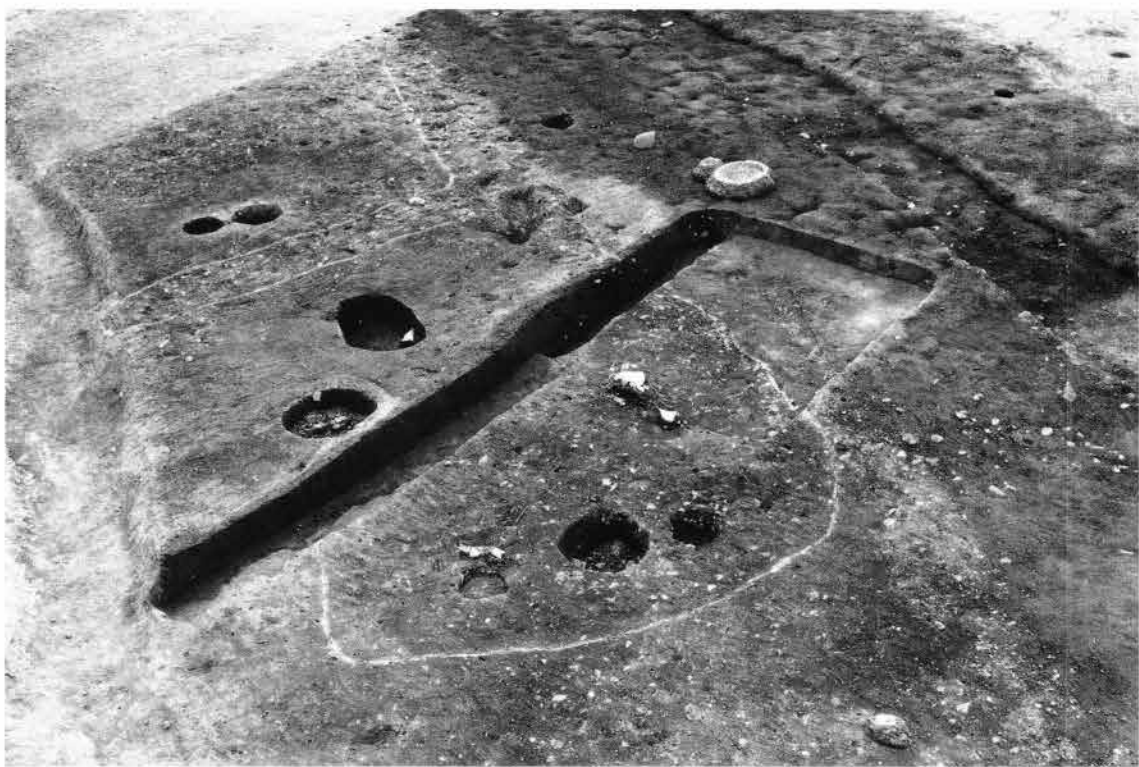


出土遺物(1) 番号は挿図実測図に対応





(1) 調査地遠景 (南方上空から)



(2) 遺物集中地点16全景 (東から)



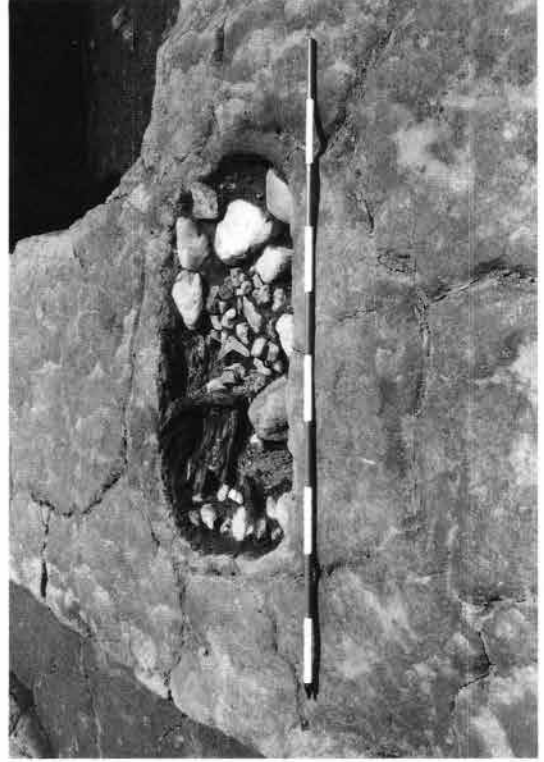
(1) 掘立柱建物跡1～3完掘状況(東南から)



(2) 土坑7遺物検出状況(北西から)



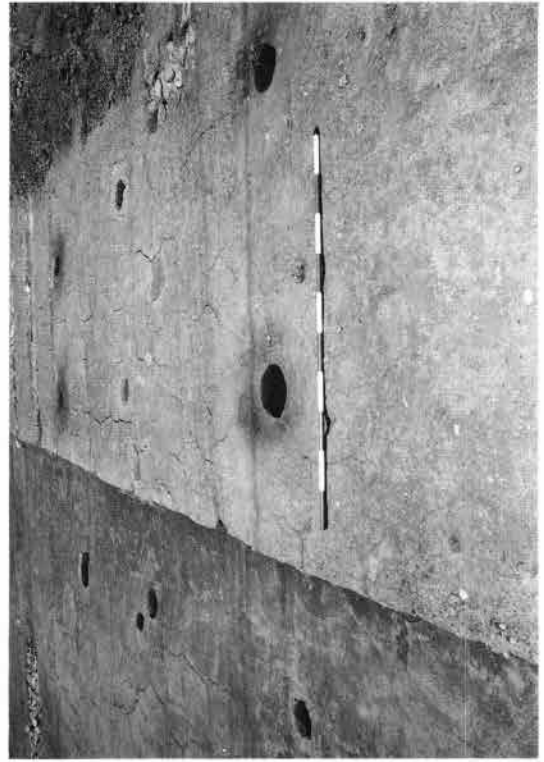
(3) 土坑10 完掘状況 (東から)



(4) 土坑13 検出状況 (南西から)



(1) 土坑6 遺物出土状況 (北から)



(2) 掘立柱建物跡 4 検出状況 (南西から)



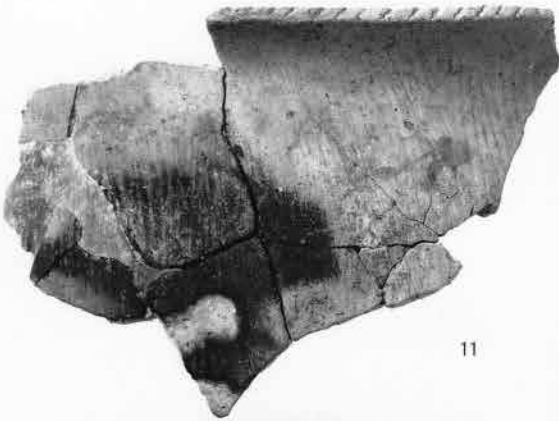
26



35



51



11



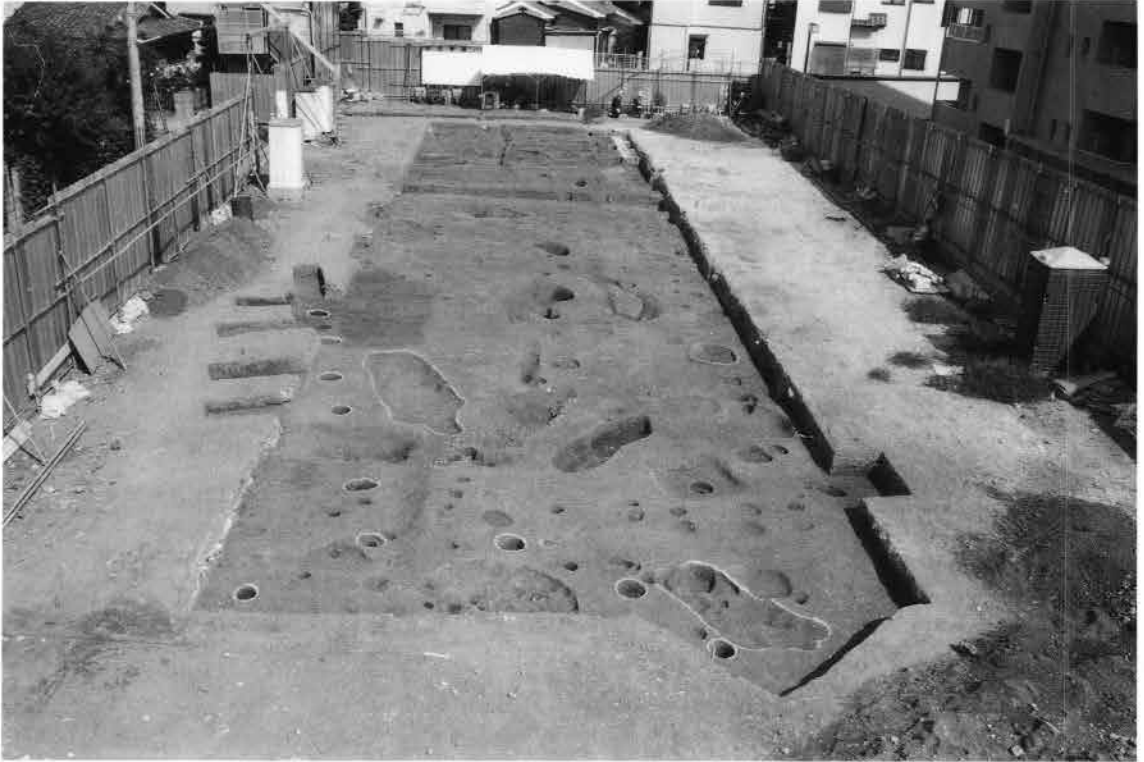
3



9



33



(1) 調査地全景 (西から)



(2) 調査地西半分 (南から)



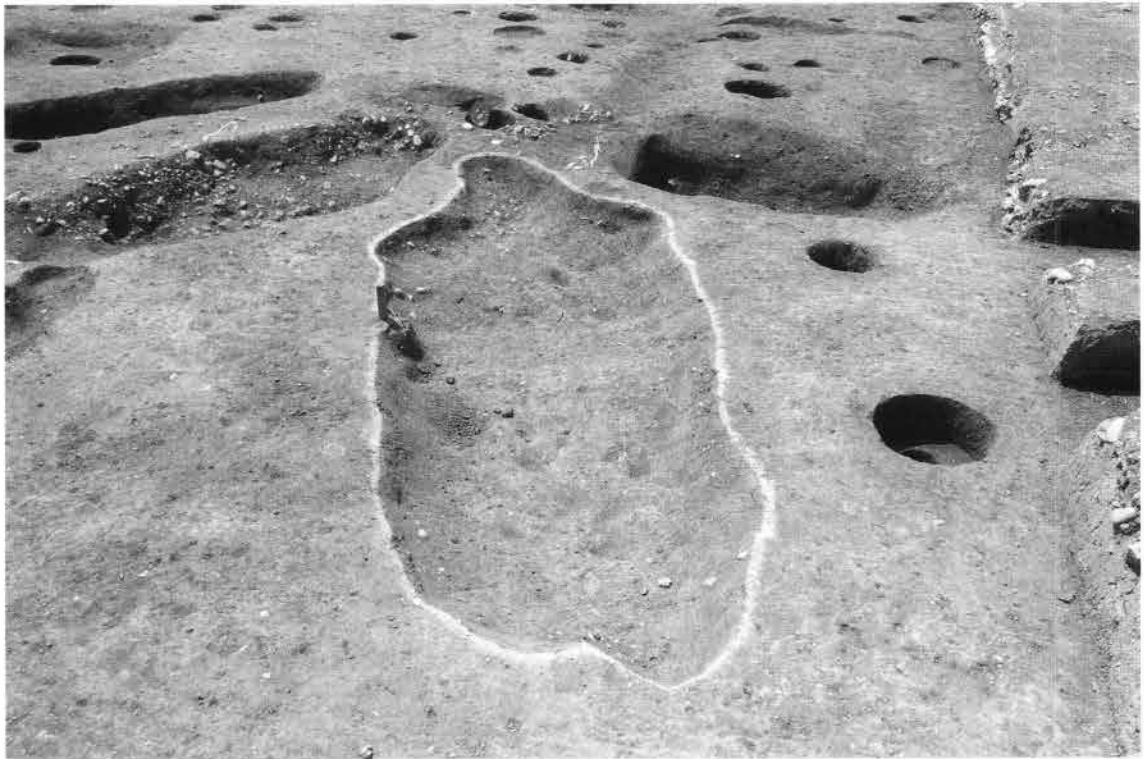
(1) 掘立柱建物跡1 (南から)



(2) 土坑4・5 (北西から)



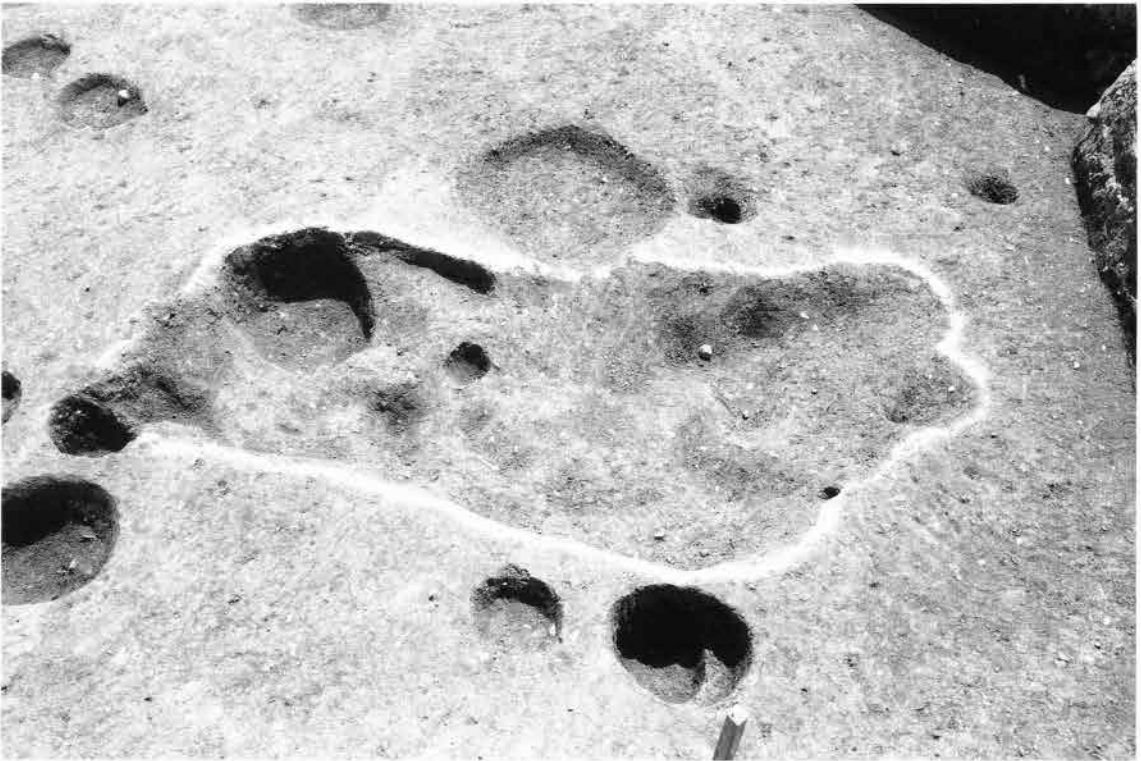
(1) 土坑1遺物出土状況（東から）



(2) 土坑1（東から）



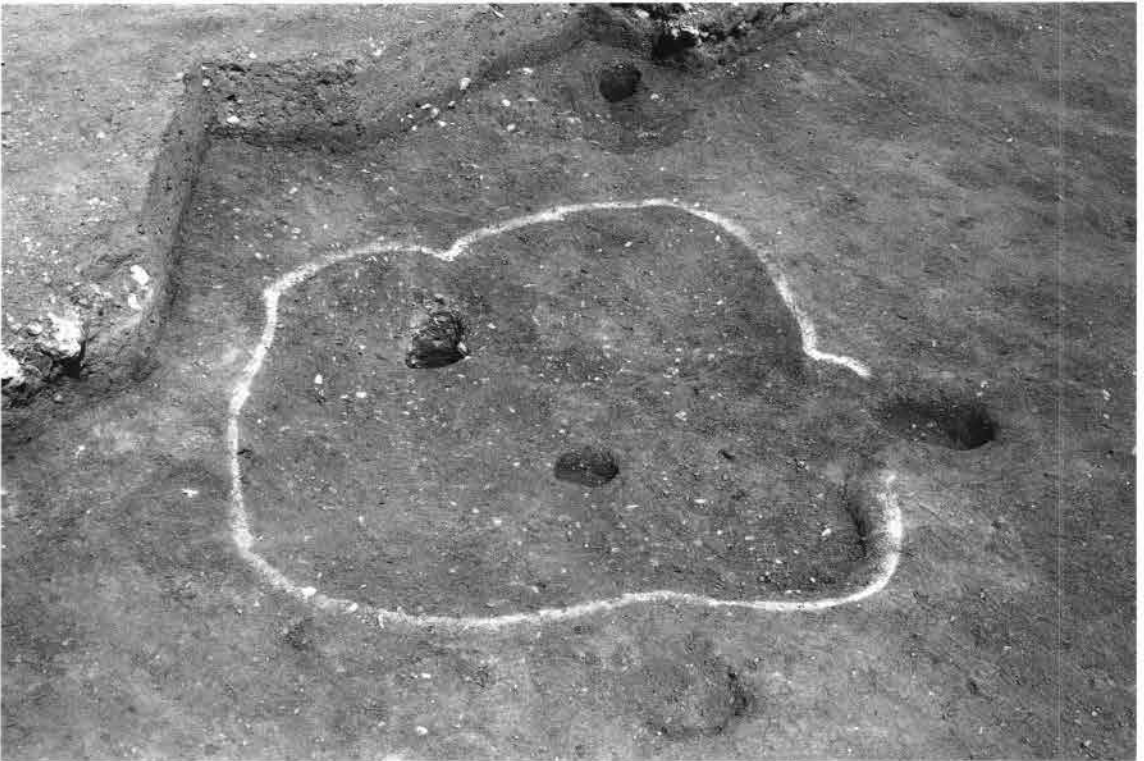
(1) 土坑2 遺物出土状況 (南東から)



(2) 土坑2 (北西から)



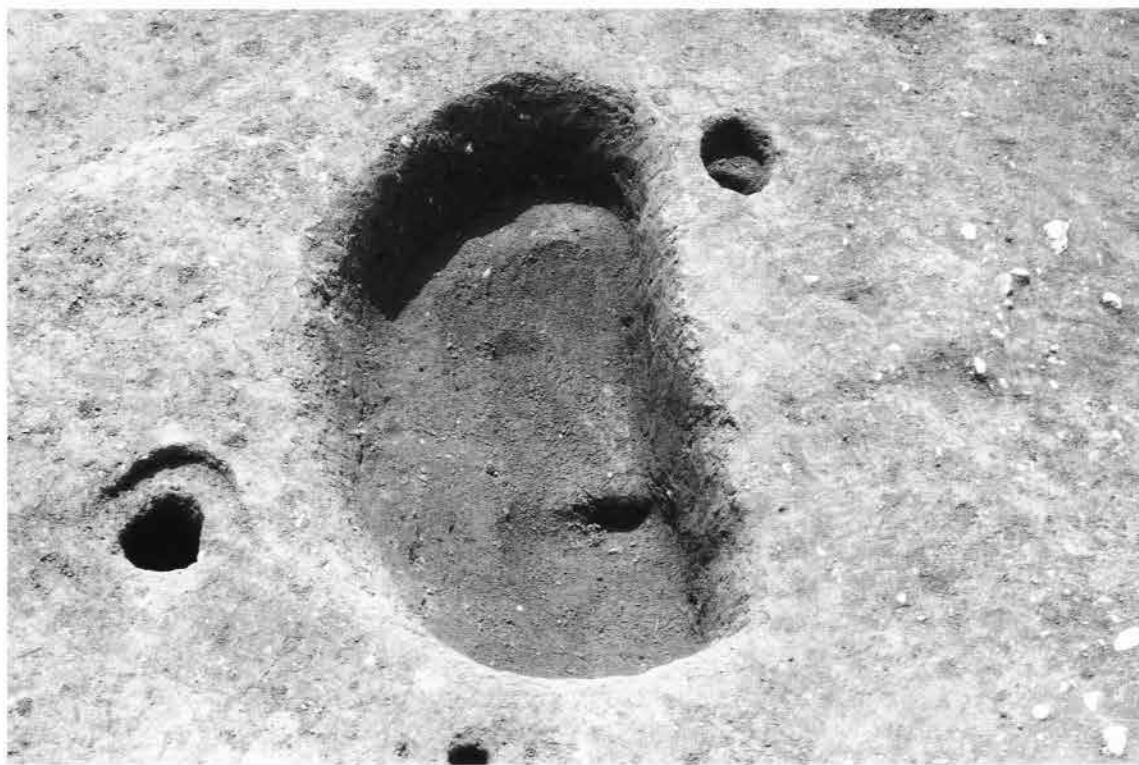
(1) 土坑3 (東から)



(2) 土坑10 (南西から)



(1) 土坑13 (北西から)



(2) 土坑12 (北東から)



(1) 柵列1及びピット群（西から）



(2) 柵列1・P4遺物出土状況（北東から）



1



5



4



3



6



2



7



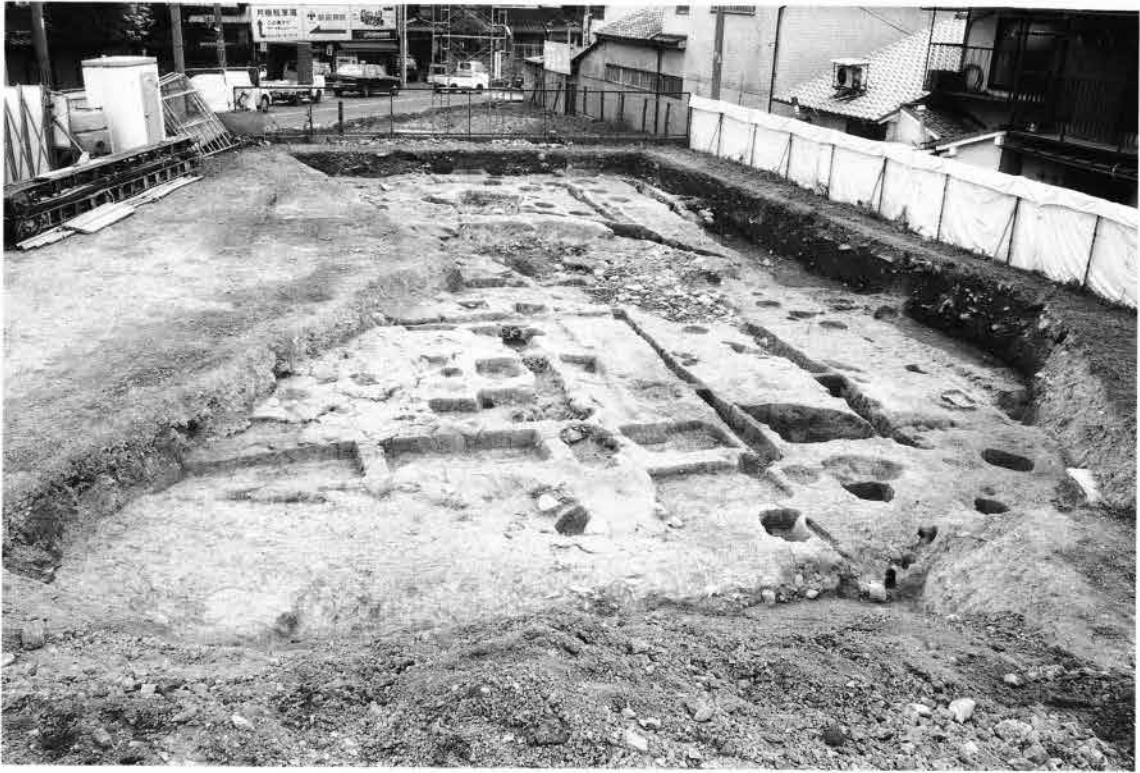
8



(1) Aトレンチ調査前（南から）



(2) Aトレンチ北端攪乱



(1) Aトレンチ南端 (北から)



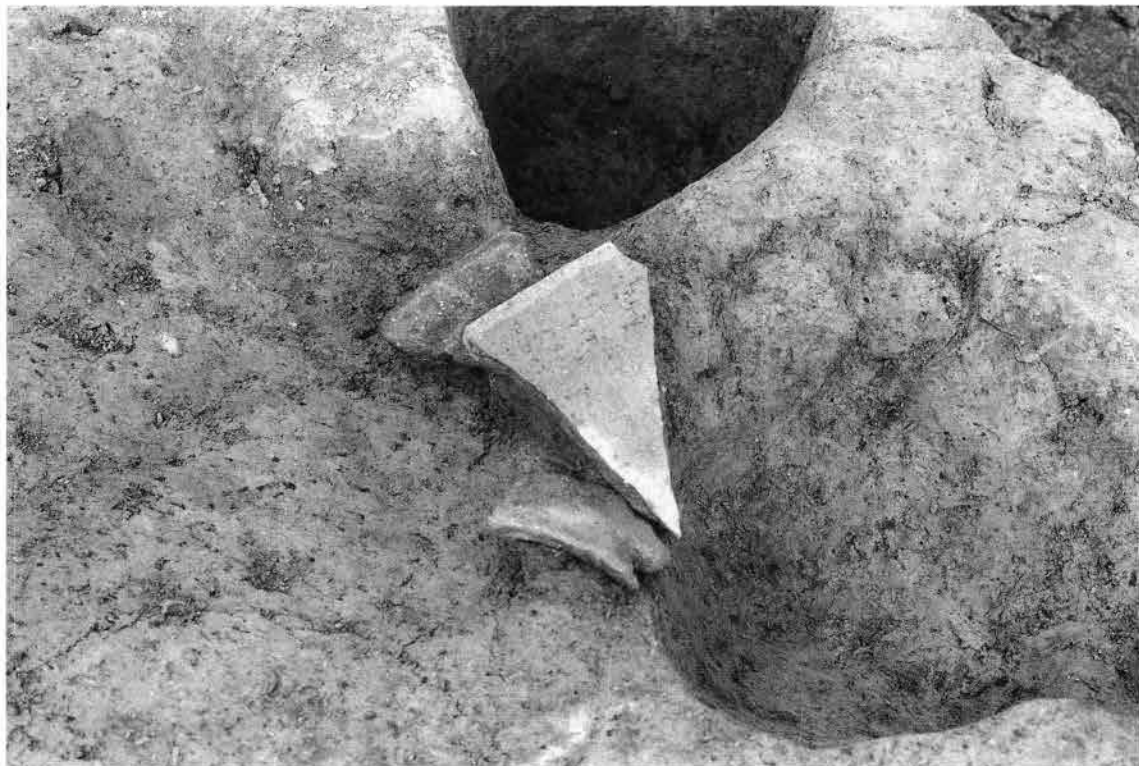
(2) Bトレンチ全景 (北から)



(1) Cトレンチ全景（北から）



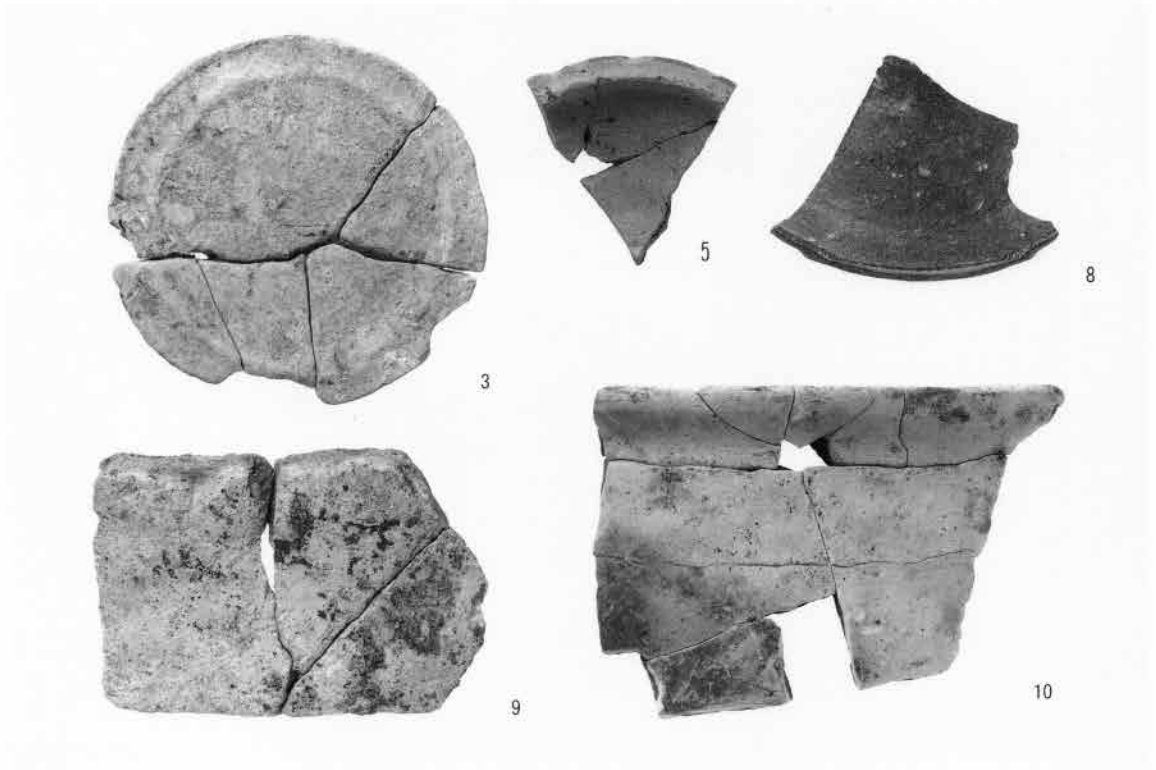
(2) Cトレンチ北東、ピット1（南から）



(1) Aトレンチ遺物出土状況（暗茶灰色粘質土）



(2) Cトレンチ北東SK 01遺物出土状況



(1) Aトレンチの出土遺物(1)



(2) Aトレンチの出土遺物(2)



(1) Cトレンチの出土遺物(1)



(2) Cトレンチの出土遺物(2)



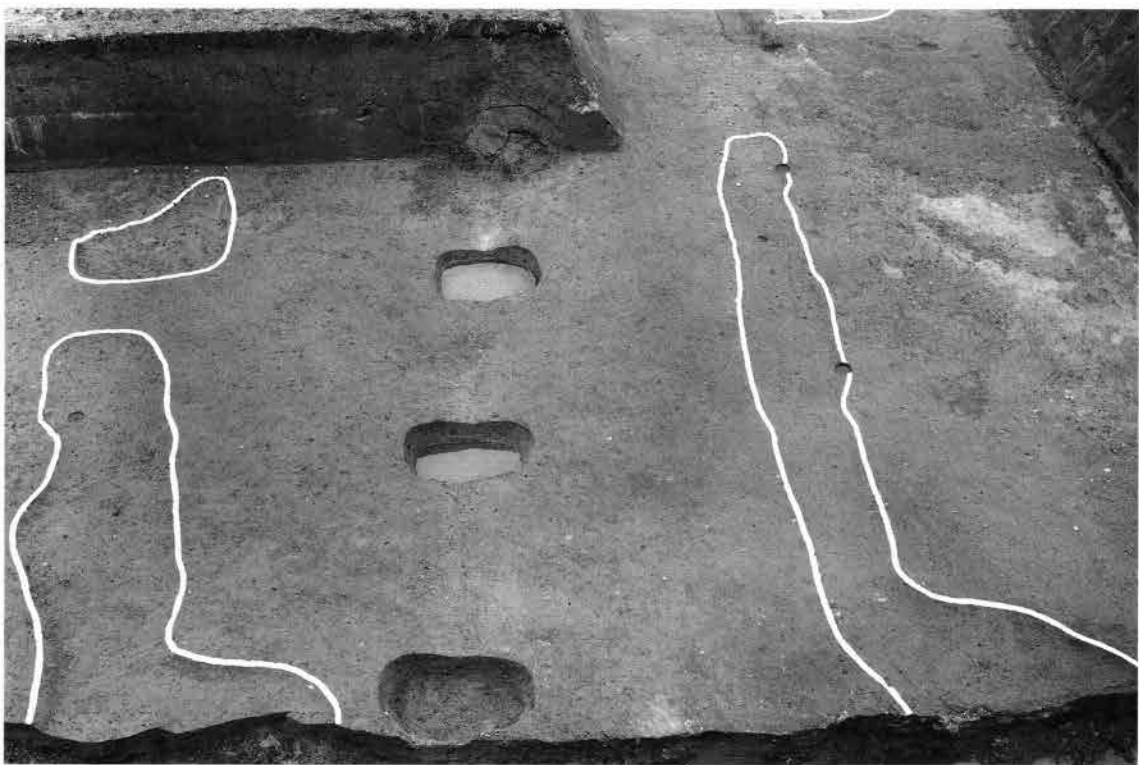
(1) 調査地遠景（調査前の状況）（北から）



(2) 北拡張区遺構検出状況（南から）



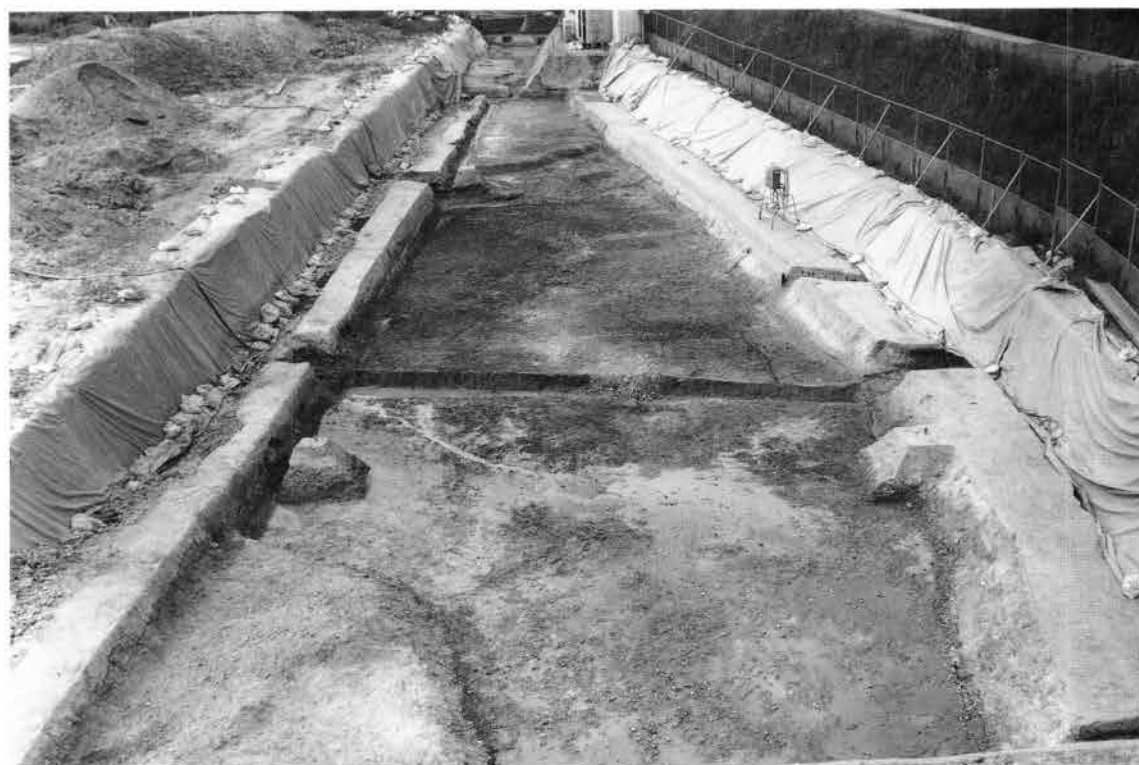
(1) 北拡張区柱列検出状況（南から）



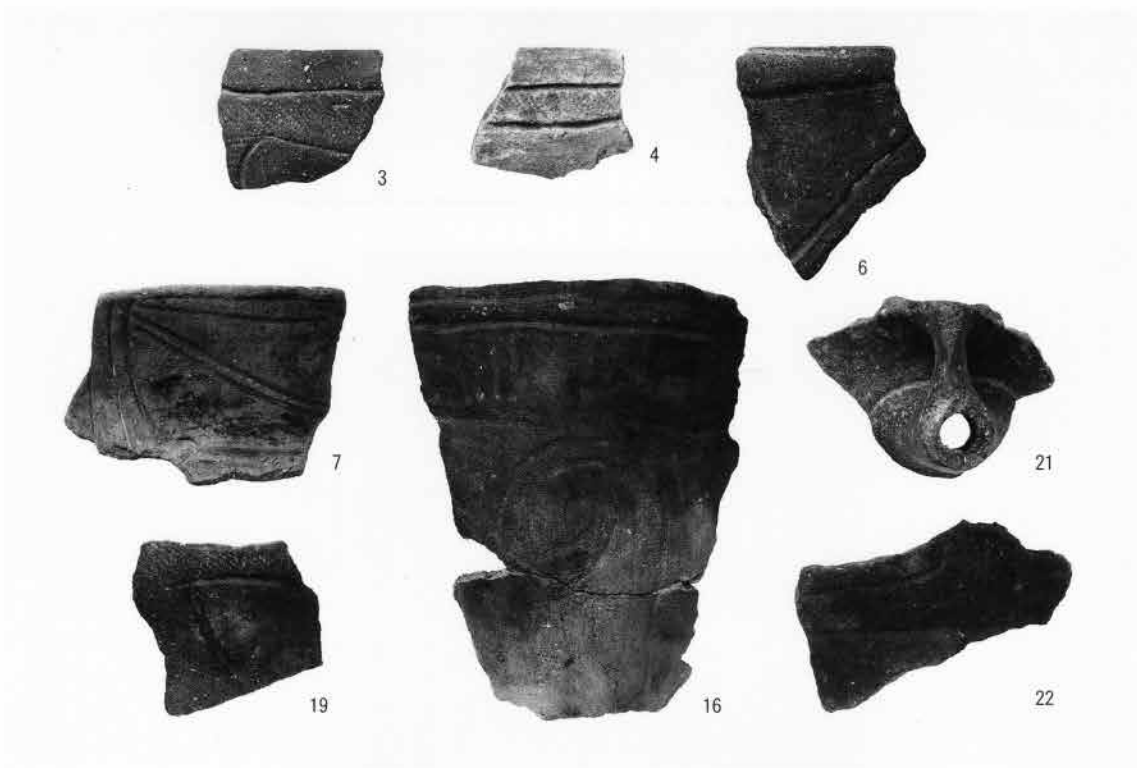
(2) SD 03・06検出状況（北から）



(1) 上層遺構検出状況（南から）



(2) 下層遺構（SR 20）検出状況（南から）





116



141



129



143



163



160



136



159



157



156



167



149



80



162



99



179



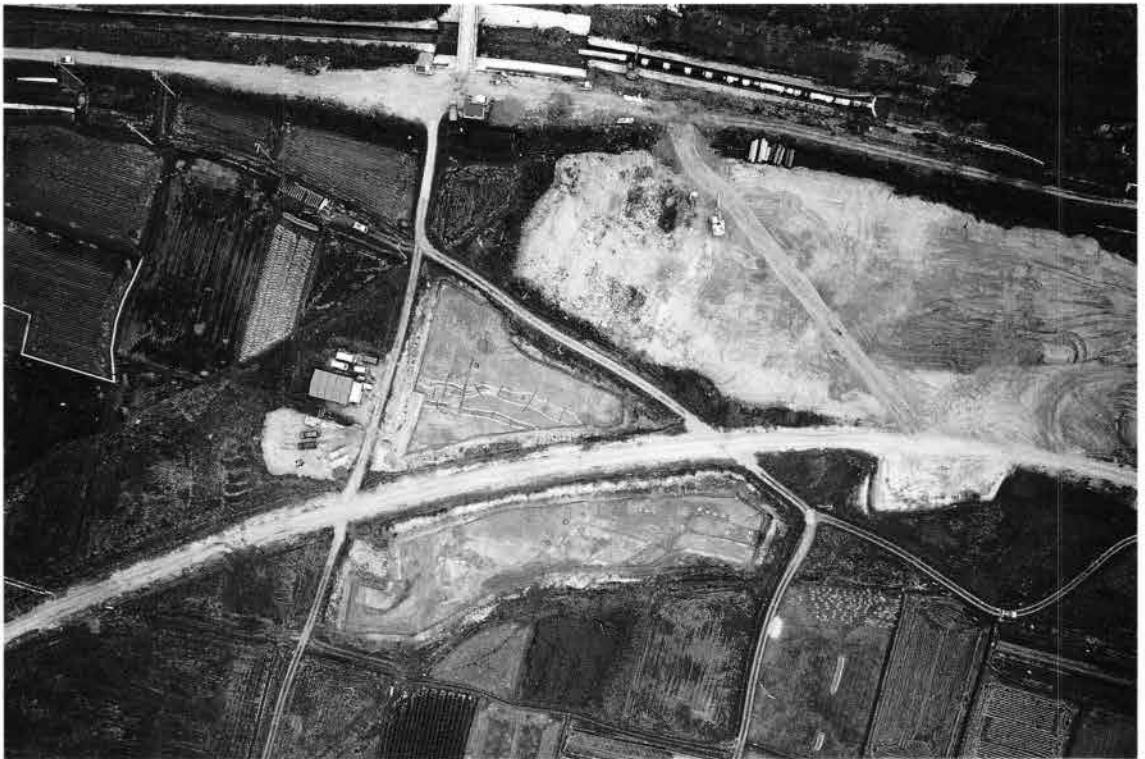
178



182



(1) 調査地周辺空中写真（西から）



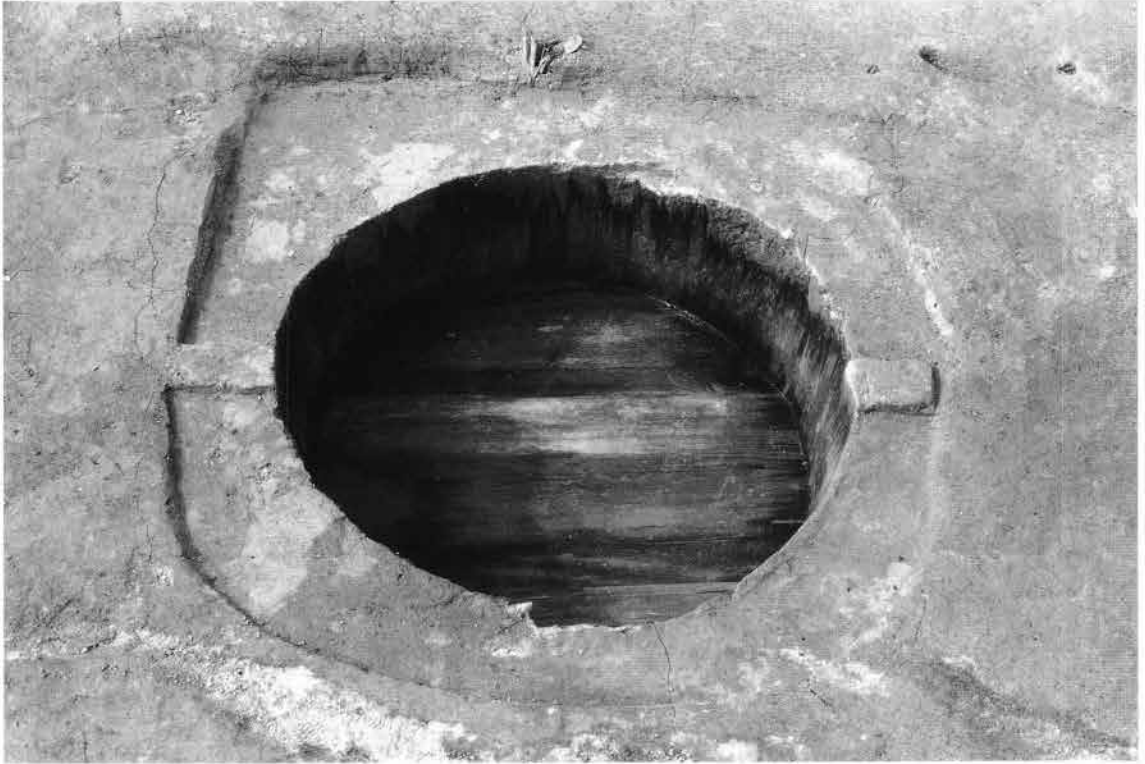
(2) 調査地空中写真（上が東）



(1) AE区上層検出素掘り溝群（北から）



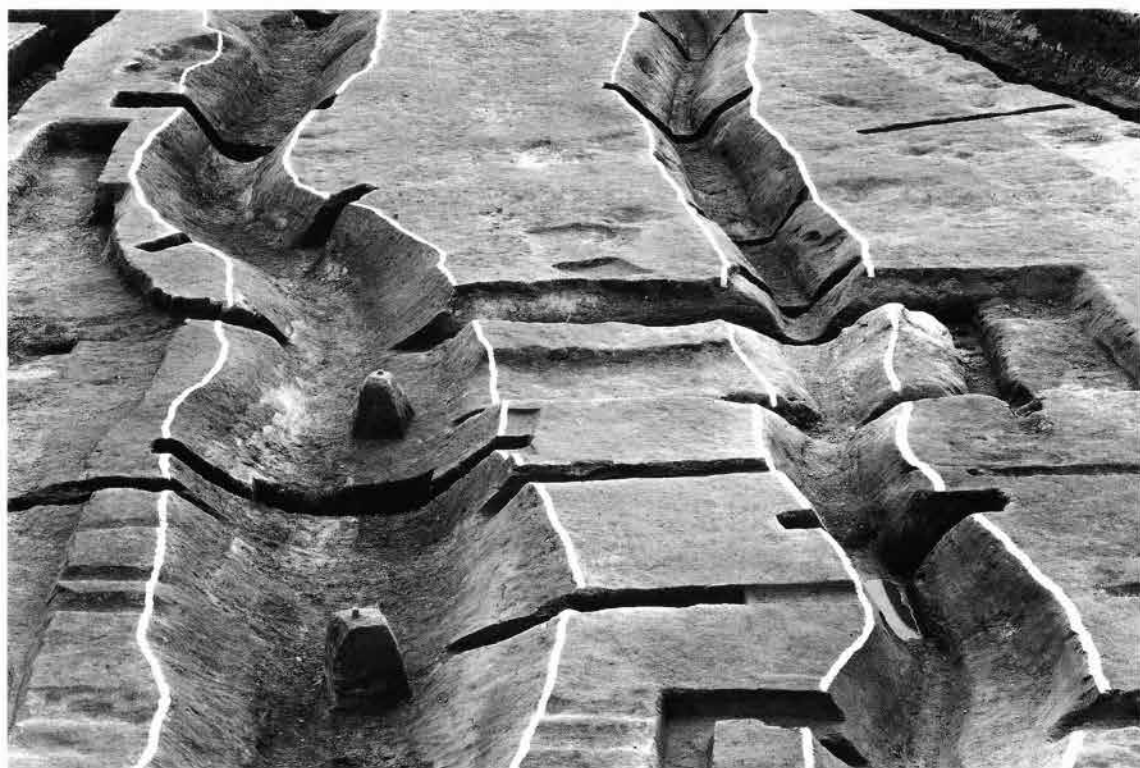
(2) AW区上層検出素掘り溝群（北から）



(1) AW 区上層検出野井戸 1 (南から)



(2) AE 区下層遺構検出状況 (北から)



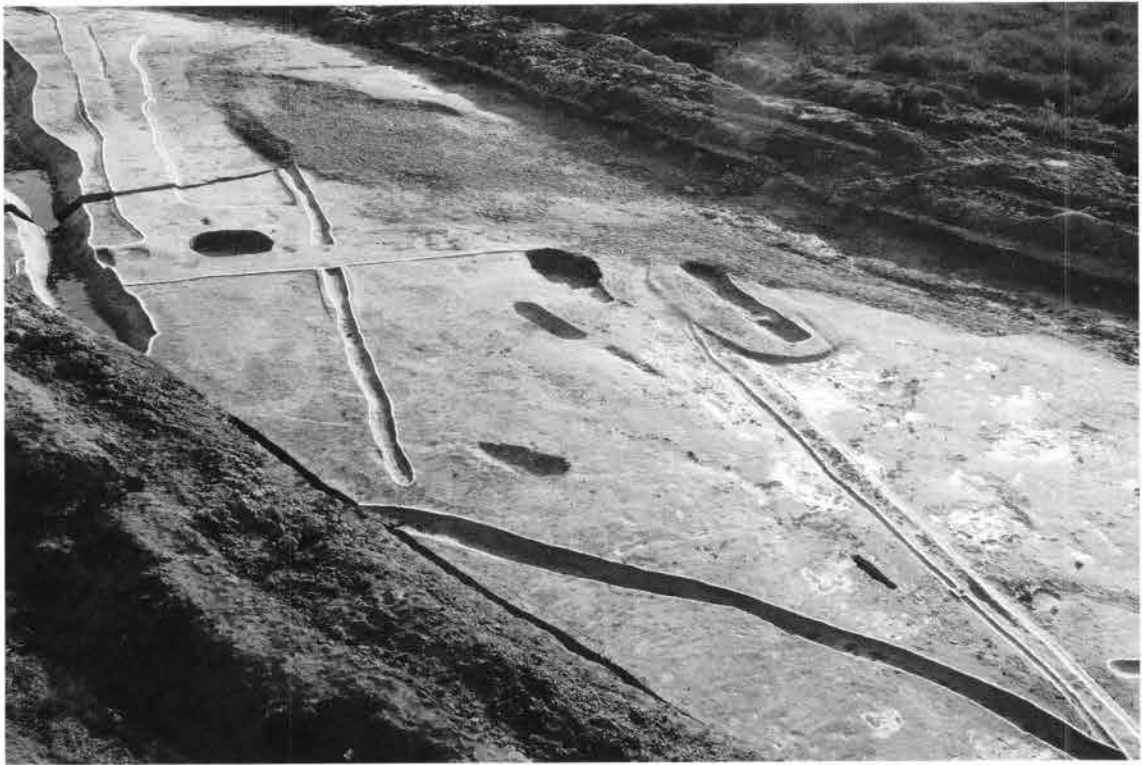
(1) AE 区 SD 9404・9405 (北から)



(2) AE 区 SD 9406 (北から)



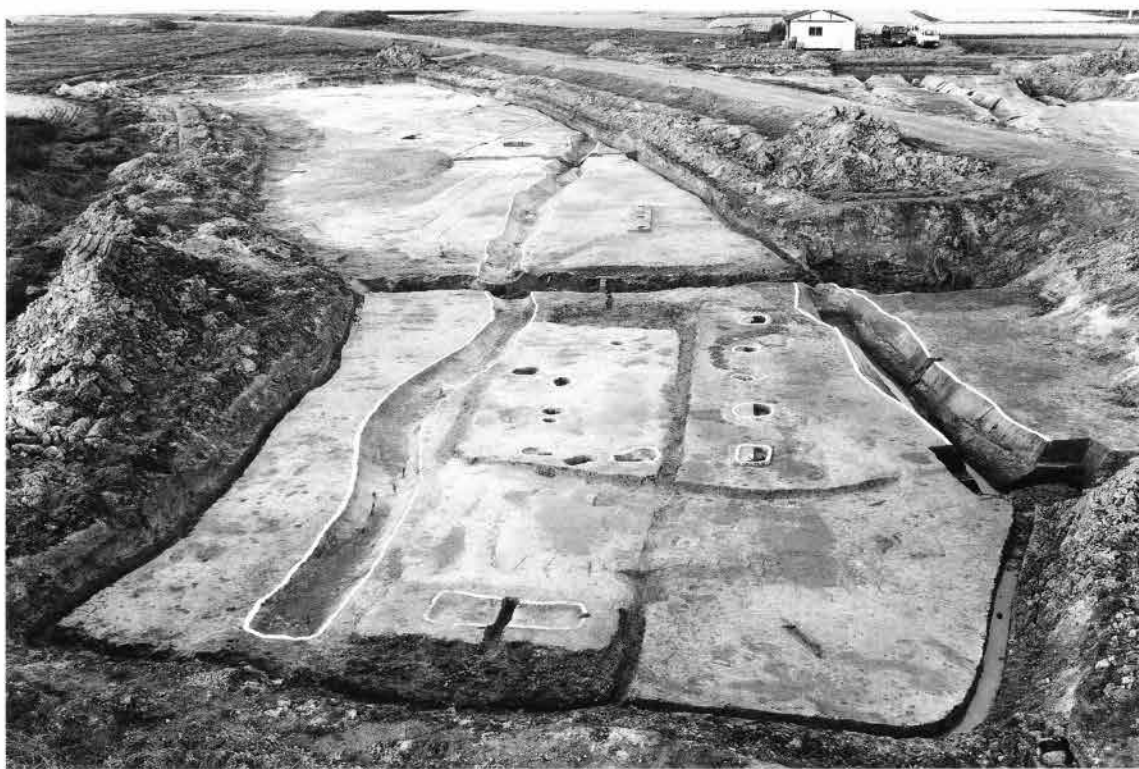
(1) AW 区下層遺構検出状況（北西から）



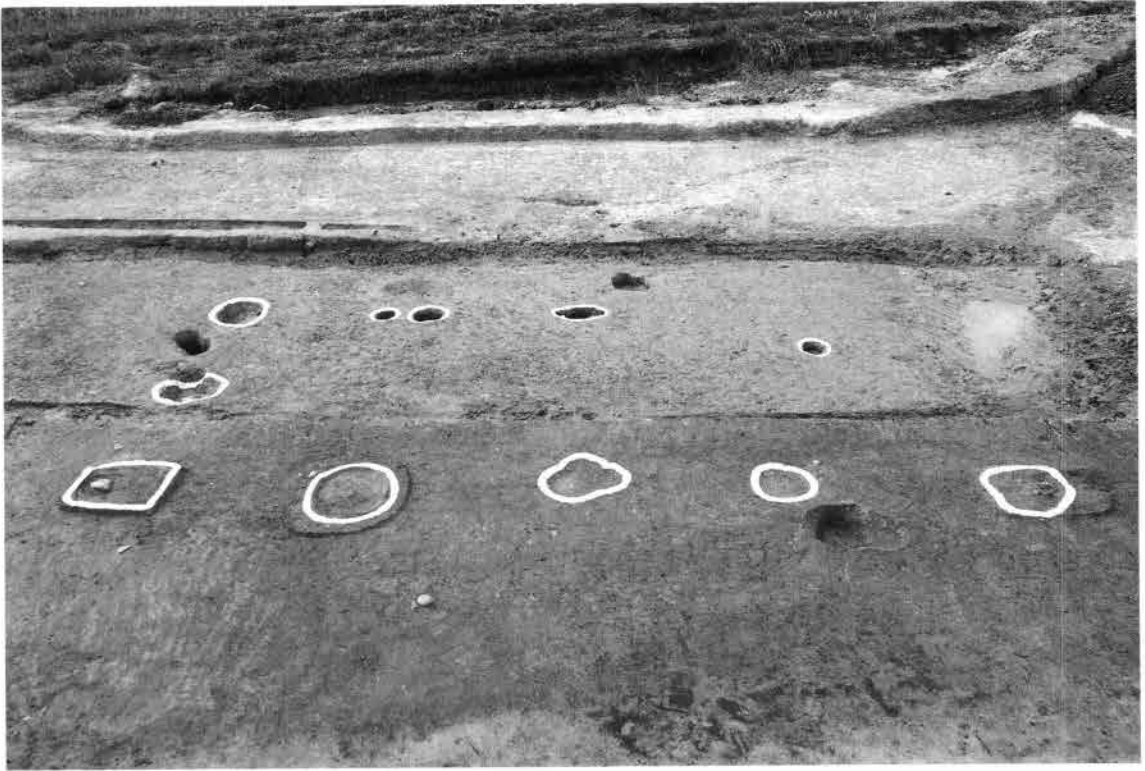
(2) AW 区中央下層遺構検出状況（北から）



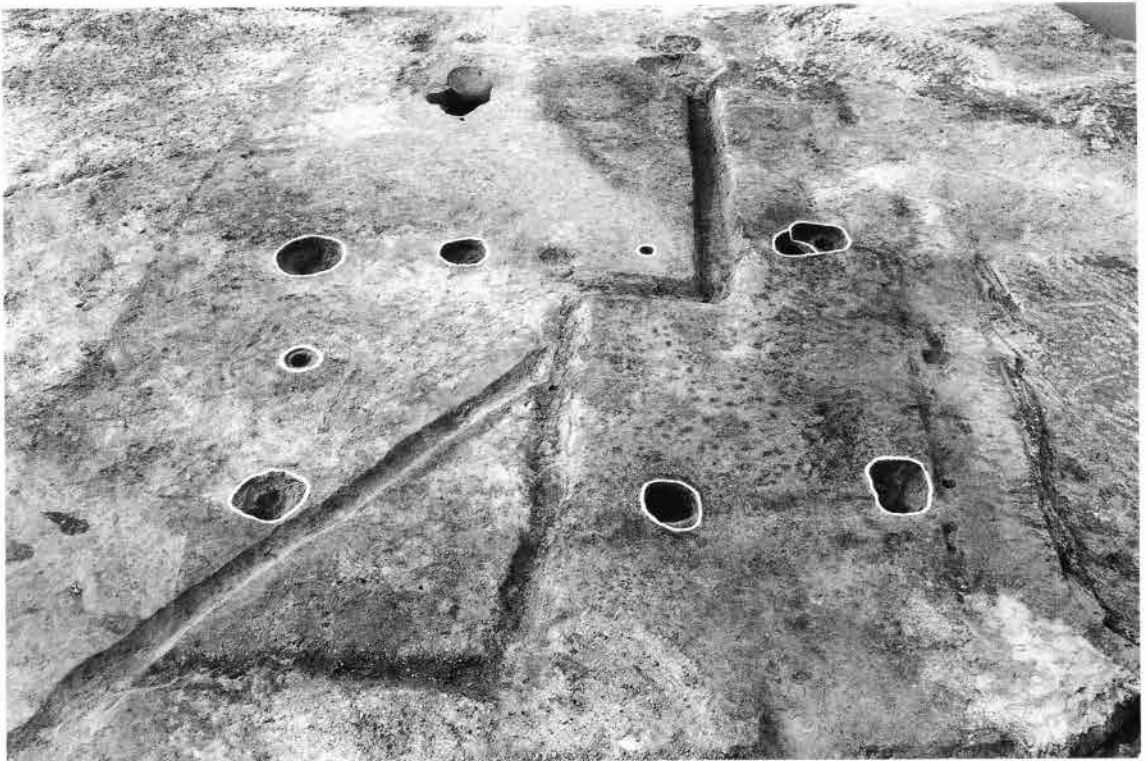
(1) AW区南部下層遺構検出状況(北から)



(2) AW区南部下層遺構検出状況(南から)



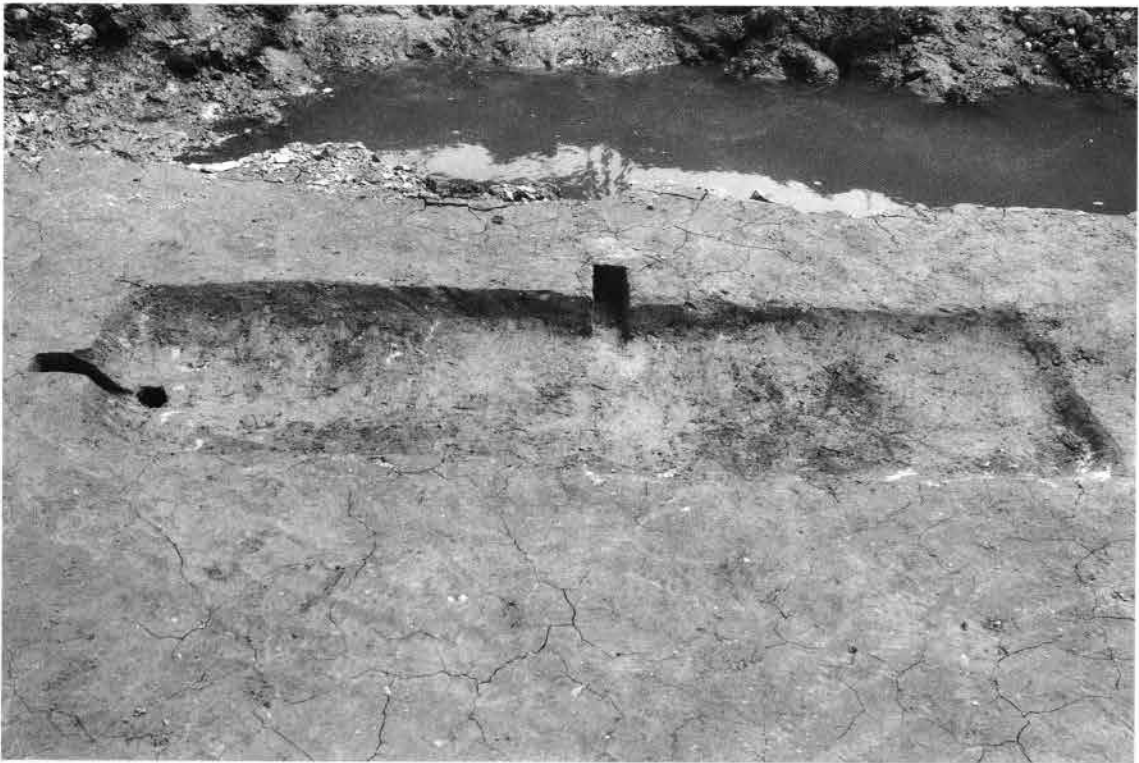
(1) SB 9401検出状況（東から）



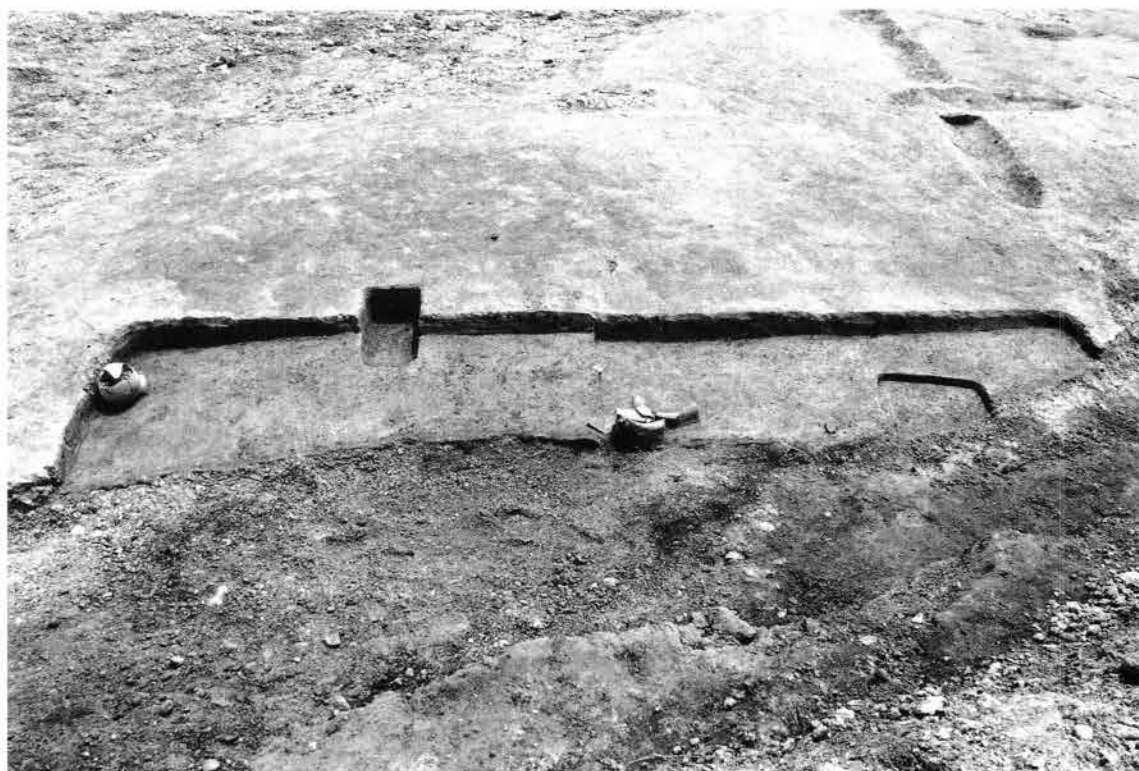
(2) SB 9402検出状況（東から）



(1) SA 9412検出状況 (東から)



(2) SK 9415検出状況 (北から)



(1) SK 9403検出状況（西から）



(2) SK 9410検出状況（北から）



(1) SE 9416検出状況（北から）



(2) SE 9416底部水溜め検出状況（南から）



(3) SD 9406 土層断面 (北から)



(4) SD 9408 土層断面 (南から)



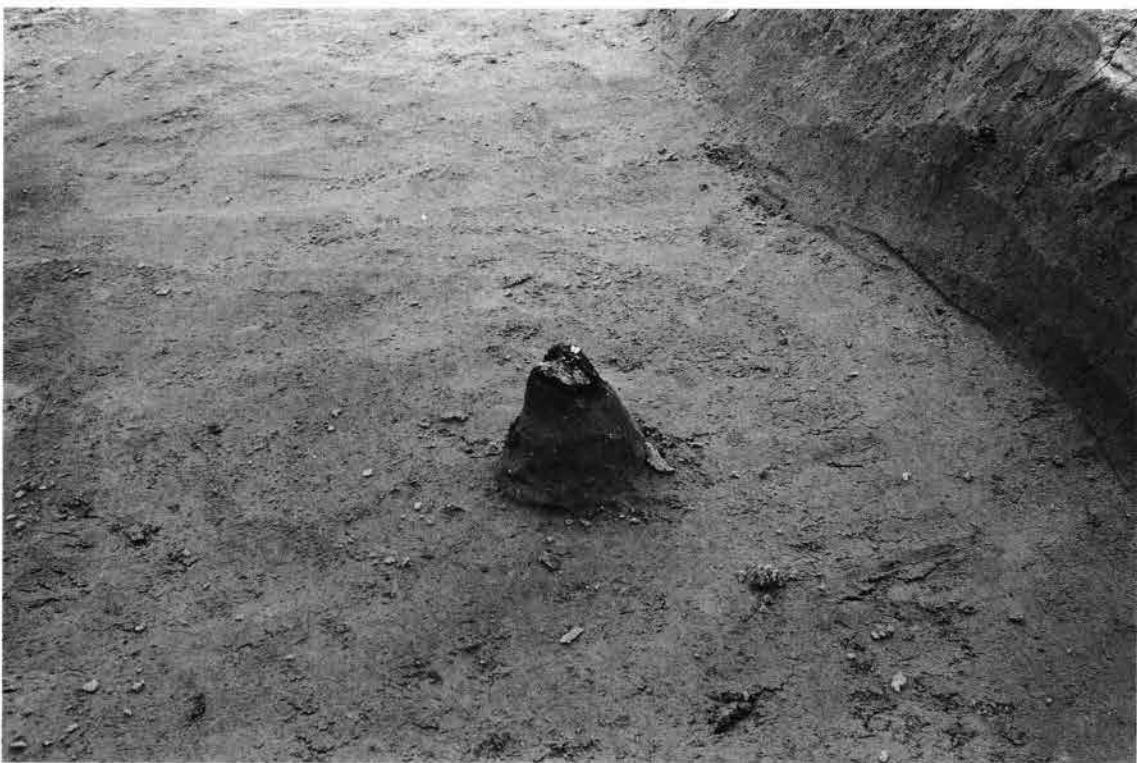
(1) SD 9405 土層断面 (南から)



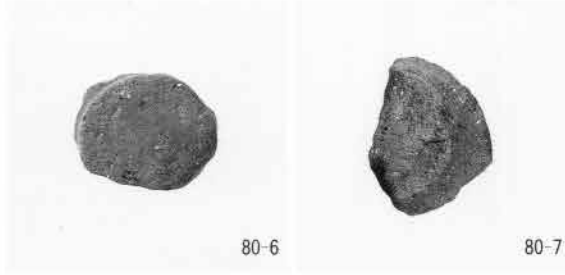
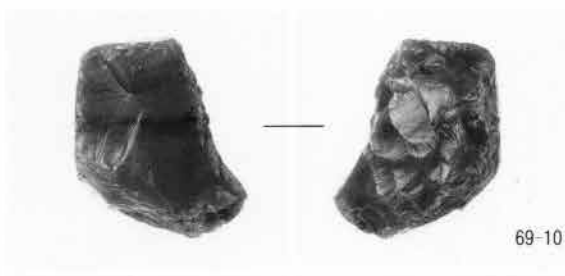
(2) SD 9404 土層断面 (南から)

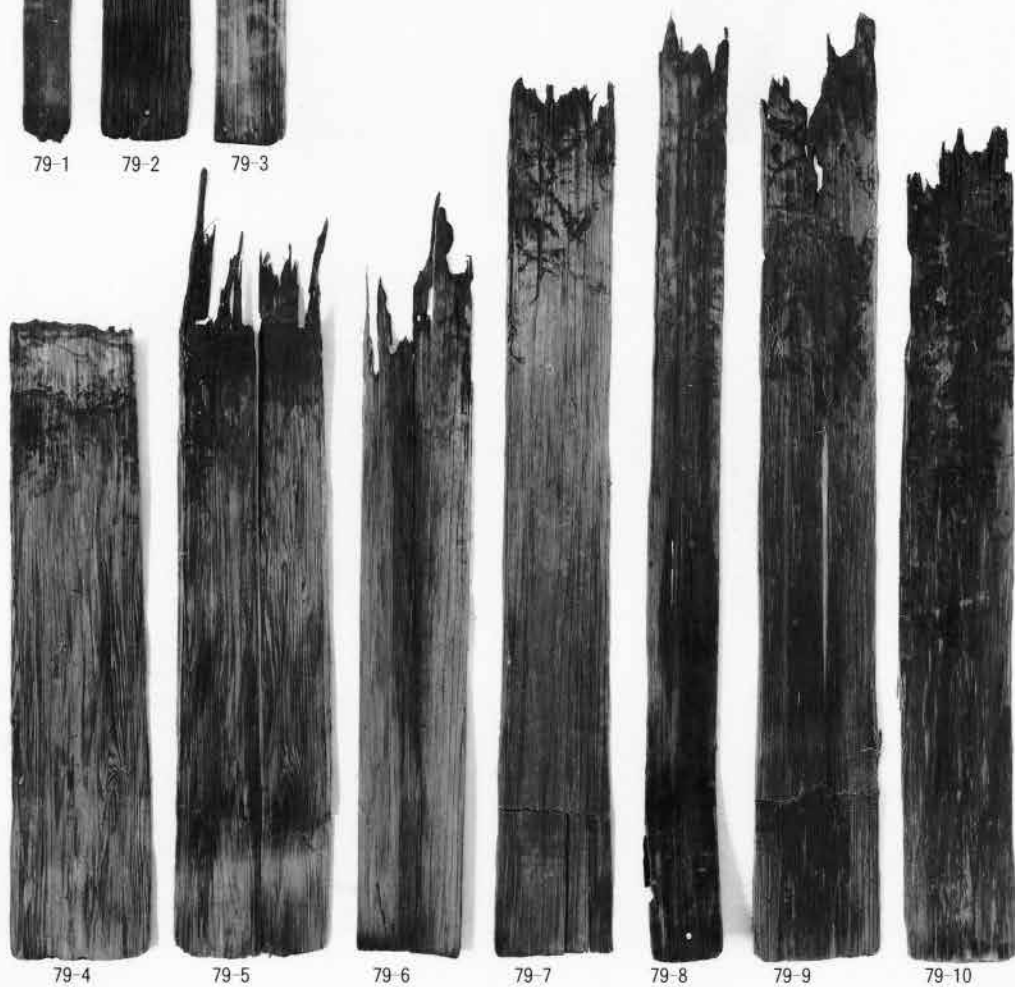
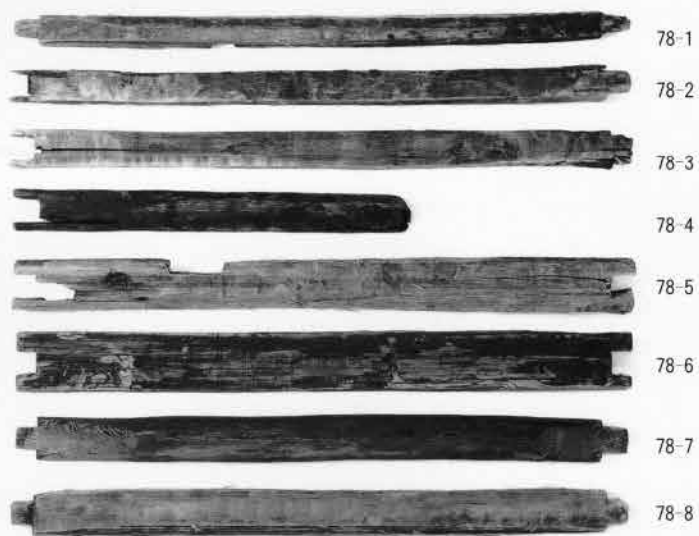


(1) 縄文土器包含層掘り下げか所（北から）



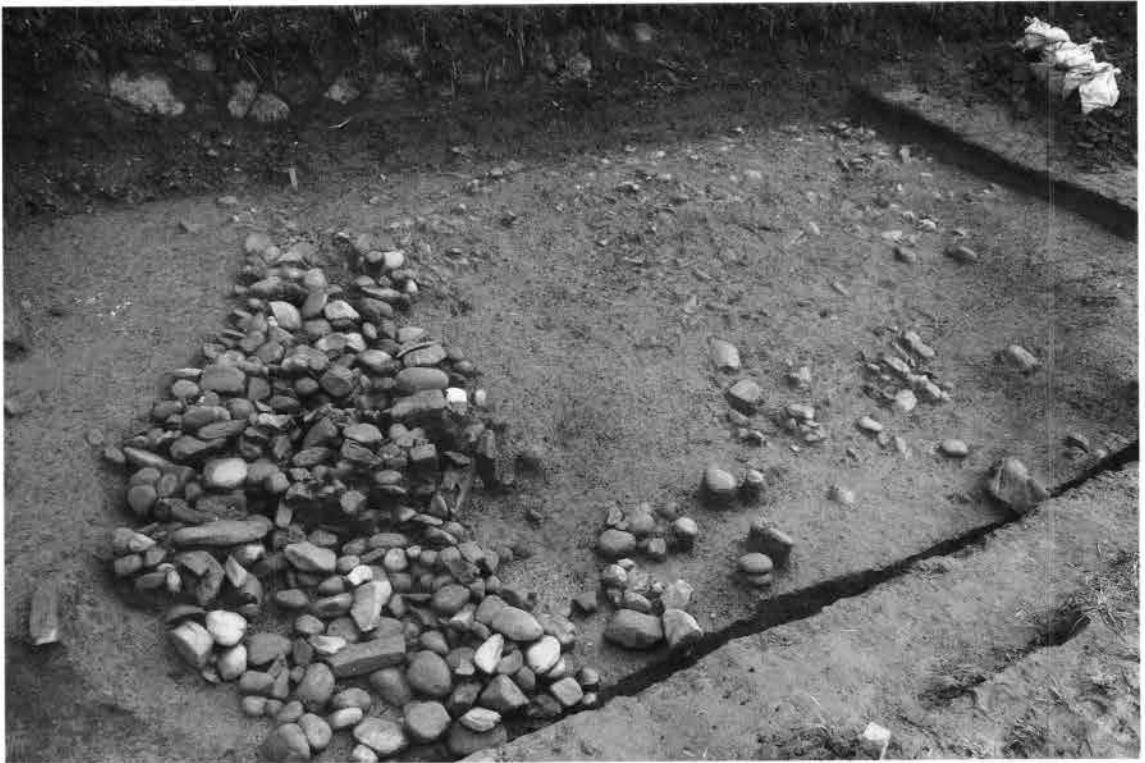
(2) 縄文土器出土状況（北から）







(1) 調査前風景（北東から）



(2) AトレンチSD 03全景（北東から）



(1) Cトレンチ鋤溝群 (西から)



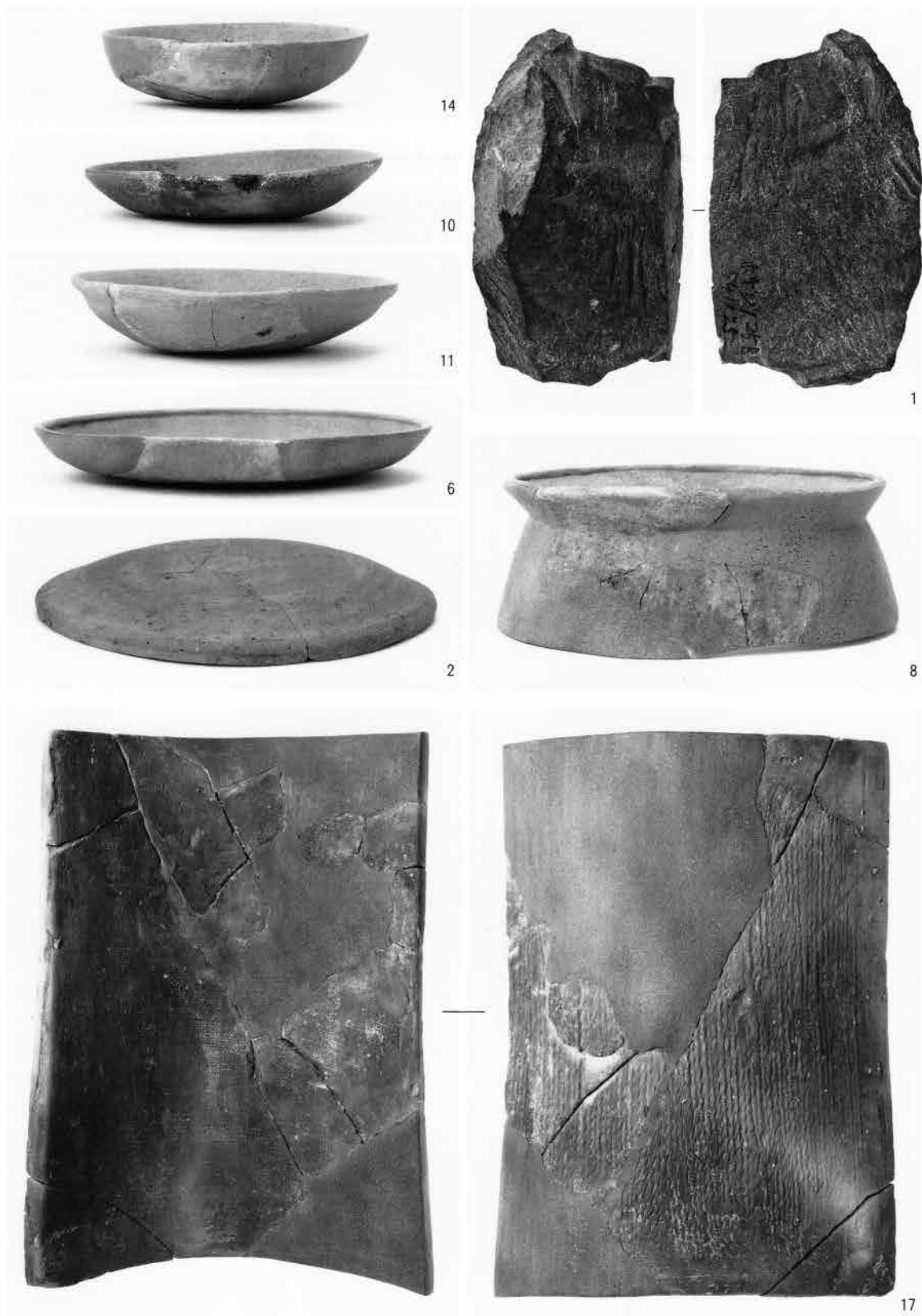
(2) Cトレンチ流路及び土層堆積状況 (南西から)

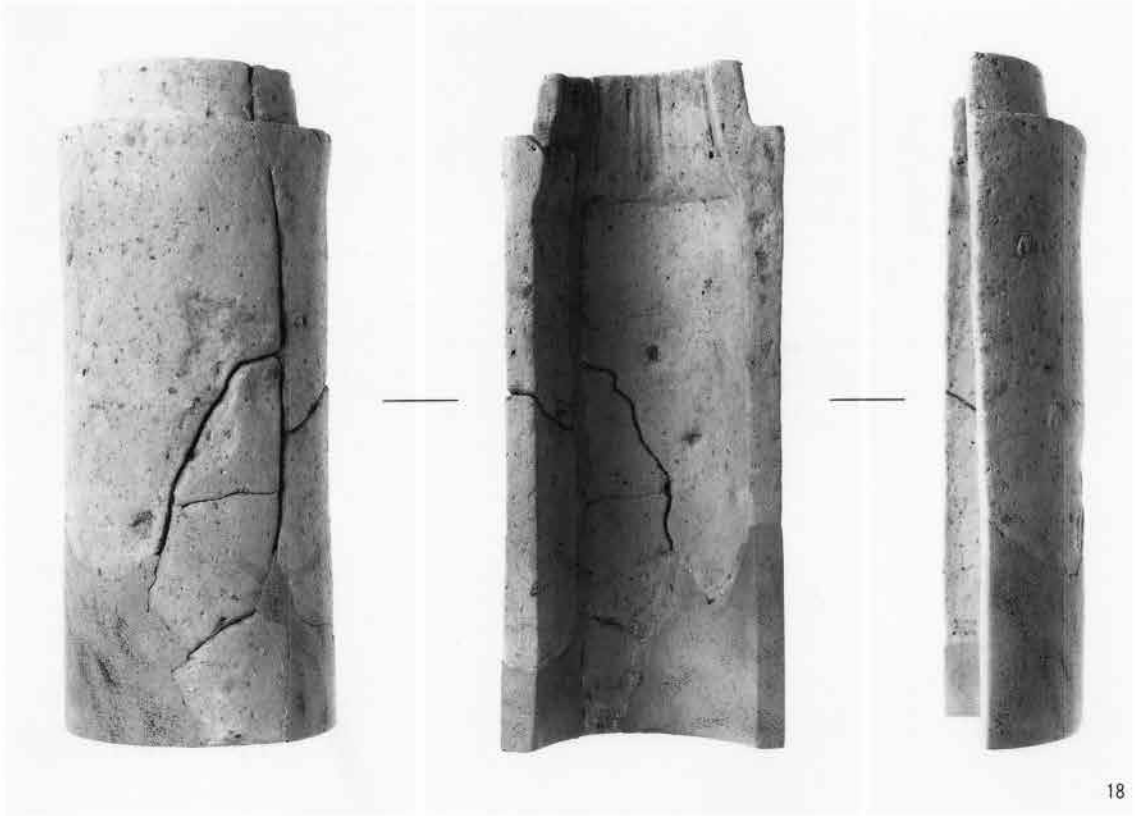


(1) Dトレンチ全景 (西から)

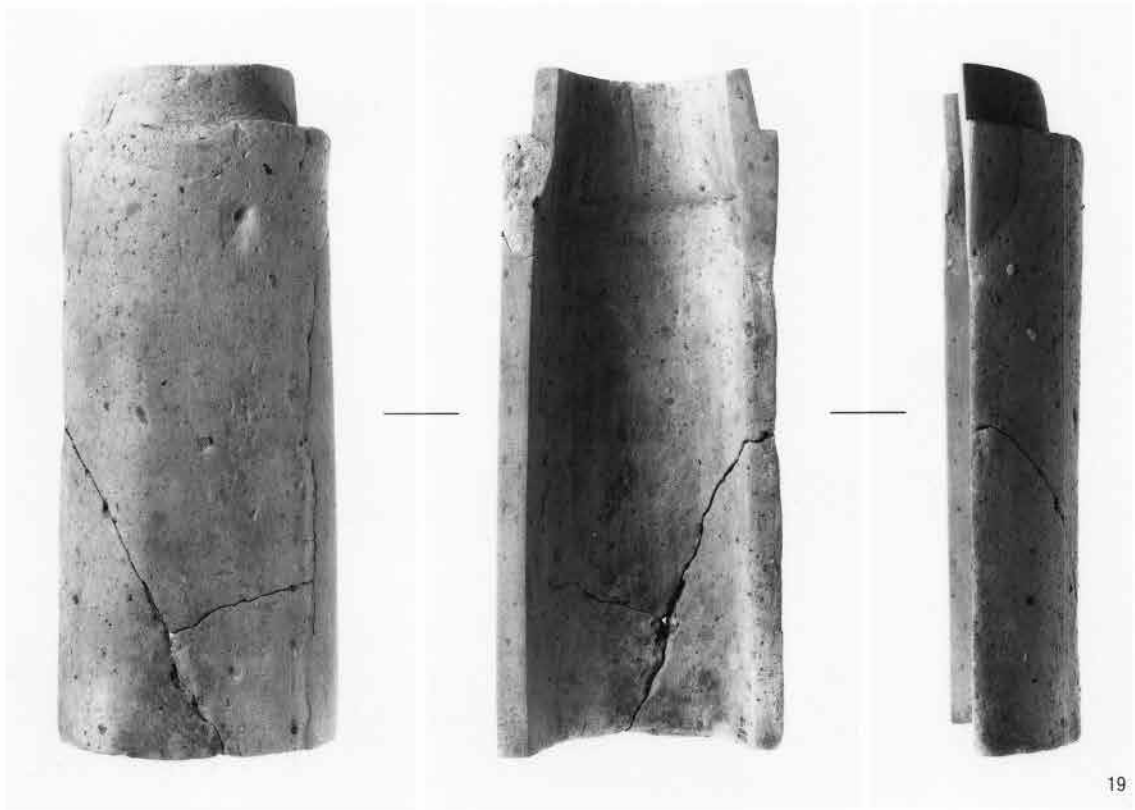


(2) Hトレンチ全景 (南西から)

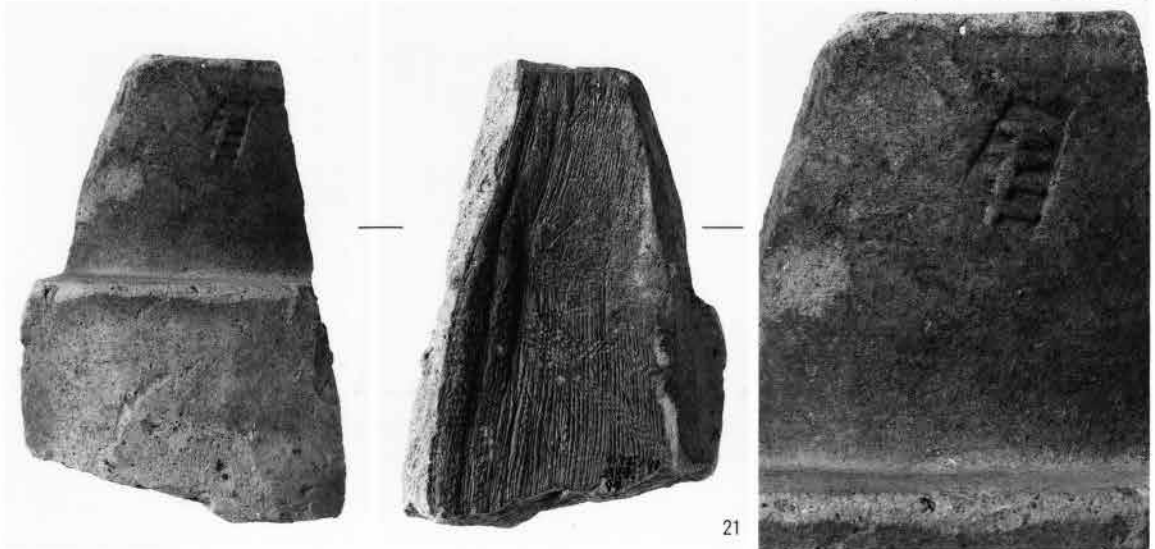
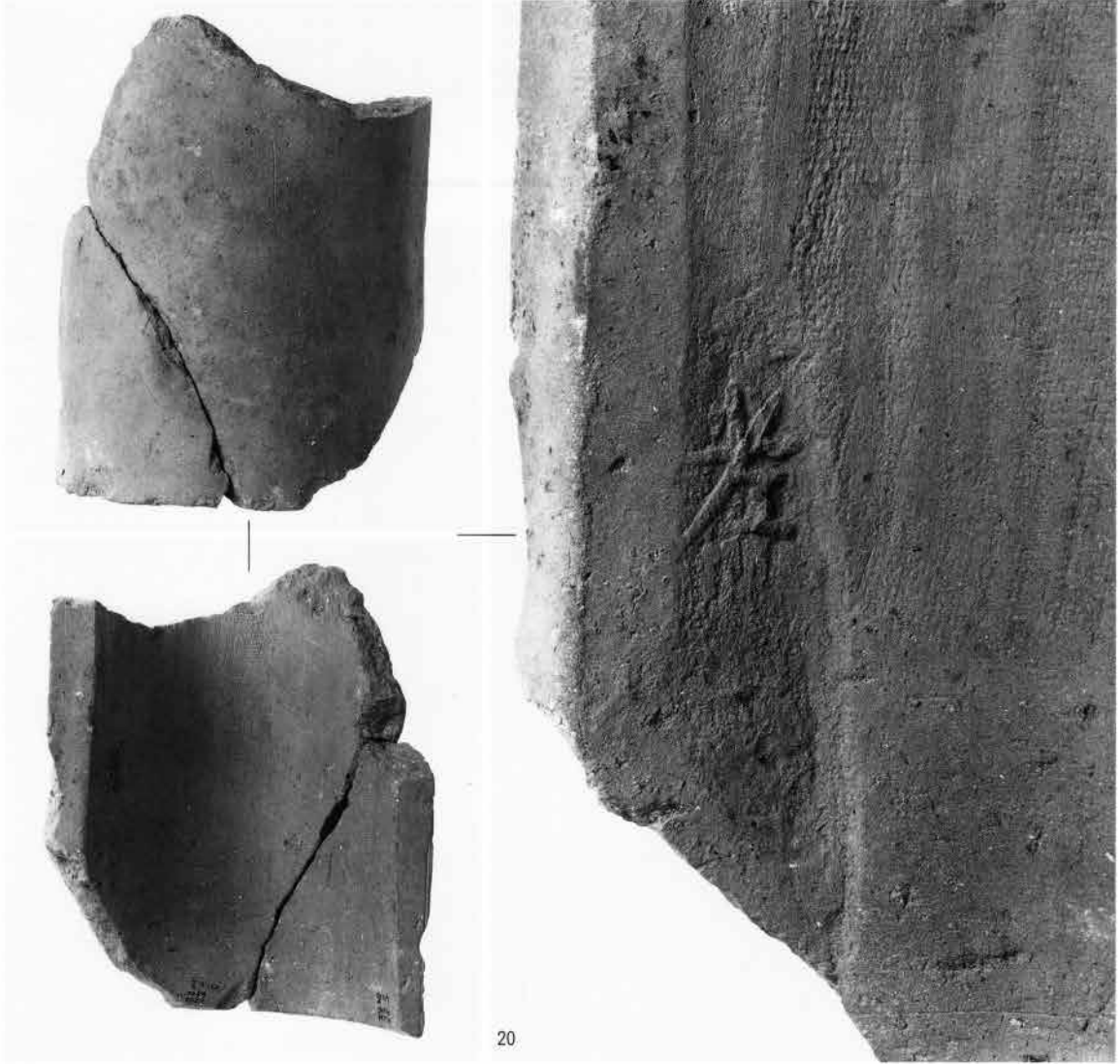




18



19



出土遺物(3) (21は法華寺野遺跡表採資料)



(1) 調査前風景（南から）



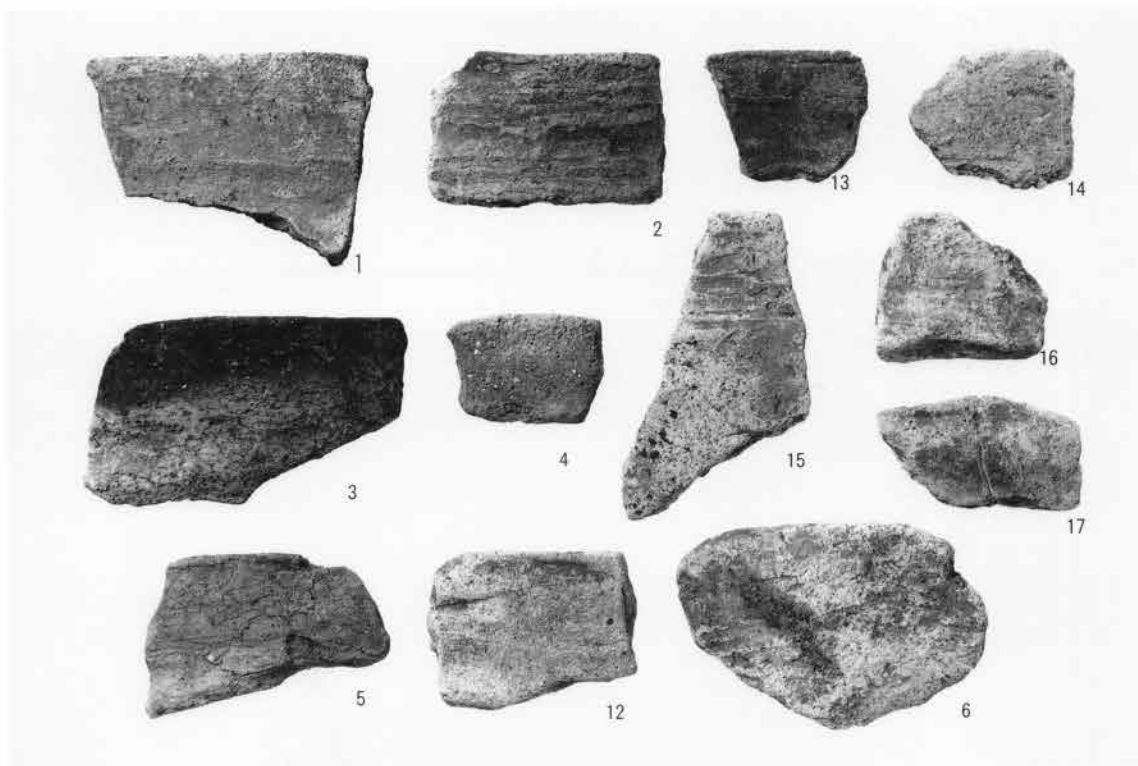
(2) 1トレンチ全景（南から）



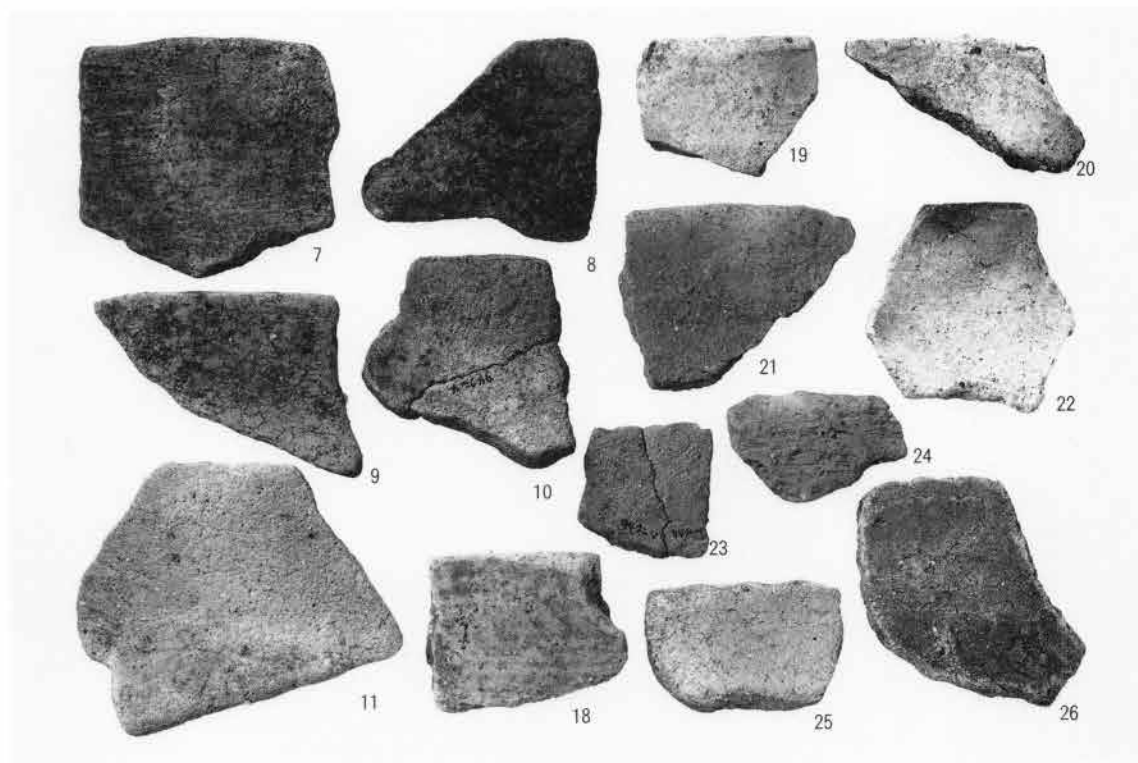
(1) 4トレンチ全景（北から）



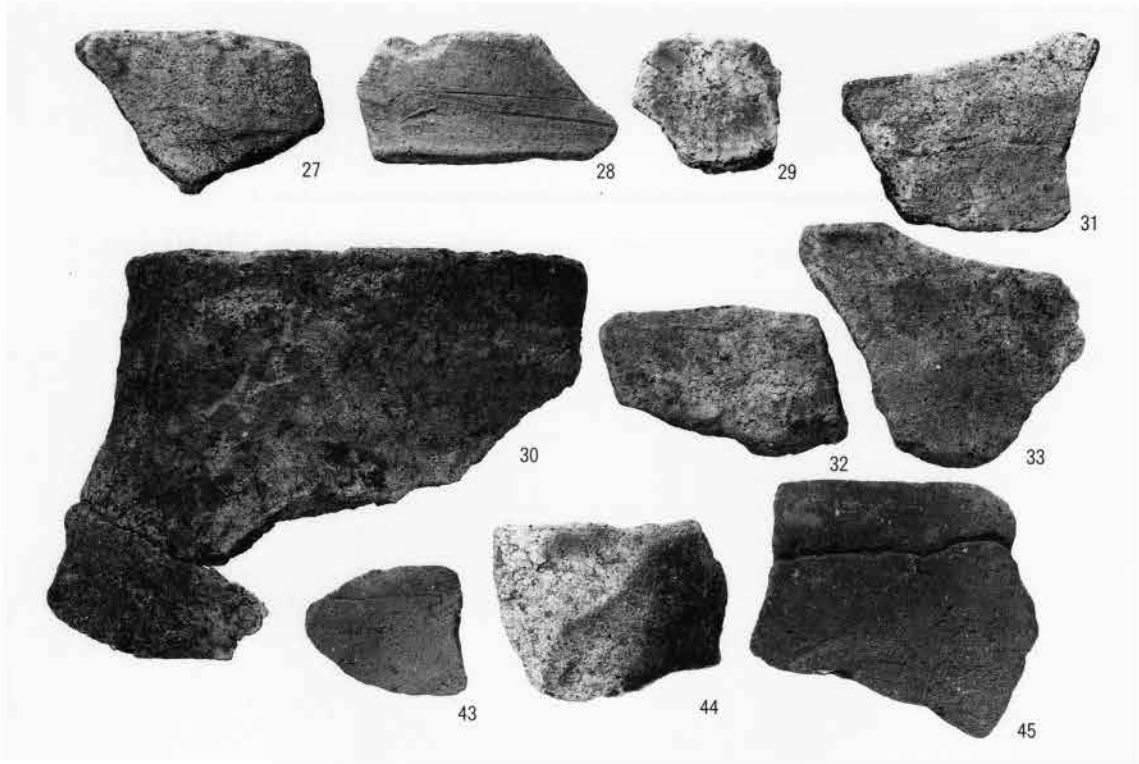
(2) 1トレンチ縄文土器出土状況



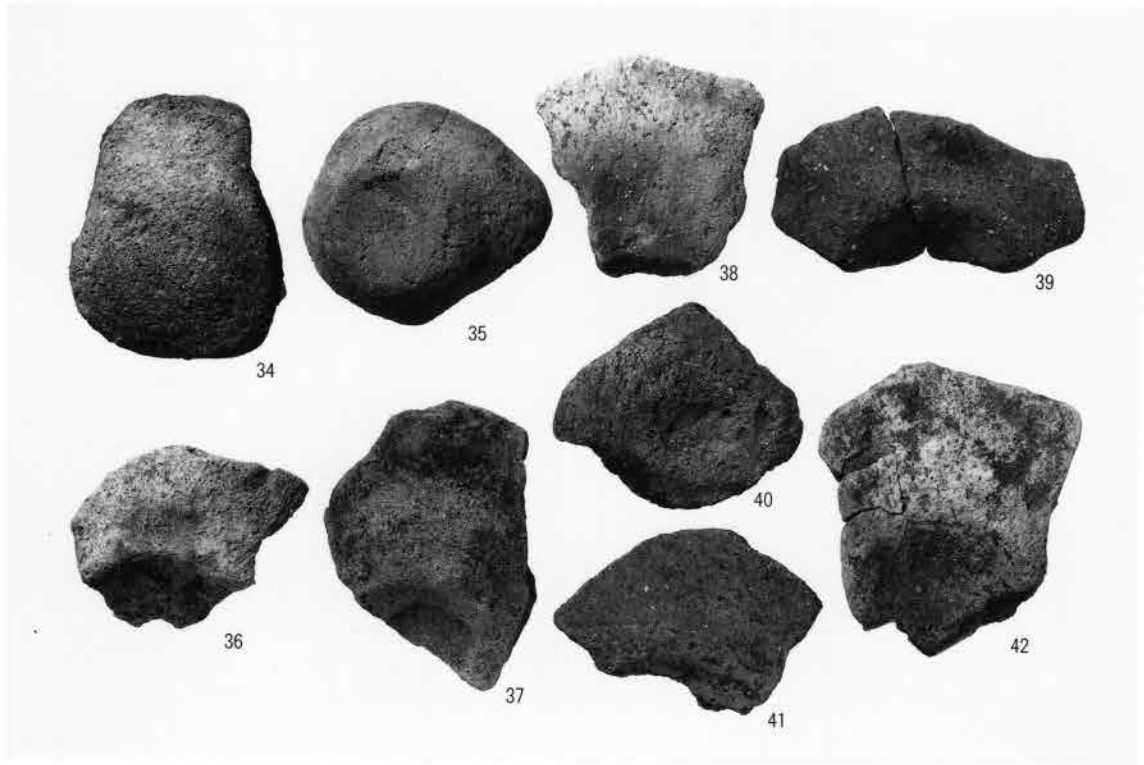
(1) 出土遺物 1



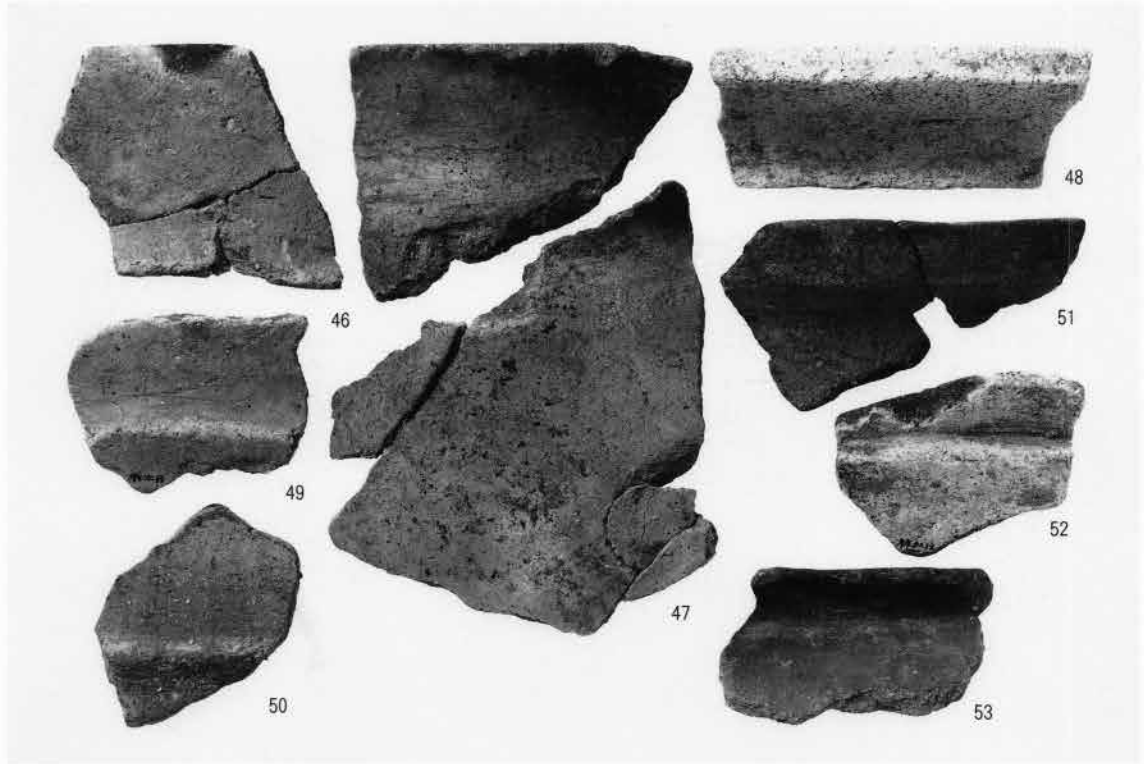
(2) 出土遺物 2



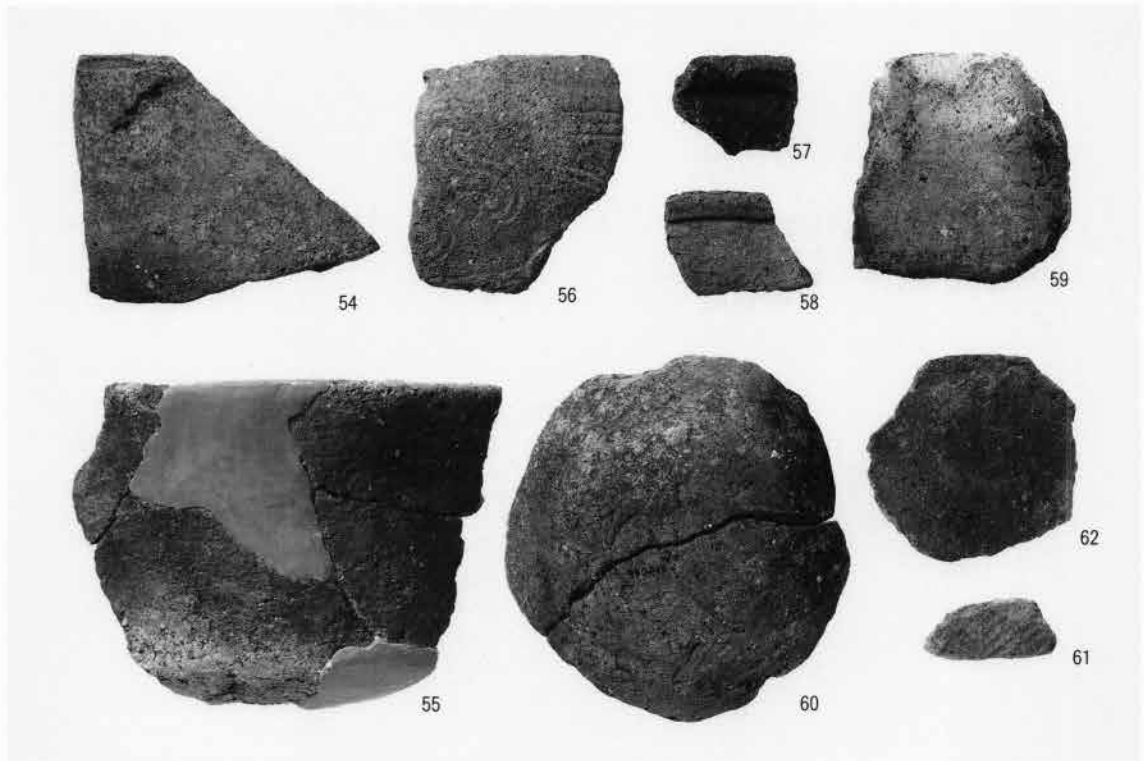
(1) 出土遺物 3



(2) 出土遺物 4

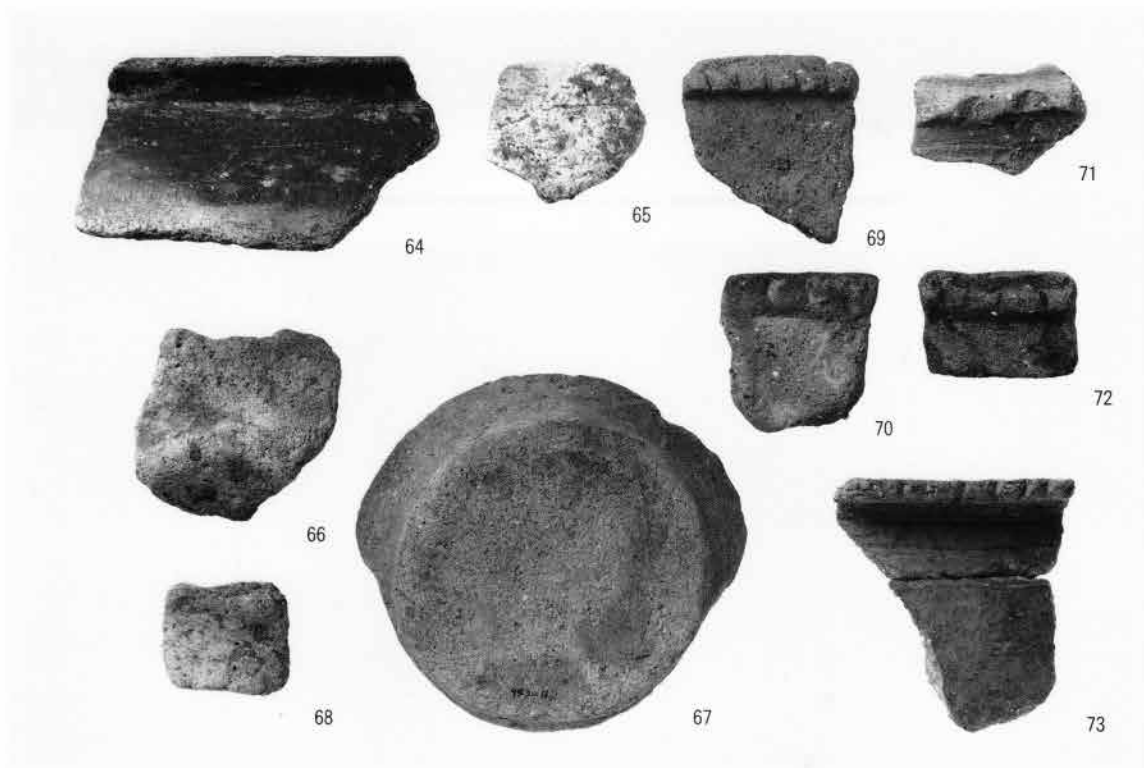


(1) 出土遺物 5

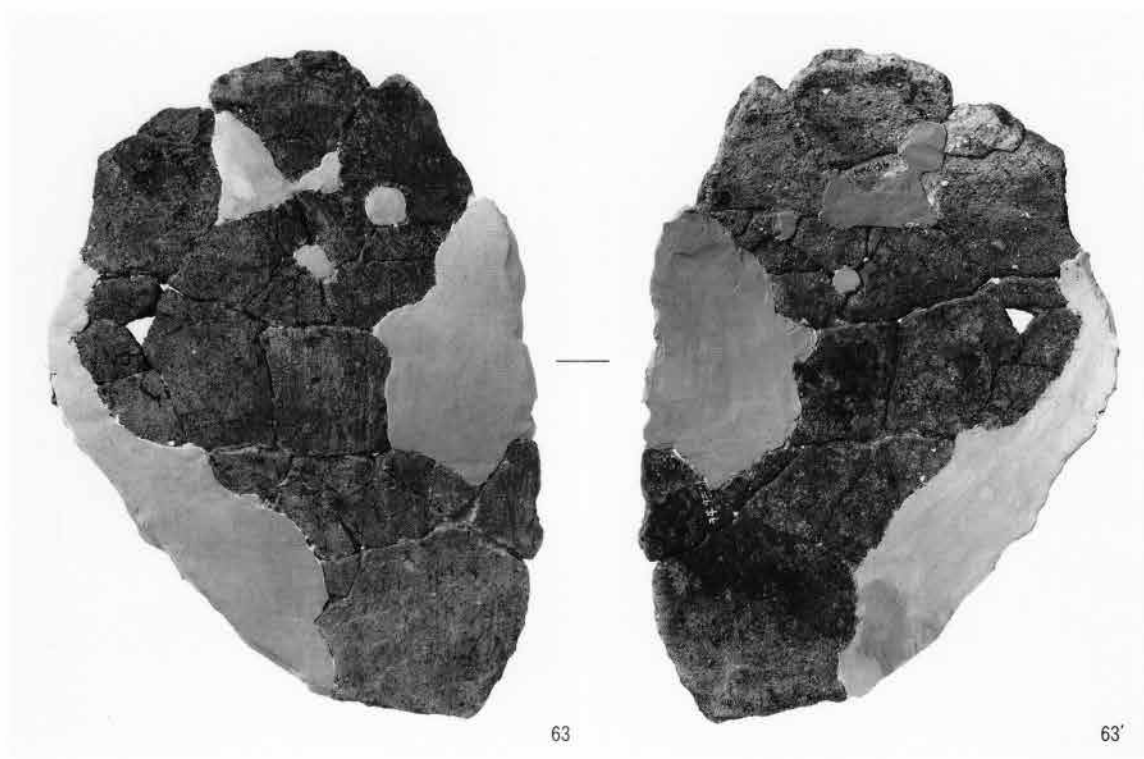


(2) 出土遺物 6

図版第64 金ヶ辻遺跡（恭仁京跡）



(1) 出土遺物 7



(2) 出土遺物 8

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	64							
編著者名	柴 暁彦・小池 寛・岸岡貴英・森正哲次・伊賀高弘・橋本 稔・有井広幸・森島康雄							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 TEL 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 27 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかのいせき	たけのぐんたん ごちょうたかの							
竹野遺跡	竹野郡丹後町竹 野	502	8			19940725 ～ 19940922	450	道路改良
なぐおかいせ きだい6じ	たけのぐんやさ かちょうみぞた になぐおか							
奈良岡遺跡第 6次	竹野郡弥栄町溝 谷奈良岡	503	37			19940530 ～ 19950216	1,200	道路建設
とういせき	きたくわたぐん けいほくちょう つじはざまのも と							
塔遺跡	北桑田郡京北町 辻狭間ノ元	381				19940627 ～ 19940812	900	ほ場整備
わかばやしい せきだい3じ	うじしいせだ ちょうわかばや し33							
若林遺跡第3 次	宇治市伊勢田町 若林33	204	85			19940718 ～ 19940909	400	職員住宅建 設
うじしがいい せき	まいづるしじと う							
宇治市街遺跡	宇治市乙方52- 8、東内29ほか	204				19940926 ～ 19941222	400	道路整備

とうろうじい せき・とうろ うじはいじあ と 燈籠寺遺跡・ 燈籠寺廃寺跡	そうらくぐんき づちょうきづみ やのうら 相楽郡木津町木 津宮ノ裏	362	52	34° 55' 40"	135° 50' 5"	19931202 ～ 19940302 19940418 ～ 19940701	820	河川改修
ゆみたいせき 弓田遺跡	そうらくぐんき づちょういちさ かゆみた・かみ おおじょう 相楽郡木津町市 坂弓田・上大条	362	34			19940418 ～ 19941227	4,400	道路建設
みかのはらり きゆうすいて いち 麩原離宮推定 地	そうらくぐんか もちょうほつけ じの 相楽郡加茂町法 花寺野	363	8			19941101 ～ 19941215	250	道路改良
かねがつじい せき 金ヶ辻遺跡	そうらくぐんか もちょうれいへ いかねがつじ 相楽郡加茂町例 幣金ヶ辻19-2	363				19940822 ～ 19940929	80	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹野遺跡	散布地	縄文～鎌倉	集石土坑、土坑	土師器・須恵器・ 黒色土器	
奈良岡遺跡第 6次	集落跡	弥生～古墳	顕著な遺構無し	弥生土器・須恵 器・土師器	
塔遺跡	散布地	弥生～古墳	掘立柱建物・土坑・ 集石坑	弥生土器・土師 器・石器	
若林遺跡第3 次	集落跡	弥生	土坑・柵列	弥生土器	
宇治市街遺跡	散布地	古墳～鎌倉・室町	土坑・溝	須恵器・土師器・ 青磁	
燈籠寺遺跡・ 燈籠寺廃寺跡	寺院・河道	奈良、縄文～中世	溝・柱列・河道・ 溝・土坑	瓦・土師器・須恵 器、縄文土器・弥 生土器・中世土 器・銭貨	河道は中世 道路の側 溝？
弓田遺跡	散布地	縄文・弥生・平 安・鎌倉～室町・ 江戸	土手状遺構・井戸・ 土坑・掘立柱建物	縄文土器・石器・ 弥生土器・井戸椀 材・須恵器・土師 器・	

甕原離宮推定地	宮殿	奈良後期	溝1など	文字瓦・瓦・須恵器・土師器・瓦器・磁器	文字瓦は「老」と押印
金ヶ辻遺跡	都城、散布地	縄文・奈良	顕著な遺構無し	縄文土器・瓦・須恵器	

京都府遺跡調査概報 第64冊

平成7年3月27日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立充通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)